

### スル法律ヲ臺灣ニ施行スルノ件

明治三十六年十月十六日  
勅令第五百四十四號

朕明治三十三年法律第十五號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ  
茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第十五號ハ明治三十六年十一月一日ヨリ之  
ヲ臺灣ニ施行ス

### ●明治三十三年法律第十五號及 同年法律第三十號ノ一部ヲ朝 鮮ニ施行スルノ件

明治四十四年七月三十日  
勅令第二百七十二號

朕明治三十三年法律第十五號及同年法律第三十號ノ一部ヲ朝  
鮮ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第十五號並同年法律第三十號中第一條乃至  
第五條及別表ハ之ヲ朝鮮ニ施行ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

### 第二節 牛 乳

#### ●牛乳營業取締規則

明治三十三年四月七日  
內務省令第十五號

沿革 明治三十九年六月內務省令第七號、四三年五月第一七  
號、大正六年一月第一七號 改正

牛乳營業取締規則左ノ通定ム

#### 牛乳營業取締規則

第一條 本則ニ於テ牛乳ト稱スルハ販賣ノ用ニ供スル全乳及  
脱脂乳ヲ謂ヒ乳製品ト稱スルハ販賣ノ用ニ供スル煉乳、脱  
脂煉乳及ヒ粉乳ヲ謂フ

牛乳營業者ト稱スルハ牛乳又ハ乳製品ノ搾取製造、販賣又  
ハ請賣ヲ營業ト爲ス者ヲ謂フ

第二條 牛乳ノ比重ハ攝氏十五度ニ於テ全乳ニ在リテハ一・  
〇二八乃至一・〇三四トシ脱脂乳ニ在リテハ一・〇三二乃  
至一・〇三八トス

全乳ノ脂肪量ハ百分中三・〇分以上トス

〔衛〕

〔衛〕

脱脂乳ノ乾燥物質量ハ百分中八・五分以上トス

第三條 煉乳ノ脂肪量ハ百分中八・〇分以上トス

煉乳又ハ脱脂煉乳中ニ混和スル蔗糖量ハ乳糖ヲ合算シテ百  
分中五五・〇分以下トス

第四條 牛乳ノ搾取又ハ乳製品製造ノ營業ヲ爲サシムトスル  
者ハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

地方長官本條ノ認可ヲ爲ストキハ衛生技術員ヲシテ牛乳又  
ハ乳製品ヲ取扱フ場所ノ構造設備ヲ検査セシムヘシ

第五條 牛乳營業者ハ左ノ牛ヨリ牛乳ヲ搾取スルコトヲ得ス

- 一 牛疫、炭疽、傳染性膜胸肺炎、流行性肺口瘡、狂犬病、  
結核、痘瘡、黃胆、「アキノミコーゼ」、氣腫瘡、赤痢、  
乳腺病、膿毒症、尿毒症、敗血症、中毒、亞布答、腐  
敗性、子宮炎、其ノ他熱性諸病ニ罹レル牛
- 二 牛乳中ニ移行スヘキ毒藥劑服用中ノ牛
- 三 分娩後七日以内ノ内牛

第六條 牛乳營業者ハ亞鉛、銅、黃銅、鍍附不良ニシテ且有  
害ノ雜質ヲ施シタル陶器又ハ含鉛珐瑯ヲ塗布シタル鐵材料  
ニテ製シタルモノヲ牛乳又ハ乳製品ノ容器又ハ量器トシテ  
使用スルコトヲ得ス

第七條 牛乳營業者ハ左ノ牛乳ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

三五

テ運搬シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

一 腐敗シタルモノ

二 粘稠若ハ苦味ナルモノ又ハ藍色赤色其ノ他異常ノ色ヲ  
呈スルモノ

三 他物ノ混合シタルモノ

四 第五條ノ牛ヨリ搾取シタルモノ

五 第二條ノ規定ニ適合セサルモノ

第八條 牛乳營業者ハ前條第一條乃至第四條ノ牛乳ヲ乳製品  
ノ原料ト爲スコトヲ得ス

第九條 牛乳營業者ハ左ノ乳製品ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ  
以テ陳列シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

一 腐敗シタルモノ

二 他物ノ混合シタルモノ

三 第六條ノ容器ヲ用キタルモノ

四 第七條第一號乃至第四號ノ牛乳ヲ原料ト爲シタルモノ

五 第三條ノ規定ニ適合セサル煉乳又ハ脱脂煉乳

第十條 牛乳營業者ハ牛乳ヲ配布スル容器ニ全乳又ハ脱脂乳  
タルコトヲ明記シ煉乳ノ容器ニハ煉乳、脱脂煉乳ノ容器ニ  
ハ脱脂煉乳タルコトヲ明記スヘシ

牛乳營業者ハ全乳ト記シタル容器ニ脱脂乳、煉乳ト記シタ

ル容器ニ脱脂煉乳ヲ容ルルコトヲ得ス

第十一條 牛乳營業者ハ牛乳又ハ乳製品ノ容器、量器及牛乳又ハ乳製品ヲ取扱フ場所ヲ常ニ清潔ニ爲スヘシ

第十二條 牛乳營業者ハ結核病、癩病、梅毒又傳染病ニ罹レル者ヲシテ牛乳、乳製品若ハ其ノ容器、量器ノ取扱ヲ爲サシメ又ハ其ノ取扱ヲ爲ス場所ニ入ラシムルコトヲ得ス牛乳營業者ニシテ其疾病ニ罹レルトキ亦之ニ準ス

第十三條 牛乳營業者ハ傳染性ノ疾病ニ罹レル牛ノ隔離ヲ行フヘシ

第十四條 地方長官ハ當該官員又ハ衛生技術員ヲシテ牛乳營業者ノ牛ヲ診檢セシメ一定ノ疾病ニ罹レル牛ニハ其ノ角ニ番號若ハ符號ヲ烙記セシメ又ハ其ノ耳朶ニ番號若ハ符號ヲ記セル耳環ヲ付セシムルコトヲ得

第十五條 地方長官ハ第五條ノ牛第六條ノ容器ヲ用キタル牛乳製品第七條各號ノ牛乳第九條各號ノ乳製品ニ關シテハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第十六條 地方官長ハ本則ノ執行ニ關シテ明治三十三年二月

法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第十七條 第十四條第二號ニ違背シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ拘留ニ處ス

第十八條 左ニ掲タル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 認可ヲ受ケスシテ第四條ノ營業ヲ爲シタル者  
二 第五條乃至第九條ニ違背シタル者

第十九條 第十條乃至第十三條ニ違背シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十條 牛乳營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

牛乳營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルルコトヲ得ス

法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人ト

〔衛〕

ス

第二十一條 本則ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十二條 乳牛ノ牛舎及牛乳搾取若ハ乳製品製造ニ用ユル場所ノ構造設備及管理方法ハ地方長官之ヲ定ム

第二十三條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

●牛乳營業取締規則改正ニ關スル件

大正六年十二月 發衛第八五號

(各地方長官宛 衛生局長通牒)

今般内務省令第十七號ヲ以テ牛乳營業取締規則中改正相成候處右ハ府縣ニヨリ全乳ノ脂肪率區々ニ百ルニ於テハ需用供給上不便ニシテ甲地ニ於ケル合格品ヲ乙地ニ供給スレハ直ニ犯則者トナル等支障不尠ヲ以テ行政上之カ統一ノ必要ヲ認メラレタル次第ニシテ取テ牛乳ノ品質ヲ低下セシムルモノナリト爲スノ趣旨ニ無之候ヘ共或ハ多數營業者間ニハ法令改正ノ精神ヲ誤解シ故意ニ加水脱脂シテ不正手段ヲ講スルコトナキ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

ヲ保シ難ク候條此際一般營業者ニ對シ改正ノ趣旨ヲ御示達ノ上今後一層斯業ノ發達ヲ圖ル様御配慮相成度

●牛乳營業取締規則第二條牛乳ノ比重及脂肪量ノ檢定方法

明治三十三年五月二十一日 内務省令第二十號

沿革 明治四三年五月内務省令第一八號 改正

牛乳營業取締規則第二條牛乳ノ比重及脂肪量ノ檢定方法左ノ通定ム

一比 重

攝氏十五度ニ於テクウエンス、ミユルレル氏ノ乳稠計ヲ用ヒ計測ス若シ他ノ溫度ニ於ケルトキハ矯正表ニ依リ攝氏十五度ニ於ケル比重ニ換算ス

一脂肪

硫酸(攝氏十五度ニ於テ比重一・八二〇乃至一・八二五ニシテ九十乃至九十一「アロセント」ノモノ)十立方「センチメートル」ヲ「ビベット」ヲ用キテケルベル氏「アチロメートル」ニ注入シテ注意シテ純「アミールアルコホル」(攝氏十五度ニ於テ比重約〇・八一五ニシテ沸騰點百二十八

乃至百三十度ノモノ)一立方「センチメートル」ヲ層積シ  
(前兩試薬ハ測取前ニ約十五度トナスヘシ)然ル後攝氏十五  
度ノ牛乳十一立方「センチメートル」ヲ「ビベット」ヲ用キ  
テ「ブチロメートル」ノ腹部ニ接シ徐々ニ流下セシメテ  
「アルコホル」上ニ層積シ龜裂ナキ乾燥ゴム栓ヲ以テ善ク栓  
塞シ指ヲ以テ栓ヲ壓シツ、急ニ振盪シ牛乳ノ溶解シタル後  
更ニ數回彼方此方ヘ動カシ十五分間六十乃至七十度ノ温湯  
中ニ挿入シ次ニ二乃至三分時間遠心力器(一分時間廻轉數  
七百回以上ノモノ)ニ掛ケ更ニ六十乃至七十度ノ温湯中ニ  
數分間挿入シ茲ニ析出セル脂肪層ノ度數ヲ讀取スヘシ而シ  
テ其ノ度數二十分ノ一ヲ乘スルトキハ直ニ牛乳百分中ノ脂  
肪量ヲ得ヘシ

●産業組合カ牛乳ノ販賣等ヲ爲  
ス場合ハ牛乳營業取締規則ノ  
適用ヲ受クヘキヤ否ノ件

大正十三年十月六日  
農衛第八號

農商務省農務局長照會 大正十三年六月二十四日  
十三農局第六三三號

産業組合カ組合員ノ生産シタル牛乳ヲ買取り又ハ委託ヲ受ケ  
生乳ノ儘若ハ生乳ニ加工シテ牛酪或ハ煉乳トナシ販賣スル場  
合ニハ明治三十三年内務省令第十五號牛乳營業取締規則ノ適  
用ヲ受クヘキヤ否ヤニ關シ別紙寫ノ通島根縣知事ヨリ照會有  
之候ニ付一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也  
(別紙)

鳥根縣知事照會 大正十三年六月六日  
商第一一五七號

部内藤川郡荒木村原助五郎外百二名ヨリ別冊定款ヲ以テ有限  
責任荒木酪農購買販賣利用組合設立許可申請來候處之カ設立  
許可後ニ於テ其ノ販賣事業ニ於ケル生乳及乳製品取扱行爲ニ  
屬シテハ明治三十三年内務省令第十五號牛乳營業取締規則ノ  
適用ヲ受クヘキモノナリヤ聊カ疑義ノ點有之候條何分ノ義至  
急御回示相煩度此段及照會候也

有限責任荒木酪農購買販賣利用組合定款(略)

農商務省農務局長照會 大正十三年八月五日  
十三農局第六三三號

農務省令第十五號牛乳營業取締規則ノ適用ヲ受クヘキヤ  
否ヤニ關シ鳥根縣知事ヨリノ問合セニ付及照會置候處本件ハ  
差迫居候趣ニ付至急何分ノ御回示ヲ得度此段重テ及照會候

也

追テ本件ニ付テハ左記事項ニ付御回示ヲ得度申添候也

- 一 左ノ場合ハ組合カ搾取業者トシテ牛乳營業取締規則第四  
條ニ該當スルモノナリヤ  
一、組合ノ設備セル搾取所ニ於テ組合員自ラ搾取スル場合  
二、組合員カ組合ノ設備セル搾取所(搾取ノ設備ヲ爲シ搾  
取者ヲ雇入レルモノ)ニ於テ組合ヲシテ搾取セシムル  
場合
- 二 購買組合カ牛乳ヲ飼養シテ生乳ヲ搾取シ生乳ノ儘又ハ之  
ニ加工シテ乳製品ト爲シ組合員ニ賣却スル場合ニハ牛乳  
營業取締規則第四條ニ該當スルモノナリヤ
- 三 購買組合カ生乳ヲ組合員ヨリ受入レ生乳ノ儘販賣スル場  
合ハ組合員カ搾取業者ニシテ組合ハ請賣業者ト認メラル  
ルヤ
- 四 購買組合カ組合員又ハ組合員外ヨリ生乳ヲ買入レ生乳ノ  
儘組合員ニ賣却スル場合ハ單ニ請賣業者トナルモノナリ  
ヤ
- 五 牧場等ニ於テ犢ヲ育成スルヲ目的トスル者カ餘乳ヲ販賣  
スル場合又ハ農家ノ副業トシテ牛乳ヲ飼養シ牛乳ヲ販賣  
スル場合ニ於テハ搾取業者トシテ認可ヲ受クヘキモノナ  
リ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

リヤ

衛生局長回答 大正十三年十月六日  
農衛第八號

産業組合ノ事業執行ニ付標記ノ規則適用ニ關シ六月二十四日  
及八月五日十三農局第六三三號御照會ノ件了承右ハ組合又ハ  
組合員何レカ營業者タルヤハ個々ノ具體的事件ニ付判定セラ  
ルヘキモノト認メラルモノ何レノ場合タルヲ問ハス當然同規  
則ノ適用ヲ受クヘキモノト被存候條御了知相成度

追テ八月五日御照會ノ事項ニ關シテハ御參考迄別紙ニ依リ  
御承知相成度

- (1) 搾取業者カ自己所有ノ搾取所ヲ使用スルヤ否ヤハ營業者  
ヲ判定スル要件ニ非ルカ故ニ本件組合ハ規則第四條ノ搾  
取業者ニ非ス
- (2) 組合カ搾取行爲ヲ爲ス場合ハ其ノ牛乳カ組合員ノ所有ニ  
屬シ其ノ搾取セル牛乳ヲ組合員ニ交付スル場合ト雖組合  
カ搾取業者トシテ規則第四條ニ該當ス
- 二 御意見ノ通り購買組合カ營業者トシテ規則第四條ニ該當  
スルモノト認ム
- 三 組合ハ請賣業者者ニシテ組合員ハ搾取業者ト認ム
- 四 組合ハ請賣業者トシテ規則第一條ニ該當ス

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

五 牧場ノ餘乳販賣、農家ノ副業トシテノ牛乳販賣ハ繼續シテ爲サルルモノト被認カ故ニ規則法上何レモ搾取營業者トシテ規則第四條ノ適用ヲ受クヘキモノト被認

●牛乳營業取締規則第五條牛乳中ニ移行スヘキ毒藥劇藥處方ニ關スル件

明治三十三年十月二十日 內務省令第四十六號

明治三十三年四月內務省令第十五號牛乳營業取締規則第五條第二號牛乳中ニ移行スヘキ毒藥劇藥處方ニ關スル件左ノ通定  
第一條 牛乳中ニ移行スヘキ毒藥劇藥品目左ノ如シ  
石炭酸  
安知母紙誤鹽類  
砒素及其ノ化合物  
銅鹽類  
越嶺利涅、斯篤利幾尼涅其ノ他  
「アルカロイド」及其ノ據類  
菲沃斯草

別刺敦那草  
水銀鹽類  
沃度加倫誤  
阿片  
鉛鹽類  
藜蘆根  
番木甞子  
亞鉛鹽類  
以上ノ藥品ヲ含有スル諸製劑  
第二條 獸醫前條ノ毒藥劇藥ヲ處方シタルトキハ其ノ旨ヲ牛乳營業者ニ告知スヘシ  
第三條 獸醫前條ニ違背シタル者ハ一四九十五錢ノ科料ニ處ス

●牛乳營業取締規則第五條適用方

明治三十六年六月一日 內務省訓第三八三號

明治三十三年四月內務省令第十五號牛乳營業取締規則第五條ノ適用方左ノ通り心得ラルヘシ

〔衛〕

結核ニ付テ第五條ヲ適用スルハ檢診上左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ限ル  
一 乾房結核  
一 重症肺結核  
一 汎發結核  
一 前各號ノ外著シク營養ヲ損害セル結核諸症  
明治三十三年五月訓令第四百七十一號ハ之ヲ廢止ス 右訓令ス

●牛乳營業取締規則第五條適用ニ關スル訓令改正ニ關スル件

明治三十六年六月一日 衛甲第三五號

今般訓令第三八三號ヲ以テ明治三十三年五月訓令第四百七十一號ヲ改正セラレタルハ畜牛結核病豫防法施行規則第九條ニ規定セル重症結核ハ勿論乳房結核ニ關シテハ假令輕症ノモノト雖改正訓令列記ノ病症中ニ包含セシムルノ趣旨ニシテ此等病牛ニ對シテハ凡テ牛乳營業取締規則第五條ヲ適用セントス

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

ルニ有之又病牛ニ附スヘキ記號ニ關シテハ畜牛結核病豫防法施行規則第十條ノ適用ヲ受クルコトナリタルニ基ク儀ト御承知相成度依命此段及通牒候也

●「ツベルクリン」稀釋ノ爲石炭酸水使用ノ件

明治三十六年十一月十四日 衛甲第六四號

「ツベルクリン」稀釋ノ爲石炭酸水使用ノ義ニ關シ高知縣知事ト照覆候ニ付爲參考此段及通牒候也  
高知縣知事照會 明治三十六年十月八日 衛發第三五〇號  
這回御送付相成候畜牛結核病豫防法令質疑應答要録第十六條第四回ニ對シ「ツベルクリン」ヲ注射シタル乳牛ノ乳汁ヲ飲用ニ供スルハ害ナシト有之候處該「ツベルクリン」稀釋ノタメ使用スル石炭酸水ハ明治三十三年內務省令第四十六號規定ノ乳汁中ニ移行スヘキ劇毒藥ニ屬スルヲ以テ牛乳營業取締規則第五條第二ニ該當シ搾取販賣セシムルコトヲ得サル儀ト被存候得共右應答ノ次第モ有之候條猶御取調ノ上御意見承知致

〔各地方長官宛〕  
〔衛生局長通牒〕

四一

度此段及照會候也

衛生局長回答 明治三十六年十一月四日  
衛第九三〇六號

本年十月八日付衛發第三五〇號ヲ以テ「ツベルクリン」稀釋ノタメ石炭酸水使用ノ義ニ付御照會ノ處右ハ其量僅微ニシテ乳汁中ニ移行スルモノト認メサルヲ以テ之ヲ使用スルモ差支無之義ト御承知相成度依命此段及回答候也  
追テ本件ニ關シ農務局長へ御照會ノ處右ハ本省主管ニ付回答候條添申候也

### 育兒乳ノ取締ニ關スル件

大正十二年三月十四日  
阪衛第一五三號

大阪府知事照會 大正十一年十二月十二日  
衛第一二七四五號

近來管下ニ於テ育兒乳ト稱シ牛乳ニ水及滋養糖ヲ混合シ茶褐色又ハ紫色ノ瓶ニ入レ育兒乳ト記載シタル「レットテル」ヲ貼付シ販賣スル者有之候處曾テ乳酸菌入牛乳其他ニ關シテハ本年五月十七日付衛保第一四八號ヲ以テ御通牒ノ次第モ有之候得共本品ハ多少趣ヲ異ニスルノミナラス明ニ牛乳ニ水及滋養糖ヲ混シ育兒乳トシテ販賣スルモノナルヲ以テ牛乳營業取締

規則第七條第三號ニ依リ取締ルニアラサレハ一般牛乳營業者ニ於テ單ニ水又ハ砂糖等ヲ混合シ稀釋牛乳或ハ甘味牛乳ノ名稱ノ下ニ販賣スルモノヲ生シ其及ホス影響極メテ大ナルモアルヘク果テハ牛乳營業取締規則ノ竊肆ヲ脱シ延テ當該規則ヲ有名無實タラシムル虞アルノミナラス斯クテハ衛生上憂慮スヘキ事ト思料セラレ候モ前記御通牒ノ趣旨ヨリ推ストキハ本件モ亦同規則ノ範圍外ノ如ク解セラレサルニ非ラサルヲ以テ之カ取締方ニ關シ貴局ノ御意見承知致度差當リ處置ヲ要スヘキ儀モ有之候條至急御回報相煩度及照會候也  
衛生局長回答 大正十二年三月十四日  
阪衛第一五三號

客年十二月十二日付衛第一二七四五號ヲ以テ御照會ノ標記ノ件了承右ハ牛乳營業取締規則第七條ニ依リ取締ル可キモノト存候

### 牛乳營業取締規則第十四條ニ關スル件

明治三十三年十一月九日  
衛第九五二五號

和歌山縣知事照會 明治三十三年十月三十日  
衛第三〇三號

スヘキ事項ヲ規定有之候處右規則ノ施行細則トシテ必用ノ制限内清涼飲料水ノ原料水ハ必ス蒸餾亦ハ煮沸水ノ外使用ヲ禁シ又ハ請賣營業者ヨリ健康證明書ヲ徴シ又牛乳ノ滅菌法又ハ冷却方法ヲ採ラシムル等ノ事項ヲ規定シ之ニ制裁ヲ付スルモ差支ヘ無之哉至急御回報相成度此段及問合候也  
衛生局長回答 明治三十三年八月二十七日  
無

本月十一日付衛第五一八號ヲ以テ御問合ノ趣了承右第一及第二ノ場合ハ共ニ實效ヲ期シ難カルヘキカ故強テ其ノ必要ヲ認メヌ又第三牛乳ノ滅菌法若ハ冷却方法ヲ採ラシムル場合ハ單ニ其實效ヲ期シ難キノミナラス之ヲ規定スルノ結果徒ラニ需用者ヲ安心セシメ却テ不識ノ間危害ニ陥ラシムル等ノ虞ナキヲ保セサルニ付之ヲ制限スヘカラサルモノト思考被致候條左様御了知相成度此段回答候也

### 均質牛乳取締上疑義ニ關スル件

大正九年十二月二十一日  
衛北第二三三號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

牛乳營業取締規則第十四條第一項一定ノ疾病ニ罹レル牛トハ同規則第五條第一項列記ノ各疾病ヲ指シタル義ニ候哉又右疾病中結核病ノミヲ指シタル義ナルカ聊カ疑義ヲ生シ候ニ付此段及照會候也

衛生局長回答 明治三十三年十一月九日  
衛第九五二五號

衛第三〇三號ヲ以テ牛乳取締規則第十四條第一項一定ノ疾病ニ罹ル牛ニ關シテ御照會ノ趣了承右ハ必竟快癒ノ見込ナキ病牛ヲ稱シタル儀ニ候得ハ直ニ第五條ノ疾病ニ該當スルモノニモ無之候就テハ專ラ結核諸症ニ適用相成可然ト存候此段及御回答候也

### 牛乳營業取締規則及清涼飲料水營業取締規則中地方長官ニ於テ制定スヘキ事項ノ件

明治三十三年八月二十七日  
衛生局長回答

熊本縣知事照會 明治三十三年八月十一日  
衛第五一八號

本年內務省令第十五號牛乳營業取締規則第二十一條省令第三十號清涼飲料水營業取締規則第十五條ニ地方長官ニ於テ制定

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

首標ノ件ニ關シ北海道廳長官トノ間ニ別記ノ通り照覆致候條  
爲念及移譯候也

北海道廳長官照會 大正九年十月十八日  
警備第一二七三八號

一般農村畜養牛ノ搾乳ヲ酸度試験ヲ行ヒ(煉乳製造用原料乳  
ト同シ)購入集收シ含有脂肪等ヲ均定シ之レカ原料ヲ「バス  
チユライザー」ニ依リ攝氏八十度ニ加熱シ「佛國製ホモゲナ  
イサー」(均質機)ニ透導シ乳球其他ヲ均質シ摺詰ノ上更ニ間  
歇的殺菌法ヲ施シ販賣セントスルモノハ牛乳營業取締規則ニ  
依ル全乳ナリヤ將又乳製品以外ノ特殊乳製品ナリヤ當廳ニ於  
テハ普通市乳ト其化學的性質上同一ナルモノト認メ乳牛搾取  
所牛乳取扱器具取扱者等諸般ニ互ル取締ヲ離脱セル即チ農村  
飼牛産乳ヲ用ユルハ衛生上危險ノ虞ナキヲ保セサルヲ以テ牛  
乳搾取營業者ノ牛乳ヲ原料トスルニアラサレハ其販賣ヲ認可  
スヘキモノニアラスト思料候モ取扱上疑義相生シ候ニ付貴局  
ノ御意見承知致度至急何分ノ御回答相煩度此段及照會候也  
衛生局長回答 大正九年十二月二十一日  
警備第二三三號

首標ノ件十月十八日附警備第一二七三八號ヲ以テ御照會相成  
候處右ハ御意見ノ通り全乳トシテ取締ルヘキ義ト被認候從テ  
農村飼牛産乳ノ如キモ牛乳營業取締規則ニ依リ牛乳營業ノ認

可ヲ受クルニアラサレハ之カ搾取販賣ヲ爲スコトヲ得サル義  
ト御了知相成度

●煉乳取締ニ牛乳營業取締規則  
ヲ適用可否ノ件

明治四十年三月十三日  
警備第一號

鳥根縣知事照會 明治三十九年十二月二十七日  
坤警第五二一號

今般縣下ニ於テ新ニ合名會社ヲ設立シ練乳ト稱スル一種ノ乳  
製品ヲ製造販賣セントスル者有之該品ノ製法、成分、用法等  
左ニ記載スルカ如クニシテ從來坊間ニ於テ需給セラル、粉乳  
ニ類似スルモノニ付粉乳ノ一種トシ牛乳營業取締規則ヲ適用  
スヘキモノト認メ候得共聊カ疑義ニ涉リ候間御意見承知致度  
差掛ル事件有之ニ付之至急何分御回報ヲ煩ハシ度現品相添此  
段照會候也

左記

一 製法製造者ノ申立ニ依レハ普通牛乳ニ汽熱ヲ與ヘ其水  
分ヲ蒸發セシメツ、一定ノ操作ヲ以テ練狀ノ小塊片ニ固  
形セシムルモノナリト然レトモ製造者ハ製法ヲ秘密ニ付

セントシ事實ヲ申立テサルノ疑ナキニ非サルヲ以テ多少  
ノ相違アルヤモ測リ難シトス

二 成分 本品ノ百分中成分ハ概ネ左ノ如シ

脂肪	四二、三〇〇
含窒素物	三四、一四五
乳糖	一四、六五五
灰分	四、六〇〇
水分	四、三〇〇

三 用法 本品ヲ適宜ノ湯水ニ溶解シテ飲用シ又ハ製品ノマ  
、之ヲ食シ若ハ菓子製造ノ原料ニ供スルヲ以テ目的トス  
ルモノナリ

衛生局長回答 明治四十年三月十三日  
警備第一號

練乳取締方ニ關シ容年十二月二十七日付坤警第五二一號御照  
會之趣了承右ハ御見解ノ通ト存候 段及回答候也

●輸入煉乳取締ニ關スル件

大正三年五月  
警備第一八三號

(衛生局長  
啓)

輸入煉乳中往々其脂肪量標準以下ノモノ有之ヤノ趣ニテ之カ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第二節 牛乳

取締ニ關シ帝國議會ヘ請願ノ向モ有之候條取締方自今一層御  
注意相成候條致度

●乳酸菌入牛乳其他取締ニ關ス  
ル件

大正十一年五月十七日  
警備第一四八號

大阪府知事照會 大正十一年四月二十日  
警備第一四八號

近來乳酸菌入牛乳又ハ加味「ヨーグルド」ナルモノヲ左記製  
法ニ製造シタルモノヲ販賣スルモノ續出候處右乳酸菌入牛乳  
營業取締規則第七條第三項ニ據リ加味「ヨーグルド」ハ乳製  
品(「ヨーグルド」ニ加味セルモノニ付)トシテ取締シ可然モ  
ノナリヤ貴局ノ御意見承知致度及照會候也

一、ヨーグルド製法(二種)

(甲)、原菌神戸衛生試驗所製造ブルガリヤ菌ト糖化菌トノ混  
合劑ピオフェルミン

方法 新鮮ナル牛乳一斗ヲ七升ニ加熱濃縮シ五斗五才ニ  
入ルル容瓶ニ分チ之ニ「オピフェルミン」一瓦ヲ入レ攝  
氏三十八度ニ於テ二十四時間培養シ得タルモノヲ瓶入原  
菌トス

更ニ前記濃縮シタル牛乳一斗ノ中ニ前項瓶入原菌四瓶ヲ加ヘテ攪拌シ之ヲ「ヨーグルド」用瓶ニ九十瓦ヲ入レ且適宜レモン油ヲ加ヘ三十八度ニ於テ八時間培養シ得タルモノヲ「ヨーグルド」トシテ販賣ス

(乙)方法 搾取直渡ノ生乳ヲ一時間餘九十度ニテ煮沸シ三分ノ一容量トナル迄攪拌シツツ牛乳一斗ニ對シ一斤ノ割合ニテ砂糖ヲ加ヘ三分ノ一容量トナリシ時二十度以下ニ冷却シ之ニ B B 印「レモン」ヲ牛乳一合ニ對シ一二滴ノ割合ニテ加ヘ更ニ一方ニ於テ寒天斜面培養セシ菌ヲ牛乳一合ニテ洗ヒ落シテ培養シ之ヲ牛乳二升中ニ加ヘシモノヲ牛乳一斗ニ對シ五合ノ割合ニ加ヘテ瓶詰トシ解卵器中ニ入レ牛乳ノ温度四十度内外ニナリシ時ヨリ約三四時間培養シテ製出セシモノヲ冷蔵庫ニ貯藏ス

一、乳酸菌入牛乳製法(二種)  
(甲)方法 攝氏百度ニ於テ牛乳一斗ヲ七升ノ割合ニ濃縮シタルモノヲ三十七度ニ冷却シ之カ一斗中ニ前記瓶入原菌四瓶分及「ゴハン」ト稱スル砂糖適量ヲ加ヘ普通牛乳ト同シキ容瓶ニ入レ數時間後ニ販賣ス  
(乙)方法 前記乙號ノ試験管一本ノ原菌ヲ一合ノ牛乳ニテ洗ヒ落シテ培養シ之ヲ牛乳一斗中ニ五合及砂糖一斤ノ割合

ニテ混和シ更ニ適宜ノ B B 印「レモン」ヲ加ヘテ能ク攪拌シテ瓶詰トシ室内温ニテ一晝夜放置シタル後販賣ス  
衛生局長回答 大正十一年五月十七日 衛保第一四八號  
標記ノ件ニ關シ四月二十日衛第四一五二號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ何レモ現行牛乳營業取締規則ニテ取締ルヘキ限リニ非スト思料セラレ候條貴府ニ於テ適宜取締ノ方法ヲ講セラレ候様致度

●「コーヒ」又ハ「チョコレート」入煉乳ト稱スル物ノ取締方ノ件

大正七年十一月二十一日 衛保第一八七號  
北海道長廳官照會 大正七年八月三十日 警衛第一二二八三號  
普通煉乳製造工程中「コーヒ」又ハ「チョコレート」浸出液ヲ加ヘ製造シタル乳製品ニ「コーヒ」入煉乳又ハ「チョコレート」入煉乳ト稱シ販賣セントスルモノ有之候處右「コーヒ」「チョコレート」ハ牛乳營業取締規則第九條第二號ノ他物ト認ムル哉或ハ蔗糖同様ノモノト見做シ他物ニアラスト認ムルモノナリヤ之ヲ他物ト認ムルトキハ木製品ハ牛乳營業取締規則

第一條ノ定ノ乳製品以外ノ乳製品トシテ取扱ハサル限リ市場ニハ絕對販賣セラレサルコト相成ルヘク又後段ノ解釋ニ從ヒ蔗糖同様ノ物ト認メ牛乳營業取締規則第一條ノ乳製品トシテ取扱フヘキヤ或ハ第一ノ解釋ニ從ヒ牛乳營業取締規則第一條規定ノ乳製品以外ノ乳製品トシテ取扱フヘキヤ取締上疑義相生シ候ニ付貴局ノ御意見承知致度候條至急何分ノ御回答相煩度此段及御照會候也  
衛生局長回答 大正七年十一月二十一日 衛保第一八七號  
標記ノ件ニ關シ本年八月三十日付警衛第一二二八三號御照會ノ趣了承普通煉乳製造工程中「コーヒ」又ハ「チョコレート」ノ浸出液ヲ加ヘ製造シタル何々入煉乳ト稱スル物ノ如キハ牛乳營業取締規則第一條ニ所謂乳製品ニハ無之特殊ノ乳製品トシテ御取扱相成可然ト存候

●「ヨーグルド」及「ケファイア」製造販賣取締ニ關ルス件

大正三年五月 衛生局長回答  
大正三年五月 衛保第八四號  
京都府知事照會

近來「ヨーグルド」及「ケファイア」ノ製造販賣營業ヲ顯出ツル者多々有之候處内務省令第十五號第一條ニ規定サレタル乳製品ト認メ難キモ該品ハ牛乳ヲ原料トシテ製造スルモノニシテ粗製濫造賣ニ放任スルトキハ危險ナキヲ保シ難キ様思料セラレ候ニ付右取締上乳製品トシテ取扱可然哉至急何分ノ御回示相成度  
(衛生局長回答)  
右ハ牛乳營業取締規則第一條ノ乳製品ト稱シ難ク候條差當リ貴府ニ於テ相當ノ規定ヲ設クル等適宜御取締相成様致度

●乳酸菌入牛乳及加味ヨーグルト取締ニ關スル件

大正十一年五月十七日 衛保第一四八號  
大阪府知事照會 大正十一年四月二十日 衛第四一五二號  
近來乳酸菌入牛乳又ハ加味ヨーグルドナルモノヲ左記製法ニ製造シタルモノヲ販賣スルモノ續出候處右乳酸菌入牛乳ハ牛乳營業取締規則第七條第三項ニ依リ加味ヨーグルドハ乳製品(ヨーグルドニ加味セルモノニ付)トシテ取締リ可然モノナリ

ヤ貴局ノ御意見承知致度及照會候也

左記

一、ヨーグルド製法(二種)

(甲) 原菌神戸衛生試験所製造ブルガリヤ菌ト糖化菌ト混合劑「ピオフェルミン」

方法新鮮ナル牛乳一斗ヲ七升ニ加熱濃縮シ五勺五才ニ入ルル容瓶ニ分チ之ヲ「ピオフェルミン」壹瓦ヲ入レ攝氏三十八度ニ於テ二十四時間培養シ得タルモノヲ瓶入原菌トス

更ニ前記濃縮シタル牛乳壹斗中ニ前項瓶入原菌四瓶ヲ加ヘテ攪拌シ之ヲ「ヨーグルド」用瓶九十五瓦ヲ入レ且適宜レモン油ヲ加ヘ三十八度ニ於テ八時間培養シ得タルモノヲ「ヨーグルド」トシテ販賣ス

(乙) 方法 搾取直渡ノ生乳ヲ一時間餘九十度ニテ煮沸シ三分ノ一容量トナル迄攪拌シツツ牛乳一斗ニ對シ一斤ノ割合ニテ砂糖ヲ加ヘ三分ノ一容量トナリシ時二十度以下ニ冷却シ之ニBB印レモンヲ牛乳一合ニ對シ一二滴ノ割合ニテ加ヘ更ニ一方ニ於テ寒天斜面培養セシ菌ヲ牛乳一合ニテ洗ヒ落シテ培養シ之ヲ牛乳二升中ニ加ヘシモノヲ牛乳一斗ニ對シ五合ノ割合ニ加ヘテ瓶詰トシ貯留器中ニ入

レ牛乳ノ温度四十度内外ニナリシ時ヨリ約三四時間培養シテ製出セシモノヲ冷蔵庫ニ貯藏ス

一、乳酸菌入牛乳製法(二種)

(甲) 方法 攝氏百度ニ於テ牛乳一斗ヲ七升ノ割合ニ濃縮シタルモノヲ三十七度ニ冷却シ之カ一斗中ニ前記瓶入原菌四瓶分及「ゴハン」ト稱スル砂糖適量ヲ加ヘ普通牛乳ト同シキ容瓶ニ入レ數時間後ニ販賣ス

(乙) 方法 前記乙號ノ試験管一本ノ原菌ヲ一合ノ牛乳ニテ洗ヒ落シテ培養シ之ヲ牛乳一斗中ニ五合及砂糖一斤ノ割合ニテ混和シ更ニ適宜ノBB印レモンヲ加ヘテ能ク攪拌シテ瓶詰トシ室内温ニテ一晝夜放置シタル後販賣ス

衛生局長回答 大正十一年五月十七日 衛保第一四八號

標記ノ件ニ關シ四月二十日衛第四一五二號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ何レモ現行牛乳營業取締規則ニテ取締ルヘキ限リニ非スト思料セラレ候條貴府ニ於テ適宜取締ノ方法ヲ講セラレ候様致度

●「ラクトスターゼ」又ハ「ラクチン」等ヲ使用シ牛乳ヲ凝固

〔衛〕

セシメ販賣スル者ノ取締方

大正三年四月 衛生局回答

熊本縣知事照會 大正三年四月 衛熊第五九號

「ラクトスターゼ」又ハ「ラクチン」等ヲ用ヒ牛乳ヲ凝固セシメ販賣ノ用ニ供セントスル者アリ右ハ乳製品トシテ取締ノ必要ヲ認メラルト雖モ牛乳營業取締規則第一條ノ所謂乳製品ト稱スヘキヤ否ニ關シ聊カ疑義有之候條貴官ノ御意見至急御回示相成度

(衛生局長回答)

右ハ乳製品ト稱シ難ク候條貴縣ニ於テ取締ノ必要ヲ認メラルルニ於テハ相當規定ヲ設ケラルル等適宜御取締相成度候

第三節 清涼飲料水

●清涼飲料水營業取締規則

明治三十三年六月五日 内務省令第三十號

〔衛〕

沿章 明治三十九年六月六日内務省令第九號、四三年七月第二六號、一二年三月第七號 改正

清涼飲料水營業取締規則左ノ通定ム

清涼飲料水營業取締規則

第一條 本則ニ於テ清涼飲料水ト稱スルハ販賣ノ用ニ供スル「ラムネ」、「リモナーデ」(果實水、薄荷水及桂皮水ノ類ヲ含ム)曹達水及其ノ他炭酸含有ノ飲料水並果實汁、果實蜜及之ニ類似スル製品ニシテ稀釋シテ飲用ニ供スルモノヲ謂フ

清涼飲料水營業者ト稱スルハ清涼飲料水ノ製造(清涼飲料水ニ供スル鐵器ノ採取ヲ)販賣又ハ請賣ヲ營業ト爲ス者ヲ謂フ

第二條 清涼飲料水製造ノ營業ヲ爲サントスル者ハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

地方長官本條ノ認可ヲ爲ストキハ衛生技術員ヲシテ製造場ノ構造、設備及用水ヲ検査セシムヘシ

第三條 清涼飲料水營業者ハ飲料水ニ接觸スル部分ヲ銅、鉛又ハ其ノ合金ニテ製シタル調製器、容器又ハ量器ヲ使用スルコトヲ得ス但シ鍍錫其ノ他衛生上有害ノ虞ナキ方法ヲ施シタルモノハ此ノ限ニ在ラス



第四條 清涼飲料水營業者ハ清涼飲料水ノ製造又ハ貯蔵ニ有毒性「テール」色素、「サツカリン」其ノ他人工甘味質、有害性芳香質又ハ防腐劑ヲ使用スルコトヲ得ス

「テール」色素ハ前項以外ノモノト雖モ製造地地方長官ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第五條 清涼飲料水營業者ハ左ノ清涼飲料水ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列シ若ハ貯蔵スルコトヲ得ス

一 潤滑又ハ變敗シタルモノ

二 沈澱物又ハ固形ノ夾雜物アルモノ

三 鹽酸、硝酸及硫酸其ノ他遊離礦酸ヲ含有スルモノ

四 砒素、安知母、鉍、鉛、亞鉛、銅、錫ヲ含有スルモノ

五 有害性其ノ他製造地又ハ輸入地地方長官ノ許可ヲ受ケサル「テール」色素ヲ含有スルモノ

六 「サツカリン」其ノ他人工甘味質ヲ含有スルモノ

七 有害性芳香質ヲ含有スルモノ

八 防腐劑ヲ含有スルモノ

果實汁、果實蜜及之ニ類似スル製品ニシテ稀釋シテ飲用ニ供スルモノノ中原料トシテ使用スル果實ノ類、砂糖及水ノ他外物ヲ混和セサル製品ニ就テハ前項第一號及第二號ノ規定ハ原料植物ノ組織及成分ニ基因スル場合ニ限リ之ヲ適用ス

セス但シ變敗シタルモノニ就テハ此ノ限ニ在ラス

第六條 清涼飲料水製造者ハ其ノ氏名、社名、營業所ノ所在並製造年月日ヲ記載シタル票紙ヲ以テ清涼飲料水ヲ販賣スル容器ヲ封緘スヘシ但シ製造地地方長官ニ於テ許可シタルモノニ就テハ此ノ限ニ在ラス

「テール」色素ヲ含有スル清涼飲料水ニハ製造者又ハ輸入者ハ其ノ容器ニ人工著色ノ文字ヲ明記スヘシ

第七條 清涼飲料水營業者ハ清涼飲料水ノ調製器、容器、量器及製造場其ノ他清涼飲料水ヲ取扱フ場所ヲ常ニ清潔ニ爲スヘシ

第八條 清涼飲料水營業者ハ結核、癩病、梅毒及傳染病ニ罹レル者ヲシテ清涼飲料水ノ調製若ハ小分ヲ爲サシメ又ハ其ノ場所ニ立入ラシムルコトヲ得ス清涼飲料水營業者ニシテ其ノ疾病ニ罹レルトキ亦之ニ準ス

第九條 地方長官ハ第三條ノ器具第五條ノ清涼飲料水ニ關シテハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第十條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シテハ明治三十三年二月法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第十一條 清涼飲料水營業者虛偽ノ記載ヲ爲シタル封緘票紙

ヲ貼用シ若ハ貼用セシメタル者又ハ封緘票紙ニ虛偽ノ記載ヲ爲シ若ハ爲サシメタル者ハ二十五日以下ノ「重禁錮」ニ處ス

第十二條 左ニ掲クル者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

一 認可ヲ受ケスシテ第二條ノ營業ヲ爲シタル者

二 第三條乃至第五條ニ違背シタル者

第十三條 第六條乃至第八條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十四條 清涼飲料水營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シテ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

清涼飲料水營業者ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス

法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス

法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

第十五條 本則ハ明治三十三年九月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ「ラムネ」ニ關シテハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 地方長官ハ清涼飲料水ノ製造場ノ構造設備及管理方法ニ關シ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第十七條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

●清涼飲料水取締規則有害性著色料取締規則飲食物及布片中砒素及錫ノ試驗方法

明治三十四年十月十二日 內務省令第三十號

清涼飲料水營業取締規則有害性著色料取締規則飲食物及布片中砒素及錫ノ試驗方法左ノ通定ム

一 飲食物中砒素及錫ノ定性分析法

甲 固體

著色部分二十一グラム一ヲ取り試験ニ供スヘシ若シ其ノ量ヲ得難キトキハ少量ヲ使用スルコトヲ得

檢體ヲ細割若ハ粉碎シ瓷皿ニ容レ之ニ純鹽酸(比重一、一〇乃至一、一三)ヲ三倍容量ノ蒸餾水ヲ以テ稀釋シタルモノ百立方「センチメートル」ヲ注加シ次ニ格魯兒酸加留膜約〇、五「グラム」ヲ投加シ重湯煎上ニ致シ其ノ内容ノ溫度重湯煎ノ溫度ニ達スルヲ窺ヒ五分時間毎ニ格魯兒酸加留膜〇、一乃至〇、二「グラム」ヲ投加シ蒸發スル水分ハ斷ヘス之ヲ補ヒ其ノ内容鮮黃色ニシテ且均同稀薄トナルニ至ラハ尙約〇、五「グラム」ノ格魯兒酸加留膜ヲ投加シ加温シ格魯兒酸ノ消失スルニ至リ冷却シ濾過シ紙濾上ノ殘渣ハ溫湯ヲ以テ能ク洗滌シ濾液及洗滌液ヲ最初用キタル純鹽酸量ノ少クモ六倍トナシ之ヲ攝氏六十度乃至八十度ニ温メツ、三時間徐々ニ純硫化水素瓦斯ヲ通シ飽和セシメ然ル後濾紙ヲ以テ覆ヒ少クモ十二時間温處ニ放置シ茲ニ洗滌ヲ生セハ濾過シ硫化水素含有ノ水ヲ以テ能ク洗滌シ尙濾過ナルニ乘シ黃色硫化安母紐膜(黃色硫化安母紐膜四立方「センチメートル」比重〇、九六ノ安母尼亞水二立方「センチメートル」及水十五立方「センチメートル」ヨリ成レル混和液)ヲ以テ溶解セシメ殘渣ハ硫化安母紐膜含有ノ水ヲ以テ

洗滌シ其ノ濾液及洗滌液ハ微温ニテ蒸發乾燥シ之ニ約三立方「センチメートル」ノ發煙硝酸ヲ加ヘ微温ニテ蒸發シ黃色ノ殘渣ヲ得ルニ至リ(殘渣尙暗色ナレハ發煙硝酸ヲ加ヘテ温ムルノ法ヲ反復スヘシ)其ノ殘渣ノ濾過ナルニ乘シ之ニ少量ノ炭酸那篤留膜末ヲ加ヘテ亞爾加里性トナシ之ニ三分ノ炭酸那篤留膜及一分ノ硝酸篤留膜ヨリ成レル混和物ニ「グラム」ヲ加ヘ更ニ少量ノ水ヲ混シ均同泥狀トナシ乾燥シ注意シテ熱シ溶解セシメ無色トナルニ至リ(溶塊無色ナラサルトキハ尙少量ノ硝酸那篤留膜ヲ加フヘシ)溶塊ハ冷後溫湯ヲ以テ溶解シ濾過シ始メハ冷水次ニ水及酒精各等分ヨリ成レル混和液ヲ以テ洗滌スヘシ錫アレハ濾紙上ノ殘渣中ニ存在シ砒素アレハ濾液中ニ存在ス

濾液及洗滌液ハ蒸發シテ約十五立方「センチメートル」トナシタル後稀硝酸ヲ滴加シテ酸性トナシ(茲ニ水酸化錫ヨリ成レル沈澱ヲ生セハ前ノ如ク濾過洗滌スヘシ)温メテ炭酸及亞硝酸ヲ去リ(必要アレハ濾過スヘシ)然ル後過量ノ安母尼亞水ヲ加ヘ(必要アレハ濾過スヘシ)次ニ少量ノ酒精及麻痺失亞合劑ヲ加フヘシ砒素存在スレハ直ニ「若ハ冷所ニ放置シタル後」白色結晶性ノ沈澱ヲ析出ス此ノ沈澱ヲ濾過シ安母尼亞水一分水二分及酒精一分ヨリ成レル混和

液少量ヲ以テ洗滌シタル後成ル可ク少量ノ稀硝酸ニ溶解シ其ノ溶液ヲ蒸發シ少量トナシ其ノ一滴ヲ小瓷皿ニ取り硝酸銀溶液一滴ヲ加ヘ瓷皿ノ邊縁ヨリ安母尼亞水(比重〇、九六)一滴ヲ注意シテ添加スヘシ然ルトキハ其ノ接界ニ赤褐色ノ帶ヲ生ス

前上炭酸那篤留膜ト硝酸那篤留膜トノ溶塊ノ水ニ溶解セル殘渣ハ濾紙ト共ニ乾燥シ磁製坩堝内ニ於テ灰化シ之ニ少量ノ炭化加留膜ヲ加ヘ熱シテ溶解シ且紅熾シ始ムルニ至ラシムヘシ冷後坩堝ノ内容ニ水ヲ加ヘテ軟化シ水ヲ用キテ瓷皿内ニ移スヘシ錫存在スレハ金屬トナリ沈著スルヲ以テ能ク洗滌シ乾燥シタル後之ニ少量ノ鹽酸ヲ加ヘテ温メ其ノ溶液ニ就キア昇汞又ハ格魯兒金若ハ硫化水素ヲ以テ錫ヲ檢査スヘシ

乙液體

液中ニ含有スル固形物質質量約二十「グラム」ニ應スル量ヲ取り試験ニ供スヘシ

稀薄ノ液體ニシテ酸性ナラサルモノハ直チニ蒸發シ酸性ノモノハ蒸餾シテ少量トナシ其ノ殘渣ハ固體ノ試験ニ於ケル如ク格魯兒酸加留膜及濾液ヲ以テ處置スヘシ其ノ濾液ハ濾紙ニテ酸性トナシ純硫化水素瓦斯ヲ通シ若シ沈澱ヲ生セ

ハ前ノ殘渣ヨリ得ヘキ硫化水素沈澱ト合スヘシ

二 布片中砒素ノ定量分析法

檢體三十一「グラム」ヲ取り其ノ面積ヲ計測ノタル後之ヲ細截シ内容約四百立方「センチメートル」ノ有口「レトルト」ニ投加シ之ニ純鹽酸(比重一、一八乃至一、一九)百立方「センチメートル」ヲ注加シ其ノ「レトルト」ノ斜メニ上向セル頸部ト鈍角ヲナシテ冷却器ヲ結合シ受器ハ内容約五百立方「センチメートル」ノモノヲ撰ミ之ニ蒸餾水二百立方「センチメートル」ヲ充タシ此ノ受器ヲ冷却シ氣密ニ冷却器ト連結スヘシ斯クシテ鹽酸注加後約一時間ヲ經過セハ之ニ砒素ヲ含有セサル亞格魯兒鐵冷飽和溶液五立方「センチメートル」ヲ注加シ蒸餾スヘシ「レトルト」内ノ液體殆ソト抽出シ終ルニ及テ之ヲ冷却セシメ更ニ五十立方「センチメートル」ノ純鹽酸ヲ加ヘ再ヒ蒸餾スルコト前ノ如ク茲ニ得タル濾液ハ通常褐色ヲ呈ス此ノ液ニ水ヲ加ヘテ六百乃至七百立方「センチメートル」トナシ攝氏六十度乃至八十度ニ温メツル三時間徐々ニ純硫化水素瓦斯ヲ通シテ飽和セシメ濾紙ヲ以テ覆ヒ少クモ十二時間温處ニ放置シ茲ニ生シタル沈澱ヲ濾過シ硫化水素含有ノ水ヲ以テ能ク洗滌シ其ノ沈澱尙濾過ナルニ乘シ黃色硫化安母紐膜(黃色硫化安母紐膜四

立方「センチメートル」比重〇・九六ノ安母尼亞水二立方「センチメートル」及水十五立方「センチメートル」ヨリ成レル混和液ヲ以テ溶解セシメ残渣ハ硫化安母紐含有ノ水ヲ以テ洗滌シ其ノ濾液及洗滌液ハ磁製坩堝ニ容レ微温ニテ蒸發乾燥シ之ニ約三立方「センチメートル」ノ發煙硝酸ヲ加ヘ時計硝子ヲ以テ覆ヒ微温ニテ蒸發シ（残渣尙暗色ナレハ發煙硝酸ヲノヘテ温ムル法ヲ反復スヘシ）其ノ残渣尙濕潤ナルニ乗シ之ニ少量ノ炭酸那篤留末ヲ加ヘテ亞爾加里性トナシ之ニ三分ノ炭酸那篤留及一分ノ硝酸那篤留ヨリ成レル混和物ニ「グラム」ヲ加ヘ更ニ少量ノ混シ均同泥狀トナシ重湯煎上ニ於テ乾燥シ注意シテ熱シ熔融セシメ無色トナルニ至リ（溶液無色ナラサルトキハ尙少量ノ硝酸那篤留ヲ加フヘシ）溶液ハ後冷温湯ヲ以テ溶解シ濾過シ初メ冷水次ニ水及酒精各等分ヨリ成レル混和液ヲ以テ洗滌シ濾液及洗滌液ハ蒸發シテ約十五立方「センチメートル」トナシタル後稀硝酸ヲ滴加シ酸性トナシ（茲ニ沈澱ヲ生セハ濾過洗滌スヘシ）温メテ炭酸及亞硝酸ヲ去リ（必要アレハ濾過スヘシ）然ル後過量ノ安母尼亞水ヲ加ヘ（必要アレハ濾過スヘシ）次ニ少量ノ酒精及麻痺濕失亞合劑ヲ加ヘ硫酸安母紐誤麻痺濕失亞トナシ常法ニ從ヒ定量シ布片百平方「センチ

「センチメートル」ニ付砒素ノ含有量ヲ算出スヘシ

### ●清涼飲料水營業取締規則中改正ニ關スル件

明治四十三年七月  
衛生局  
第五三六六號

今般清涼飲料水營業取締規則中改正相成候處「テール」色素中ニハ無害性ノモノモ有之是等ハ必要ニ應シ使用ヲ許可シ可然トノ趣旨ヲ以テ改正相成候次第ニ有之候得共該色素ハ其種類甚多ク既製品ニ付果シテ何レノ種類ノモノヲ用ヒタリヤ從テ無害ノモノナリヤヲ檢定スルハ至難ナル總ニ付營業者ヲシテ先以テ其使用セントスル「テール」色素輸入品ナルトキハ其使用シタル「テール」色素ノ種類ヲ詳記出願セシメ且之ニ試驗用ノ現品ヲ添付セシメ願書記載ノ種類ト一致スルヤ否ヤヲ檢定シタル上許可セラレ而シテ許可後販賣ノ製品力許可以外ノ「テール」色素ヲ含有セサルヤ否取締上御注意相成様致度候而シテ「テール」色素中左記ノモノハ必要ニ應シ前記手續ニ依リ許可セラレ可然モ其他ノ「テール」色素若ハク之ヲ含有スル者色料ノ使用ヲ出願シ又ハ是等ヲ含有スル飲食水ノ輸入販

〔衛〕

賣若クハ是等ヲ含有スル原料ノ使用ヲ出願スル者アリタルトキハ當分ノ内一應當局ニ御打合せノ上許可相成度候又第六條第一項ノ改正ハ「クラウンコルク」(或ハ云フ王冠打)硝子玉栓等ヲ用フル「サイダー」「ラムネ」其製造場ノ構造設備製法等近來概シテ改良セラレ製品又相當持久力ヲ有スルニ至リ強テ之ニ製造年月日ヲ記載セシムルノ必要ナク而モ運搬又ハ販賣上多大ノ困難ヲ感シ候趣ニ付今回之ヲ改正セラレタル次第ニ有之依テ前記ノ趣旨御斟酌ノ上封緘省略ヲ許可セラレ可然候次第ニ今回ノ改正中製造地又ハ輸入地地方長官ノ許可云々トアルハ一旦製造地又ハ輸入地地方長官ニ於テ許可シタルモノハ他管内ニ於テハ更ニ許可其他ノ手續ヲ要セス販賣セシムルノ趣旨ニ有之候間御承知相成度尙第六條第二項ハ需用者ヲシテ製造原料ヨリ生シタル色相ト誤認セシムルノ弊ヲ防クノ趣旨ニ出テタル義ニ付貼紙ノ相當ナル位置ニ明瞭ニ記載モシムル様御取締相成度此段及通牒候也

#### 一 赤 色

- (1)「プロキシン」Pulxin(ヂクロール、ナトラブローム、フルオレスツエイン)ノ「カリウム鹽類」
- (2)「エオジン」Eosin(テトラブローム、フルオレスツエイン)ノ「アルカリ鹽類」

#### 二 橙 黄色

- (3)「クリトロン」B、Erythrosin B 又「ヨードエオジン」B、Todeosin B(テトラヨード、フルオレスツエイン)ノ「アルカリ鹽類」
- (4)「ローゼンガール」oRosc bengale 又「ベンガールローゼ」Bengal rose(ヂクロール、テトラヨード、フルオレスツエイン)ノ「カリウム鹽類」
- (5)「アマラント」Amaranth 又「ヘトロート」NS、Echrot NS 又「ナフトーネロート」Na、Naphtholrots 又「ボルドー」S、Bordeaux s(ナフトエオン酸アツオ、ナフトール)(1)ヂスルフオ酸(3)六)ノ「ナトリウム鹽類」

#### 三 黄 色

- (1)「ナフトールゲルブ」Na、Naphtholgelb S 又「シュウエーフェルゲルブ」S、Schwefelgelb S 又「ソイレゲルブ」S、Sauerelb S 又「アニングゲルブ」

Anilngelb 又「チロニン」又 Citronin 又「ヤ  
ウネアチデ」Jauneacide 「ザニトロ」(一、四)ナ  
フトール(一)スルフォ酸(七)「カリウム」又「ナ  
トリウム鹽類」

四 青色

「インヂゴヤスハフアチド」Indigodisulfacid (イン  
ヂゴ、ヂスルフォ酸ナトリウム)

五 緑色

「リヒトグリーン」SF、Lichgrun S.F. 又「ゾイ  
レグリン」D Sauregrun D 又「ゾイレグリン  
エキストラ」Sauregrun - Mira (ヂメチール、ヂベ  
チール、ヂアミ、ドトリフェニール、カルビノール、  
トリスルフォ酸ノ「ナトリウム鹽類」)

大正十二年三月二十六日  
内務省發衛第五三號

(地方長官宛  
衛生局長通牒)

今般内務省令第七號ヲ以テ標記取締規則改正ノ件公布相成候  
處右官施ニ關シテハ左記要項知了知ノ上取締上遺憾ナキヲ期

セラレ候様致度

一、果實汁、果實蜜ニ類似スル製品ニシテ、糖、糖、シハ飲料ニ供  
スルモノトハ植物ノ根、葉、種子等ヲ原料トシテ製造シ  
タル「生蜜」、薄荷蜜、「紅茶シロツブ」、「珈琲シロ  
ツブ」ノ類ヲ指スモノト御承知相成度

二、第五條第二項ノ規定ニ該當スル製品ニ付テハ其ノ潤濁、  
沈澱物及固形爽雜物カ原料植物ノ組織及成分ニ基因スル  
モノナルヤ或ハ他ノ事由ニ基因スルモノナルヤノ鑑別ハ  
衛生上特ニ重要ト認メラルルノミナラス右製品ハ製法ニ  
依リテハ比較的變敗シ易キ性質ヲ生スルヲ免レサルニ付  
製品ノ取締ヲ勵行スルト共ニ特ニ製製場ノ監督指導ニ留  
意セラレ兼ネテ規則第五條第二項ヲ適用スヘキモノト然  
ラサルモノトヲ豫メ區別シ店頭取締上ノ便宜ニ供スル様  
致度

三、「テール」色素ヲ含有スル清涼飲料水ニハ人工著色ノ文字  
ヲ明記スルヲ要スル規定ナルニ拘ハラス其ノ位置及字體  
ノ大サ等ニ於テ往々明記ト難認モノ尠カラス右ノ規定ハ  
改正規則第五條第二項ノ規定ニ該當スル製品ト他ノ製品  
トノ區別ヲ判明ナラシムル上ニモ關係尠カラサル儀ニ付  
キ規定ノ文字ハ容易ニ認識ノ得ル位置ニ明瞭ニ記載セシ

(衛)

ムル様督勵セラレ度

- 四、輸入製品ニシテ「テール」色素ヲ含有スルモノニ付テハ  
歐文ヲ以テ人工著色タルコトヲ表示シアル場合ト雖モ人  
工著色ノ文字ヲ明記セシメラレ度
- 五、果實汁、果實蜜ニ關シ既ニ規則第二條ノ認可ヲ受ケ居ル  
者ニ對シスハ改正規則ニ據リ更メテ認可ヲ受クルヲ要セ  
サルコトニ御取扱相成度

●清涼料水原料ニ乳酸使用ニ關

スル件

大正十三年二月二十二日  
衛保第六七號

茨城縣知事照會 大正十三年一月三十日  
衛發第二六號

今般清涼飲料水原料ニ左記ノ通乳酸ノ使用出願有之候處差支  
無之様認メラレ候得共該乳酸ノ許否ニ付一應貴局ノ御意見伺  
度尙許可差支無之候ハ、其ノ分量等承知致度

砂	糖	壹	貫	枸橼酸	十	匁
乳	酸	五	十	瓦	香	料
					五	十
					瓦	

第五類 保健 第四章 食物其他ノ物品 第三節 清涼飲料水

五七

ポルトーエス

二分

水

壹斗三升六合

(衛)

但貳合罐六十六本ヲ製造ス

衛生局長同答 大正十三年二月二十二日  
衛保第六七號

標記ノ件ニ關シ客月三十日付衛發第二六號ヲ以テ御照會之儀  
了承右ハ許可差支無之者ト認メラレ候

●清涼飲料水著色料使用許否ノ

件

明治四十三年九月二十一日  
衛生局長同答

兵庫縣知事照會 明治四十三年七月二十七日  
衛收第五五九三號ノ一

清涼飲料水營業者ニシテ「テール」色素ヲ含有スル「シナル  
コエツセス」ノ使用届出テタル者有之候處右ハ獨逸國デッ  
トモルト市シナルコ株式會社製造ニ係ル「ノイコクタン」及  
「ゾイレゲンブ」ノ二種ヨリナリタルモノニシテ使用差支ナキ  
モノト思料候モ該色素ハ本月十五日付内務省衛發第五三六六號  
御通牒列記外ノモノニ付一應貴局ノ御意見承知致度此段及照

衛生局長回答 明治四十三年八月二十四日  
客月二十七日付御照會清涼飲料水ニ「シナルコエツセンス」  
許否ノ件ハ使用セシムルモ差支ナシト存ス

千葉縣知事照會 明治四十三年九月二十一日  
衛第五六四五號

テール色素ストロベリー植物性赤色着色劑(ベセテブルレッツ  
トカラリングダマター)ヲ清涼飲料水ニ配伍方出願者有之候  
處右ハ許可スルモ差支無之哉御回答相煩度本年七月十五日内務  
省衛第五三六六號ヲ以テ御通牒ノ次第モ有之候ニ付現品相添  
此段及照會候

衛生局長回答 明治四十四年六月十七日  
衛千第八四號

清涼飲料水着色料ノ義ニ付客年九月二十一日付衛第五六四五  
號及本月十三日付衛第五六四五號ヲ以テ御照會ノ處ノ植物性  
着色料ハ規則ニヨリ取締ルヘキモノニ無之候得共テール色素  
ストロベリート稱スルモノハ未タ其本體ヲ證明シ得サルモノ  
ニ付許可スヘキモノニ無之ト被存候條右様御了知相成度此段  
及回答候也

北海道廳長官照會 明治四十四年一月十三日  
警衛第二〇一號

一テール色素  
ブラウン(BROWN)  
獨逸國伯林アニリン染料製造合資會社製造  
右テール色素ヲ清涼飲料水シヤペンサイダーニ加味(水量一  
升ニ付一分割)致度旨願出者有之候處本品ハ客年七月十五日  
付衛第五三六六號ヲ以テ御通牒相成タル品目以外ノモノト被  
認候ニ付テハ許否ニ關シ御意見承知致度候條何分ノ御回報煩  
ハシ度此段及照會候

追テ別便ヲ以テ原品及御送附候條此段申添候也

衛生局長回答 明治四十四年七月七日  
衛北第一一號ノ内

清涼飲料水ニ「テール」色素使用許否ノ義ニ付本年一月十三日  
付警衛第二〇一號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ衛生上害否不明  
ノモノニ付許可不相成方可然ト存候此段及回答候也

明治四十四年八月三日  
衛廣第六六號

(各地方長官宛(東京府、廣島)縣ヲ除ク)衛生局長通牒

(衛)

清涼飲料水ニ使用スヘキテール色素許否ノ義廣島縣ヨリ照會  
ニ付左記ノ通回答候條爲念此段及通牒候也

廣島縣知事照會 明治四十四年三月十六日  
衛第一六〇九號ノ内

別封テール色素ヲ清涼飲料水着色料トシテ使用方願出ツルモ  
ノ有之候處許可シ差支ナキヤ御意見承知致度候

衛生局長回答 明治四十四年八月三日  
衛廣第六六號

清涼飲料水着色料使用許否ノ義ニ付本年三月十六日衛付第一  
六〇九號ノ内ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ別紙東京衛生試驗所  
試驗成績寫ノ通ボンソールニ該當スルモノニ付許可相成可然  
ト被存候此段及回答候也

(別紙略ス)

明治四十四年九月二十七日  
衛廣第一一二號

(北海道廳長官、警視總監、各府縣知事)宛但東京府廣島縣ヲ除ク衛生局長通牒

清涼飲料水色素料「ボスポレタ」ト稱スルモノ許否ノ義ニ付  
廣島縣ヨリ照會ニ付左記ノ通り回答候條爲念此段及通牒候  
也

廣島縣知事照會 明治四十四年六月六日  
衛第二一八三號

清涼飲料水着色料トシテ「ボスポレタ」ナルモノ、使用ヲ出  
願セルモノ有之候ニ付試驗スルニ「テール」色素ヲ含有スル  
モノト被認候處右ハ許可シ可然哉御意見承知致度候

衛生局長回答 明治四十四年九月二十七日  
衛廣第一一二號

清涼飲料水着色料「ボスポレタ」ト稱スルモノ許否ノ義ニ付  
本年六月六日付衛第二一八三號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ別  
紙衛生試驗所試驗成績寫ノ通成分不明ニ付許可スヘキモノニ  
無之ト被存候此段及回答候也

(別紙略ス)

宮城縣知事照會 明治四十四年九月六日  
衛發第七五三八號

別封テール色素ヲ清涼飲料水着色料トシテ使用致度願出願ノ  
モノ有之候處許可差支無之候哉御意見承知致度此段及照會候  
也

衛生局長回答 明治四十四年九月二十七日  
衛城第一二五號

清涼飲料水着色料ノ義ニ付本月六日衛發第七五三八號ヲ以テ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第三節 清涼飲料水  
御照會ノ處右ハ無害植物性色素ニ付許可相成可然ト存候此段  
及回答候也

六〇

警視總監照會 明治四十三年八月十七日  
第一〇七〇號ノ二

清涼飲料水營業者中左記著色料ノ使用方ヲ出願シタルモノ有  
之右ハ本年七月十五日内務省衛生第五三六六號御通牒列記  
以外ノ著色料ナルヲ以テ其許否ニ關シ何分ノ御意見承知致度  
此段及照會候也

左記

- 一 クロセインスカレット
- 一 マゼンダフクシン

衛生局長回答 明治四十四年十月五日  
衛警第一一八號

清涼飲料水ニ使用スヘキ著色料許否ノ義ニ付客年八月十七日  
付第一〇七〇號ノ二ヲ以テ御照會ノ趣了承御送付ノ現品ニ付  
東京衛生試験所ヲシテ調査セシメ候處右ハ略ホ御來示ノ名稱  
ニ一致スルモ果シテ同一色素ナルヤ否ヤハ不明ニ有之從テ該  
色素ハ之ヲ使用セシメタル様致度尤モ其性状「クロイセンス  
カレット及マゼンダフクシン」ニ一致スルモノハ衛生上無害

ナルニ付許可相成可然ト被存候此段及回答候也

三重縣知事照會 大正二年二月十三日  
衛發第一〇九四號

清涼飲料水著色料トシテ獨逸國ライプツビ、シムメル會社  
製造ノ赤色々素スカレットト使用方出願スルモノ有之候處右  
ハ許可差支無之哉御意見承知致度候

衛生局長回答 大正二年四月十日  
衛三第一八號

本件ニ關シ本年二月十三日付衛發第一〇九四號ヲ以テ御照會  
ノ趣了承右ハ「テール」色素中ノモノアツオ候色素ニ屬シ學  
術上已ニ證明セラレタル有害性色ニハ該當セスト雖モ其ノ  
果シテ無害ナルヤ不明ナルモノニ付許可相成ラサル様致度  
候

鳥根縣知事照會 大正二年六月四日  
發衛第一六一號

清涼飲料水著色料トシテ「ローヤルゴールド」ナルモノ使用  
出願スルモノ有之候處之レカ使用許可可然哉明治四十三年七  
月内務省衛生第五三六六號御通牒ニ基キ原品相添ヘ此段照會  
候也

〔衛〕

衛生局長回答 大正二年七月十日  
衛島第六二號

本件ニ關シ客月四日付發衛第一六一號ヲ以テ御照會ノ趣了承  
右ハ「アツオ」族ノ四種混合色素ニシテ衛生上無害ト稱シ雖  
キモノニ付許可相成ラサル様致度候

〔衛〕

新潟縣知事照會 大正二年九月二十二日  
衛收第七六二五號

清涼飲料水著色料トシテ葡萄著色劑及ボールドノ二種使用方  
出願セルモノ有之候ニ付現品検査ヲ遂ケ候處「テール」色素  
ヲ含有スルモノト判決セラレ尙其成分ノ本體未詳シ點モ有之  
許否決シ兼候貴局ノ御意見承知致度此段及御照會候也

衛生局長回答 大正二年十二月五日  
衛新第一一六號

本件ニ關シ本年九月二十二日附衛收第七六二五號ヲ以テ御照  
會ノ趣了承右ハ別紙東京衛生試験所成績ノ通ニ付許可相成ラ  
サル様致度候  
(別紙略ス)

黄色著色料「アウラミン」(黄色ビオクタニン)ヲ以テ清涼  
飲料水ニ著色シ度旨出願ノ者有之候處右ハ許可相成可然モノ  
ニヤ明治四十三年七月十五日衛第五三六六號御通牒ノ次第モ  
有之御意見承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正三年四月十五日  
衛青第三〇號

本件ニ關シ本月二日附衛收第一一六四號ヲ以テ御照會ノ趣了  
承右ハ衛生上無害ト稱シ雖キモノニ付許可スヘキモノニ無之  
ト被存候

神奈川縣知事照會 大正三年四月十一日  
實衛發第九〇號

清涼飲料水著色料トシテボンソー六R使用致度旨願出有之候  
處右ハ許可差支候哉一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候  
也

衛生局長回答 大正三年四月二十三日  
衛神第二二四號

本件ニ關シ本月十一日附實衛發第九〇號ヲ以テ御照會ノ趣了  
承右ハ許可スヘキモノニ無之ト被存候

青森縣知事照會 大正三年四月二日  
衛收發第一一六四號

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第三節 清涼飲料水

六一

大正三年六月一日  
衛三第四五號

(各地方長官(東京府ヲ)  
除ク)宛衛生局長通牒)

清涼飲料水著色料ノ義ニ關シ三重縣ト照覆ノ結果左記ノ通決定候條爲念此段及通牒候也

三重縣知事照會 大正三年四月二十七日  
衛取第三一九號ノ一

清涼飲料水著色料トシテ「クロセインスカーレット三B」及「ボルドー六B」使用方出願スルモノ有之候處右ハ許可差支無之候哉御意見承知致度

衛生局長回答 大正三年六月一日  
衛三第四五號

本件ニ關シ客月二十七日附衛取第三一九號ノ一ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ何レモ使用セシメ差支無之ト被存候

追テ御送付ノ試験材料ボルドー六Bナル色素ハボルドーBニ一致スルモノニ有之候爲念申添候

三重縣知事照會 大正四年一月二十五日  
衛取第四三六號ノ一

清涼飲料水著色料トシテ「ボルドーB」使用方出願タルモノ

有之候處右ハ許可差支無之哉御意見承知致度候

追テ試験材料ハ別便ヲ以テ送付致候

衛生局長回答 大正四年八月二十四日  
衛三第一九號

右ニ關シ本年一月二十六日附衛取第四三六號ヲ以テ御照會ノ處本品中ニハ「モノアツオ色素ニ屬スルフアストレット」(エヒトロートC)ノ外少量ノ黄色素ヲ含有シ其黄色素ハ成分判明セサルヲ以テ許可スヘキモノニ無之ト被存候

大正五年五月二十二日  
衛三第七五號

(各地方長官(東京府、三重縣ヲ除ク)宛衛生局長通牒)

清涼飲料水著色料トシテ獨逸品アニリシ染料製造會社製品ボルドーB使用方許可ノ義ニ關スル三重縣ヨリ照會ニ對シ左記ノ通り回答致置候條爲御參考及通牒候也

三重縣知事照會 大正五年四月四日  
衛發第二五〇〇號

清涼飲料水著色料トシテ獨逸國アニリン染料製造會社製品「ボルドーB」使用方出願タルモノ有之候處右ハ許可差支無之哉御意見承知致度候

〔衛〕

追テ該色素ハ別便ヲ以テ御送附致候

衛生局長回答 大正五年五月二十二日  
衛三第七五號

本件ニ關シ客月四日附衛發第二五〇〇號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ許可相成可然ト被存候

大正七年八月十六日  
衛廣第一七九號

(各地方長官(廣島縣ヲ)  
除ク)衛生局長通牒)

清涼飲料水著色料トシテ「ローダミンB」使用方許可ノ義ニ關スル廣島縣ヨリ照會ニ對シ別紙ノ通り回答致置候條爲念及通牒候也

廣島縣知事照會 大正七年七月二日  
衛第三三〇四號

清涼飲料水著色料トシテ「ローダミン」ノ使用ヲ出願セル者有之候處右ハ許可シ差支無之哉御意見承知致度候

衛生局長回答 大正七年八月十四日  
衛廣第一七九號

本件ニ關シ客月二日付衛第三三〇四號ヲ以テ御照會ノ處右ハ許可スヘキモノニ無之ト被存候

〔衛〕

新潟縣知事照會 大正十一年五月十一日  
衛發第四一三號

清涼飲料水著色料トシテ「テール」色素 Bordeaux (東京市日本橋區銀町高木商店販賣) 使用方出願ノモノ有之候處右ハ許可シ差支無之候哉御意見承知致度此段及照會候也  
追テ現品ハ別便ヲ以テ送附候也

衛生局長回答 大正十一年六月十六日  
衛保第一七六號

本件ニ關シ五月十一日附衛發第四一三號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ許可相成可然ト被存候

追テ本件ニ關スル東京衛生試驗所成績別紙寫爲御參考及送附候(別紙成績書略)

大分縣知事照會 大正十一年十二月六日  
衛第五七八五號

左記テール色素ヲ清涼飲料水著色料トシテ使用シタキ旨出願ノ者有之候處許可相成可然哉現品相添及照會候也

一 ベバメント

衛生局長回答 大正十二年二月二十二日  
衛保第五五二號

本件ニ關シ大正十一年十二月六日付衛第五七八五號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ衛生上害否不明ノモノニ付許可不相成方可然ト存候

●桂皮油、酒精ヲ配伍シタル清涼飲料水取締ニ關スル件

明治三十五年六月 衛第四二四八號

和歌山縣知事照會 明治三十五年五月 衛發第一六六號

清涼飲料水取締規則ニ關スル左記事項ニ付御意見承知致度候間至急御回答ヲ煩ハシ度此段及照會候也

左記

一、桂皮油酒精ノ二藥品ヲ等分ニ酒伍シ之ヲ十瓦乃至十五瓦ノ小瓶ヲニ入レ一瓶ヲ二錢乃至三錢ニテ卸賣若ハ小賣營業ヲ爲スモノアリ其目的トスル處ハ主トシテ兒童ノ夏季飲料水ニ供スルモノニシテ何レノ店頭ニモ陳列販賣セリ右ハ清涼飲料水取締規則第二條ニ依リ取締ヲ爲スヘキ哉將又本劑ハ清涼飲料ノ原料ニシテ同條ノ範圍外ニ屬スルモノトシ自由

ニ製造販賣セシムヘキ哉若シ之ヲ不問ニ置クトキハ從來規則ノ下ニ營業セル飲料水製造者ハ其繁雜ナル取締ノ漏弊ノ脱シ比較的手數ト費用トヲ要セサル本品ヲ製造販賣スルモノ多ク遂ニハ取締ノ目的ヲ達スル能ハサルノ虞アリ  
二、前段末段ニ依リ取締ヲ爲スヘカラストセハ本品二種ノ原料ハ日本藥局方所定ノ藥品ニ屬スルヲ以テ之ヲ混合販賣スルモノニ製業者ト見做シ取締ルコトヲ得ハキヤ  
衛生局長回答 明治三十五年六月 衛第四二四八號  
客月二十九日付衛發第一六六號ヲ以テ桂皮油及酒精ノ二品ヲ配合シタルモノ販賣營業者取締ノ件ニ關シ御照會ノ趣了承右ハ桂皮油ト見做シ清涼飲料水取締規則ニ依リ取締ルヘキモノト被存御此段及回答候也

●清涼飲料水ニ酒精ヲ含有スルモノ取扱方

明治四十年十二月 衛發第一九七號ノ内

(衛生局長 通 課)

清涼飲料水ニ酒精ヲ含有スルモノ取扱方ノ儀ニ付愛知縣何ニ對シ左記ノ通決定條條爲念此段及通牒候也

愛知縣知事照會 明治四十年十一月二十日 衛發第九三五號

清涼飲料水トシテ白葡萄酒ナルモノ左記ノ如キ配合ニ依リ製造販賣ノ義認可申請有之候處製造原料中ニ酒精ヲ加味スル場合ハ明治三十四年三月法律第八號及酒精含有飲料稅法及同年八月勅令第六十五號酒精及酒精含有飲料稅法施行規則ニ據ルヘキモノト思料セラレ候得共桂皮油及酒精ノ二藥品ヲ等分ニ配伍シタル飲料ノ販賣取締ニ關シ明治三十五年五月和歌山縣ノ照會ニ對シ同年六月五日付御回答ノ次第モ有之物義相生シ候ニ付テハ至急何分ノ御意見承知致度此段及照會候也

ルモノニアラスシテ桂皮油ヲ溶解ス可キ目的ニ使用シタルモノト御承認相成タル義ニ無之哉併テ相候  
衛生局長回答 明治四十年 十二月二十五日  
清涼飲料水原料中ニ酒精ヲ加味スルモノノ取扱方ノ儀ニ付客月二十日衛發第九三五號ヲ以テ御照會之處右ハ清涼飲料水營業取締規則ニ據ルノ外油類ヲ溶解スル目的ヲ以テ酒精ヲ使用スルト否トニ關セス苟モ酒精ヲ含有スル清涼飲料水ハ酒精及酒精含有飲料稅法ニモ據ルヘサモノト被存候條右様御了知相成度此段及回答候也  
追テ桂皮油及酒精配伍ノ飲料取締ニ關シ明治三十五年六月和歌山縣回答ハ酒精及酒精含有飲料稅法ヨリ見テ回答シタル義ニ無之候ニ付爲念申添候

●桂皮油、酒精ヲ配合シタル清涼飲料水取締ノ件

明治三十五年九月二十二日 衛第六二七三號

廣島縣知事照會 明治三十五年七月二十一日 衛發第一二七號

追テ和歌山縣ニ對シテノ御回答ハ桂皮油ニ酒精ヲ配伍ス

- 一、酒石酸七匁
- 一、葡萄酒四匁
- 一、煮沸水一斗
- 一、サラメ砂糖七百匁
- 一、酒精四分

以上



近來坊間ニ於テ桂皮油酒精ノ二藥品ヲ配合シ即チ桂皮酒精ナルモノヲ作り販賣セルモノアリテ兒童等コレヲ買入テ水中ニ混シテ飲用セリ付テハ該品ハ桂皮水ヲ作ルノ原料タルヲ以テ桂皮水ニ準シテ取締ルヘキモノナリトノ説有之然ルニ明治三十三年六月内務省令第十三號第一條ニ記載アル清涼飲料水トハ幾分力水ヲ配合セヘキモノニシテ單ニ桂皮油酒精ノ二種ヲ配合シタルモノヲ以テ清涼飲料水ト同一視ス可ラサルハ勿論ト存候若シ桂皮油酒精ノ配合物ヲ清涼飲料水ニ準シテ取締ラントセハ懷中ラムネ(砂糖ニ酒精又ハ枸橼酸及橙皮油ヲ混シ壓搾シテ錠劑トナシタルモノ)蜜柑水原料(酒石酸又ハ枸橼酸及橙皮油ヲ砂糖ニ混和シタルモノ)ノ如キモ亦清涼飲料水トシテ取締ラサル可ラサルノ結果ヲ生スルヲ以テ現行法規ノ上ニ於テハ到底コレヲ不問ニ置クノ外無之ト認メ候得共貴省ノ御意見如何可有之乎至急何分ノ御回報相煩シ度此段及照會候衛生局長回答明治三十五年九月二十二日 衛第六二七三號

●清涼飲料水ニ「サポニン」及之ニ類スル物質使用取締ノ件

明治四十一年六月二十六日 衛廣第一一三號ノ内

(衛生局長 通)

清涼飲料水ニ「サポニン」及之ニ類スル物質使用許否之義何出ニ付左記之通回答候條爲念此段及通牒候也

廣島縣知事照會 明治四十一年六月十九日 衛第五三三九號

近來、ラムネニ持續的ニ泡起性ヲ與フル爲メ「サポニン」及之ニ類スル物質ヲ使用スルモノアリ右ハ清涼飲料水取締規則以外ノ品ニ有之候得共之カ許否ニ關シテハ聊カ疑義相生候條何分ノ御回答相成度候

衛生局長回答 明治四十一年六月二十六日 衛廣第一一三號ノ内

清涼飲料水「ラムネ」ニ「サポニン」及之ニ類スル物質使用

(衛)

本年七月二十一日付警坤第一二七號ヲ以テ桂皮油酒精ノ二藥品ヲ配伍シタルモノ取締方ノ義ニ付御照會ノ趣了承右ハ桂皮水ト見做シ清涼飲料水營業取締規則ニ依リ取締ルヘキモノト被存候此段及回答候也

衛生局長回答 明治三十五年九月二十二日 衛第六二七三號

許否之義ニ付本月十九日付衛第五三三九號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ亞硫酸ヲ含有スルモノニ付規則第五條ニヨリ御取締相成度此段及回答候也

●清涼飲料水原料「シヤンペン サイダー」及「バインアツブル」ヲ含有スルモノ取締方

明治四十三年八月 衛廣第一〇一號

(各地方長官宛 衛生局長通牒)

清涼飲料水原料「シヤンペンサイダー」及「バインアツブル」ト稱スルモノノ義ニ付廣島縣照會ニ付左記ノ通決定候條爲念此段及通牒候也

廣島縣知事照會 明治四十三年七月 衛第三四七一號

本縣ニ於テ昨年來清涼飲料水原料タル芳香質ニ付試験セシ結果ニ依レハ「シヤンペンサイダー」「バインアツブル」ト稱スルモノハ殆ト皆「アミールアルコホール」ヲ含有致居リ候依テ規則第四條ニ牴觸スルモノト認メ其使用ヲ差止メ居候ヘ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第三節 清涼飲料水

共府縣ニ依リテハ之ヲ許可セル向有之哉ニ聞及候果シテ然ラハ其取扱區々ニ涉リ取締上不都合ヲ生スル義ト存候ニ付御參考迄ニ此段申進候

衛生局長回答 明治四十三年八月 衛廣第一〇一號

清涼飲料水原料「シヤンペンサイダー」並ニ「バインアツブル」ト稱スルモノ取締方ノ儀ニ付客月九日附衛第三四七一號ヲ以テ御照會ノ趣了承寫ト調査候處右ハ本年三月三十一日發行衛生試驗彙報第十一號中「シヤンペンサイダー」「エツセン」ニ試験成績記載ノ如ク本品中ニハ揮發油ノ外「アミールアルコホール」「エステル」含有スルモノニ付「アミールアルコホール」ノ「エステル」ヲ以テ「アミール、アルコホール」同様有害性芳香質ト認ムルハ穩當ナラスト被存候此段及回答候也

●清涼飲料水ノ防腐劑ニ關スル件

明治三十四年七月四日 衛第五二六〇號

香川縣知事照會 明治三十四年六月二十八日 衛第七四二號

清涼飲料水ニシテ撒爾失爾酸礫酸等之如キ防腐劑ヲ混有スルモノニ對シテハ相當取締中ノ處往々安息香酸度利斯林等ヲ附加スルモノアリ右ノ安息香酸ノ如キハ祛痰藥ナルモ製造者カ調合スルノ目的ニシテ沈澱若クハ潤濁ヲ豫防スルニ出スル以上ハ腐防劑ト認メ客年六月御省令第三十號清涼飲料水取締規則第九條ニ依リ相當措置シ可然哉目下差懸リタル義有之候條至急何分ノ御意見相伺度此段及御問合候也  
衛生局長回答 明治三十四年七月四日  
衛第五二六〇號

●清涼飲料水類似品取扱方ニ關スル件

明治四十三年十二月二十七日  
衛熊第二〇五號

熊本縣知事照會 明治四十三年十二月十九日  
衛第一二八九號

左記ノ件ニ付取扱上疑義相生シ候ニ付貴官ノ御意見相伺度此

段及照會候也  
一 寒天及砂糖ヲ水ニ溶解シ半流動體トナシ是ニ桂皮油若クハ薄荷油等ノ芳香質ヲ加ヘタルモノ又ハ砂糖液(單舍利別稠度)ニ少量ノ有機酸及ヒ芳香質ヲ加ヘタルモノ等ハ清涼飲料水トシテ取締ルヘキモノナルヤ  
衛生局長回答 明治四十三年十二月二十七日  
衛熊第二〇五號

●固形及粉末「ラムネ」ニハ清涼飲料水取締規則ヲ適用スヘキヤ否ノ件

明治三十四年六月二十日  
衛玉第四六八〇號

埼玉縣知事照會 明治三十四年六月十二日  
衛發第一二四號

アイスクリームハ清涼飲料水取締規則ノ範圍内ニアラスト思  
考ス

第四節 氷 雪

●氷雪營業取締規則

明治三十三年七月三日  
內務省令第三十七號

沿革 明治三十九年六月內務省令第一〇號、大正元年一月

第一四號 改正

氷雪營業取締規則左ノ通定ム

氷雪營業取締規則

第一條 本則ニ於テ氷雪ト稱スルハ販賣ノ用ニ供スル氷雪ヲ謂フ

氷雪營業者ト稱スルハ氷雪ヲ採收製造シテ販賣シ又ハ其ノ卸賣若ハ請賣ヲ爲ス者ヲ謂フ

第二條 氷雪ヲ採收製造シテ販賣セントスル者ハ地方長官、其ノ卸賣ヲ爲サントスル者ハ警察官署ノ認可ヲ受クヘシ  
地方長官本條ノ認可ヲ爲ストキハ衛生技術員ヲシテ採收、

固形又ハ粉末「ラムネ」ト稱シ酒石酸炭酸曹達炭酸マグネシ  
ア白糖芳香質等ヲ配伍シ水ニ溶和セサル製劑ノ販賣願出候者  
有之石ハ清涼飲料水取締規則ニ據ルヘキモノニ候哉御意見承  
知致度候間至急御回報相煩シ度此段及照會候也  
衛生局長回答 明治三十四年六月二十日  
衛玉第四六八〇號

本月十二日付衛第一二四號ヲ以テ固形ラムネニ關スル件御  
照會ノ趣了承右ハ清涼飲料水營業取締規則ニ依ルヘキモノニ  
無之ト被存候此段及御回答候也

●アイスクリームハ清涼飲料水  
取締規則ノ範圍ニ入ルヘキヤ  
否ノ件

明治三十三年七月  
衛生局長回答

照會 明治三十三年七月十六日  
衛第七五四三號

飲食物アイスクリームハ清涼飲料水取締規則ノ範圍ニ入ルヘ  
キヤ至急御指令アリタシ

衛生局長回答 明治三十三年  
七月

製造又ハ貯蔵ノ場所ノ構造、設備並ニ材料ノ検査ヲ爲サシムヘシ

第三條 氷雪ノ融解水ハ無色透明ニシテ臭味ナク又夾雜物アルモ僅微ヲ過クヘカラス

氷雪融解水ノ百萬分中格魯兒量ハ二分硝酸量ハ一分安母尼亞量ハ〇・〇五分過滿飽加留誤消費量ハ三分亞硝酸ハ痕跡ヲ過クヘカラス

第四條 氷雪營業者ハ第三條ノ規定ニ適合スル氷雪ニ非サレハ飲食用ノ目的ヲ以テ販賣シ又ハ貯蔵スルコトヲ得ス

第五條 飲食用ノ氷雪ヲ請賣スル營業者ハ飲食用ノ目的ヲ以テアスルト否トニ拘ハラズ第三條ノ規定ニ適合セサル氷雪ヲ販賣シ又ハ貯蔵スルコトヲ得ス

第六條 地方長官ハ左ノ場合ニ於テハ第三條ノ規則ニ適合セサル氷雪ニ關シテ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

一 氷雪營業者飲食用ノ目的ヲ以テ販賣ニ供シ又ハ貯蔵スルトキ

二 第五條ノ營業者販賣ニ供シ又ハ貯蔵スルトキ

第七條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シテハ明治三十三年二月

法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第八條 第二條第一項及第四條ニ違背シタル者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條 第五條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 氷雪營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成者ト同一ノ能力ヲ有シル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

氷雪營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルルコトヲ得ス

法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス

法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

附 則

第十一條 本則ハ明治三十三年八月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ雪ニ關シテハ明治三十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔衛〕

〔衛〕

第十二條 地方長官ハ氷雪ノ採收、製造又ハ貯蔵ノ場所ノ構造、設備及管理方法ニ關シ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

● 氷雪營業取締規則中ノ氷雪採收製造ノ意義ニ關スル件

大正二年六月十三日 衛青第三三號

青森縣知事照會 大正二年五月六日 衛發第七八號

省令氷雪營業取締規則附則第十二條中氷雪ノ採收製造云々中採收ト製造ノ意義ニ付近府縣ノ施行細則ニ於テ水池ヲ設ケ自然寒氣ヲ以テ結氷セシムルヲ製造ト看做シ(宮城、山形、岩手、栃木)或ハ之ヲ採收ノ一部ト看做シ(新潟、北海道、秋田)或ハ之ヲ區別セス水池ニ關シ採取製造ヲ混用シ(千葉、神奈川)タルモノアリ何レヲ正當トスヘキモノトシ御承認相成居次第ニ候哉或ハ製造シテ採收スルモノト解釋致シ可然モ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第四節 氷雪

ノニ候哉本縣ニ於テハ自然寒氣ニ依ルモノハ方法ノ如何ヲ問ハス採收トシ人工的寒氣ニ依ル所謂機械製氷ノ如キモノニ限リ製造ト看做シ居候ヘ共差當リ必要モ有之候ニ付前記ノ事由及區別承知致度此段及照會候也 大正二年六月十三日 衛生局長 衛青第三三號ノ内

● 氷雪營業取締上ニ關スル疑義ノ件

大正十二年四月二十四日 內務省滋衛第一六號

滋賀縣知事照會 大正十二年二月十三日 衛發第四三號

氷雪營業取締上左記ノ件ニ關シ御意見拜承致度此段及照會候也

一、最初ヨリ飲食用以外ノ用途ニ供スル目的ヲ以テ規則第

三條ノ規定ニ適合セサル氷雪ノ採取又ハ製造ヲ認許スルコトハ差支無キヤ否

二、差支ナシトスレハ之ヲ飲食用氷雪ト同一場所ニ於テ區別シ採取、製造セシムルモ差支無之哉

衛生局長回答 大正十二年四月二十四日  
内務省滋養衛生第一六號

標記ノ件ニ關シ二月十三日付衛發第四三號ヲ以テ御照會ノ趣了承第一項ハ差支無之第二項飲食用氷雪ト然ラサル氷雪トハ同一場所ニ於テ採取製造セシメサルヲ適當ト被認候

● 蠶種貯藏用ニ供シタル氷雪食  
用トシテ販賣ノ件

大正三年三月二十日  
衛發第一九號

德島縣知事照會 大正三年二月二十八日  
衛第八八〇號

氷雪ヲ蠶種貯藏ノ用ニ供シ事後之ヲ飲食用ニ販賣シタキ旨出願スル者アリ右ハ當初ヨリ飲食用ニ販賣ノ目的ヲ以テ貯藏シタルモノニアラサルモ該氷雪ハ直接蠶種ニ觸レシメサルハ勿

論使用ノ方法モ飲食用トシテ貯藏スル構造ト殆ト異ナラサル状態ノ下ニ藏置シ冷却ノ用ニ供スル趣キナルヲ以テ名稱ハ異ナルモ實質ハ飲食用トシテ貯藏スルノトモ同一ナルカ故ニ該氷雪ニシテ規則第三條ニ概觸セサルトキハ之ヲ飲食用トシテ販賣セシメ差支無之哉御意見承知致度此段及御問合候也

衛生局長回答 大正三年三月二十日  
衛發第一九號

本件ニ關シ客月二十八日付衛第八八〇號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ該氷雪販賣出願者カ氷雪營業者トシテ氷雪營業取締規則並同規則ニ基ク規定ノ適用ヲ受ケ殊ニ其貯藏貯所ノ蠶種冷却ト貯藏所トノ隔壁モ亦ノ規定ニ適合シ便宜上偶々之ヲ冷却用ニ充當シタルニ過キササルモノニ於テハ御意見ノ通御取扱相成差支ナシト被存候

● 常水ニ果實テール色素及ゲラ  
チン液等ヲ混和氷結セシメタ  
ルモノハ氷雪或ハ清涼飲料水  
ト看做スヘキヤ否ヤノ件

大正十年六月二十四日  
衛保第三七五號

〔衛〕

標記ノ件ニ關シ關係各縣ニ對シ今回別記ノ通申進候條爲參考及通牒候也

衛生局長通牒 大正十一年二月二十二日  
衛保第三號

〔長崎縣、山口縣、熊本縣、佐賀縣、福岡縣知事宛〕

在京城府長谷川町朝鮮天然氷倉庫株式會社ヨリ標記天然氷ハ本年貴縣下ニ移出スヘキ旨通報有之候處朝鮮ニ於テハ過般當該取締規則改正ノ結果飲食用トシテ適當ノ氷雪ニ非サレハ採取、貯藏、販賣ヲ許可セサルノミナラス其ノ品質標準ハ内地氷雪營業取締規則第三條ト同様ノ規定ニ適合スルコトヲ要スル儀ニ候ヘ共採取場ノ設備制限等内地各府縣ノ情況ト異ナル點モ有之候ニ付之カ移入販賣ヲ認ムルニ際シテハ衛生上相當御留意相成候様致爲念申進候也

● 朝鮮産天然氷移入ニ關スル通  
牒ノ件

大正十一年二月二十二日  
衛保第三號

〔各地方長官宛〕  
〔衛生局長通牒〕

高知縣知事照會 大正十年六月十四日  
衛收第二三一九號

左記ノ件ニ付取扱上疑義相生シ候間一應貴局ノ御意見相何度此段及照會候也

左記

一 常水ニ果實芳香質砂糖テール色素及少量ノ「ゲラチン」液ヲ混和シタルモノヲ起寒混和劑ニヨリ氷結セシメ棒形狀（常温ニ於テ容易ニ液體トナル）トナシタルモノ氷雪或ハ清涼飲料水ト看做スヘキモノナルヤ否

衛生局長回答 大正十年六月二十四日  
衛保第三七五號

本件ニ關シ六月十四日附衛收第二三一九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ氷雪或ハ清涼飲料水トシテ取締ルヘキモノニ無之ト被存候

● 支那産氷雪輸入販賣取締ニ關  
スル件

大正十二年六月二十三日  
内務省販衛第四二八號

〔各地方長官宛〕  
〔衛生局長通牒〕

標記ノ件ニ關シ大阪府知事ノ照會ニ對シ今回別記ノ通回答致候條御了知相成度

大阪府知事照會 大正十二年四月十八日 衛第五一二五號

近來支那鴨綠江ニ於テ採取シタル自然水ヲ管内ニ輸入販賣セント企劃スルモノ有之候處内務省令第三十七號米雪營業取締規則中ニハ輸入水ニ關スル規定無之取締上聊カ疑義相生シ候條至急貴局ノ御意見承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正十二年六月二十三日 内務省阪衛第四二八號

肺記ノ件ニ關シ四月十八日衛第五一二五號ヲ以テ御照會ノ趣了承輸入水ニ付テモ内地ニ於テ販賣スル場合ハ米雪營業取締規則ノ適用ヲ受クヘキ儀ニ候ヘ共本件支那產ノ水ニ關シテハ其ノ取締狀況及採收場ノ設備制限等不明ニ有之候條當分ノ間之カ輸入販賣ヲ認メサルコトニ適當御取締相度候條致度

### 第五節 人工甘味質

#### ●人工甘味質取締規則

明治三十四年十月十六日 内務省令第三十一號

沿章 明治三十九年六月内務省令第一二號 改正 人工甘味質取締規則左ノ通定ム

#### 人工甘味質取締規則

第一條 人工甘味質トハ「サツカリ」(甘精)其ノ他之ニ類スル化學的製品ニシテ含水炭素ニ非サルモノヲ謂フ

第二條 販賣ノ用ニ供スル食物ニハ人工甘味質ヲ加味スルコトヲ得ス

人工甘味質ヲ加味シタル食物ハ之ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列ツ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

本條ノ規定ハ第三條第一項第二項ノ場合ニ之ヲ適用セス

第三條 地方長官ハ治療上ノ目的ニ供スヘキ食物ノ調味ニ人工甘味質ノ使用ヲ許可スルコトヲ得

前項ノ食物ハ醫師ノ證明アル者ニ限り之ヲ販賣授與スル

此ノ限ニ在ラス

營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス

法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス

法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

#### 附 則

第九條 本則ハ明治三十五年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

#### ●砂糖代用品トシテ「サツカリ」ヲ使用スモルノ取締ニ關スル件

明治四十二年二月 農甲第三號ノ内

コトヲ得

本條第一項ノ許可ヲ受ケタル者其ノ食物ヲ他人ニ代理販賣又ハ請賣セシムルトキハ其ノ氏名及營業所ヲ地方長官ニ届出ヘシ

本條第一項ノ許可ハ地方長官ニ於テ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第四條 前條ノ食物ヲ販賣授與スルトキハ容器又ハ被包ヲ用キ其ノ容器又ハ被包ニハ「人工甘味質製」ノ六字ヲ記スヘシ

第五條 地方長官ハ第三條第一項ノ許可ヲ受ケスシテ人工甘味質ヲ加味シタル食物ニ關シテ明治三十三年(二月)法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第六條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シテ明治三十三年(二月)法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第七條 第二條第一項第二項第三條第三項及第四條ニ違背シタル者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ヲ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ

近來砂糖消費稅增徴ノ結果坊間ニ於テ砂糖代用品トシテ「サツカリン」ヲ使用スルモノ多キヤノ趣傳フルモノ有之候ニ就テハ明治三十四年十月內務省令第三十一號人工甘味質取締規則ニ據リ嚴重御取締相成候様依命此段及通牒候也

### ●家庭用甘味料トシテ「サツカリン」製造販賣許可ノ件

大正八年十一月三日  
和衛第六八號

和歌山縣知事照會 大正八年八月十八日  
衛第六三二一號

縣下ニ於テ家庭用甘味料トシテ「サツカリン」ヲ大規模ニ製造シ販賣差支ナキヤノ何出有之法令上別段差支ナキモノト被存候得共何分ノ御意見至急承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正八年十一月三日  
和衛第六八號

標記ノ件ニ付八月十八日衛第六三二一號ヲ以テ御照會ノ處右ハ家庭用甘味料ナル名稱ノ下ニ販賣セラル、トキハ公衆ヲシテ誤解セシムル虞モ可有之被存候ニ付單ニ「サツカリン」タルコトヲ明示シ販賣モシメ候様致度

### ●人工甘味質取締規則適用ニ關スル件

大正四年七月二十二日  
衛第一五八號

熊本縣知事照會 大正四年七月三日  
衛第四七一號

本縣管内ニ於テ酒精含有飲料（人工葡萄酒）ノ甘味補助劑トシテ「グリセリン」ヲ加味販賣セントスル者有之候處右ハ人工甘味質取締規則ヲ適用スヘサモノナルヤ差當リタル事件有之候條至急何分ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正四年七月二十二日  
衛第一五八號

本件ニ關シ衛第四七一號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ人工甘味質取締規則ニ依リ御取締相成可然存候

大阪府知事照會 大正四年九月一日  
衛第五二二四號

「グリセリン」ハ酒類ノ自然的成分トシテ含有セルモノ多ク從テ「サツカリン」等ト其ノ趣ヲ異ニセルヲ以テ當府ニ於テハ

### 第六節 有害性著色料

#### ●有害性著色料取締規則

明治三十三年四月十七日  
內務省令第十七號

沿革 明治三十七年七月內務省令第一一二號、三十九年六月第八號、四十二年一月第一號、大正二年七月第一一二號

改正

有害性著色料取締規則左ノ通定ム

有害性著色料取締規則

第一條 有害性著色料ヲ分テ左ノ二種トス

第一種 左ニ掲クル物質其ノ化合物及之ヲ含有スルモノ  
砒素、拔留漢、嘉度密烏漢、格羅漢、銅、水銀、鉛、錫、安知母紐漢、烏拉紐漢、亞鉛、藤黃、必備林酸、一ヂニトクロレゾール、一コラルリン

第二種 左ニ掲クル物質及之ヲ含有スルモノ

硫酸拔留漢、硫化嘉度密烏漢、酸化格羅漢、朱、酸化錫、一ムツシーフ一金、酸化亞鉛、硫化亞鉛、銅、錫、亞鉛及其ノ合金屬ニシテ固有ノ光澤ヲ有スルモノ

當該取締規則第一條所定範圍外ノモノトシテ取扱來リ候處這般玉造稅務署長ヨリ客年七月三日衛第四七一號熊本縣知事照會ニ對スル同月二十三日衛第一五八號衛生局長回答寫ヲ添付シテ當該取締方針ニ付照會越候ニ付テハ之ニ對スル回答並將來ニ於ケル取締上該規則ヲ適用スヘキヤ否ヤニ付疑義相生シ候條至急御意見承知致度候也

追テ從來ノ實驗ニ依レハ酒類ニ該劑ヲ加味セル事實ヲ發見セシコト無之尙前熊本縣知事ニ對スル回答ノ件ニ付テハ當府ニ通牒セラレ居ラサル次第ニ候條此旨申添候也

衛生局長回答 大正四年九月八日  
衛第一五〇四號

本件ニ關シ本月一日衛第五二二四號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ人工甘味質取締規則ニ依リ御取締相成可然存候

第二條 有害性著色料ハ販賣ノ用ニ供スル食物ノ著色ニ使  
用スルコトヲ得セ但野菜果實類ノ貯藏品ニ在リテハ其ノ一  
「キログラム」中銅百「ミリグラム」昆布ニ在リテハ其ノ無  
水物一「キログラム」中銅百五十「ミリグラム」ヲ含有ス  
ル限度マテ銅、銅化合物又ハ之ヲ含有スル著色料ヲ使用ス  
ルハ此ノ限ニ在ラス

第三條 有害性著色料ヲ以テ著色シタルモノハ販賣ノ用ニ供  
スル食物ノ容器又ハ被包トシテ使用スルコトヲ得ス但シ  
左ニ掲クルモノハ此ノ限ニ在ラス  
一 漆、硝子、釉藥又ハ珐瑯質ニ有害性著色料ヲ融和シタ  
ルモノ

二 第一條第二種ノ著色料ヲ以テ著色シタル容器又ハ被包  
ニシテ飲食物ニ其著色紙混入ノ虞ナキモノ

第四條 第一條第一種ノ著色料ハ販賣ノ用ニ供スル化粧品、  
齒磨、小兒玩弄品（繪雙紙、錦繪、色紙ヲ含ム）ノ製造又  
著色ニ使用スルコトヲ得ス但シ左ニ掲クルモノハ此限ニ在  
ラス  
一 漆、硝子、釉藥又ハ珐瑯質ニ有害性著色料ヲ融和シタ  
ルモノ  
二 護謨質ニ融和シタル金硫黃

第五條 第一條第一種ノ著色料ハ販賣ノ用ニ供スル化粧品、  
齒磨、小兒玩弄品（繪雙紙、錦繪、色紙ヲ含ム）ノ製造又  
著色ニ使用スルコトヲ得ス但シ左ニ掲クルモノハ此限ニ在  
ラス  
一 漆、硝子、釉藥又ハ珐瑯質ニ有害性著色料ヲ融和シタ  
ルモノ  
二 護謨質ニ融和シタル金硫黃

三 乾燥油又ハ「ワニス」ニ融和シ若ハ「ワニス」ヲ塗布  
シタル酸化鉛（鉛丹ヲ含ム）又ハ格羅酸鉛（硫酸鉛  
ト併用セルモノヲ含ム）但シ制離シ易キモノハ此ノ限  
ニ在ラス

四 水ニ不溶性ノ亞鉛化合物ニシテ護謨質又ハ「ワニス」ニ  
融和シ若ハ「ワニス」ヲ塗布シタルモノ  
酸化亞鉛又ハ酸化亞鉛ハ護謨質又ハ「ワニス」ニ融和シ若  
ハ「ワニス」ヲ塗布スル場合ノ外販賣ノ用ニ供スル護謨製  
玩弄品ノ製造又ハ著色ニ使用スルコトヲ得ス

第五條 砒素ヲ含有スル著色料ハ販賣ノ用ニ供スル衣服其ノ  
他身ノ圍リニ用ユル物品又ハ其ノ材料ノ著色ニ使用スルコ  
トヲ得ス但シ布片百平方「センチメートル」中二「ミリグ  
ラム」以下ノ砒素ヲ含有スルモノハ此ノ限ニ在ラス

第六條 第二條ニ違背シテ著色シタル飲食物第三條ノ容器被  
包及ヒ之ヲ使用シタル飲食物又ハ第四條若ハ第五條ニ違背  
シテ製造シ著色シタル物品若ハ材料ハ之ヲ販賣シ又ハ販賣  
ノ目的ヲ以テ陳列シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第七條 前條ノ物品ニ關シテハ地方長官ハ明治三十三年（二  
月）法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違  
背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

〔舊〕

第八條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シ明治三十三年（二月）  
法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第九條 第二條乃至第六條ニ違背シタル者ハ二十五圓以下ノ  
罰金ニ處ス

第十條 營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依  
リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ  
營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ  
此ノ限ニ在ラス

營業者ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ  
從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己  
ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス  
法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關  
シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ  
法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人ト  
ス

附 則

第十一條 本則ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十二條 鉛白ハ當分ノ内第四條ノ規定ニ拘ハラズ化粧品ト  
シテ之ヲ使用スルコトヲ得

第五類 保健 第四章 食物其他ノ物品 第六節 有害性著色料

第十三條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之  
ヲ行フ

●有害性著色料取規則第二條  
野菜果實類ノ貯藏品及昆布中  
銅ノ試験方法

大正二年七月二十六日  
内務省令第十三號

明治三十七年十一月内務省令第五號有害性著色料取締規則第  
二條野菜果實類ノ貯藏品及昆布中銅ノ試験方法ヲ左ノ通改正  
ス  
檢體五「グラム」ヲ磁製坩堝ニ取リ（昆布ニ在リテハ百度ノ  
温ニ於テ恒量ヲ得ルニ至ルマテ乾燥シ先ツ水分ヲ定量シタル  
後）熱灼シテ炭化セシメ冷後硝子棒ヲ以テ搗碎シテ粉末トナ  
シ稀硝酸約五立方「センチメートル」ヲ注加シテ温浸シユル  
レンマイエル硝子坩堝中ニ濾入シ濾紙上ノ殘留物ハ濾紙ト共ニ  
再ヒ前ノ磁製坩堝ニ致シ乾燥シ熾灼シテ全ク灰化セシメ此ノ  
殘灰ニ稀硝酸約二立方「センチメートル」ヲ加ヘ温浸シ濾過  
シ洗滌シ前ノ濾液ニ合シ「アンモニア」水ヲ以テ中和シタル

後鹽酸性トナシ之ニ硫化水素ヲ通シテ充分飽和セシメ出口  
ヲ寬ク栓塞シ約三時間温所ニ放置シ全ク沈底セル硫化銅ヲ濾  
紙上ニ採取シ硫化水素水ヲ以テ善ク洗滌シタル後乾燥シ濾紙  
ト共ニ前ノ磁製坩堝内ニ於テ灰化シ殘灰ヲ數滴ノ硝酸ニ溶解  
シ重湯煎上ニ温メ「アムモニア」水ヲ注加シテ「アルカリ」性  
トナシ若シ必要アレハ濾過シ茲ニ得タル澄明ノ液ヲ蒸發皿ニ  
移シ重湯煎上ニ蒸發シテ過剩ノ「アムモニア」ヲ驅逐シ中性反  
應ヲ呈スルニ至リ其ノ中性液ヲ二百立方「センチメートル」  
ノ標線アル硝子壺ニ移シ硝酸アムモニウム溶液（硝酸アモ  
ニウム百「グラム」ヲ蒸留水一「リートル」ニ溶解シ其ノ反應  
全ク中性ノモノ）二十立方「センチメートル」ヲ注加シ水ヲ  
以テ全容量二百立方「センチメートル」トナシ善ク混和シテ  
其ノ二十立方「センチメートル」（原品〇、五グラム）ニ相當  
ス）ヲ内徑約一、五「センチメートル」ノ無色試験管ニ取り又  
別ニ前ト同一ノ試験管數箇ニ標準銅溶液（純結晶硫酸銅〇、  
三九二七グラム）ヲ蒸留水一「リートル」ニ溶解シタルモノ  
ニシテ其ノ一立方「センチメートル」中〇、一「ミリグラム」  
ノ純銅ヲ含有ス）若干立方「センチメートル」ヲ取り之ニ硝  
酸アムモニウム溶液二立方「センチメートル」ヲ加ヘ水ヲ以  
テ全容量二十立方「センチメートル」トナシタル後各試験管

ニ新ニ製シタル黃色血漬濾液（用ニ臨テ黃色血漬濾一「グ  
ラム」ヲ蒸留水一「リートル」ニ溶解シタルモノ）〇、五立  
方「センチメートル」ヲ加ヘ善ク混和シ十分時内ニ白紙上ニ  
於テ上而ヨリ透視シ比色定量法ヲ行フヘシ但昆布ニ在リテハ  
其ノ無水物一「キログラム」中ノ銅量（ミリグラム）ニ改算ス  
ヘシ

●有害性著色料取締規則中化粧品  
品ニ關スル件

明治三十六年四月八日  
衛甲第二七號

〔各地方官宛  
衛生局長通牒〕

有害性著色料並ニ娼妓健康診斷上取締之義ニ付廣島縣ト照覆  
之要領爲御參考此段及御通牒候也  
廣島縣知事照會 明治十六年三月十二日  
衛甲第二七號  
有害性著色料並ニ娼妓健康診斷上取締ニ關シ左記ノ廉々疑義  
相生候條御意見承知致度右ハ目下差掛リタル件有之候ニ付至  
急御回報ニ接度此段及問合候也

〔衛〕

〔衛〕

一 有害性著色料取締規則第四條ニ掲ケアル化粧品ノ内ニ  
ハ坊間ニ販賣セラレツツアル「白髮染粉」ヲ包含セル  
ヤ否果シテ之ヲ包含セサルモノトセハ例ハ炭酸鉛ヲ含  
有スルモノト雖取締ノ範圍外ト見做シ可然乎

二 (省 略)

衛生局長回答 明治三十六年四月八日  
衛甲第二七號

三月十二日付警坤第四五號ヲ以テ有害性著色料並娼妓健康診  
斷上取締ノ義ニ抄御問合ノ處左記ノ通御了知相成度此段及回  
答致候也

一 有害性著色料取締規則第四條ニ掲ケル化粧品中ニハ  
「白髮染粉」ヲ包含ス

二 (省 略)

●有害性著色料取締規則中漆ニ  
關スル件

明治三十三年九月三十日  
衛第七九三八號

福岡縣知事照會 明治三十三年七月五日  
衛發第三二號

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第六節 有害性著色料

本年內務省令第十七號有害性著色料取締規則第四條第一ノ漆  
ト稱スルハ單ニ日本ニテ製スル植物性ノ漆ノミヲ稱スル儀ニ  
ハ可有之乎本縣福岡市ニ於テハ博多人形ト稱シ小兒玩具及床  
据等ニ供スル人物ノ模像ヲ製シ海外ニモ多少輸出致候右ニ使  
用スル著色料ハ「デコラチオンラック」即西洋漆ニ色素ヲ溶  
和シ又ハ著色ノ後其表面ニ「ラック」ヲ塗付シ巧ニ光澤ヲ發  
セシメ殆ト釉藥ノ如キ觀有之之ヲ水中ニ數時間投入スルモ色  
素ノ他物ニ附著スル虞ハ無之右「ラック」ニ溶和シタルモノ  
ハ規則第四條第一ノ漆トシテ差支ハ無様被認ル尤モ組造ノモ  
ノハ或ハ幾分色素ノ他物ニ附著スルコトアルモ組造ノモノハ  
日本流ニテモ同様ニ有之候事實前記ノ通り有害ノ虞ハ無之候  
得共取締上漆ノ定義ニ於テ幾分疑義有之候ニ付一應御意見承  
知致度此段及御照會候也

追テ本文ノ「ラック」ハ規則第四條ノ一ニ依ルヘカラサル  
モノトセハ多數製造者ニハ大影響ヲ及シ候該「ラック」ハ  
價額ノ上及使用ノ上ニ於テ他ニ之ニ代ルヘキモノナク餘程  
困難ノ狀況ヲ見受候條至急何分ノ御報ニ預リ度此段申添候  
衛生局長回答 明治三十三年九月二十日  
衛第七九三八號  
本年七月衛發第三二號ヲ以テ小兒玩具及床据品等ニ使用ス



ル西洋漆ニ關シ御照會相成候處本年省令第十七號第四條ノ漆トアルハ普通西洋漆ト稱スル假漆ノ類ハ包含セサル精神ニ有之候ニ付玩具ニ著色スル有害性著色料ノ被包料トシテ使用スル能ハスト存候此段及回答候也

●毒藥硫酸ヲ含有スル玩具取締ニ關スル件

明治四十四年六月十三日 衛署第一五八號

長崎縣知事照會 明治四十三年九月十二日 乙衛署第三五〇號

縣下ニ於テ蛇玉ト稱スル玩具(小サキ白色ノ玉)ヲ販賣シ居ル者アルヲ以テ收去試驗セシニ硫酸水銀ヲ含有スルヲ發見候モ何等法規ノ據ルヘキモノナク處分上疑義相生候條何分ノ御回報相煩ハシ度此段及御照會候也  
衛生局長回答 明治四十四年六月十三日 四三衛署第一五八號  
硫酸水銀ヲ含有スル玩具取致方ノ義ニ付客年九月十二日付乙衛署第三五〇號ヲ以テ御照會ノ所右ハ有害性著色料ト看做

シ規則第四條ニヨリ御取扱相成度此段及回答候也

●有害性玩弄品取締ニ關スル件

大正十年十月二十五日 衛署第一三九一號

廣島縣知事照會 大正十年十月十一日 衛署第七四八九號

有害性著色料取締規則第四條中「化粧品齒磨小兒玩弄品ノ製造又ハ著色ニ使用スルコトヲ得ス」トアルハ「化粧品齒磨ノ製造小兒玩弄品ノ著色ニ使用スルコトヲ得ス」ト解釋スヘキハ論ラ俟タサル處ナルモ近來當市内ニ於テ蛇玉ナル小兒玩弄品ヲ販賣スルモノ有之試驗スルニ毒物硫酸水銀ヲ以テ製造セルモノニ付有害ナルヲ以テ之カ販ヲ禁止スルノ必要有之ト認メ候然ルニ右硫酸水銀其ノモノヲ以テ製造セルモノニシテ著色シタルモノニ非ス依テ該條ニ依リ取締ルコト能ハス左リトテ之ヲ不問ニ附スルハ種ナラサルコト、存候就テハ果シテ取締ヲ要スルモノトセハ之カ適用法ニ付承知致度右ハ差懸リタル義有之候條至急何分ノ御回答相煩度  
追テ御參マテニ現品一袋添付置候

衛生局長回答 大正十年十月二十五日 衛署第一三九一號  
標記ノ件ニ關シ十月十一日付衛署第七四八九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ有害性著色料ト看做シ規則第四條ニ依リ御取締相成度

●剥製品ハ多量ノ亞硫酸ヲ含有セルヲ以テ注意ヲ要スル件

大正二年十月 衛署第一三六號

(衛生局長 移)

本邦ヨリ輸出スル剥製品類ハ獨逸國ニ於テ專ラ小兒ノ玩具ニ供セラル、趣ノ處同國漢堡警察署ニ於テハ右剥製品ハ化學的試驗ノ結果多量ノ亞硫酸ヲ含有セルヲ以テ衛生上有害ノモノトシテ使用セサル様告示ヲ發シ又獨逸帝國衛生局モ同一意見ノ下ニ該告示ヲ衛生公報ニ掲載シタル旨在本邦獨逸大使ヨリ申越候趣外務省ヨリ通知有之候依テ東京衛生試驗所ヲシテ實物ニ就キ試驗セシメ候處果シテ多量ノ亞硫酸ヲ含有セルコトヲ發見シ之ヲ小兒玩具トシテ使用スルハ衛生上頗ル危險ナル旨報告有之候ニ付御注意相成度

●食飲物ニ麥兒色素使用ニ關スル件

明治三十三年十一月二十六日 衛署第一〇一三一號

香川縣知事照會 明治三十三年十一月十五日 衛署第一二三〇號

麥兒色素ヲ食飲物著色料トシテ使用ノ義ニ付テハ純粹ニシテ其全量四分ノ一以下ヲ含有スルモノニ限り從來使用販賣差許來候處本年六月御省令第三十號清涼飲料水營業取締規則第五條第五項ニ依レハ同色素ヲ含有スルモノヲ販賣シ又ハ貯藏スルコトヲ得サル規定ニ有之本年四月御省令第十七號有害性著色料取締規則ニハ規定ナキモ右ハ清涼水而已ナラス一般食飲物著色料トシテ使用スルヲ得サル事トハ被存候得共取扱上難カ疑義相生シ差懸リタル義モ有之候條至急何分ノ回報相成度此段及御問合候也

衛生局長回答 明治三十三年十一月二十六日 衛署第一〇一三一號  
本月十五日付衛署第一二三〇號ヲ以テ麥兒色素ヲ食飲物著色料トシテ使用スル義ニ付御照會相成候處右ハ本省令第十七號第一條ニ紙觸セサル色素ニシテ他ノ法令ニ於テ特ニ制限セサル

以上ハ假令參見色素ト雖モ使用スルニ差支ナキ趣旨ニ有之候  
條御了知相成度此段及御回答候也

●群青「ウルトラマリン」ヲ飲食物ノ著色料ニ使用ノ件

大正十一年十二月九日  
衛保第三八三號

滋賀縣知事照會 大正十一年八月二十九日  
衛發第二一六號

最近菓子類ノ著色料トシテ群青「ウルトラマリン」ヲ使用スル者有之候處該品ハ少量ニ過キサレモ可溶性硫酸「アルカリ」ヲ含有スルノ外酸ニ依リテ硫化水素ノ發生スル者ニ付有害品トシテ取締ル必要アルカト思料セラレ候モ未タ規程ニ何等制定ナキモノナルヲ以テ聊カ疑義ヲ生シ候條貴局ノ御意見承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正十一年十二月九日  
衛保第三八三號

標記ノ件ニ關シ八月二十九日衛發第二一六號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ有害性著色料取締規則適用ノ範圍外トシテ御取扱相成度

●「カラメル」ヲ使用セル飲食物取締ニ關シ通牒ノ件

大正十一年十二月二十七日  
内務省發衛第二七四號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

現今飲食物著色料トシテ使用セラルル「カラメル」ノ主ナルモノニ就キ「フォルムアルデヒド」ノ含有量ヲ調査シタル東京衛生試驗所ノ試驗別冊ノ通ニ有之候條御參考相成度右成績及現今著色料トシテ一般ニ使用セラルル「カラメル」ノ濃度ニ徴スルトキハ之ヲ使用セル飲食物中ニ存在スル「フォルムアルデヒド」ノ含量ハ極メテ僅微ト認メラレ候處「カラメル」中ニ「フォルムアルデヒド」ヲ存在スルヲ奇貨トシ「カラメル」ヲ使用セル飲食物ニ對シ故意ニ「フォルムアルデヒド」ヲ使用スル者無之ヲ保シ難ク候條「カラメル」ヲ使用セル飲食物ニ對シテハ其ノ「フォルムアルデヒド」カ「カラメル」使用ノ結果自然ニ移行セルモノナルヤ否ヤニ付不斷御注意相成取締上遺憾ナキ様致度  
追テ現今ニ於テハ他ニ適當ナル「カラメル」代用品ヲ求ム

(衛)

(衛)

第七節 飲食物防腐劑

●飲食物防腐劑取締規則

明治三十六年九月二十八日  
内務省令第十號

沿革 明治三十七年一二月内務省令第一六號、三十九年六月第一三號、大正四年一〇月第一五號 改正

飲食物防腐劑取締規則左ノ通定ム

第一條 本則ニ於テ防腐劑ト稱スルハ左ニ掲クル物質其ノ化合物及之ヲ含有スルモノヲ謂フ  
安息香酸、硼酸、「クロール」酸、「フルオール」水素、「フォルムアルデヒド」、「昇汞、亞硫酸、次亞硫酸、「サリチール」酸、「チモール」、「ナフトール」、「レゾルチン」、「ヒノゾール」、蟻酸、亞硝酸  
第二條 販賣ノ用ニ供スル飲食物ノ製造又ハ貯藏ニ防腐劑ヲ使用スルコトヲ得ス

ルコト困難ナル次第モ有之「フォルムアルデヒド」ノ含量カ別冊衛生試驗所ノ試驗成績程度ノ「カラメル」ニ付テハ當分ニカ使用ヲ認容スルハ不得止モノト認メラレ候條「カラメル」及「カラメル」ヲ使用セル飲食物ニ對シテハ當分飲食物防腐劑取締規則ヲ適用セサルコトニ御取扱相成度尙別冊試驗成績ニ於ケル檢出量以上ノ「フォルムアルデヒド」ヲ含有スル「カラメル」及「カラメル」ヲ使用セル飲食物中「フォルムアルデヒド」含量壹萬分ノ一以上ニ上ルモノヲ發見シタルトキハ該「カラメル」及飲食物ノ「フォルムアルデヒド」含量、其ノ販賣名及發賣者ノ住所氏名等其ノ都度御報告相成度(東京衛生試驗所試驗成績書略)

防腐劑ヲ使用シタル飲食物ハ之ヲ販賣シタルハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第三條 第一條ニ掲クルモノハ飲食物ノ防腐用ト稱シテ販賣シ又ハ其ノ目的ヲ以テ製造シ若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第四條 第二條第三條ノ物品ニ關シテハ地方長官ハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第五條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シ明治三十三年二月法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第六條 第二條第三條ニ違背シタル者ハ貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

第七條 營業者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本則ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス  
法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ義務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ

法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

附 則

第八條 本則ハ明治三十七年十月一日ヨリ之ヲ施行ス  
第九條 左ノ各號ノ場合ニハ本則施行ノ日ヨリ七箇年間本則ノ規定ヲ適用セス

- 一 清酒ノ製造又ハ貯藏ノ爲別ニ定ムル試験法ニ適合スル限度マテ「サリチール」酸ヲ使用スルトキ
  - 二 魚介獸肉ニ硼酸又ハ其ノ鹽類ヲ使用スルトキ
  - 三 魚介ノ貯藏又ハ運搬ノ爲「サリチール」酸又ハ其ノ化合物ヲ使用スルトキ
  - 四 前各號ニ依リ防腐劑ヲ使用シタル清酒、魚介若ハ獸肉ヲ販賣シ又ハ陳列シ若ハ貯藏スルトキ
- 第十條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

● 飲食物防腐劑取締規則改正ニ

關スル件

大正四年十月三十日  
秘衛第二一五二號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

今般内務省令第十五號ヲ以テ飲食物防腐劑取締規則ヲ改正シ即日ヨリ施行セラレ候處新ニ追加セル「ナフトール」以下ノ防腐劑ヲ規則改正前ニ使用セル飲食物ニ關シテハ此際法令ニ依リ刑事訴追ハ勿論廢棄處分ノ如キモ萬止ムヲ得サルモノノ外之ヲ見合セ反應ヲ呈セサル程度ニ稀釋セシムル等可成衛生上危害ヲ生スルノ虞ナキ方法ニ依リ處置セシメ當業者ヲシテ多大ノ損害ヲ被ラシメサル様特ニ御注意相成度尙又亞硝酸ハ自然ニ含有セラル場合アリテ之ヲ故意ニ使用セシモノナリヤ否ヤ検査困難ノ場合モ可有之ニ付其ノ取締ニ關シテハ他日一定ノ方法ヲ設ケ追テ通牒ノ答ニ付右及通牒候迄取締方相見合セ候致度

● 清酒ノ製造又ハ貯藏ニ關シ

「サリチール」酸使用ノ件

大正三年十二月二十四日  
内務省令第二十九號

清酒ノ製造又ハ貯藏ニ關シ別ニ定ムル所ノ清酒中「サリチール」酸試験法ニ適合スル程度以内ニ於テ「サリチール」酸ヲ使用スル場合及之ヲ使用シタル清酒ヲ販賣陳列又ハ貯藏スル場合ニ付テハ當分ノ内明治三十六年九月内務省令第十號飲食物防腐劑取締規則ヲ適用セス  
「サリチール」酸ニ限り當分ノ内明治三十六年九月内務省令第十號飲食物防腐劑取締規則第三條ヲ適用セス

● 清酒ノ防腐ニ「サリチール」酸  
使用許可ノ件

大正十三年十二月  
發衛第二二六號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

令般内務省令第二十九號ヲ以テ當分ノ内清酒ノ防腐ニ「サリチール」酸使用許可スルコトニ相成候處是固ヨリ止ヲ得サルニ出テシ處置ニシテ可成速ニ衛生上危害ノ虞アル「サリチール」酸使用ノ禁止ヲ期待セル義ニ有之候間自今一層當業者ヲ

普通シ清酒ノ醸造貯蔵ノ改善ヲ圖ラシムルト同時ニ「サリチール」酸ニ代ハルヘキ防腐劑ニ付テモ充分調査研究ノ上目的ヲ達スル様御配慮相成度

●清酒中「サリチール」酸ノ試験法

明治三十六年九月二十八日 内務省令第十一號

飲食物防腐劑取締規則(第八條)ノ清酒中「サリチール」酸試験法左ノ通定ム

清酒中「サリチール」酸ノ試験法  
清酒二立方「センチメートル」ニ蒸餾水ヲ和シテ百立方「センチメートル」トナシ其ノ五立方「センチメートル」ヲ内容約五十立方「センチメートル」ノ分液漏斗ニ取り之ニ稀硫酸(十「プロセント」)三滴及揮發石油(攝氏六十乃至百二十度ニ於テ蒸餾スルモノ)十五立方「センチメートル」ヲ注加シ五分間強ク振盪シテ静置シテ下層ノ水溶液ヲ除去シ残留シタル揮發石油ヲ蒸餾水十立方「センチメートル」ト共ニ強ク振盪シテ静置シテ二分間析出スル下層ノ水溶液ヲ内徑約一、五「セ

「センチメートル」ノ無色試験管ニ取り之ニ過「クロール」酸液(約「プロセント」)一滴ヲ和シ直ニ白紙上ニ於テ上面ヨリ透視スルニ呈色スヘカラス

●清酒中「サリチール」酸含有量適合ニ關スル件

明治三十七年十月 衛發第三三一號

客年九月省令第十一號飲食物防腐劑取締規則ト同時ニ發布セラレタル清酒中「サリチール」酸試験法ハ清酒一石中約十匁以下ノ「サリチール」酸ヲ含有スルモノニ對シ適合スル義ニ有之候條爲念此段及通牒候也

●洋酒ノ取締ニ關スル件

大正十年九月九日 衛發第一一三八號

福岡縣知事照會 大正十年八月二十三日 衛發第六七三五號

付乙號ノ通り回答候條爲念此段及通牒候  
醸造試驗所照會 明治三十九年三月 無號

明治三十六年内務省令第十號飲食物防腐劑取締規則ニ於ケル撒里矢爾酸許可量ニ於テハ數々危險ヲ感スル由ヲ訴フル者有之哉ニ聞及候ニ付不反敢本所ニ於テモ撒里矢爾酸代用品ニ付收究セシメ候處「ベタ、オキシ、ナフトイツ」酸ハ撒里矢爾酸ニ比較シ約五倍ノ效力ヲ有シ且ツ撒里矢爾酸ニ比シ多少健康上ニ於ケル害毒モ尠ナキカトモ存セラレ候得共疑惑モ有之ニ付一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 明治三十九年五月 衛直第一七號

三月十二日付ヲ以テ「サリチール」酸代用品「ベタ、オキシ、ナフトイツ」酸ノ義ニ關シ御照會ノ處石生理的作用ニ關シテハ不明ニ候得共「ベタ、ナフトール」ノ誘導體ナルヲ以テ健康上有害ナルモノト被存候條右様御了知相成度此段及回答候也

●食醋中「サリチール」酸含有取締方

●「サリチール」酸代用品「ベタ、オキシ、ナフトイツ」酸ノ件

明治三十九年五月 衛直第一七號ノ内

(衛生局長 通牒)

飲食物防腐劑ノ義ニ付別紙甲號ノ通り醸造試驗所ヨリ照會ニ

管内ニ清酒ノ滓引ト稱シ清酒醸造後樽底ニ分解沈澱セルモノニシテ一見濁酒ノ如ク混濁セルモノヲ販賣スル者有之收去試験スルニ「サリチール」酸ヲ含有致居候處該酒ハ清酒ト確認ニヨリ明治三十六年九月内務省令第十號飲食物防腐劑取締規則第二條ニ概觸スルモノト思料仕候得共若シ前段規則第二條ヲ適用シ能ハサル場合ニハ止ヲ得ス此儘販賣セシムルコト、ナリ聊カ穩當ナラサル様思考セラレ候條何分ノ御意見差當リ承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正十年九月九日 衛發第一一三八號

標記ノ件ニ關シ八月二十三日附衛收第六七三五號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御意見ノ通明治三十六年九月省令第十號飲食物防腐劑取締規則第二條ニ概觸スルモノト被存候

明治四十二年一月  
衛阪第五九七號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

標防腐劑「サリチール」酸ヲ含有スル食醋取締方ノ義ニ付何  
出ノ向モ有之候處清酒ニ「サリチール」酸ノ使用ヲ認容セル以  
上ハ別紙東京衛生試験所試験成績書ノ通食醋中多少ノ「サリ  
チール」酸ヲ含有スルハ止ヲ得サル者ト被認候ニ付テハ食醋  
中含有スル「サリチール」酸ノ量其ノ石中三匁以下ナルトキ  
ハ清酒ヨリ移行シタル者ト見做御取扱相成可然之ニ反シ三匁  
以上ニ及フ者ハ故意ニ防腐劑ヲ加ヘタル疑有之候ニ付事實御  
調査ノ上相當御措置相成様致度此段及通牒候也  
(別紙略ス)

●防腐劑「フォルムアルデヒド」  
「ド」變性後ノ清酒販賣方許否  
ノ件

大正五年一月十九日  
衛青第八號

青森縣知事照會 大正五年一月十日  
衛收發第三八三九號

防腐劑「フォルムアルデヒド」含有ノ故ヲ以テ廢棄處分ヲ

ス技ニ得タル清酒中ニハ普通所含ノ酸量ニ達スルマテ酒石酸  
又ハ乳酸ノ溶液ヲ加ヘ後粕漉ヲ行ヒ滓引清澄ノ上火當ヲ爲シ  
テ保存スヘシ  
如上ノ方法ニ依リ「ホルマリン」ヲ脱除シタル清酒ハ原酒ニ  
比シ少シク品質ヲ傷クルハ止ムヲ得サルモ劣等酒ニ至リテハ  
却テ品位ヲ向上スルニ至ル  
衛生局長回答 大正五年一月十九日  
衛青第八號  
本件ニ關シ本月十日付衛收發第三八三九號ヲ以テ御照會ノ處  
右脱除並加工法ハ衛生上害ナシト被認候條販賣方認可相成可  
然ト被飲候

●フォルムアルデヒド含  
有清酒ノ除害方法ノ件

大正五年四月二十七日  
衛茨第六七號

茨城縣知事照會 大正五年四月十八日  
衛發三六號  
防腐劑取締上必要有之候條左記事項ニ對シ至急衛御回答相煩  
度此段及照會候也

受ケタル清酒ヨリ左記脱除方法ニ依リ普通清酒トシテ販賣シ  
タキ旨出願スル者有之候處右ハ衛生上其儘許可スヘカラサル  
モノト思料セラレ候ヘ共一應御意見承知致度此段及照會候也  
左記

清酒中ノ「ホルマリン」脱除法

本法ノ根據ハ「ホルムアルデヒド」カ石灰乳ニ依リテ濃縮  
シ「フォルモノゼ」ナル糖類ニ變化スル反應シタルモノニシ  
テ「フォルモーセ」ト共ニ抱水炭素化合物ニ屬ス  
此方法ヲ實際ニ施サントスルトキハ當該清酒中ニ含マル、酸  
量ニ基キ先ツ所要苛性石灰ノ概量ヲ算出シ是ニ依リテ可成新  
鮮ナル煨性石灰ヲ用意シ水ヲ注キ充分消化セシム其程度ハ粉  
末狀トナルヲ以テ足ル次ニ右苛性石灰ハ之ヲ當該清酒中ニ投  
入シテ充分攪拌シ強度ノアルカリ性トナシタル後密封シテ放  
置ス爾後三四週間ヲ經ハ一部ヲ探取シ稀硫酸ヲ滴下シテ酸性  
トナシ蒸餾シ此餾液ニ就キ「フォルムアルデヒド」反應ヲ  
試シ之ヲ檢出セサルニ至レハ現酒ノアルカリ性ヲ測定シ之ニ  
對シ所要ノ酒石酸又ハ乳酸ノ概量ヲ算出シ可成濃厚ナル水溶  
液トナシ現酒ヲ攪拌シツ、注意シテ之ヲ添加シ中性若ハ極微  
弱ノ「アルカリ」性トナシ密封ノ上生スル沈澱ヲ沈著セシメ  
上清ヲ分別シ沈澱ハ之ヲ布片ニテ濾過シ濾液ヲ上清液ニ混和

左記

- 一 フォルムアルデヒド含有清酒ニ對シ煨製石灰ヲ以テ無  
害トナシタキ旨(明治四十四年大藏省醸造試験所報告第  
四十一號ニ依ル)申請アリタル場合ハ之ヲ衛生上危害ヲ  
生スル虞ナキ有效ナル方法トシテ認メ得ヘキヤ否ヤ
  - 二 前項ノ方法ヲ以テ許可差支ナキモノトセハ煨製石灰投入  
ノ分量並其ノ放置期間如何
  - 三 前項ノ方法ヲ以テ行ヒ尙「フォルムアルデヒド」ノ含  
有シアル場合ニ於テハ除去不可能ノモノト認メ差支ナキ  
ヤ
  - 四 第一項ノ方法以外ニ有效ナル「フォルムアルデヒド」  
除去方法アリヤ否ヤ
- 衛生局長回答 大正五年四月二十七日  
衛茨第六七號  
本件ニ關シ本月十八日付衛發第六三號ヲ以テ御照會之趣了承  
右ハ左記ノ通ニ有之候
- 左記
- 一 適量ニ煨製石灰ヲ使用シ操作方法宜シキヲ得ルニ於テハ  
本法ハ理論上有效ニシテ又衛生上危害ヲ生スルノ虞ナキ  
モノト認メ得ヘシ

- 二 本法ハ「フォルムアルデヒド」ノ含量ニ對シ一定ノ比例ニ假製石灰ヲ附加スルノ必要アルカ如シ然レトモ其比例及放置ノ期間ニ關シテハ尙詳細ナル研究ヲ缺ク
- 三 完全ニ本法ヲ施行シタル場合ニ於テハ「フォルムアルデヒド」ヲ殘存セサル筈ニシテ其除去必スシモ不可能ニアラサルヘシ
- 四 本法ノ外有效ナル方法未タ確定セルヲ聞カス

●清酒中ニ「フォルムアルデヒド」ヲ含有スルモノ措置方ニ關スル件

明治四十二年七月六日  
衛奈第五〇號

奈良縣知事照會 明治四十二年六月十九日  
坤警監四九二〇號  
販賣ノ用ニ供スル清酒中ニ「フォルムアルデヒド」ヲ含有スルモノハ之ヲ如何ナル程度迄稀釋セハ衛生上無害トナルヘキモノ有之候哉又酒精ニテ「フォルムアルデヒド」含有ノ清酒ヲ濾過セハ「フォルムアルデヒド」存在ノ反應ヲ呈セサルモノノ由

シテ然ラハ右反應ナキ清酒ハ衛生上無害ト認メ得ヘキモノニ有之候哉目下差懸リタル事件有之候ニ付併セテ何分ノ御意見承リ度此段及御照會候也  
衛生局長回答 明治四十二年七月六日  
衛奈第五〇號  
販賣ノ用ニ供スル清酒中ニ「フォルムアルデヒド」ヲ含有スルモノ措置方ノ義ニ付客月十九日附坤警第四九二〇號ヲ以テ御照會ノ處「フォルムアルデヒド」含有スル清酒ハ酒精ヲ以テ濾過スルモ到底該反應ヲ認メサルニ至リ難ク尙又「フォルムアルデヒド」ヲ含有スル清酒ノ處分トシテ其反應ヲ呈セサル程度迄稀釋セシムルハ萬止ムヲ得サル場合ノ外不可然ト存候此段及回答候也

●清酒防腐劑製造販賣許否ニ關スル件

明治四十二年九月十四日  
衛石第一〇四號

清酒防腐劑製造販賣ノ義ニ付石川縣ト照覆ノ結果左記ノ  
〔各地方長官（東京府、石川縣ヲ除ク）宛衛生局長通牒〕

通り決定候條爲念此段及通牒候也  
石川縣知事照會 明治四十二年八月二十六日  
收衛第二八三號  
清酒等防腐ノ目的ヲ以テ左記ノ藥品ヲ調合シ賣藥部外品トシテ製造營業出願者有之候處右ハ防腐劑取締規則第一條規定ノ藥品外ナルモ果シテ許可シ差支ナキモノニ有之候哉何分ノ御回示相煩度候也

左記

一名 稱 ヒヲターズ

二調 合 材料

(イ) 「タンニツクアシット」二五〇、グラム

(ロ) 「ピオクタニン」 五〇、グラム

但獨逸國「ミルタ」製藥會社製造ノ尋常藥

三製 法

右(ロ)ヲ乳鉢内ニ入レ之ニ少量ノ(イ)ヲ混和シ充分注意シテ研和スルコトヲ數回漸次全部ノ(イ)ヲ(ロ)ニ均密ニ

混清スルニアリ

四 使用法

本品二五〇「グラム」ヲ清酒ノ火入貯藏ノトキ樽卸移出ノトキ變味ノ兆候ヲ認メタルトキ潤濁ヲ生シタルトキ又ハ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第七節 飲食防腐劑

●清酒醬油防腐劑許否ニ關スル件

大正八年六月二十七日  
衛和第八一號

〔各地方長官宛衛生局長通牒〕

清酒醬油防腐劑許否ノ義ニ關シ和歌山縣ヨリノ照會ニ對シ別紙ノ通り回答致置候條爲念及通牒候也  
和歌山縣知事照會 大正八年六月五日  
衛第三三八五號  
清酒醬油等防腐ノ目的ヲ以テ左記ノ藥品ヲ調合シ賣藥部外品トシテ製造致度旨ノ出願者有之候處右ハ取締以外ノ藥品ナル

醬油ノ洋下ケノトキ樽卸移出トキ之等ニ二十石量ニ混清攪拌シ充分溶解スシムルニアリ  
衛生局長回答 明治四十二年九月十四日  
衛石第一〇四號ノ内

清酒防腐劑製造許否ノ義ニ付客月二十六日附收衛第二八三號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ防腐劑トシテ許可スヘキモノニ無之ト被存候此段及回答候也

モ許否ニ付疑義相生シ候間何分ノ御回示相成度候也  
追テ明治四十二年九月十四日附ヲ以テ石川縣ノ照會ニ對ス  
ル御回答ノ次第モ有之候ヘ共「ピオクタニ」「タンニン」  
酸ノ何レニ對スル不許可ノ御意見ニ候哉了解致兼候間本照  
會ニ對シ若シ不許可ノ御意見トスレハ其ノ何レナルヤ又分  
量ノ如何ニ關スルトキハ其ノ旨各別ニ舉示相煩度申添候  
記

一防腐液

唐カラシ

五匁

タンニン酸

五匁

右水一升ニ溶解シタルモノ

使用分量

醬油一石ニ對シ本液一合ヲ加フ

衛生局長回答 大正八年六月二十七日

衛和第八一號

本月五日附衛第三三八五號ヲ以テ標記ノ件許可ノ義ニ關シ御  
照會ノ趣了承右ハ許可相成可然ト被存候

### ●清酒防腐劑トシテ鹽化アルミ ニウム使用ニ關スル件

### ●清酒ノ除酸目的ニ「アンモニ ア」ヲ加入スルノ許否ニ關ス

〔衛〕

大正五年七月二十五日  
衛兵第三一三號

〔各地方長官宛  
衛生局長通牒〕

清酒防腐劑トシテ鹽化アルミニウム使用方許否ノ義ニ關スル  
兵庫縣ヨリノ照會ニ對シ左記ノ通り回答致置候條爲御參考及  
通牒候也

兵庫縣知事照會 大正五年七月十四日  
衛兵第六七三二號ノ一

鹽化アルミニウムヲ清酒防腐劑トシテ使用致度旨酒造業者ヨ  
リ申出タル趣ヲ以テ別紙寫ノ通豊岡稅務署長ヨリ照會有之候  
處右ハ飲食物防腐劑取締規則第一條規定外ノモノナルモ衛生  
上支障アルモノト被認候ニ付之カ使用ヲ承認セサル方可然ト  
存候ヘ共一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也  
(別紙略ス)

衛生局長回答 大正五年七月二十五日  
衛兵第三一三號

本件ニ關シ本月十四日附衛收第六七三二號ヲ以テ御照會ノ處  
右御見込ノ通り御取扱相成可然ト被存候

### ル件

明治四十年四月  
衛井第三九號

〔各地方長官宛  
衛生局長通牒〕

清酒ヲ酸味ヲ帶フル場合ニ於テ除酸ノ目的ヲ以テ「アンモニ  
ア」ヲ混和スルノ許否ニ關シ福井縣ト照覆ノ結果左記ノ通り  
決定候條爲念此段及御通牒候也

福井縣知事照會 明治四十年四月十一日  
四衛第一六三號

清酒ニ酸味ヲ帶フル場合ニ於テ除酸ノ目的ヲ以テ「アンモニ  
ア」ヲ混和致シ度出願スル者有之右ハ衛生上差支ナキモノト  
被存候モ之レカ許否ニ關シ貴省ノ御意見承知致度候條至急御  
回答相成候條此段及御問合候也

衛生局長回答 明治四十年四月  
衛井第三九號

清酒ニ酸味ヲ帶フル場合ニ於テ除酸ノ目的ヲ以テ「アンモニ  
ア」ヲ混和スル許否ノ義ニ付本月十一日付四衛第一六三號ヲ  
以テ御問合ノ處右ハ衛生上穩當ナラサルモノト被存候條許可  
不相成候條致度此段及回答候也

### ●清酒防腐器販賣許否ノ件

大正六年七月二十七日  
五衛阪第一號

〔各地方長官宛  
衛生局長通牒〕

本件ニ關シ大阪府知事ト別紙寫ノ通照覆致候條御承知相成度  
追テ本件防腐器ハ固ヨリ清酒ニ限リ其ノ使用ヲ認メタル義  
ニ有之又大藏省ノ回答省略致候條爲念申添候

大阪府知事照會 大正四年十二月二十八日  
衛第一〇一九二號

清酒防腐器販賣方何出ノ者有之候處若鉛鹽類ヲ防腐劑トシテ  
使用セシムルハ衛生上危害ノ虞アルモノト被認候ニ付販賣セ  
シメサリシ方可ナリト思料候ヘ共該品ハ既ニ特許局ニ於テ特  
許セルモノナレハ之カ取扱上疑義相生シ候條何分ノ御回示相  
煩度此段及照會候也

衛生局長回答 大正六年七月二十三日  
五衛阪第一號

本件ニ關シ大正四年十二月二十八日衛第一〇一九二號ヲ以テ  
テ照會ノ趣了承右ニ付大藏省ノ意見ヲ徵シ候處別紙ノ通回答  
有之該器使用後若鉛ノ清酒中ニ溶解スル量ハ極テ僅微ニシテ

衛生上殆ト無害ト被認候條之ヲ販賣スルモ支障ナシト被存候

●「フオルマリン」ヲ酒造業者ニ購賣セシメサル件

大正六年十二月二十日 五衛省第九一二號

主稅局長照會 大正五年九月十三日 往第九一五五號

「フオルマリン」ヲ酒造業者ニ購賣セシメサル方針ノ件ニ關シ本年八月八日付衛省第七三三號ヲ以テ御回答ノ趣了承右ハ明治三十九年貴局御申譯ノ趣旨ト同一ノ理由ニ依リ今回各地方廳へ通牒相成候趣ニ候處當貴時局カ當局ニ對シ御照會相成候處ハ單ニ「フオルマン」ヲ酒液貯藏桶ノ消毒ニ使用スル場合ノ問題ニ限ラレタルモノニシテ即チ右「フオルマリン」ヲ貯藏桶ノ消毒ニ使用スルトキハ往々「フオルムアルデヒツト」ノ清酒ニ移行スル虞アルヲ以テ酒桶ノ消毒ニ「フオルマリン」ヲ使用セシメサコトニ致度トノ希望ニ有之從テ當局ニ於テモ爾後酒桶ノ消毒ハ成ルヘク之ヲ避ケシムルコトトシ若シ已ラ

〔補〕

得ス之ヲ使用セムトスル者アルトキハ其ノ消毒後ノ處理ヲ十分ナラシメ防腐劑取締規則ニ概觸セサル様特ニ注意ヲ加ヘ居候次第ニシテ今後ト雖此ノ方針ニ依リ取扱フヘク候得共元來酒造家カ「オルマリン」ヲ購入スルハ曩ニモ屢々申進置候通り單ニ貯藏桶ノ消毒ノミナラス主トシテ其ノ製糖場就中製麴室醱酵室及貯藏庫等ノ消毒殺菌用トシテ使用スルモノニ有之候條今回各地方廳ニ對シ御通牒相成候如ク酒造業者ヲシテ全然「フオルマリン」ノ購入ヲ爲サシメサルコト相成候テハ酒類製造上最モ重大ノ關係ヲ有スル製糖場ノ殺菌消毒ヲ行フニ由ナク從テ醱造ノ安全ヲ期スルコトヲ得ス腐造ハ愈増加スルニ立至リ其ノ影響スル所甚大ナルモノ有之候斯ノ如ク本件ハ今回回答ノ如キ單ニ貯藏桶消毒ノミノ問題ニ無之全ク酒造家ノ安否ニ關スル重大事項ニ有之御間右各地方廳ニ對スル御通牒ニ就テハ是非此際御考慮相成候様致度殊ニ今ヤ漸ク本年ノ酒造期ニ入ラムトスルニ際シ差懸リタル儀ニ有之候條至急何分ノ御回答相煩度此段重テ及照會也

衛生局長回答 大正六年十二月二十日 五衛省第九一二號

本件ニ關シ客年九月十三日往第九一五五號ヲ以テ照會ノ趣了承酒造業者ノ行フ可キ消毒方法ニ付キテハ強チ「フオルマリ

〔補〕

明治四十三年六月二十一日 衛省第九一號

〔各地方長官宛〕 衛生局長通牒

醬油防腐劑使用許可ノ義ニ付熊本縣照會ニ對シ左記ノ通り回答候條爲念此段及通牒候也

熊本縣知事照會 明治四十三年六月七日 衛第五五九號

醬油防腐劑トシテ左記ノ藥品ヲ配伍シ發賣許可出願者有之候處右ハ飲食物防腐劑取締規則第一條ニ掲ル防腐劑品目以外ノモノ有之候ヘ共之カ許否ニ關シテハ聊カ疑義相生シ候ニ付一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

藥味分量

- 芥子 貳拾匁
- 胡椒 貳拾五匁
- 純苛性ナトリウム七匁五分
- 芳香丁幾 二匁
- カラメル少許
- 蒸溜水百三十匁

製法

蒸溜水百三十匁ヲ鐵鍋ニ容レ胡椒二十五匁ヲ加ヘ數分間沸騰セシメ微温トナル迄放置シ芥子二十匁ヲ加ヘ攪拌シ後密木綿ニテ濾過シ此液ニ苛性ナトリウム七匁五分及芳香丁幾二分ヲ

●醬油防腐劑發賣許可ノ義ニ關スル件

「フオルマリン」ニ依ルヲ要セス他ニ適當ナル方法モ有之ノミナラス之ヲ酒造業者ノ手ニ委ヌルトキハ如何ニ之カ使用ヲ爲スヤハ素ヨリ豫知スルコトヲ得ス依テ生スヘキ衛生上ノ危害不尠儀ト被存候ニ付右御了知ノ上再考相成度此段及回答候也

主稅局長照會 大正七年一月三十一日 往第八六七號

客年十二月二十日付衛省第九一二號ヲ以テ「フオルマリン」ヲ酒造業者ニ購賣セシメサル件ニ付酒造業者ノ行フヘキ消毒方法ニ付テ強チ「フオルマリン」ニノミ依ルヲ要セス他ニ適當ナル方法アル趣御申越相成候處右適當ナル他ノ方法爲參考承知致度候條御同示相成度此段及照會候也

衛生局長回答 大正七年三月一日 衛省第一四二號

本件ニ關シ一月三十一日往第八六七號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ桶ニ對シテハ從來ノ消毒方法即チ蒸氣殺菌、熱湯洗滌、日光乾燥、サリチール酸含有ノ酒精又ニ燒酎塗布、倉庫等ハ内部ノ清掃、熱湯清拭等ヲ適當ト被存候



第五類 保健 第四章 食物其他ノ物品 第七節 飲食防腐劑

加ヘ「カラメル」ヲ以テ赤褐色ヲ呈スル迄少許ヲ加ヘ全量ヲ百二十分トナシ製ス

用法用量

醬油ニ混シテ用ユ用量ハ前記百二十分ヲ五石量ニ加フ

效能

夏期醬油ノ白微ヲ防ク目的トス

衛生局長回答 明治四十三年六月二十一日 衛生局長回答 衛生第九一號

本月七日附衛第五九號ヲ以テ醬油防腐劑使用許否ノ義ニ付御照會ノ趣了承右ハ衛生上有害ニ付許可不相成方可然ト存候此段及回答候也

● 緋草酸ヲ醬油防腐劑ト爲ス許否ノ件

大正十一年十二月十五日 衛保第二四八號

大正十一年六月十七日 衛保第四五七號

左記製法、用法、效能ニ依リ賣薬部外品ノ免許ヲ出願セル者有之候處右ハ防腐劑取締規則以外ノモノナルモ之カ許否ニ關

シ疑義相生シ候條貴局ノ御意見承知致度候

製法

緋草酸 一五、〇瓦 水 四三五、〇瓦 右二味ヲ混シ四五〇、〇瓦トス

用法

右四五〇、〇ノ液ヲ醬油五石中ニ混ス

效能

徽止

衛生局長回答 大正十一年十二月十五日 衛保第二四八號

標記ノ件ニ關シ六月十七日付衛第四五七七號ヲ以テ御照會ノ趣了承東京衛生試驗所試驗報告ニ依レハ右ハ防腐劑トシテ效力有之モノト難認候條可然御取計相成度 追テ別紙東京衛生試驗所試驗報告寫御參考ノ爲及送付候 (試驗報告ハ略ス)

● 醬油防腐劑トシテ藥品イソユ一ゲノール等配伍許否ノ件

大正六年十月十二日 衛山第二九〇號

(各地方長官宛 衛生局長通牒)

醬油防腐劑ニ關スル山口縣ヨリノ照會ニ對シ別紙ノ通回答致置候條爲念及通牒候也

山口縣知事照會 大正六年九月十七日 衛第四三六二號

一、醬油徽止劑(スキルチン)

一、藥品分量

イソユ一ゲノール 三〇、〇%

アセトユ一ゲノール 五、〇%

アルコホル 六九、五%

一、製法

イソユ一ゲノール及アセトユ一ゲノールヲ右分量ヲアルコホルニ溶解セシメ茶褐色瓶ニ入レ一瓶ヲ五石量トシテ販賣ス

一、用法

右溶液五勺五才(即一瓶量)ヲ製成醬油五石ニ混入シ攪拌シ用フヘシ

一、效能

第五類 保健 第四章 食物其他ノ物品 第七節 飲食防腐劑

右ヲ使用スルトキハ上等醬油ニシテ二十日間下等醬油ニシテ十日間微ヲ防止スル效能アリ

右製劑賣薬部外品トシテ願出候處之カ許否ニ關シ聊カ疑義相生シ候ニ付貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正六年十月十二日 衛山第二九〇號

本件ニ關シ客月十七日付衛第四三六二號ヲ以テ御照會ノ處右ハ許可スヘキモノニ無之ト被存候

● 醬油防腐劑取締ニ關スル件

大正十四年五月五日 十三衛保第四五八號

(各地方長官宛 衛生局長通牒)

標記ノ件ニ關シ別紙ノ通新潟縣ト照覆致候條爲念御了知相成度

新潟縣知事照會 大正十三年八月二十二日 衛發第六六一九號

肉桂酸ナトリウムヲ配合セル醬油防腐劑發賣許否ニ關シ廣島縣照會ニ對シ大正十年六月衛廣第七七九號ヲ以テ御回答ノ次第モ有之當業者ニ對シ之カ使用セシメサル様取締居候處今回

縣下蒲原郡小須戸町井須合名會社ニ於テ醬油一石六斗ニ左記該當製劑ヲ混入發賣セルヲ發見シ直ニ混入ヲ差止メ候得共飲食物防腐劑取締規則第一條規定ノ品目ニ該當セサルタメ混入醬油ノ處分ニ關シ聊カ疑義ヲ生シ候條何分ノ御指示相仰度此段及照會候也

記

名 稱 モー ル ダ ン

京都市下京區本町通十五丁目東福寺北門三一化學研究所製造

大阪市西區觀上通二丁目今野商店發賣

衛生局長回答 大正十三年十二月九日 衛保第四五八號

標記ノ件ニ關シ八月二十二日衛發第六六一九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右現品ニ付テハ現在處分スヘキ法規無之ノミナラス防腐劑取締規則トノ關係モ有之カ販賣ノ禁止ハ隱當ナラサル據有之候條本件取締ニ關シ追テ何分ノ決定ヲ爲ス迄ハ大正十年六月衛第三二九七號廣島縣知事ニ對スル回答ノ趣旨ニ鑑ミ注意其他適當ノ方法ニ依リ當業者ニ於テ該製劑ヲ使用セサル様御取 相成候様致度

●「チノゾール」配伍ノ飲食物防腐劑販賣許可ノ件

明治三十九年六月七日 衛阪第三七九號ノ内

(各地方長官宛 衛生局長通牒)

飲食物防腐劑「チノゾール」許可ノ義ニ關シ別紙乙號ノ通り大阪府ヨリ照會ニ付甲號ノ通り回答相成候條爲念此段及通牒候也

大阪府知事照會 明治三十九年五月二十一日 衛第一二六九號

「チノゾール」ヲ主藥トセル飲食物防腐劑ノ販賣營業願出候者有之候處右ハ當該ノ規則中ニ於テ禁止セサル藥品ニ付許可差支ナク思料候ヘ共其性質藥効等ニ於テハ禁止藥ト略ホ同様ノモノナルヲ以テ之カ處分上多少ノ疑義相生シ候條右許可ニ關シ一應御省ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 明治三十九年六月七日 衛阪第三七九號ノ内

客月二十一日付衛第一二六九號ヲ以テ飲食物防腐劑「チノゾール」許可ノ義ニ付御照會ノ處右ハ害否不明ナルモノニ付許

可不相成方可然ト被存候條右様御了知相成度此段及回答候也

●飲食物防腐劑(ウレミン)販賣許可ノ件

大正九年三月三日 衛阪第一一五號

(各地方長官宛(東京府、大阪府ヲ除ク) 衛生局長通牒)

標記ノ件ニ關シ大阪府照會ニ對シ左記ノ通回答致候條爲念通牒候也

大阪府知事照會 大正九年二月二十一日 衛第一二〇一號

酒醬油酢其他ノ防腐劑トシテ別紙寫ノ通免許申請ノモノ有之候處許可シ差支無之哉何分御回示相煩度

別 紙

一 方 名 「ウレミン」

一 藥味分量並製法

稀鹽酸及結尿素ノ各一分子量ヲ蒸發皿ニ取り之ヲ重疊煎上ニ蒸發品セシメテ製ス

一 用法用量 酒、醬油、酢等ノ液體ニハ其一石量ニ對シテ(ウ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第七節 飲食防腐劑

(衛)

(衛)

●防腐劑(沃度カルチウム)ノ許可ニ關スル件

大正十年一月十九日 衛廣第三四〇號

廣島縣知事照會 大正九年十二月二十三日 衛第七九六號

左記製法ニ依ル沃度「カルチウム」ヲ清酒ニ防腐劑トシテ出願セル者有之候處右ハ防腐劑取締規則以外ノモノナレトモ衛生上有害ナリト認ムルヲ以テ許可スヘカラサルモノト被存候得共貴局ノ御意見承知致度候也

製法 石灰水一〇〇〇、〇ヲ沸騰セシメ乾燥食鹽一〇、〇

ヲ投入シ溶解セル後沃度四、〇ヲ加ヘ無色トナルニ

至ル迄振盪シ冷後濾過シテ製ス

用法 清酒一升ニ對シ二瓦乃至六瓦トス

衛生局長回答 大正十年一月十九日 衛醫第三四〇號

本件ニ關シ客年十二月二十三日附衛第七九五六號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御意見ノ通ニ有之候

●魚類防腐劑枯礬末販賣許否ノ件

件

大正十年四月十九日 衛醫第四〇一號

大阪府知事照會 大正十年三月二十八日 衛第二九九一號

枯礬末一〇〇、〇瓦ヲ清水一斗ニ溶解シ魚類防腐劑トシテ販賣願出ノ者有之候處該品ハ古來ヨリ飲食物防腐劑トシテ使用シ來リシモノニ有之且飲食物防腐劑取締規則ニ紙觸セサルヲ以テ許可シ支障ナキヤ御意見御回示相煩度候

衛生局長回答 大正十年四月十九日 衛醫第四〇一號

客月二十八日附衛第二九九一號ヲ以テ標記ノ件ニ關シ御照會ノ趣了承右ハ許可相成可然ト存候

●桂皮酸ヲ主藥トセル防腐劑ノ取締方ニ關スル件

取締方ニ關スル件

大正十年六月二十五日 衛醫第七七九號

廣島縣知事照會 大正十年六月十四日 衛第三二九七號

左記製法用法效能ニ依リ賣藥部外品ノ免許ヲ出願セル者有之候處右ハ防腐劑取締規則以外ノモノナルモ之カ許否ニ關シ疑義相生候條賣局ノ御意見承知致度候

製法 桂皮酸一分 カヲメル二分

右ノ割合ヲ以テ混合シ「エキス」トナス

用法 醬油火入レノ際加熱セルモノ十石ニ右エキス千二百瓦ヲ混和ス

效能 醬油ヲ適當ニ著色シ併テ微ノ發生ヲ防止ス

衛生局長回答 大正十年六月二十五日 衛醫第七七九號

本件ニ關シ六月十四日附衛第三二九七號ヲ以テ御照會ノ趣了

承右ハ許可スヘチモノニ無之ト被存候

●飲食物防腐劑(亞硫酸)取締ニ關スル件

關スル件

明治三十九年十二月二十二日 秘丙第四九九號

(警視總監、京都、大阪府知事宛衛生局長通牒)

近時西洋菓子ノ原料トシテ米國ヨリ輸入スル澱粉糖舎利別(水飴)中ニハ漂白ノ爲メニ用キタル多量ノ亞硫酸ヲ含有スルモノアル趣別紙ノ通り報告有之候處右ハ衛生上取締ヲ要スルコト勿論ニ有之候得共之カ爲近時漸ク發達ノ緒ニ就カントスル西洋菓子製造業ハ急激ナル打擊ヲ與フルカ如キコト無之様致度候ニ付先以此際當業者ニ警告ヲ與ヘ至急改良ノ方法ヲ講セシムル等相當御措置相成度此段及通牒候也

(別紙試驗所ノ報告略ス)

明治三十九年十二月二十二日 秘丙第四九九號

(各地方長官(三府ヲ除ク)宛衛生局長通牒)

西洋菓子ノ原料タル澱粉糖舎利別中ニ亞硫酸ヲ包含スルコトニ關シ別紙ノ通り三府ニ對シ通牒致置候ニ付若シ貴縣(廳)ニ於テモ是等ノ事實ニ違著セハ通牒之通り御取相成度此段及通牒候也

(別紙前掲)

●外國ヨリ輸入ノ防腐劑含有飲食物ニ關スル件

大正二年十月三十日 衛阪第二二三號ノ内

(各地方長官、通商局長、海軍省醫務局長宛衛生局長通牒)

本件ニ關シ大阪府知事ノ照會ニ對シ左記ノ通回答候條記承知相成度

大阪府知事照會 大正二年九月十一日 衛第四七五號

外國ヨリ輸入ノ左記飲食物ニシテ防腐劑安息香酸曹達「ベンツオアトオフソーダ」ヲ含有(含有量ニ多少アリト雖大約〇、二%内外トス)セルヲ販賣スルモノアリ此種ノ物品ニハ商標ニ含有物及其量ヲ明記シ米國ニ於テハ其販賣ヲ認容セラレタ

ルモノナラムモ我國ニ輸入シ之ヲ一般飲食物トシテ販賣スルニ於テハ當然取締規則ヲ適用スヘキモノト相認メ候ニ就テハ當願管内ノ現在品中輸入済月日ヲ經過セシテ未タ包装ヲ解セス税關ニ保管中ニ屬スルモノノ如キハ輸入者ヲシテ適當ノ措置ヲ爲サシメ其ノ他各販賣店ニ散在セルモノニ對シテハ飲食物防腐劑取締規則第四條ノ命スル處ニ從ヒ相當處分スヘキ意見ニ有之候ヘ共事體外國トノ貿易ニ影響スルノミナラス將來ノ取締向ニモ相關シ候義ニ付一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

名 稱	製 造 所
チ エ リ	米國サンフランシスコ、フレシ
トマトケチャツプ	ユマンクラーク會社
カツチングカチャツプ	米國ヒツチパーク、エツチ、ゼツ
チ エ リ	トハインツ會社
マラスキーノチエリ	米國サンフランシスコ、カツチ
衛生局長回答	米國(製造場不明)
衛生局長回答	米國(製造場不明)

本件ニ關シ本月十一日付衛第四七五一號ヲ以テ御照會之趣了

承右ハ御意見ノ通御取扱相成差支ナシト按存候

### ●米國製「トマト」、キャツチツプ」及「マラスキ」ノ酒漬櫻實販賣禁止ノ件

大正二年十二月十八日  
衛第六八七八號

外務次官照會 大正二年十一月  
通送第五四五號

本件ニ關シ在本邦米國大使ヨリ別紙寫ノ通申越ノ次第モ有之候ニ付右茲ニ及御送付候條何分ノ義御回報相成度此段及照會候也

(別紙)

肅啓陳者在神戸亞米利加領事ヨリ「ウイトコウスキ」會社ノ陳情書ヲ送付シ來リ候ニ付爰ニ其要領ヲ閣下ニ致スノ光榮ヲ有シ候會社ハ合衆國ニ於テ製造ノ「トマト」、キャツチツプ」及「マラスキ」ノ酒漬櫻實販賣ノ代理店ニ有之候處今回大阪官憲ハ其販賣スル食料品ハ安息香酸鹽ヲ含有スルトノ理由ヲ以テ帝國飲食物取締規則ニ違反スルモノトシテ之カ販賣ヲ禁止致候然ルニ此等食料品ハ多年日本ノ市場

〔衛〕

〔衛〕

### ●燻製肉中ニ含有スル「フォルムアルデヒド」取締ニ關スル件

大正七年十二月十八日  
六神衛第一七一號

(各地方長官(除神奈川) 縣)宛衛生局長通牒

一般ニ販賣セラルル數種燻製肉ニ就キ「フォルムアルデヒド」含有ノ調査ヲ遂ケタル東京衛生試驗所ノ報告書別冊ノ通ニ付御參照相成度就テハ燻製肉中ニハ製造多少ノ「フォルムアルデヒド」ヲ含有スルヲ奇貨置クヘシト爲シ故意ニ之カ使用ニ出ツル者無キヲ保セス候條不自然ニ含有ヲ檢出スル部分又ハ含有ノ分量等ニ依リ不斷注意ヲ拂ハレ犯則者御取締相成候様致度此段及通牒候也

(東京衛生試驗所報告書略ス)

神奈川縣知事照會 大正六年十一月九日  
已警衛第六一七號

神奈川縣鎌倉郡玉繩村岡本二百十一番地

「ハム」製造者 當 岡 周 藏

ニ於テ販賣致來リタルモノニ有之候處今突然禁止ノ處分ヲ受ケタル義ニ候趣尙同會社ハ此等食料品中ニ防腐劑トシテ〇、〇ニパーセントノ安息香酸鹽ヲ含有スルモ衛生上無害ナリトノ相當資格アル化學者ノ證明狀ヲ添へ申出候右ニ付亞米利加ノ前記食料品製造家ニ御注意致度存候條防腐劑トシテ安息香酸鹽ヲ(Benzoate of Soda)含有スル食料品ノ輸入ハ果シテ禁止セララルル義ニ候哉御示教相煩度候

小官ハ此機會ヲ利用シテ重テ閣下ニ敬意ヲ表シ候敬具

内務次官回答 大正二年十二月十八日  
衛第六八七八號

本件ニ關シ客月四日通送第五四五號ヲ以テ御照會之趣了承安息香酸鹽ヲ含有スル飲食物ハ其含有量ノ多少ヲ問ハス之ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列シ若ハ貯藏スルコトヲ得サル義ニ有之候條御承相成度

追テ本件ト同一事件ニ關シ衛生局長ト大阪府知事ト照覆ノ結果本年十月三十日阪第二二三號ノ内ヲ以テ貴省通商局長ヘ通牒濟ニ付御聞取相成度尙特ニ爲參考別紙飲食物防腐劑取締規則寫一通付添致候

(別紙寫略ス)

右ノ者製造ニ係ル食料品「ハム」輸出検査申請有之候ニ付是レ  
 カ検査ヲ遂クルニ該「ハム」中ヨリ飲食物防腐劑タル「フオ  
 ルムアルデヒド」ヲ檢出セリ而シテ外表面ハ其ノ反應著シ  
 ク其ノ内表面ニ至ルニ從ヒ僅微トナリ或ハ全ク反應ヲ呈セサ  
 ルモノアリ要スルニ「ハム」製品ハ何レモ其ノ外表面部中  
 「フオルムアルデヒド」ヲ含有スルコトハ否定スヘカラサル  
 コトト被認候而シテ之カ原因ヲ調査スルニ製造作業中ノ銅屑  
 燻蒸ニ由リ自然的ニ「フオルムアルデヒド」瓦斯ヲ發散シ  
 「ハム」ノ外表面部ニ浸潤スルモノニシテ現在ニ於ケル製造方  
 法トシテ到底止ムヲ得サル次第ト存セラレ候而シテ明治三十  
 六年九月内務省令第十號飲食物防腐劑取締規則第二條第一項  
 ニ依レハ販賣ノ用ニ供スル飲食物ノ製造又ハ貯藏ニ防腐劑ヲ  
 使用スルコトヲ得ス又同條第二項ニ依レハ防腐劑ヲ使用シタ  
 ル飲食物ハ云々ト記載シ何レモ防腐劑ノ使用ヲ前提トセルヲ  
 以テ本件ノ如キ製造ニ伴フ自然ノ發生ニ依ル含有ハ法ノ豫期  
 シタルモノニ無之從テ本件ノ如キハ當然同法適用ノ範圍内ニ  
 在リトモ認メラレス候得共其公衆衛生上ニ關係ヲ有スルト同  
 時ニ他方「ハム」生産上ニ至大ノ影響ヲ及ホス事ニモ有之候  
 條右ニ關シ何分ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長通牒 人正七年十二月十八日  
 六神衛第一七一號  
 客年十一月九日付已警衛發第六一七號ヲ以テ標記ノ件何出ラ  
 レ候處右ハ御見解ノ通り飲食物防腐劑取締規則適用ノ範圍外  
 ト御承知相成可然依命此段及通牒候也  
 追テ一般ニ販賣セラルル燻製肉ニ就キ「フオルムアル  
 デヒド」含有ノ調査ヲ遂ケタル東京衛生試驗所ノ報告書  
 別冊ノ通ニ付御參照相成度而シテ燻製肉中ニハ製造上多少  
 ノ「フオルムアルデヒド」ヲ含有スルヲ奇貨置クヘシト  
 爲シ故意ニ之カ使用ニ出ツル者無キヲ保セス候條不自然ニ  
 含有ヲ檢出スリ部分又ハ含有ノ分量等ニ依リ不爾注意ヲ加  
 ヘラレ犯則者御取締相成候様度致申添候  
 (東京衛生試驗所報告書略ス)

### 第八節 飲食物用器具

#### ●飲食物用器具取締規則

明治三十三年十二月十七日  
 内務省令第五十號

消重 明治三十九年六月内務省令第一一號、四二年一二月二  
 四號 改正

飲食物用器具取締規則左ノ通定ム

飲食物用器具取締規則

- 第一條 本則ニ於テ飲食物用器具ト稱スルハ飲食器、割烹具  
 其ノ他飲食物ノ調理器、容器、貯藏器又ハ量器ヲ謂フ
- 第二條 營業者ハ飲食物用器具ヲ鉛又ハ百分中鉛十分以上ヲ  
 含ム合金ヲ以テ製造シ又ハ修繕スルコトヲ得ス
- 第三條 營業者ハ食飲物器具ノ飲食物ニ接觸スル部分ヲ百分  
 中鉛二十分ヲ含ム合金ヲ以テ製造シ又ハ百分中鉛五分以上  
 ヲ含ム錫合金ヲ以テ鍍布スルコトヲ得ス
- 鐘詰用ノ鐘ニ在テハ營業者ハ外部ノ鐵著及鐵受ノ鐵著ニ百  
 分中鉛五十分以上ヲ含ム合金ヲ使用スルコトヲ得ス

第五類 保健 第四章 食物其他ノ物品 第八節 飲食用器具

- 第四條 營業者ハ珞那又ハ釉藥ヲ施シタル飲食物用器具ニシ  
 テ之ニ百分中醋酸四分ヲ含ム水ヲ容レ三十分時間煮沸スル  
 ニ其ノ液中ニ砒素又ハ鉛ヲ溶出スルモノヲ製造スルコトヲ  
 得ス修繕ニ關シテ亦同シ
- 第五條 營業者ハ哺乳器具ヲ鉛又ハ亞鉛ヲ含ム護膜ヲ以テ製  
 造スルコトヲ得ス
- 第六條 營業者ハ其ノ製造又ハ輸入スル金屬性飲食物用  
 器具ニ極印其ノ他容易ニ剝落セサル方法ヲ以テ自己ノ製造  
 又ハ輸入ニ係ルコトヲ證スルニ足ルヘキ商號其ノ他ノ符號  
 ヲ附スヘシ
- 輸入業者ニ在リテハ當分ノ内自己ノ輸入ニ係ルコトヲ證ス  
 ルニ足ルヘキ商號其ノ他ノ符號ヲ記載シタル票紙ヲ貼付シ  
 テ前項ノ符號ニ代フルコトヲ得
- 第六條 第二條乃至第五條ニ違背シテ製造若ハ修繕シタル飲  
 食物用器具ハ之ヲ販賣シ販賣ノ目的ヲ以テ貯藏若ハ陳列シ  
 又ハ營業上ニ使用スルコトヲ得ス
- 第七條 銅又ハ其ノ合金ヲ以テ貯藏若ハ陳列スルコトヲ得ス  
 賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ貯藏若ハ陳列スルコトヲ得ス
- 第七條 銅又ハ其ノ合金ヲ以テ製造シ又ハ修繕シタル飲食物  
 用器具ノ飲食物ニ接觸スル部分ニシテ鍍金屬ノ剝脱シタル

モノ又ハ固有ノ光澤ヲ有セサルモノハ營業上ニ使用スルコトヲ得ス

第八條 地方長官ハ第二條乃至第五條ニ違背シテ製造又ハ修繕シタル飲食物用器具若ハ之ヲ用ヒタル飲食物又ハ第七條ノ飲食物用器具若ハ之ヲ用ヒタル飲食物ニ關シテハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得本則ニ違背シタル營業者ニ關シテ亦同シ

第九條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シ明治三十三年二月法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第十條 第二條乃至第七條ニ違背シタル者ハ二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ヲ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

營業者ハ其ノ代理人、戸主、實族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス  
法人ノ代表者又ハ共ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ

法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

第十二條 本則ハ明治三十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
第十三條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

●飲食物用器具取締ニ關スル件

大正十二年二月二十七日  
內務省愛衛第三四號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

標記ノ件今回愛知縣知事ノ照會ニ對シ別紙ノ通回答致シ候條御了知相成度  
別紙

愛知縣知事照會 大正十一年八月二十一日  
衛發第一三四號

飲食物用器具取締規則ニ依ル該用器具中何等ノ被覆ナキ銅製  
庖丁類及琺瑯ヲ施サ、ル鐵製飲食物用器具例ヘハ鐵瓶、鍋、

[衛]

[衛]

釜ノ如キ何等危害ヲ生スル虞ナキモノニ付テハ之レニ捺印若クハ商標又ハ記號ノ貼付ヲ要セサル様ニモ被認右ニ關シテハ他ノ金屬製器具ト同シク之ヲ勵行シ居ル向モ有之取締上ニ統一ヲ缺キ聊カ疑義相生シ候條御意見承知致度此段照會候也  
衛生局長回答 大正十二年二月二十七日  
內務省愛衛第三四號

●飲食物用器具取締方等ニ關スル件

明治四十二年五月六日  
四一東己第三八號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

飲食物用器具取締規則施行ニ關シテハ夫々方針ヲ定メテ御實行相成居候事ト存候得共左記事項ニ關シテハ將來一層御配意相煩度尙他ノ物品例ヘハ有害性著色料取締規則ノ範圍ニ屬ス

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第八節 飲食物用器具

●飲食物用器具取締規則第五條ノ追加ニ關スル件

明治四十三年十一月  
衛島第五一號

(鳥取縣知事照會)

- 一 小賣業者ノ外ニ製造者者卸賣商輸入商アル場合ニハ可成其製造者卸賣商輸入商ニ就キ物品ヲ收去検査スルコト
- 二 販賣者ノ陳列貯藏スル物品ニ關シ試験ノ結果不良ト認メタルトキハ其旨製造者所在府縣ヘ通知スルコト
- 三 前項若シ良否ノ判定カ程度問題ニ屬シ少シニテモ手心ニ依リ差異ヲ生スル如キ疑アルトキハ製造者所在府縣ニ打合セノ上處分スルコト
- 四 製造元所在府縣ハ右通知又ハ打合アルトキハ速ニ處置回答スルコト

明治四十二年十一月内務省令第二十四號ヲ以テ明治三十三年十二月同省令第五十號飲食物用器具取締規則中ニ第五條ノニヲ追加相成候處規則第一條ニ依ルトキハ物質ノ如何ヲ問ハス總テノ飲食物用器具ヲ包含スルモノト認メラル、ニ就テハ當業者ハ第五條ノニ依リ其製造又ハ輸入スル金屬性飲食物用器具ニハ總テ極印其他商號ヲ附スヘキ義ト被存候モ又鑄鐵製鍋釜ノ如キ何等ノ危害ヲ生スル虞ナキモノニ付テハ極印等ヲ要セサル様ニモ被認聊カ疑義ヲ生シ候條御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 明治四十三年十一月 衛甲第五一號

右規則第五條ノ二ノ金屬性飲食物用器具ニハ鑄鐵製鍋釜等ヲモ合ム義ト御承知相成度此段及回答候也

●飲食物用器具取締ニ關スル件

大正七年十二月二十五日 阪衛第四二二號

(各地方長官宛 衛生局長依命通牒)

飲食物用器具取締規則第五條ノ二、第六條號二項ノ規定ハ從

前規違則反ノ物品ヲ發見スルモ其ノ製造者ノ誰タルヤヲ知ル能ハサル爲自然販賣者ノミヲ處罰シ製造者ヲ取締ルコト能ハサリシ不備ヲ補フ爲メ明治四十二年十二月省令第二十四號ヲ以テ追加セラレ候次第ニ有之原來是ニ則リ夫々御取締ノコト、被存候處這般日本金物同業組合聯合長ヨリ取締規則中改正方請願アリ其ノ陳述ニ依レハ輸出ノ目的ヲ以テ製造シタル珐瑯鐵器ニシテ大正六年九月農商務省令第二十六號輸出珐瑯鐵器取締規則所定ノ検査ニ不合格ノモノハ内地ニ於テ之ヲ販賣スルノ他方法無之ト爲シ而シテ當該製造品ニハ極印記號等無キヲ以テ製造人ヲ證明スル證紙ヲ貼付シテ販賣シツ、アルモノノ如ク又當業者ハ取締規則ハ輸出品ニハ適用セラレサルヲ以テ從テ輸出ノ目的ヲ以テ製造スル器具ニハ極印其ノ他ノ記號ヲ附スルノ要ナシト誤信シ居ル様ニ有之候因是觀之規則第五條ノ二ノ規定ニ違反セル器具ニシテ各地ニ散在セルモノ抄カラサルヘク相察被致候ノミナラス省令ノ趣旨ハ内地向タルト輸出向タルト問ハス廣ク製品ヲ取締ルノ意味ナルニ製造者ニ於テ省令發布後十年ヲ經過セル今日尙ホ法規ヲ誤解シツ、アルカ如キハ頗ル遺憾トスル處ニ有之候就テハ此際周ク珐瑯鐵器ニ付嚴重取締ヲ加ヘラルルト同時ニ一面當業者ニ對シ誤解ノ匡正方ニ關シ可然御取計相成候様致度

〔衛〕

●飲食物用器具取締規則疑義ニ關スル件

明治三十四年二月 衛甲第五號

(鳥根縣知事照會)

一 珐瑯又ハ釉藥ヲ施シタル飲食物容器ニシテ規則第四條ノ規定ニ依リ試驗シ砒素又ハ鉛ヲ溶出セサルモノハ該器具ノ外部ニ對シ同一ノ方法ヲ以テ試驗スル場合ニ於テ砒素又ハ鉛ヲ溶出スルコトアルモ第四條違背ノ器具ト認ムヘキ限リニアラサルヤ

二 珐瑯又ハ釉藥ヲ施シタル器具ニシテ其使用上煮沸スルモノト否ラサルモノトアリ例ヘハ茶碗、皿、鉢等ノ如キ時トシテ熱物ヲ容ルコトアルモ其熱物ハ暫時ニシテ冷却シ數十分時間同一ノ熱度ヲ保持スルモノニ非ス故ニ其器具中多少ノ鉛又ハ砒素ヲ含有スルモ通常ノ使用上ニ於テハ或ハ全ク之ヲ溶出セス或ハ溶出スルモ極メテ少量ニ過キサハシ殊ニ菓子器ノ如キニ至リテハ固ヨリ熱物ヲ容ルヘキモノニ非ラス其他猶之ニ類スルモノ少ナカラス然ルニ

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第八節 飲食物用器具

111

〔衛〕

此等ノ器具ニ對シテ規則第四條ニ依リ醋酸水煮沸ノ試驗法ヲ以テ砒素又ハ鉛ノ絶無ヲ期スルハ稍苛察ニ過キ第二、第三ノ規定ニ於テ鉛ノ絶無ヲ期セサルモノト權衡ヲ得サルノ感ナシトセス就イテハ斯ノ如ク使用ノ目的煮沸用ニ供セサル器具ニ關シテハ第四條ノ規定ヲ適用スルノ限リニアラサルカ將タ用法ノ如何ニ拘ハラヌ又溶出分量ノ多寡ヲ問ハス必ス第四條ノ規定ヲ適用スヘキ義ナルヤ

三 規則第六條ニ第二條乃至第五條ニ違背シテ云々トアルハ第二條乃至第五條ノ規定ニ適合セサル器具ト云フ旨意ニシテ本則施行前ノ製造又ハ修繕ニ係ル器具ヲ包含スルヤ又ハ本則ノ施行後ニ於テ第十條ニ該當スル違背ノ行爲ニ依リテ製造又ハ修繕シタル器具ノミヲ指シタル旨意ナルヤ

衛生局長回答 明治三十四年二月 衛甲第五號  
右者左記ノ通ニ有之候條御了知相成度經何ノ上及御回答候也  
第一項 御意見之通り  
第二項、第三項 前段御意見之通り

●珐瑯若ハ釉藥ヲ施シタル飲食

物器具取締ニ關スル件

明治四十三年二月  
阪第五〇三號

(大阪府知事照會) 明治四十三年二月  
衛生局長宛

飲食物用器具取締規則第四條ハ珙那若ハ釉藥ヲ施シタル飲食物用器具ニシテ鉛又ハ砒素ヲ含有スルヤ否ヤノ試驗方法ヲ規定セラレタル義ト被認候處等シク珙那若ハ釉藥ヲ施シタル飲食物用器具ニシテ茶碗、皿、鉢、(淡路燒又ハ)ノ如キ非煮沸用ノモノニ對シ同條ノ試驗方法ニ依ラスシテ冷時四%醋酸水ヲ注加シ數時間放置スルトキハ其ノ醋酸水中ニ鉛ヲ溶出スルモノニ有之此等ノ飲食物用器具ハ同條第二條ニ概觸スルモノト解釋シ相當取締ヲ要スル義ト被存候得共明治三十四年二月衛甲第五號島根縣知事ノ問合ニ對シ貴官ヨリ御回答ノ次第モ有之候處前記物品ニシテ冷時浸出法ニ依リ鉛ヲ溶出シタルトキハ如何ニ處置スヘキ御意見ニ候哉差懸リタル義有之候條至急何分ノ御回答相成度此段及照會候也  
衛生局長回答 明治四十三年二月  
阪第五〇三號ノ内

右物品ニ對シテハ規則ニヨル處分ハ當分見合セ先以テ當業者ニ警告ヲ與ヘ製造法改良セシムル方可然ト被存候此段及回答候也

●非煮沸飲食物用器具ニ關スル件

大正六年六月二十六日  
衛德第一五三號

德島縣知事照會 大正六年五月二十八日  
衛德第四〇九七號

珙那若ハ釉藥ヲ施シタル飲食物用器具ノ内茶碗、皿、鉢ノ如キ非煮沸用ノモノニ對シテハ規則ニ依ル處分ハ當分見合セ當業者ニ製造方法ヲ改良セシムヘキ旨四十四年二月阪第五〇三號ノ内ヲ以テ大阪府ト照覆ノ次第御通牒相成候處兵庫縣三原郡淡陶株式會社ノ製作ニ係ルモノハ今尙製造方法ヲ改良セサルモノト見ヘ現ニ之等ノ器物ニ冷時四%ノ醋酸水ヲ注加シ三十分間放置シテ鉛ヲ溶出セルモノヲ販賣スルモノ往々有之右ハ畢竟當業者ニ於テ製造上ノ改良ニ意ヲ用ヒサル結果斯ル粗惡品ヲ製作スルニ至リシモノト認メラレ衛生上看過スヘカラサルヲ以テ斷然規則第四條ノ違反者トシテ處置スヘキ要アリ

(衛)

ト被存候得共本件ニ關シテハ曩ニ大阪府知事ニ對シ御回答ノ次第モ有之候ニ付一應貴官ノ御意見承知致度此段及照會候也

追テ從業來之ニ該當スル鉛溶出ノ器具ヲ販賣スル者アルトキハ其時々説諭ヲ加ヘ製造元ヘ返却セシメ來リシ處今同ハ製造元ヨリ販賣者ニ對シ別紙寫ノ通りノ書面ヲ送り來リ之等ノ器物ハ規則違反ニアラサルヲ以テ販賣差支ナキ旨ヲ獎勵シ隨テ販賣者ニ於テモ之ヲ製造元ニ返却スルコトヲ好マサル狀況モ有之候條御參考迄ニ申添候也  
(別紙略ス)

衛生局長回答 大正六年六月二十六日  
衛德第一五三號

本件ニ關シ客月二十八日衛德第四〇九七號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ兵庫縣知事ニ對シ當業者戒告方通牒致置候條今一應販賣業者ニ對シ嚴重説諭ヲ加ヘ現品ヲ製造元ヘ返却セシムル様致度

衛生局長通牒兵庫縣知事宛 大正六年六月廿六日  
衛德第一五三號

珙那若ハ釉藥ヲ施シタル飲食物用器具ノ内茶碗、皿、鉢ノ如キ非煮沸用ノモノニ對シテハ規則ニ依ル處分ハ當分見合セ當業者ニ對シ製造方法ヲ改良セシムヘキ旨四十四年二月阪第五〇

三號ノ内ヲ以テ及通牒置候處御管下三原郡淡陶株式會社ノ製造ニ係ルモノハ今尙規則ニ違反スルモノ有之製造元ヘ返却方販賣業者ニ警告スルモ製造元ニ於テハ右等器具ハ鉛ヲ溶出スルモ規則違反ニアラストナシ販賣ヲ獎勵スル傾向アル旨德島縣知事ヨリ申出ノ次第モ有之甚タ以テ不心得ノ義ト被存候條嚴重御戒告相成様致度

●衛生上相當法令ニ依リ取締ルヘキ物品中特許ヲ受ケタルモノニ對シ取締ノ件

明治三十五年四月五日  
衛甲第二〇號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

近來各地方ニ於テ衛生上相當法律令ニ依リ取締ルヘキ物品中特許法ニ依リ特許ヲ受ケタルモノニ對シ其ノ取扱方區々ニ涉リ候右ハ縱ヒ特許ヲ受ケタル物品ト雖モ之カ製造販賣等ニ就キテハ相當法令ノ範圍ニ於テ取締ルヘキハ勿論ノ義ニ有之候條御了知相成度爲念依命此段及通牒候也



### 第九節 メチールアルコール

#### ●メチールアルコール(木精)取締規則

明治四十五年五月二十八日  
内務省令第八號

メチールアルコール(木精)取締規則左ノ通定ム

メチールアルコール(木精)取締規則

第一條 メチールアルコール(木精)ヲ含有スル飲食物ハ之ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ製造、陳列若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第二條 メチールアルコール(木精)又ハメチールアルコール(木精)ヲ混和シタル物品ニハ其ノ容器ニ「メチールアルコール(木精)又ハ「メチールアルコール(木精)混和」ノ文字ヲ明記スルニアラサレハ之ヲ販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ陳列若ハ貯藏スルコトヲ得ス

第三條 メチールアルコール(木精)ノ製造者、輸入者又ハ販賣者ハ帳簿ヲ作製シ其ノ製造高、受入高、譲渡高、使用高受入先、譲渡先其ノ年月日及譲渡先使用ノ目的ヲ記入スヘシ

地方長官ハ當該吏員ヲシテ前項ノ帳簿ヲ檢閲セシムルコトヲ得

第四條 前項ノ帳簿ハ十年間之ヲ保存スヘシ

第五條 メチールアルコール(木精)ヲ含有スル飲食物及其ノ營業者ニ關シテハ地方長官ハ明治三十三年二月法律第十五號第一條ニ依リ處分スルコトヲ得

第六條 地方長官ハ本則ノ執行ニ關シ明治三十三年二月法律第十五號第二條ノ職權ヲ行フコトヲ得

第七條 第一條又ハ第二條ニ違背シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ懲役ニ處ス

第八條 第三條第一項又ハ第四條ニ違背シタル者若ハ第三條第二項ノ檢閲ヲ拒ミタル者ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條 營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本則ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

〔衛〕

〔衛〕

營業者ハ其ノ代理人、尸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス  
法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本則ニ違背シタル場合ニ於テハ本則ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

#### 附 則

東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行フ

#### ●清酒葡萄酒「ブランデー」及「ウキスキー」等ノ類ニ於ケル「メチールアルコール」試験方法

明治四十五年六月五日  
内務省訓令第七號

府 縣

メチールアルコール「木精」取締規則中清酒及葡萄酒ノ類並酒

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第九節 メチールアルコール

精煉耐ブランデー及ウキスキーノ類ニ於ケル「メチールアルコール」試験方法左ノ通定ム

一 清酒及葡萄酒ノ類ニ在リテハ檢體二百立方「センチメートル」ヲ内容約五百立方「センチメートル」ノ硝子壺ニ取り之ニ炭酸石灰約三「グラム」加ヘ左圖ノ如キ割温蒸餾管ヲ用ヒ八十度ヲ超ヘサル温ニ於テ約二時間ニ蒸餾シテ得タル「アルコール」ヲ以テ左ノ試験ヲ行フヘシ

前項ノ「アルコール」一立方センチメートルヲ試験管ニ取り之ニ「プロセント」ノ過マンガン酸カリウム溶液五立方「センチメートル」及硫酸〇・二立方「センチメートル」ヲ加ヘ二乃至三分時間ノ後八「プロセント」ノ硫酸溶液一立方「センチメートル」ヲ以テ脱色シ試験管内ノ混液黄色ヲ呈スルニ至レハ更ニ硫酸一立方「センチメートル」ヲ加ヘテ振盪シ全ク脱色シタル後之ニ「フクシン」亞硫酸液五立方「センチメートル」ヲ加ヘ試験管ヲ栓塞シ輕ク搖盪シタル後一時間放置スヘシ  
フクシン亞硫酸製法

結晶「フクシン」ノ粉末トナセルモノ約〇・一「グラム」ヲ内容百立方「センチメートル」ノ共栓硝子壺ニ取り蒸餾水八十八立方「センチメートル」及重亞硫酸

ナトリウム（白色ノ結晶性粉末）約〇・七「グラム」ヲ加ヘテ溶解シ一時間ノ後之ニ鹽酸二十五滴ヲ加ヘテ密栓シ光ヲ遮リ冷處ニ貯フヘシ

本品ハ無色或ハ微黃色ノ液ナリ

本品五立方「センチメートル」ヲ試験管ニ取り之ニ十萬分中一分ノ「フェオルムアルデヒド」(CHO)ヲ含有スル水溶液五立方「センチメートル」及硫酸一立方「センチメートル」ヲ加ヘテ栓塞シ輕ク搖盪シ一時間放置スルニ紫紅色ヲ呈セサル可ラス

前項ノ試験ニ於テ呈色シタルトキハ更ニ左ノ試験ヲ行フヘシ

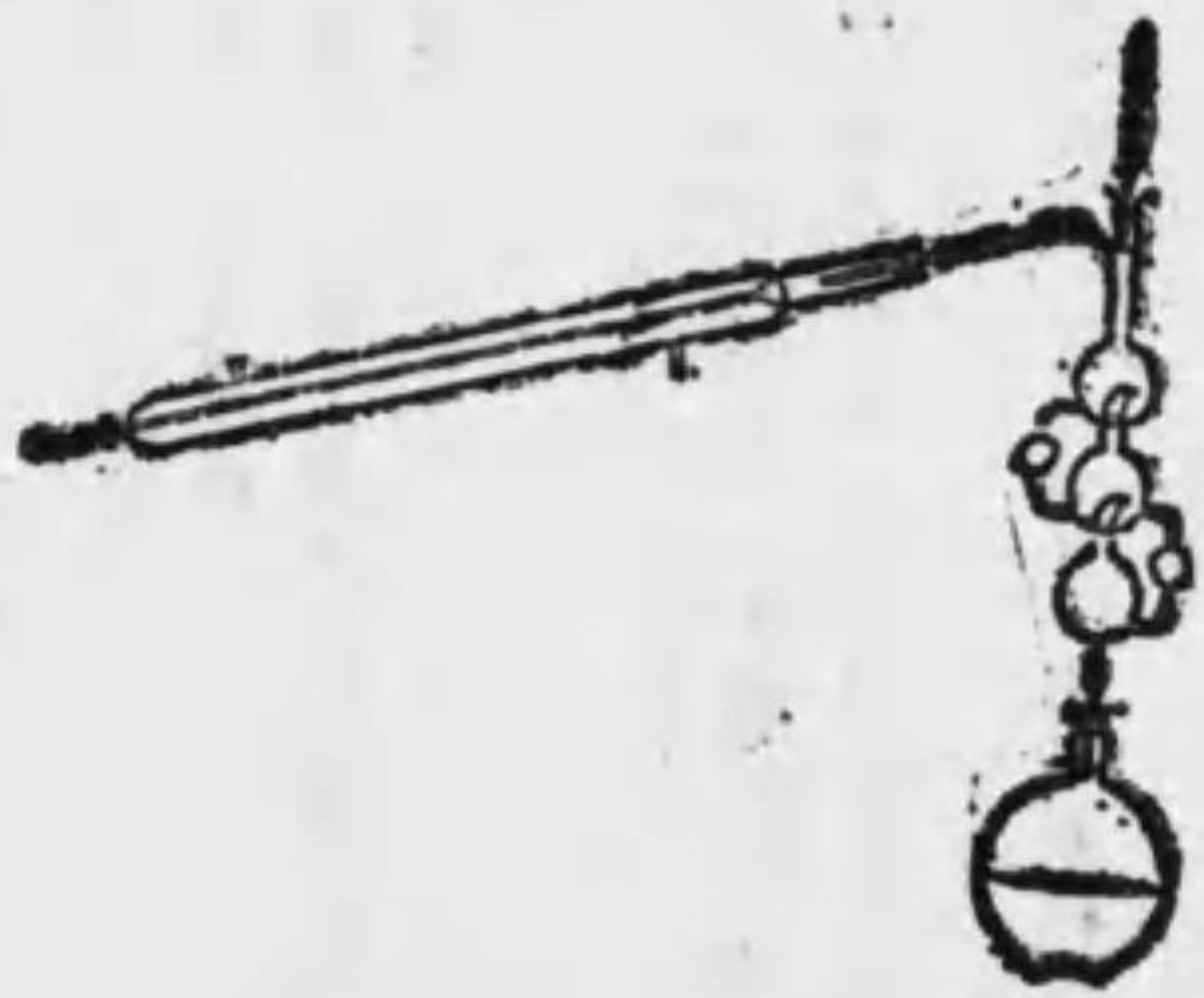
前試験殊餘ノ「アルコール」ヲ成ルヘク低温ニ於テ蒸餾シ十立方「センチメートル」ヲ取り之ニ「プロセント」ノ過マンガン酸カリウム溶液二百五十立方「センチメートル」及硫酸十立方「センチメートル」ヲ加ヘテ振盪シ二乃至三分時間ノ後八「プロセント」ノ硫酸溶液ヲ以テ脱色シ蒸餾スヘシ蒸餾中ハ時々餾液約五立方「センチメートル」ヲ取り之ニ鹽酸フェニールヒドラチン約〇・〇三グラム、二・五「プロセント」ノ「ニトロプルシット」ナトリウム「溶液四滴及十「プロセント」ノ「ナトロン」溶液

一立方「センチメートル」ヲ加フルニ初メハ暗色ヲ呈スルモ後ニ蒸餾シ來タルモノハ類藍色ノ反應ヲ呈スルニ至ルヲ以テ此場合ニハ受器ヲ取換ヘ可檢體含有ノ餾液ヲ成ルヘク多量ニ採集スルノ目的ヲ以テ同上ノ試験法ニ依リ藍色ヲ呈セサルニ至ル迄蒸餾ヲ持續スヘシ其得タル餾液ニ過剰ノ「アムモニア」水ヲ注キ八十度ヲ超ヘサル温ニ於テ蒸發シ濃厚トナシ（游離アムモニア揮散ノ後）殆ト無色ノ濃厚液二滴ヲ物體硝子上ニ取り之ニ昇汞溶液一滴ヲ加ヘテ鏡檢スルニ三放線及多放線狀ノ星狀結晶ヲ認ムルトキハ「メチールアルコール」ノ存在ヲ徵ス

酒精、燒酎、「ブランデー」並「ウイスキー」ノ類ニ在リテハアルコール含有量ノ多少ニ從ヒ之ニ相當量ノ水ヲ加ヘテ約十八容量「プロセント」トナシタルモノ二百立方「センチメートル」ヲ取り酒精及葡萄酒ノ類ニ於ケル「メチールアルコール」試験法ニ從ヒ試験スヘシ

〔衛〕

割温蒸餾管



〔衛〕

大阪府知事照會 大正二年七月十八日  
衛第三七九號

「メチールアルコール」ハ毒物劇物營業取締規則ニ依リ劇物ト指定セラレタルモ其混和物ニ付テハ何等規定ノ存在セサル爲メ故意ニ他物ト混和シ取締規則ノ範圍ヲ脱セムトスルモノアリ之ニ對シテハ全然取締規則外ノモノト見ルヘキヤ將又混和量ニ依リ適當ノ範圍ヲ定ムヘキモノナルヤ一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正二年九月三十日  
衛第一七〇號

本件ニ關シ本件七月十八日附衛第三七九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ客年五月省令第八號メチールアルコール（木精）取締規則ニヨリ御締締相成度

●「メチールアルコール」ニ他物ヲ混和シタルモノ、取締方ニ關スル件

大正二年九月三十日  
衛第一七〇號

第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第九節 メチールアルコール

### 第十節 飲食物輸出入其他

#### ●輸出飲食物罐詰取締規則

大正五年一月十三日  
農商務省令第一號

輸出飲食物取締規則左ノ通相定ム

輸出飲食物罐詰取締規則

第一條 飲食物罐詰ハ罐又ハ罐ノ標紙ニ邦語又ハ外國語ヲ以テ内容物ノ品名及正味量ヲ明示シタルモノニ非サレハ之ヲ輸出スルコトヲ得ス

罐詰ノ包装箱ニハ其ノ品名ヲ明示スヘシ

第二條 罐附若ハ卷締ノ不完全ナル罐詰又ハ罐ノ膨脹シタルモノニシテ内容物腐敗ノ虞アルモノハ之ヲ輸出スルコトヲ得ス

第三條 前二條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス  
附 則

本則大正五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本則施行前製造シタル飲食物罐詰ニシテ正味量ヲ明示セサルモノハ本則施行後二年ヲ限り地方長官ノ許可ヲ受ケ之ヲ輸出スルコトヲ得

#### ●米國及其領内ニ輸出スル罐詰

類検査證明ニ關スル件

明治四十二年九月  
四一外甲第一一九號

(内務、農商務)  
兩次官通譯

米國純良食品條例施行ノ結果米國並ニ米領ニ輸入セララルル肉類及同製品ニハ輸出國官憲ノ検査證明書ヲ要スル事ト相成候ニ就テハ管下ノ狀況ニ依リ必要ト認メララルトキハ貴廳ノ検査證明書ヲ願出ツルモノニ對シ左ノ方法ニ依リ證明書ヲ附與セラレ可然尙獸肉以外ノ罐詰其他之ニ類スルモノモ亦之ニ準シ御取扱相成可然此段及通牒候也

一 輸出用獸肉罐詰其他肉製品ノ検査證明方願出ツル者アルトキハ隨時警察官及相當技術員ヲシテ之カ製造場所ニ臨檢セシムルコト

(衛)

一 地方廳ニ於テ前記製品中若シ一箇ニテモ不純良品ヲ發見シタルトキハ其ノ全部ヲ廢棄セラルルモ異議ナキ旨ノ請書ヲ徵シ置キ相當技術員ヲシテ抜キ検査ヲ施サシムルコト

一 相當技術員及警察官ハ(一)牛肉中ニ馬肉ヲ混シ又ハ牛肉ト稱シテ馬肉ヲ用ヒ其他詐欺的行爲アラサルヤ(二)屠場ニ於テ屠畜検査員ノ検査シタル證印アル獸肉ナリヤ(三)防腐劑其他有害物ヲ混スルコトナキヤ否ヲ検査スルコト

一 純良製品ノ各箇ニ對シテハ一定ノ検査済證ヲ貼付シ又同種類製品ノ一團ニ對シテハ一定ノ検査證明書ヲ附與スルコト

#### ●食肉輸移入取締規則

昭和二年一月二十日  
內務省令第四號

食肉輸移入取締規則左ノ通定ム

食肉輸移入取締規則

第一條 本令ニ於テ食肉ト稱スルハ食用ニ供スル牛、綿羊、  
第五類 保健 第四章 飲食物其他ノ物品 第十節 飲食物輸出入其他

#### ●食肉輸移入取締規則第二條二

山羊、豚及馬ノ生肉ニシテ販賣ノ用ニ供スルモノヲ謂フ

第二條 食肉ハ屠畜検査ヲ經タルコトヲ證スル輸出官憲(支那ニ在リテハ在支帝國官憲)又ハ移出地官憲ノ證明書並肉面ニ獸種及屠殺年月日ヲ明示シタル屠畜検査員ノ檢印アルモノニシテ別ニ指定スル海港ニ於テ地方長官ノ検査ニ合格シタルモノニ非サレハ輸入又ハ移入スルコトヲ得ス

第三條 前條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條 食肉ヲ輸入又ハ移入スル者カ未成年者、禁治産者又ハ法人ナルトキハ本令ノ罰則ハ之ヲ其ノ法定代理人又ハ法人ノ代表者ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第五條 食肉ヲ輸入又ハ移入スル者ハ其ノ代理人、雇人、其他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ第二條ノ規定ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

附 則

本令ハ昭和二年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

### 依ル海港指定

昭和二年一月二十日  
内務省告示第五百十九號

食肉輸入取締規則第二條ノ規定ニ依リ左記海港ヲ指定ス  
大阪 横濱 神戸 長崎 嚴原 敦賀 下關 門司

昭和二年八月十二日  
内務省告示第四百五號

食肉輸入取締規則第二條ノ規定ニ依リ左記海港ヲ指定シ昭  
和二年九月十一日ヨリ施行ス  
廣島縣下 宇品

### ●人造「バター」表示ニ關スル件

大正三年五月二日  
農商務省令第十二號

沿革 大正三年九月農商務省令第一三號  
人造「バター」表示ニ關スル件左ノ通定ム  
第一條 人造「バター」ノ製造營業者ハ製造後遲滞ナク其ノ容  
器又ハ包裝ニ人造「バター」ナル文字ヲ明瞭ニ表示スヘシ

但シ輸出スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス  
人造「バター」ノ輸入、移入又ハ販賣ノ營業者カ前項ノ表  
示ノナキモノ又ハ其ノ表示ノ明瞭ナラサルモノヲ取得シタ  
ルトキ亦同シ

第二條 前條ノ營業者ハ其ノ所持スル人造「バター」ニ爲シタ  
ル前條ノ表示カ消滅シタルトキ、明瞭ナラサルニ至リタル  
トキ又ハ其ノ表示アル容器若ハ包裝ヲ變更シタルトキハ更  
ニ前條ノ表示ヲ爲スヘシ

第三條 前二條ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス  
附 則  
本令ハ大正三年十月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本令施行ノ際第一條ノ營業者カ所持スル人造「バター」ハ之ヲ  
本令施行ノ日ニ製造、輸入、移入又ハ取得シタルモノト看做  
ス

### ●茶葉取締ニ關スル件

大正十三年八月一日  
農商務省令第十七號

沿革 大正一四年一月農林省令第二八號 改正  
明治四十四年農商務省令第二十號ヲ左ノ通改正シ公布ノ日ヨ

リ之ヲ施行ス

第一條 左ノ各號ノ一ニ該當スル製茶ハ之ヲ販賣ノ目的ヲ以  
テ製造シ若ハ譲受又ハ賣渡スコトヲ得ス但シ刑法第十九條  
第一號又ハ第三號ニ該當セサルモノニシテ地方長官ノ認可  
ヲ經テ茶葉ノ原料ニ供スル爲賣渡シ又ハ譲受クルコトハ此  
ノ限ニ在ラス  
一 粘質物ヲ用キテ製造シタルモノ（茶粉ト海草類ヨリ製  
出シタル無害ナル粘質物トヲ以テ製造シタルモノヲ  
除ク）又ハ之ヲ他ノ茶ニ混シタルモノ  
二 物料ヲ用キテ色澤ヲ附シタルモノ又ハ之ヲ他ノ茶ニ混  
シタルモノ  
三 腐敗シタルモノ又ハ之ヲ他ノ茶ニ混シタルモノ  
四 土砂其ノ他ノ不純物料ヲ混シタルモノ  
第二條 前條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス  
前項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

## 第五章 屠 場

### ●屠場法

明治三十九年四月十一日  
法律第三十二號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル屠場法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ  
ム

#### 屠場法

第一條 本法ニ於テ屠場ト稱スルハ食用ハ供スル目的ヲ以テ  
獸畜ヲ屠殺スル屠場ヲ謂フ  
本法ニ於テ獸畜ト稱スルハ牛、羊、豚及馬ヲ謂フ  
第二條 屠場ヲ設立セムトスル者ハ地方長官（東京府ニ於テ  
ハ警視總監）ノ許可ヲ受クヘシ  
第三條 屠場以外ニ於テハ食用ニ供スル目的ヲ以テ獸畜ヲ屠  
殺解體スルコトヲ得ス但シ自家用其ノ他特別ノ事情アル場  
合ハ命令ノ定ムル所ニ依ル  
第四條 屠場ニ於テハ屠畜検査員ノ検査ヲ經サル獸畜ヲ屠殺  
解體スルコトヲ得ス

屠肉、内臓其ノ他食用ニ供スル部分ハ屠畜検査員ノ検査ヲ  
經ルニ非サレハ屠場外ニ搬出シ又ハ製造ノ用ニ供シ若ハ貯  
藏スルコトヲ得ス

第五條 屠場ニハ屠畜検査ノ爲必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第六條 市町村ニ於テ屠場ヲ設立スルトキハ地方長官（東京  
府ニ於テハ警視總監）ハ必要ト認ムル地區内ニ於ケル私設  
屠場ノ廢止ヲ命スルコトヲ得

第七條 屠場ヲ設立スル市町村ハ廢場ヲ命セラレタル私設屠  
場主ニ對シ屠場ノ使用廢止ノ爲受クヘキ損失ヲ補償スヘ  
シ

前項ニ依リ補償スヘキ金額ハ協議ニ依リ之ヲ定ム協議調ハ  
サルトキハ鑑定人ノ意見ヲ徵シ地方長官之ヲ決定ス其ノ決  
定ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

第八條 内務大臣ハ必要ト認ムルトキハ屠場ノ設置ヲ市町村  
ニ命スルコトヲ得

第九條 市町村ハ地方長官（東京府ニ於テハ警視總監）ノ認  
可ヲ得ルニ非サレハ屠場ヲ廢止スルコトヲ得ス

第十條 市町村立屠場ノ用地ニ必要ナル國有ノ土地ハ之ヲ市  
町村ニ讓與シ又ハ無償ニテ使用セシムルコトヲ得

第十一條 衛生上危害ヲ生シ其ノ他公益ヲ害スルノ虞ヲリト

認ムルトキハ地方長官（東京府ニ於テハ警視總監）ハ屠場  
ノ廢止ヲ命シ又ハ其ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

第十二條 地方長官（東京府ニ於テハ警視總監）ハ必要ト認  
ムルトキハ屠場設備ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第十三條 第三條、第四條ニ違背シタル者又ハ第十一條ノ停  
止ヲ犯シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十四條 屠畜ニ關スル營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナル  
トキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ依リ之ニ  
適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ  
關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限  
ニ在ラス

第十五條 屠畜ニ關スル營業者ハ其ノ代理人、戸主、家族、  
同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又  
ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮  
ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カレルコトヲ得ス

第十六條 法人ノ代表者又ハ其ノ雇人、其ノ他ノ從業者法人  
ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタ  
ル場合ニ於テハ各法規ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人ト  
ス

附 則

第十七條 本法施行ノ際現ニ存スル屠場ハ本法施行後三箇年  
間ハ本法ノ許可ヲ受ケタルモノト看做ス但シ本法施行ノ日  
ヨリ起算シ許可期間三箇年以内ナルトキハ其ノ期間ニ依  
ル

前項ノ期間終了後ハ本法ニ依リ許可ヲ受クヘシ

第十八條 本法中市町村ニ關スル規定ハ北海道ノ區、一級町  
村、二級町村及沖繩縣ノ區其ノ他市町村ニ準スヘキ地ニ適  
用ス

第十九條 本法ハ明治三十九年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●屠場法施行規則

明治三十九年六月二十二日  
内務省令第十六號

沿革 大正一〇年七月内務省令第一九號 改正

屠場法施行規則左ノ通定ム

屠場施行規則

第一條 屠場法第二條ニ依リ地方長官（東京府ニ於テハ警視  
總監以下ニ做フ）ニ於テ屠場ノ設立ヲ私人ニ許可スルトキ  
ハ一定ノ期限ヲ附スルコトヲ要ス

第五類 保健 第五章 屠場

第二條 地方長官ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ屠場主ノ名義ヲ  
變更スルコトヲ得ス

第三條 左ニ掲ケル場合ニ於テハ屠場法第三條ノ制限ニ依リ  
サルコトヲ得

一 獸肉販賣業者、旅店、飲食店又ハ料理店ニ非スシテ  
（一年未滿）、羊、豚ヲ自家用ニ供スル場合

二 不慮ノ災害ニ因リ負傷シ若ハ救フヘカラサル状態ニ陥  
リ又ハ難産、産褥麻痺若ハ急性鼓脹症ニ因リ切迫屠殺  
ヲ必要トスル場合但シ此ノ場合ニ於テハ屠場以外ニ於  
テ解體スルコトヲ得ス

三 遠洋航路若ハ近海航路ヲ航行スル日本船舶又ハ外國船  
舶内ニ於テ船員、船客ノ食用ニ供スル爲屠畜ヲ屠殺解  
體スル場合

四 前各號ノ外土地ノ狀況ニ依リ地方長官ノ認可シタル場  
合

第四條 屠場使用料及屠殺料ハ其ノ額ヲ定メ地方長官ノ認可  
ヲ受クヘシ之ヲ増減スルトキ亦同シ

第五條 屠場主又ハ屠畜業者ハ定額以外ノ料金を受ケ又ハ正  
當ノ事由ナクシテ屠場ノ使用若ハ屠殺ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 屠場ハ獸畜ノ屠殺解體ノ外他ノ目的ニ使用スルコト

ヲ得ス但シ地方長官ノ認可ヲ得タル場合ハ此ノ限ニ在ラ

第七條 屠場ハ常ニ清潔ナラシムヘク居室、繋留所、生體檢  
査所及業務上使用スル器具ハ屠殺終了後之ヲ洗滌シ血液、  
汚物及汚水ハ検査員ノ指示ニ從ヒ之ヲ處置スヘシ

第七條ノ二 支那、西伯利亞ヨリ輸入スル牛羊ノ屠殺解體ヲ  
爲ス場合及支那、西伯利亞以外ノ地方ヨリ輸入若ハ移入ス  
ル牛羊ニシテ檢疫期間満了前解放セラレタルモノノ屠殺解  
體ヲ爲ス場合ハ屠殺解體終了後直ニ居室、繋留所、生體檢  
査所、通路及業務上使用スル物件並生皮、内臓、血液、胃  
腸内容物其ノ他検査員ノ特ニ必要ト認ムル場所、物件ニ對  
シ検査員ノ指示ニ從ヒ消毒方法ヲ施行スヘシ  
前項ノ屠殺解體ニ從事シタル者ハ其ノ終了後検査員ノ指示  
ニ從ヒ手足及被服ニ對シ消毒方法ヲ施行シ且入浴スヘシ

第八條 屠場主又ハ屠畜業者ハ結核、癩、梅毒又ハ傳染性皮  
膚病ニ罹レル者ヲシテ獸畜ノ屠殺解體ヲ爲サシムルコトヲ  
得ス  
屠畜業者ニシテ前項ノ疾病ニ罹レルトキハ獸畜ノ屠殺解體  
ヲ爲スコトヲ得ス

第九條 生體検査ノ際検査員ニ於テ獸畜カ疾病ニ罹リ食用ニ

供スヘカラスト認メタルトキハ屠殺ヲ禁シ角又ハ前蹄若ハ  
腎部ニ禁字ヲ烙印スヘシ其ノ傳染病ナル場合ハ直チニ隔離  
セシメ病毒ニ汚染シタル場所、物件ニ對シ消毒方法、清潔方  
法ヲ施行セシムヘシ

前項ノ烙印ハ検査員ノ認可ヲ經ルニ非サレハ之ヲ消除スル  
コトヲ得ス

第十條 病畜ハ生體検査ニ於テ食用ニ供スルモ衛生上危害ノ  
虞ナシト認メラレタルモノト雖モ病畜居室以外ニ於テ屠殺  
スルコトヲ得ス但シ検査員ノ認可ヲ得タル場合ハ此ノ限ニ  
在ラス

第十一條 屠殺解體ヲ終リタルトキハ検査員ハ屠内、内臓其  
ノ他食用ニ供スル部分ニ烙印ヲ爲スヘシ

第十二條 屠殺解體後検査員ニ於テ獸畜カ傳染病ニ罹レルコ  
トヲ發見シタルトキハ居室其ノ他病毒ニ汚染シタル場所、  
物件ニ對シ消毒方法、清潔方法ヲ施行セシムヘシ

第十三條 地方長官ハ食用ニ供スヘカラスト認メタル屠内、  
内臓其ノ他ノ部分ニ關シ明治三十三年法律第十五號第一條  
ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第十四條 第九條第二項ニ違背シタル者ハ二十五日以下ノ重  
禁錮ニ處ス

第十五條 第二條第四條第五條第六條第十條ニ違背シタル者  
及第七條第七條ノ二第九條第一項第十二條ノ命令ニ應セサ  
ル者ハ貳拾五圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條 第八條ニ違背シタル者ハ拾圓以下ノ罰金ニ處ス  
附 則

本則ハ明治三十九年法律第三十二號屠場法施行ノ日ヨリ之ヲ  
施行ス

●屠場ノ構造設備標準

明治三十九年六月二十七日  
内務省令第十七號

屠場ノ構造設備標準左ノ通定ム

屠場ノ構造設備標準

屠場ノ位置ハ獸畜ノ搬入屠内ノ搬出及給水並排水ニ便ニシテ  
左ノ各號ノ地域外タルコトヲ要ス

- 一 離宮、御用邸又ハ御陵墓ヨリ五町以内ノ地
- 二 社寺、學校、病院、公園又ハ水道水源ヨリ二町以内ノ地
- 三 前各號ノ外地方長官、東京府ニ於テハ警視總監ニ於  
テ風致上若ハ公衆及獸畜ノ衛生上不適ト認メタル地

第五類 保健 第五章 屠場

屠場ニハ繋留所、生體検査所、居室、検査室、血液溜、汚水  
溜、汚物溜、消毒所及隔離所ヲ設ケ其ノ構造及設備ハ左ノ各  
號ニ依ルヘシ

一 繋留所ハ地盤ヲ石、「コンクリート」又ハ煉瓦（止ム  
ヲ得サルトキハ漆喰又ハ厚板）ニテ築造シ後方ニ汚  
水溝ヲ設ケ牛、馬ハ一頭毎ニ槽、羊、豚ハ適宜ニ區劃  
ヲナシ各區ニ番號ヲ附記スルコト

二 生體検査所ハ地盤ヲ石、「コンクリート」又ハ煉瓦（止  
ムヲ得サルトキハ漆喰又ハ厚板）ニテ築造シ體量及  
體尺ノ計測並獸體保定ニ關スル設備ヲナスコト

三 居室ハ居室、（牛馬居室、犢羊居室、豚居室、病畜居  
室）内臓取扱室及外皮取扱室ニ區劃シ生體、屠内、内  
臓等ノ搬出入口ヲ各別ニ設ケ地盤ハ石又ハ「コンクリ  
ート」又ハ不滲透質ノ材料ヲ以テ築造シ血液、汚水ヲ  
排除スヘキ溝ヲ設ケ勾配ヲ付シ内壁ニハ（石又ハ煉瓦  
造ノ場合ヲ除ク）金屬又ハ石板ヲ以テ四尺以上ノ腰張  
ヲナシ採光換氣ノ爲意ヲ設ケ分臟検査臺、屠内懸吊器  
屠内秤量器ヲ備フルコト

四 検査室ニハ顯微鏡其ノ他検査ニ必要ナル器具、藥品ヲ  
備フルコト

第五類 保健 第五章 屠場

- 五 検査室ニハ検査員詰所ヲ附屬セシムルコト
  - 血液溜、汚水溜、汚水溜ハ居室ヨリ三間以上ノ距離ヲ有シ不渗透質ノ材料ヲ以テ築造シ其ノ周壁ハ地盤ヨリ五寸以上ヲ高メ且ツ雨水ヲ防クヘキ装置ヲナスコト
  - 六 消毒所ハ場内適當ナル場所ニ之ヲ設ケ消毒上必要ナル装置ヲナスコト
  - 七 隔離所ハ適當ナル場所ニ之ヲ設ケ地盤ハ糞留所ニ準シ築造スルコト
- 屠場ノ周圍ニハ見透ササル様塔塚ヲ設ケ之ニ閉鎖シ得ヘキ門戸ヲ附クヘシ
- 前各項ノ構造設備ハ土地ノ狀況ニ應シ之カ省略ヲ許可スルコトヲ得
- 専ラ羊、豚ノ屠殺ノ目的トスル屠場ニ關シテ亦同シ

●屠場ノ新設許可等爾今内議ニ及ハサル件

明治三十九年八月二十七日  
秘甲第一一六號

●屠場新設出願ニ關スル件

大正十年四月一日  
保第二〇一號

大阪府知事照會 大正十年三月二十五日  
衛第三六八四號

屠場法施行後屠場ノ新設出願スル者アル場合ニ於ケル取扱方ニ關シテハ明治三十九年七月内務省秘甲第七十九號通牒ノ次第モ有之候處既ニ十數年ヲ經過シ其狀態ノ變遷モ亦甚シク且食糧問題ニ關シ各方面ニ於テ種々論議セラレ、今日ニ於テモ尙前記通牒ノ制限ニ準據スヘキモノナリヤ將又右制限ニ據ラス之ヲ許可シ以テ肉食供給ノ調節ヲ圖リ支障ナキ義ナリヤ處理上差迫リタル義有之候ニ付至急何分ノ御意見承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正十年四月一日  
衛保第二〇一號

標記ノ件ニ關シ三月二十五日衛第三六八四號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ明治三十九年七月内務省秘甲第七十九號通牒ニ依リ御取扱相成度

追テ地方ノ狀況ニ依リ特ニ本文制限以上ノ屠場設置ヲ必要トスル場合ハ當該地方ニ於ケル肉食供給ノ關係其他狀況詳

本年三月三十日代秘甲第四二號ヲ以テ屠場ノ新設若ハ繼續許可ヲ爲サントスル場合ニハ一應御内議可有之旨依命及通牒置候處右ハ勿論屠場法ノ施行後ニハ其義ニ及ハサル筋ニ有之候得共爲念此段及通牒候也

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

●屠場法施行後ノ屠場新設出願ニ關スル件

明治三十九年七月四日  
秘甲第九七號

屠場法施行後屠場ノ新設出願スルモノアル場合ニハ大都會ノ市ヲ除クノ外通常一郡一市ニ一箇所以上ヲ許可セサルコト〔及屠場法施行規則第十一條規定ノ檢印ハ畜種ニ應シ少ナクモ左ノ各部ニ押捺スルコト〕ニ御取計相成度依命此段及通牒候也

(左記ハ消滅ニ付略ス)

(衛)

具ノ上本省ノ指揮ヲ受ケラレ候様致度申添候

●屠場新設ニ關スル件

大正七年九月二十三日  
衛宮第七九號

宮崎縣知事照會 大正七年九月十八日  
警第一五一九號

本縣南那珂郡ハ縣ノ南端ニ位シ東西七里南北十一里面積五十四里ニシテ東ハ海ニ面シ西北ハ山嶽重疊交通不便ノ土地ニ有之候同郡内ニハ郡ノ西北ニ瀕セル吾田村ニ既設ノ屠場一ヶ所ヲ有スルモ同村ヨリ南端福島村ハ陸路八里ニシテ同村ニ接續セル北方大東、東城、都井、高木ノ五ヶ村ヨリ之等ノ各村ニ於ケル獸肉需用供給上屠場増設スルノ必要有之候處今同郡福島村々屠場設置申請候ニ付許可ノ見込ニ有之候然ルニ屠場新設ニ就テハ明治三十九年七月四日秘甲第七九號御通牒ノ次第モ有之候ニ付貴官ノ御意見御回示相煩度候

衛生局長回答 大正七年九月二十三日  
衛宮第七九號

標記ノ件ニ關シ本月十八日付警第一五一九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ既設屠場ノ維持上差支無之且溢設ノ端ヲ啓クノ虞

ナキ御見込ナルニ於テハ御許可相成可然ト存候

### ●特種屠場ノ設置許可ニ關スル件

大正十一年六月十六日  
衛保第二二八號

鹿兒島縣知事照會 大正十一年六月三日  
衛發第一六六八號

屠場法施行後屠場ノ新設ヲ出願スル者アル場合ニ於ケル取扱方ニ關シテハ明治三十九年七月内務省祕甲第七九號通牒ノ次第モ有之候處本縣ニ於ケル熊毛大島郡ノ如キハ各數個ノ島嶼ヲ以テ一部ヲ形成セルヲ以テ交通關係極メテ不便且ツ道路險惡ニシテ車馬ノ便ナク隣村ノ往來モ容易ナラサル狀況ニ有之候殊ニ大島郡ノ如キハ文化ノ程度一層低ク殺伐ノ氣風尙去ラス加フルニ好シテ肉食ヲナシ爲ニ例年約壹萬頭ニ及フ積羊豚ノ自家用屠殺隨所ニ行ハル、結果殘忍性ヲ增長セシムルノ傾向有之哉ニモ被存風教及衛生上詢ニ遺憾ニ存候就テハ向後自家用ト雖モ可成一定ノ場所ニ於テ營業者ヲシテ屠殺セシムルハ最モ有意義ニ被存候ニ付明治三十九年六月内務省令第十七號屠場ノ構造設備標準ノ末項ニ準シ前記通牒ノ制限ニ據ラ

ス各離島ニ限リ濫設ニ互ラサル範圍ニ於テ特種屠場ヲ許可致度目下處理上差迫リタル儀モ有之候ニ付至急何分ノ御意見承知致度及照會候也

衛生局長回答 大正十一年六月十六日  
衛保第二二八號

標記ノ件ニ關シ衛發第一六六八號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ濫設ニ陥リ衛生上支障ヲ生スル虞ナキ御見込ニ於テハ新設御許可相成可然ト存候

### ●學校校舍内ニ屠場設置ノ件

大正十四年十一月十四日  
富衛第七一號

(廳府縣長官宛)  
衛生局長通牒

標記ノ件ニ關シ富山縣知事ニ對シ別紙ノ通回答致候條爲念及通牒候也  
富山縣知事照會 大正十四年十月十四日  
衛四四九七號  
學校校舍内ニ屠場設置ノ件  
明治三十九年内務省令第十七號屠場構造設備標準ニ依レハ社寺、學校、病院公園又ハ水道、水源ヨリ二町以内ノ地ニハ屠

〔衛〕

場ヲ設置スルヲ得サレ旨規程有之候處農學校又ハ畜産學校等ニシテ獸畜屠殺又ハ獸肉加工實習ノ爲メ學校ニ屠場ヲ設置スルヲモ許サ、ル義ニ有之候哉至急貴官ノ御意見承知致度此段及照會候也  
衛生局長回答 大正十四年十一月十四日  
富衛第七一號

### ●屠畜検査心得

大正二年五月十四日  
内務省訓令第十三號

學校校舍内ニ屠場設置ノ件

標記ノ件ニ關シ十月十四日衛第四四九七號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ屠場法ノ所謂屠場ニ非スト思料セラレ從テ御來示ノ規定ハ之ニ對シ當然ニ適用セラルヘキモノニ無之ト被存

沿軍 大正一〇年七月内務省訓令第一〇號、一二年三月第五號 改正

廳府縣 東京府 ヲ除ク

屠畜検査心得左ノ通定ム

第一條 生體検査ハ左記各號ニ據リ之ヲ行フヘシ  
(一) 検査ハ屠殺ノ當日之ヲ行フヘシ

第五類 保健 第五章 屠場

〔衛〕

(二) 牛馬ノ検査ハ保定設備アル場所ニ於テ之ヲ行フヘシ

(三) 獸畜ハ清潔ニシ草鞋、不必要ナル繩索等ヲ去リ正シク繋留セシムヘシ

(四) 獸畜ノ體重ヲ場内設備ノ秤量器ニ依リ量定スヘシ

(五) 検査員ハ先ツ望診ヲ行ヒ更ニ角根又ハ耳根ニ於テ驗温シ而シテ眼、鼻、口腔ヲ開檢シ獸畜ノ一方ノ側面ニ於テ頸部、軀幹、前肢ヲ觸診シ後方ニ廻リ生殖器、後肢ヲ檢シ而シテ他方ノ側面ニ於テモ同一方法ヲ行ヒ若シ異狀ヲ認ムル症狀ニ依リ精密ナル診斷法ヲ行フヘシ

(六) 前號ノ検査ヲ了シタルトキハ其ノ結果ニ依リ屠場法施行規則第九條第一項及第十條ニ照シテ處分スヘシ

(七) 屠殺ノ許可ヲ與ヘタルトキハ内臓ト屠肉トノ合符ヲ交附スヘシ

第二條 屠殺後ノ検査ハ左記各號ニ據リ之ヲ行フヘシ

(一) 検査員ハ検査ノ際必ス二箇以上ノ肉刀ヲ携帶シ病畜又ハ病的變性物ニ接觸シタル肉刀ハ直チニ消毒スヘシ

(二) 検査員ハ左ノ順序ニ依リ獸體ヲ檢スヘシ

血液



第五類 保健 第五章 屠場

頭、舌、咽喉、頰及其ノ附近ノ諸腺  
肺臟、肺臟根淋巴腺、縱膈膜  
心臟、心囊(必ス兩心室ヲ動脈ニ沿フテ切開スヘシ)  
橫膈膜  
肝臟、肝門及其ノ附近ノ淋巴腺  
胃、腸、腸間膜淋巴腺網膜  
脾臟  
腎臟、其ノ附近ノ淋巴腺及膀胱  
辜丸、陰莖、卵巢、子宮、膈及外陰  
屠肉

- (三) 獸種ノ異ナルニ從ヒ特ニ左ノ方法ニ依リ検査ヲ行フヘシ
  - (イ) 牛ニアリテハ内外咬筋特ニ外咬筋ヲ下顎ト併行シテ切斷シ肝臟ハ輸尿管及スピゲル葉ヲ橫斷シ又腎臟ハ脂肪ヲ成ルヘク分離シ子宮ハ切開スヘシ
  - (ロ) 犢ニアリテハ臍及關節ヲ檢スヘシ
  - (ハ) 馬ニアリテハ頭ヲ縱斷シテ鼻中隔ヲ切除シ鼻中隔、鼻腔並其ノ粘膜炎ヲ檢スヘシ
  - (ニ) 豚ニアリテハ腹筋、横膈膜、頰、心臟、舌、咽喉、

ラサルモノトス

法定獸疫(但シ牛ノ傳染性流産及馬、羊ノ疥癬ヲ除ク)

膿毒症、敗血症  
尿毒症  
強直症  
高度ノ黄疸  
高度ノ水腫  
腫瘍(筋、骨、淋巴腺ニ多數發生セルトキ)  
旋毛蟲病

(七) 結核病(人體ニ有害ノ虞アルモノ)  
一條ニ依リ處置スヘシ

第三條 屠場法施行規則第九條ニ規定ノ烙印ハ別記雛形第一號ニ據ルヘシ

第四條 屠場法施行規則第十一條ニ規定ノ烙印ハ別記雛形第二號ニ據ルヘシ但シ支那、西伯利亞ヨリ輸入スル牛ニ付テハ別記雛形第三號ニ據ルヘシ  
前項ノ烙印ハ獸種ニ應シ少ナクモ左ノ各部ニ押捺スヘシ  
牛、馬(屠肉) 頰側、肩、胸内外部

第五類 保健 第五章 屠場

- (ホ) 羊ニアリテハ、肝臟、肺臟、心臟ヲ切斷シ又頭蓋ヲ開キテ檢スヘシ
- (四) 検査員ハ前二號ノ検査ヲ行フニ當リ必要アルトキハ肉、臟器等ヲ截切シテ精檢スヘシ但必要ノ程度ヲ超ヘサル様注意スヘシ  
検査ニ依リ異狀ヲ發見シ必要ヲ認メタルトキハ進ンテ機宜ノ検査ヲ行フヘシ
- (五) 獸體ノ局部食用ニ供スヘカラサルモノ左ノ如シ  
化膿性又ハ壞疽性皮膚炎アル部分  
外傷ノ部分  
結締組織、腱、臟器ノ炎症アル部分  
著シキ畸形ノ部分  
炎性産物ニヨリ汚染シタル部分  
腫瘍ノ部分  
石灰變性ノ部分  
放線菌腫、葡萄黴腫ノ部分  
疾病ノ爲メ筋肉又ハ臟器ノ萎縮セル部分  
寄生蟲及寄生蟲ヲ分離シ能ハサル部分
- (六) 左記ノ諸症ニ罹レル獸體ハ其ノ全部食用ニ供スヘカ

〔畜〕

背、前、中(腎臟ノ部位)、後ノ内外部  
前後肢、又外後側、腹、内外部  
頭、舌、尾

(内臟) 心臟、肺臟、肝臟、胃

頰、肩、胸、内外部、前後、肢上下内外側

背、内外部(腎臟ノ部位)、頭、舌

但シ犢ニシテ剥皮セサル場合ハ捺印スヘキ部分ニ於テ適宜ニ剥皮シ捺印スルコト

羊、山羊、頸、肩、背内外部(腎臟ノ部位)

腹、内外部、前後肢、内外部、頭

頰、肩、背、内外部、腹、内外部

豚 頭、肩、背、内外部、腹、内外部

前後肢上、下内外側、頭

第五條 食用ニ供スヘカラストシテ廢棄ヲ命シタルモノハ之ヲ細斷シテ一時間以上攝氏百度以上ノ熱ヲ加ヘ又ハ獸疫豫防法ニ定ムル消毒藥若クハ粗製強酸類ヲ以テ消毒ヲ行ハシムヘシ

食用ニ供スヘカラスト認メタルモノト雖モ角蹄、皮膚(牛ノ傳染性流産及馬、羊ノ疥癬以外)ハ化學工業用ニ脂肪(ノ法定獸疫ニ罹リタルモノヲ除ク)ハ化學工業用ニ脂肪ハ攝氏百度以上ノ熱ヲ加ヘ融解シタル後工業用ニ使用セシ

ムルコトヲ得

本條第一項ノ處置及第二項脂肪ノ融解ハ必ス屠場内ニ於テ之ヲ爲サシムヘシ

第六條 検査員ハ前條ノ處置ヲ終ル迄退場スヘカラス

第六條ノ二 屠場法施行規則第七條ノ二第九條第一項及第十條ノ消毒方法ハ左ノ各號ニ據リ之ヲ施行セシムヘシ

一 居室ニハ「クレゾール」水（「クレゾール」石鹼液）、又

ハ防疫用石炭酸水（防疫用石炭酸三分、普通「消毒」ヲ撒布浸潤セシメ一時間以上ヲ經過シタル後常水ヲ以テ十分ニ之ヲ洗滌スルコト

二 繋留所、生體検査所、通路其ノ他ノ場所ニハ昇永水（昇永一分、普通食）、「煨製石灰、石灰乳（煨製石灰一分、常水九分）」

「クロール」石灰又ハ「クロール」石灰水（「クロール」石灰五分、常水九分）ノ多量ヲ撒布スルコト但シ昇永水ヲ撒布シタル場合ハ一時間以上ヲ經過シタル後硫化「カリウム」水（硫化「カリウム」二）ヲ以テ其ノ部ヲ洗滌スルコト

「クロール」石灰又ハ「クロール」石灰水（「クロール」石灰五分、常水九分）ノ多量ヲ撒布スルコト但シ昇永水ヲ撒布シタル場合ハ一時間以上ヲ經過シタル後硫化「カリウム」水（硫化「カリウム」二）ヲ以テ其ノ部ヲ洗滌スルコト

三 業務上使用スル物件ハ攝氏百度以上ノ濕熱ニ一時間以上燻レシムルコト

前項ノ方法ニ據リ難キ場合ハ「クレゾール」水（「クレゾール」石鹼液三分）、防疫用石炭酸水（防疫用石炭酸五分、常水四十七分）、又ハ昇永水（昇永一分、普通食）ヲ盛りタル水槽中ニ投入シ十分ニ浸潤セシメタル後濕湯及石鹼ヲ以テ洗滌スルコト

四 生皮ハ「クレゾール」水（「クレゾール」石鹼液）防疫用石炭酸水（防疫用石炭酸三分、普通食）、「昇永水（昇永一分、普通食）」又ハ「フォルマリン」水（「フォルマリン」一分、常水三十分）ヲ以テ濕シタル布片又ハ刷毛ニテ反覆擦拭シタル後成ルヘク懸垂シテ日光ニ曝露スルコト

五 内臓、血液、角、蹄、骨ハ散逸ヲ防キ一定ノ場所ニ收集シ内臓及骨ハ之ヲ適當ノ大サニ切斷シ熱テ攝氏百度以上ニ於テ一時間以上煮沸スルコト

六 胃腸内容物ハ一定ノ場所ニ收集シ煨製石灰、石灰乳

（煨製石灰一分、）、「クロール」石灰又ハ「クロール」常水九分

石灰水（「クロール」石灰五分）ノ多量ヲ加ヘ十分攪拌スルコト

七 屠殺解體ニ從事シタル者ノ手足ハ昇永水（昇永一分、普通食）、「クレゾール」水（「クレゾール」石鹼液）又ハ防疫用石炭酸水（防疫用石炭酸三分、普通食）ヲ用キ刷毛ニテ擦拭シ更ニ濕湯及石鹼ヲ用キテ洗滌スルコト

第七條

検査員ハ左記各號ニ注意シ嚴重ニ監督スヘシ

（一）慘酷ナル方法ニテ獸畜ヲ屠殺セサルヲ旨トシ其ノ頭骨堅キモノハ銃殺其ノ他適宜ノ方法ニ依ラシムルコト

（二）汚物汚水ヲ場内ニ停滯セシメサルコト

（三）屠肉、内臓等ノ運搬用器ハ常ニ清潔ニシ運搬ノ途中塵埃等ニ依ル汚染ヲ防キ且汚水ヲ漏洩セシメサルコト

（四）屠肉ノ洗滌、屠場ノ清潔ニ要スル熱湯及冷水ノ供給ヲ充分ナラシムルコト

（五）血液ハ成ルヘク受血器ニ採リ必ス毎日場外ニ搬出セシムヘシ若シ場内又ハ其ノ附近ニ於テ之ニ加工スル場合

印 烙 號 一 第



（臂部用）  
徑二寸四分

第八條 検査員ハ帳簿ヲ備ヘ屠殺ノ禁止又ハ食用ニ供スヘカラサルモノノ處分ニ關シ其ノ理由ヲ詳記シ又病的變性物ハ適宜之ヲ保存スヘシ

附 則  
本令ハ大正二年六月十五日ヨリ之ヲ施行ス  
（別記雛形）



(角又ハ前蹄用)  
徑 八 分



橫徑二寸  
縱徑二寸

印檢號二第

●切迫屠殺並自家用屠殺ニ關スル件

大正十四年四月十六日  
衛生局第二四六號

熊本縣知事照會 大正十四年三月四日  
衛保第二一八六號

標記之件ニ關シ左記事項疑義有之候條何分ノ御指示相成度此段及照會候也

- 一、屠場法施行規則第三條第二項中急性鼓脹性トアルハ狹義的ニ牛ノ同症ノミト解釋スヘキモノナルヤ或ハ馬ノ急性風氣症ヲモ右ニ準シ適用可然モノナルヤ
- 二、大正十一年六月一日內務省靜衛第四二號ヲ以テ通牒有之候自家用屠殺ノ件第二項「數名又ハ數十名共同出資シテ犢羊豚ヲ買入レ若クハ飼育シ出資者ノ自家用ノ目的ヲ以テ屠殺解體シ出資額ノ多寡ニ應シ屠肉ヲ分配食用ニ供スル……以下略」ニ關シ若自家ノ生産飼育セルモノヲ屠殺解體シ出資額ニ應スル分配ノ意味ヲ含マスシテ厚意的ニ該屠肉ヲ他ノ數名ニ分與シ或ハ又自家ニ婚儀其ノ他多數ノ者ヲ招待シ獎勵ノ目的ヲ以テ屠殺解體スル場合ハ自家

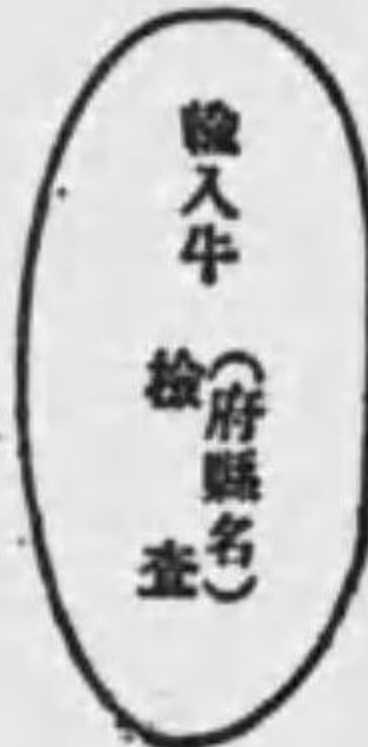
第五類 保健 第五章 屠場



徑 二 寸



橫 二 寸  
縱 五 分



橫徑一寸二分  
縱徑 二 寸

印檢號三第

用屠殺ト看做シ差支ナキモノナルヤ

衛生局長回答 大正十四年四月十六日  
衛保第二四六號

客月四日附衛第二一八六號ヲ以テ御照會相成候標記ノ件了承右之内第一號ハ牛ノ急性鼓脹症ノミヲ指稱シ第二號ハ御意見之通自家用屠殺ト解シ可然儀ト存候條御了知相成度

●自家用屠殺ニ關スル件

大正十一年六月一日  
內務省靜衛第四二號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

標記ノ件ニ關シ靜岡縣照會ニ對シ別紙ノ通回答致置候條爲念此段通牒候也

靜岡縣知事照會 大正十一年四月十九日  
衛保第二〇五五號

獸肉販賣者、旅店、飲食店又ハ料理店ニ非ラスシテ自家用ノ爲犢、羊豚ヲ屠殺解體スル場合ニ關シ左記ノ件疑義有之候條何分ノ御指示相成度此段及照會候也  
一、學校會社又ハ青年會等ノ會合ニ際シ犢羊豚ヲ團體員ニ於テ屠殺解體シ食用ニ供スル場合ハ屠場法施行規則第三條

第一號ノ自家用屠殺ト看做シ差支ヘナキヤ  
 二、數名又ハ數十名共同出資シテ犢羊豚ヲ買入レ若クハ飼育シ出資者自家用ノ目的ヲ以テ屠殺解體シ出資額ノ多寡ニ應ジ屠肉ヲ分配食用ニ供スル場合ニ前號同様自家用ト見做シ差支ヘナキヤ  
 三、會社工場等ニ於テ多數職工ヲ寄宿セシムル場合（寄宿料ヲ徵スルト否トヲ問ハス）犢羊豚ヲ屠殺解體食用ニ供スルモ自家用ト看做シ差支ヘナキヤ  
 衛生局長回答 大正十一年六月一日  
 內務省靜衛第四二號  
 大正十一年四月十九日衛第二〇五五號ヲ以テ御照會ノ件ハ屠場法施行規則第三條第一號ニ規定セル自家用屠殺ト見做スヘキモノニ非スト思料セラレ候條右御承知相成度

認メ難キ旨諭示シタル處同人等ハ其諭示ヲ背セス該豚ヲ屠殺シ其肉ヲ出資ノ額ニ應ジ分配シ自家食用ニ供シタル事實有之事件ハ屠場法第三條違反トシテ檢舉有罪意見ヲ附シ一件記録ハ所轄檢事ニ送致候處「罪トナラス」トシテ不起訴處分決定ノ旨通知有之候尤モ本件送致當初警察署長ヨリ衛生局長通牒ノ次第ヲ所轄檢事ニ通知シ斷罪ノ參考ニ供シタルモ本件事案ハ共同出資シテ自家用ノ目的ニテ屠殺解體シタルモノニシテ屠場法施行規則第三條第一號ノ自家用屠殺ト看做可然從而本事業ハ罪トナラトス處分決定有之候尙ホ本件ニ關シテハ別紙ノ通宮崎地方裁判所檢事正ヨリ通知ノ次第モ有之將來取締上齟齬ヲ來シ支障不尠相當考究ヲ要スル問題ト思料候ニ付テハ今後ノ取締ニ付キ何分ノ御指示相成度此段及照會候也

別紙

宮崎地方裁判所 大正十三年十一月一日  
 所轄檢事正通牒 宮崎地方裁判所檢事局乙第六〇六四號

宮崎縣知事照會 大正十三年十一月十四日  
 警收第一〇八八九號  
 首題ノ件ニ關シテハ大正十一年六月一日內務省靜衛第四二號御通牒ノ次第モ有之右趣旨ニ基キ取締助行中ノ所本年七月管內高岡町須崎重一外八名連署ノ上自家用トシテ豚一頭屠殺致度旨届出ニ接シ所轄警察署長ハ同通牒ノ趣旨ヲ示達シ之レヲ

數名共同出資シテ豚等ヲ買入レ屠場外ニ於テ屠殺解體シ出資ニ應ジテ肉ヲ分配シ自家ノ食用ニ供スルカ如キ自家用ト解スヘク從テ違法行爲ニアラスト認メ候條御了知相成度爲念此段申進候也

衛生局長回答 大正十四年四月二十日  
 一三衛保第五七一號

客年十一月十四日附警收第一〇八八號ヲ以テ御照會相成候條標記ノ件了承現行法令ニ對スル本省ノ解釋ハ前通牒ノ通ニ有之偶々司法官憲力之ト異ナル解釋ヲ採ルコトアルハ現在ノ制度上止ムヲ得サル儀ト存候條御了知相成度

陸軍ニ於テ行フ屠畜ハ屠場法ノ適用外ト認ムヘキヤ否ニ付  
 照覆ノ件

大正十一年十二月十四日  
 梨衛第四〇號

山梨縣知事照會 大正十一年十月十三日  
 衛發第三二三號  
 屠場法施行規則第三條第一項ニ關シ左記事項ハ自家用屠畜ト看做シ差支ナキ様被認候モ聊カ疑義相生何分ノ御指示相成度候條此段及照會候也

- 左記
- 一 陸軍ニ於テ兵食ニ供スル爲犢羊豚ヲ管内又ハ附近屠場ニ於テ屠殺解體スル場合
  - 一 陸軍ニ於テ野外演習營ノ際兵食ニ供スル爲犢羊豚ハ勿

論成牛ヲ屠殺解體スル場合

衛生局長回答 大正十一年十二月十四日  
 梨衛第四〇號

標記ノ件ニ關シ十月十三日付衛發第三二三號ヲ以テ御照會ノ趣了承屠場法ハ陸軍ノ行フ屠畜ニ付テハ適用ノ限リニ無之義ト御了知相成度  
 追テ屠場法施行規則第三條ノ自家用屠殺ハ犢羊豚ニ限ラレ牛馬ハ之ヲ含マス又屠場ニ於テ屠殺スルモノハ自家用屠殺ニ無之義ト御了知相成度本件御照會ノ内容ニ徵スルニ自家用屠殺ノ範圍等ヲ誤解シ居ラルルカ如ク被認候ニ付爲念申添候也

屠殺獸畜ニ關スル疑義ノ件

大正三年二月六日  
 衛廣第二二號

廣島縣知事照會 大正三年一月二十八日  
 衛第六五三號  
 近來本縣下罐詰製造業者中罐詰ト爲シ牛肉ノ名稱ヲ附シ販賣スルノ目的ヲ以テ臺北縣ノ檢印ヲ押捺セル水牛肉ヲ輸入スルモノ有之候處右水牛ハ屠場法第一條第二項ノ牛中ニ包含スル

義ト心得可然哉尙若シ牛、馬、羊中ニ同一種族ノ獸畜ヲ包含セサルモノトセハ之等ノ獸畜ハ屠場ニ於テ屠殺スヘカラサルモノト心得可然哉何分ノ義至急御回報相煩度

衛生局長回答 大正三年二月六日 衛廣第二二號

本件ニ關シ客月二十八日付衛第六五三號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ後段意見ノ通ト被存候條御承相成度候

岡山縣知事照會 大正六年五月十四日 衛第四九三九號

明治三十九年四月法律第三二號第一條第二項中本法ニ於テ獸畜ト稱スルハ牛羊豚及馬ヲ謂フトアリ本項ニハ水牛、山羊、驢騾ハ包含セサルモノト認ムルモ同年七月內務省秘甲第七九號中山羊ハ羊ノ中ニ含ムカ如ク解セラレ候然ラハ水牛、驢騾ノ如キモ牛馬ニ包含セラルル義ナルカ驢馬屠殺ニ關シ何出ノ向モ有之疑義ヲ生シ居候條貴局ノ御意見承知致度及照會候也 衛生局長回答 大正六年五月二十四日 衛岡第一六八號

本件ニ關シ本月十四日衛第四九三九號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ前段御意見ノ通ト存候

### 支那山東等ヨリノ輸入獸類屠殺検査ニ關スル件

大正九年一月十九日 內務省農衛第一號

(神奈川縣 兵庫縣 長崎縣 大阪府) 福岡縣各知事宛衛生局長通牒

右ニ付農商務次官ヨリ別紙寫ノ通照會有之候ニ付相當御措置相成度

農商務次官照會 大正九年一月九日 農商務省第二七四號

肉價騰貴ニ伴ヒ支那山東牛ノ輸入益々増加ノ狀況ニ有之而シテ之カ検査ニ關シテハ特ニ検査所ニ隣接セル屠場ニ於テ屠殺スルモノニ付検査期間ヲ一週間ニ短縮シ得ル様可成便宜ノ取計ヲ認メ居候處近來輸入牛ニ頻々トシテ獸疫發生シ殊ニ牛疫ニ感染シタルモノノ輸入ヲ見タルカ如キハ洵ニ遺憾ニシテ若シ此ノ牛疫ニシテ一度内地ニ浸入センカ再ヒ往年ノ如キ大慘害ヲ畜牛界ニ及ホスヤモ測リ知ルヘカラス由來支那内地ニ流行スル牛疫ニ往々定型的症候ヲ缺クカ爲メニ屠殺解體後初メテ特異ノ變狀ヲ發見シテ牛疫ト知ル例尠ナカラス故ニ病毒ノ

散莖ヲ防止セムトセハ一面屠畜検査ノ正確ヲ期セサルヘカラス即チ牛疫ニ付キ比較的經驗ニ富ム検査官ヲシテ常ニ隣接屠場ニ於ケル屠殺検査ニ干與セシムルハ防疫上最緊要ノ措置ナリト認候條隣接屠場ニ於テ輸入牛ノ屠殺ヲ行フ地方ノ輸入獸類検査官ヲシテ屠殺取締ニ關スル職員ヲ兼ホシムル様可然御取計相成度此段及照會候也

內務次官回答 大正九年一月十九日 內務省農衛第一號

本月九日付農第二七四號御照會輸入獸類屠殺検査ニ關スル件ハ關係地方長官へ通牒致置候條右了知相成度

## 第六章 毒物、劇物

### ●毒物劇物營業取締規則

明治四十五年五月十日 內務省令第五號

毒物劇物取締規則左ノ通定ム

第一條 毒物劇物營業取締規則

第一條 本令ニ於テ毒物劇物ト稱スルハ醫藥以外ノ用ニ供セシムル目的ヲ以テ販賣スル毒性又ハ劇性ノ物品ニシテ別ニ指定シタルモノヲ謂フ

明治二十二年三月法律第十號藥品營業並藥品取扱規則第三十五條ニ依リ定メラレタル毒藥劇藥ノ品目ニ該當スル物品ニシテ前項ノ指定ヲ受ケサルモノハ醫藥用品(同法第二十六條但書及第二十七條但書ノ場合ヲ含ム)ノ外之ヲ貯藏、陳列、販賣又ハ讓與スルコトヲ得ス

第二條 毒劇物營業ヲ爲サムトスル者ハ地方長官(東京府ハ警視總監

以下之)ノ許可ヲ受クヘシ

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

藥劑師、藥種商又ハ製藥者毒劇物營業ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ニ届出ヘシ

第三條 未成年者、瘋癲白痴者其ノ他毒劇物ノ取扱ヲ爲スニ堪ヘスト認ムヘキ者及法人ハ其ノ取扱ヲ爲サシムル爲メ地方長官ノ許可ヲ得タル營業管理人ヲ置クニ非サレハ毒劇物營業ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 毒劇物ハ堅牢ナル容器又ハ被包ニ容レ之ヲ密閉シ其ノ容器又ハ被包ニ醫藥用外ノ四字及其ノ品名並毒物ニハ毒物ノ二字劇物ニハ劇物ノ二字ヲ明記スヘシ

前項ノ文字ハ其ノ品名ヲ除ク外毒物ニ付テハ赤地ニ白色、劇物ニ付テハ白地ニ赤色ヲ以テ記載スヘシ

第五條 毒物ハ他ノ物品ト區別シ貯藏、陳列スヘシ劇物ニ付テ亦同シ

毒物ヲ貯藏、陳列スル場所ニハ鎖鑰ヲ施シ其ノ外部ニ醫藥用外毒物ノ六字ヲ明記スヘシ

第六條 毒劇物ヲ取扱フニハ專用ノ器具ヲ備ヘ毒物又ハ劇物ノ文字ヲ其ノ器具ニ明記スヘシ

第七條 毒劇物營業者毒劇物ヲ交付スルニハ其ノ容器又ハ被包ニ其ノ營業所、氏名、法人ニ在リテハ其ノ名稱及第四條所定ノ文字ヲ明記スヘシ但毒劇物營業者ニ交付スル場合

ハ此ノ限ニ在ラス

飲食物容器ハ之ヲ前項ノ容器ニ充用スルコトヲ得ス

第八條 毒劇物營業者ハ業務上、學術上又ハ技藝上必要アリト認ムル者ヨリ左ノ各號ノ一ニ依リ其ノ從事スル業務學術若ハ技藝ヲ證明シ且ツ品名、數量、使用ノ目的、年月日、住所、氏名、法人ニ在リテハ其ノ名稱及職業ヲ記シ捺印シタル證書ヲ提出スルニ非サレハ之ヲ販賣譲與スルコトヲ得ス

一 毒劇物營業者知人ノ證明

二 官公署又ハ學校ノ證明其ノ他證據トナルヘキ官公文書毒劇物營業者自己ノ知人ニ毒劇物ヲ販賣譲與スル場合ニ付テハ前項ノ證明ヲ要セス

家事上必要ナル毒劇物ニシテ別ニ指定スルモノニ付テハ前二項ノ規定ヲ適用セス

前項ノ毒劇物ハ品名、數量、年月日、住所、氏名、法人ニ在リテハ其ノ名稱ヲ記シ捺印シタル證書ヲ提出スルニ非サレハ之ヲ販賣譲與スルコトヲ得ス

第一項及第四項ノ證書ハ其ノ日附ヨリ十箇年間之ヲ保存スヘシ

第九條 毒劇物營業者ハ毒劇物ノ販賣譲與ヲ受ケムトスル

〔補〕

者前條ノ要件ヲ具備スルモ十四歳未満ノ者又ハ不安心ト認ムヘキ者ニハ之ヲ交付スルコトヲ得ス

第十條 毒劇物營業者官公署、官公立ノ學校及製造所等ニ對シ毒劇物ヲ販賣譲與スル場合ニハ第八條ノ手續ヲ要セス毒劇物營業者ノ間ニ於テ販賣譲與スル場合ニハ第八條ノ證書ヲ要セス

第十一條 卸賣用ノ毒劇物ニ付テハ其ノ容器又ハ被包ニ品名ヲ記シ若ハ錯誤ヲ來ササル文字又ハ記號ヲ使用スル限リ第四條ノ容器又ハ被包ノ記載ニ關スル規定ヲ適用セス前項ノ毒物ヲ貯藏スル場所ニ付テハ第五條第二項ノ規定ヲ適用セス

第十二條 地方長官ハ吏員ヲシテ毒劇物ヲ製造、貯藏造又ハ販賣スル場所ヲ巡視セシムルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ試験ノ用ニ供スル爲メ必要ナル分量ノ毒物劇物ヲ收去スルコトヲ得

前項ニ依リ收去ヲ執行スル場合ニ於テハ明治三十三年內務省令第十號第二條第三條ノ規定ヲ準用ス

第十四條 毒劇物營業者禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ又ハ其ノ業務ニ關シ不正ノ行爲アリタルトキハ地方長官ハ其ノ業務ヲ禁止シ又ハ停止スルコトヲ得

第五節 保健 第六章 毒物、劇物

地方長官ハ毒劇物營業者ノ業務ヲ禁止又ハ停止ヲ解クコトヲ得

第十五條 本令ノ執行ニ關シ當該吏員ノ尋問ニ對シ虛偽ノ答辯ヲ爲シ又ハ其ノ職務執行ヲ拒ミ若ハ之ヲ忌避シ又ハ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

毒劇物ノ容器又ハ被包ニ虛偽ノ記載ヲナシタル者若ハ第一條第二項第八條第一項又ハ第四項ニ違背シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十六條 第二條ノ許可ヲ受ケス若ハ其ノ届出ヲ爲サスシテ毒劇物營業ヲ爲シタル者、禁止又ハ停止中營業ヲ爲シタル者、第四條、第五條、第七條、第八條第五項、第九條ニ違背シタル者又ハ毒劇物ノ容器若ハ被包ニ誤記ヲ爲シタル者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 第六條ニ違背シタル者ハ料科ニ處ス

第十八條 毒劇物營業者カ未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本令ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但し其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 毒劇物營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本令ニ違背シタ

ルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルルコトヲ得ス

第二十條 法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ本令ニ違背シタル場合ニ於テハ本令ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス  
法人ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

附 則

本令ハ明治四十五年七月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本令發布ノ際現ニ毒物劇物ノ營業ヲ爲ス者ハ本令施行ノ日ヨリ三箇月以内ニ地方長官ニ届出テ毒物劇物ノ營業ヲ爲スルコトヲ得

●毒劇藥並毒劇物營業取締方ニ關スル件

大正十年七月十九日  
内務省發衛第二〇二號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

毒劇藥並毒物劇物ノ販賣授與ニ付テハ當該規則ニ依リ夫々御取締ノ義務ヲ存候得共當業者中往々無證書又ハ不備ナル證ニ依リ販賣授與スル向アルヤニ有之公衆力容易ニ購入シ得ル結果近來之ヲ惡用スル者モ不尠甚タ遺憾ノ次第ニ候條爾今一層當業者ニ對スル監督ヲ嚴密ニシ取締上遺漏ナキヲ期セラレ候様致度

●毒物劇物營業取締規則第一條  
ニ據ル毒物劇物品目指定

明治四十五年五月十日  
内務省令第六號

沿革 大正一〇年六月内務省令第一八號、一二年一月第一號 改正

明治四十五年五月内務省令第五號毒物劇物營業取締規則第一條ニ據ル毒物劇物左ノ通指定ス

本令ハ明治四十五年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

毒 物

チアン水素酸、チアンカリウム其ノ他チアン化合物並製劑但ベルリン藍色素、黄色血油鹽及赤色血油鹽ヲ除ク

〔毒〕

〔毒〕

燐、硫化燐並其ノ製劑

可溶性ウラニウム鹽類並ウラニウム含有ノ著色料

フルオール水素酸

砒素、其ノ化合物、製劑及砒素含有著色料

水銀化合物及水銀含有著色料但亞クロール汞、黄色コロイド汞、油酸汞、白降汞、雷汞、チアン酸水銀、朱ヲ除ク

劇 物

バリウム化合物但硫酸「バリウム」ヲ除ク

パラフェニールレンジアミン、其ノ鹽類並製劑

藤黄並其ノ製劑

銅化合物但雷銅ヲ除ク

硫化炭素

硫酸並其ノ含有物但十プロセント以下ヲ含有スルモノヲ除ク

カリウム

苛性カリ並其ノ製劑但五プロセント以下ヲ含有スルモノヲ除ク

苛性ナトリウム並其ノ製劑但五プロセント以上ヲ含有スルモノヲ除ク

苛性ナトリウム並其ノ製劑但五プロセント以下ヲ含有スルモノヲ除ク

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

カドミウム並其ノ化合物

ヨード並其ノ製劑

烟草製劑

ナトリウム

鉛化合物但炭酸鉛ヲ除ク

クロール酸カリウム並其ノ製劑但クロール酸鹽ヲ主トセル爆

發藥ヲ除ク

クローム酸

クローム酸カリウム、重クローマ酸カリウム並其ノ製劑

クレオソート

ブローム

ブローム水素酸

鹽酸並其ノ含有物但クロール水素十プロセント以下ヲ含有ス

ルモノヲ除ク

アニリン並其ノ化合物

亞クロール汞並其ノ製劑

亞鉛鹽類並其ノ製劑但炭酸亞鉛、酸化酸鉛、雷酸亞鉛ヲ除ク

アムモニア水但アンモニア十プロセント以下ヲ含有スルモノ

ヲ除ク

金鹽類但雷金ヲ除ク

銀鹽類但クロール銀、雷銀ヲ除ク  
メチールアルコホル(木精)

硝酸並其ノ含有物但十プロセント以下ヲ含有スルモノヲ除ク

硫酸並其ノ製劑

重碳酸カリウム

ヒドロキシシールアミン其ノ化合物並製劑

石炭酸並其ノ含有物但五プロセント以下ヲ含有スルモノヲ除ク

スルフオナール、其ノ誘導體並製劑

錫鹽類

發烟硫酸

ニトロベンツォール

粗製フオルマリン

クロロフオルム

クロールエチール

クロール階類類

ブロームエチール

アンチモニウム化合物並其ノ製劑但金硫黃ヲ除ク  
クロールピクリン並其ノ製劑

苗葉藤並其ノ製劑

●毒物劇物營業取締規則第八條  
第三項ノ毒物劇物品目

明治四十五年五月十日  
内務省令第七號

沿革 明治四十五年七月内務省令第一〇號 改正

明治四十五年五月内務省令第五號毒物劇物營業取締規則第八條第三項ノ毒物劇物ヲ左ノ通指定ス

本令ハ明治四十五年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

- 一、燐ヲ含有スル殺鼠用製劑
- 一、烟草製劑又ハ亞クロール朶ヲ有スル驅蟲用製劑
- 一、パラフェニールエニールアミンヲ含有スル染毛用製劑
- 一、消火器用ノ硫又ハ酸燐酸

●劇物含有染毛用製劑取締ニ關スル件

大正十二年五月二十九日  
分衛第三五號

〔衛〕

大分縣知事照會 大正十二年二月十六日  
衛第五九七號

管内理髮業者ニシテ豫メ劇物含有ノ染毛用製劑「パラフェニール」レンヂアミン」ヲ含有スル染毛用劑及其ノ他ノ劇物含有染毛用製劑ヲ含ム」ヲ買入レ置キ客ノ需メニ應シ頭髪ヲ染色シ一定ノ料金ヲ收受スルモノ有之候處明治四十五年五月内務省令第五號毒物劇物營業取締規則制定ノ趣旨ハ主トシテ公衆衛生上危害防止ニアリト思惟セラレ候就テハ叙上ノ行爲ハ該規則ニ抵觸セサルヤ前項ノ場合毒物劇物營業業者ニ於テ理髮業者ニ對シ「パラフェニール」レンヂアミン」含有染毛用製劑及其ノ他ノ劇物含有染毛用製劑ヲ販賣スルハ規則第八條第一項ニ規定ノ業務上必要ナルモノト認メテ差支ナキヤ  
毒物劇物營業業者ニ於テ理髮業者ニ對シ前記ノ場合「パラフェニール」レンヂアミン」含有染毛用製劑ヲ規則第八條第三項規定ノ家事上必要ナルモノト認メテ販賣差支ナキヤ  
以上ノ事項實際取締上疑義相生シ候條御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正十二年五月二十九日  
分衛第三五號

本件ニ關シ二月十六日衛第五九七號ヲ以テ御照會趣了承右ハ左記ノ通ニ有之候條御了知相成度

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

〔衛〕

一 理髮業者カ豫メ「パラフェニール」レンヂアミン」ヲ含有スル染毛用製劑又ハ其ノ他ノ劇物含有染毛用製劑ヲ買入レ置キ客ノ需メニ應シテ頭髪ヲ染毛シ一定ノ料金ヲ收受スル行爲ハ毒物劇物營業取締規則ニ抵觸スルモノト認メ難シ

二 前記ノ製劑ハ理髮業者ノ業務上必要ナル劇物ト認メ然ルヘキモ理髮業者ニ對シテハ「パラフェニール」レンヂアミン」以外ノ劇物ヲ含有スル製劑ヲ染毛用トシテ使用セシメサル様致度

三 理髮業者ニ對シ「パラフェニール」レンヂアミン」ヲ含有スル染毛用製劑ヲ同規則第八條第三項及第四項ノ規定ニ依リ販賣差支ナシ

●毒物劇物品目中「アニリン」化合物ハ劇物トシテ取扱ヲ要セサル件

大正十二年七月十八日  
衛北第九九號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

一四五



第五類 保健 第六章 毒物、劇物

毒物劇物品目中「アニリン」化合物ノ義ニ付北海道廳照會ニ對シ左記ノ通回答致置候  
 北海道廳長官照會 大正二年六月二十八日 警衛第四三〇〇號  
 明治四十五年內務省令第六號ヲ以テ發令相成候毒劇物營業取締規則第一條ニ據ル指定品目中「アニリン」其他ノ化合物ハ

「アニリン」直接ノ化合物(例ヘハ鹽酸「アニリン」ノ如キモノ)ヲ指定セルモノニシテ「アニリン」色素ノ如キ「アニリン」ノ誘導物ヲモ含ム儀ニハ無之ト存候ヘ共取締上左記色素類ハ劇物ノ取扱ヲナササルモ差支無之哉貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

左記

Auramine	オーラミン	別名 鼠粉
Aniline Grey	アニリン・グレイ	
Alizarin Blue	アリザリン・ブルーム	
Bismark Brown	ビスマルク・ブロン	別名 茶粉
Brilliant Scarlet	ブリリアント・スカレット	別名 新洋紅
Congo	コンゴ	別名 コンゴレット
Ceris Prima	ツェリス・プライム	別名 海老茶粉
Ceruleine	ツェルライン	

【續】

Coralline	コラルリン	別名 緋染粉
Chicago Blue	チカゴ・ブルーム	
Cotton Yellow	コットン・イエロー	
Dark Blue	ダーク・ブルーム	
Eosine	エオシン	別名 洋眞
Finest Scarlet	ファインスト・スカレット	別名 スカレット
Fine Blue	ファイン・ブルーム	別名 紺粉
Green Crystal	グリーン・クリスタル	別名 結晶青竹
Crystal Violet	クリスタル・バイオレット	別名 結晶紫
Methyl Violet	メチル・バイオレット	別名 紫粉
Magenata	マゼンター	別名 唐紅(マゼン)
Malachit Green	マラカイト・グリーン	別名 萌黃粉(青竹粉)
Navy Blue	ネヴィー・ブルーム	

【續】

Orange	オレンジ	別名 橙粉
Nair Blue	ナイル・ブルー	別名 藍粉
Peacock Blue	ピーコック・ブルー	別名 藍粉
Phlo Xine	フロクシン	別名 藍粉
Paratine Scarlet	パラチン・スカレット	
Paratine Black	パラチン・ブラック	
Grey Blueingy	グレイ・ブルイジー	

衛生局長回答 大正二年七月十八日  
 衛北第九九號ノ内  
 本件ニ關シ客月二十八日付醫衛第四三〇(一)號ヲ以テ御照會之  
 趣了承御例示ノ如キ「アニリン」色素ハ御見込之通劇物トシ  
 テ取扱ヲ要セサル義ト御承知相成度候

●鉛化合物ヲ(鉛丹ヲ少量ノア  
 ニリン色素フロキシナ配伍

ノモノ(鉛丹同様醫藥用外劇  
 物トシテ取締ノ件  
 大正五年十一月六日  
 衛滋一五〇號  
 滋賀縣知事照會 大正五年十月三十日  
 衛發第三二六號  
 近時市場ニ露カルル染料中洋朱ト稱ヘ鮮紅色重キ粉末ニシテ  
 一部水ニ溶解性ヲ有スル物有之候處分析ノ結果鉛丹ヲ少許ノ

アニリン色素フロキシナヲ以テ染色セルモノナルコト判明候  
 ニ付テハ鉛丹同様鉛化合物トシテ醫藥用外劇物ノ取締ヲ爲ス  
 ヘキモノナルヤニ思惟セラレ候ヘ共一應貴局ノ御意見承知致  
 度此段及照會候也

衛生局長回答 大正五年十一月六日  
 衛滋第一五〇號  
 本件ニ關シ客月三十日附衛第三二六號ヲ以テ御照會ノ趣了承  
 右ハ御見込ノ通り御取扱相成可然ト被存候

●鉛丹取締ニ關スル件

大正十三年五月三十一日  
 衛保第二四四號

長野縣知事 大正十三年五月一日  
 收第四七一二號  
 鉛丹ヲ毒物劇物營業者ニ非ラサル金物商ニ於テ塗料トシテ販  
 賣スルモノ有之右ハ當然毒物劇物營業者ニ非ラサレハ販賣不  
 相成儀ト認メラルモ之カ取締ニ關シ各府縣區々ニ渡ルヤニ  
 聞及右取締上支障ヲ感シ候條一應貴局ノ御意見承知致度此段  
 及照會候也  
 追テ本縣ニ於ケル取引先左記ノ通りニ有之御參考迄申添候

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

(取引先略)

衛生局長回答 大正十三年五月三十一日  
 衛保第二四四號  
 標記ノ件ニ關シ收第四七一二號本年五月一日付ヲ以テ御照會  
 ノ趣了承右ハ當然明治四十五年五月内務省令第五號毒物劇物  
 營業取締規則ニヨリ取締ル可キモノト存候

●毒、劇物營業許可ニ關スル件

明治四十五年五月  
 衛第四三三九號

本月十五日省令第五號ヲ以テ毒物、劇物營業取締規則公布セ  
 ラレ候處右規則第二條ニ依ル營業ノ許可ニ付テハ履歷ヲ考査  
 シ場合ニ依リテハ取扱上ノ試験ヲ行フ等藥品營業者ニ準シ相  
 當ノ智識經驗アルモノニ非サレハ許可不相成候様致度尙又規  
 則第三條ノ營業管理人ニ付テハ前同様御取扱相成度依命此段  
 及通牒候也

●毒物劇物營業許可ノ範圍ニ關ス

一四九

ル件

大正十三年五月二十六日  
内務省廣衛第四三號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

標記ノ件ニ關シ廣島縣知事ト左記ノ通り照覆致シ候條御承知  
相成度

廣島縣知事照會 大正十三年四月十六日  
衛第三〇九六號

大阪市居住ノ者ニシテ本縣下ニ在ル砒石鑛區ヲ買收シ大阪鑛  
務署ニ亞砒酸製造ヲ出願許可ヲ得テ鑛石ヲ採掘シ同所ニ於テ  
製造製品ハ全部大阪市ノ住所地ニ輸送シ販賣スルモノニ有之  
候右ハ本縣下ニ於テ製造スルモ直接之カ販賣ヲ爲ササルカ故  
ニ本縣ニ於テハ免許ヲ受クル必要ナシトノ説有之候又一説ニ  
ハ以假令本縣ニ於テ販賣セサルモ販賣ノ目的ヲ以テ製造スル  
上ハ本縣ノ許可ヲ得ヘキモノナリトノ説有之兩説何レニ依ル  
ヘキモノナルヤ貴局ノ御意見承知致度何分ノ御回答煩度候

(追書大阪鑛務署ヨリノ通牒略)

衛生局長回答 大正十三年五月二十六日  
内務省廣衛第四三號

大正十三年四月十六日衛第三〇九六號御照會標記ノ件ハ許可  
ヲ要スヘキモノト存候

●毒物劇物營業取締規則中疑義  
ノ件

大正七年八月十二日  
衛青第一六二號

青森縣知事照會 大正七年七月二十五日  
衛發第一一八號

毒物劇物營業取締規則中左記ノ點疑義相生シ候條貴局ノ御意  
見御回答相煩ハシ度候也

記

- 一、毒物劇物營業取締規則ニ依リ毒物劇物藥中ノ或ル一種藥  
品ニ限り製造販賣ヲ出願シタル場合ニ於テ之ヲ總括的ニ  
毒物劇物營業者トシテノ許可ヲ與フヘキモノナルヤ又其  
出願セシ藥品ニ限り何々製造販賣者トシテ許可スヘキ  
ヤ
- 二、明治四十五年五月三日衛第四三三九號衛生局長通牒ニ依  
レハ毒物劇物營業取締規則第二條ノ許可ニ就テハ履歷書

(衛)

大阪府知事照會 大正九年十一月六日  
衛第一一七一〇號

標記ノ件ニ關シ左記疑義相生シ候條至急何分ノ意見承知致度  
候

記

規則第一條ニ所謂「毒性又ハ劇性」ナル用語ハ之ヲ例示ト看  
做指定サレタル物品ハ必スシモ毒性又ハ劇性タルコトヲ要セ  
スト解シ支障ナキヤ假令ハ毒物劇物品目表ノ黃燐赤燐其ノ他  
ノ燐ヲ包含スト解スヘキカ然ラスシテ若毒劇性ヲ有スルコト  
ヲ前提トスト解スルナラハ右品目中ノ除外例(チアン化合物  
並製劑ヨリ「ベルリン」藍色素等ヲ除キタルカ如キ)ヲ設ケ  
タル理由トハ論理ノ一貫ヲ缺クヤニモ思料サル果シテ何レヲ  
是トスヘキヤ

衛生局長回答 大正九年十一月九日  
衛發第七二二號

標記ノ件ニ付十一月六日衛第一一七一〇號ヲ以テ御照會ノ趣  
了承規則列舉ノ毒劇物ハ毒劇性ヲ有スルモノニ有尙ホ御例  
示ノ燐ハ日本藥局方ノ燐同様黃燐ノミヲ指スモノト御了知相  
成度

ヲ考査シ取扱上ノ試験ヲ行フ等藥品營業者ニ準シ相當ノ  
智識經驗アルモノニアラサレハ許可不相成様云々有之右  
ハ毒物劇物ニ對シ一般智識ヲ要スルモノト解セラレ候  
處或ハ出願セシ藥品ノミニ對シテハ智識ヲ有スルモノニ  
テモ差支ヘナキヤ

衛生局長回答 大正七年八月十二日  
衛青第一六二號

本件ニ關シ客月二十五日付衛發第一一八號ヲ以テ御照會ノ趣  
了承右ハ左記ノ通り取扱相成度

記

- 一、毒物劇物中ノ或ル一種藥品ト雖モ毒物劇物營業取締規則  
ニ依リ販賣ヲ出願シタル場合ハ同規則第二條ニ依リ毒物  
劇物營業者トシテ許可ヲ與フルコト
- 二、前項營業ノ許可ハ毒物劇物ニ對シ一般智識ヲ要スルコ  
ト

●毒物劇物營業取締規則中疑義  
之件

大正九年十一月十九日  
衛發第七二二號

●スルフォナール含有殺鼠劑取扱方ノ件

大正二年三月五日  
衛丘第六七號

福岡縣知事照會 大正二年二月二十日  
衛收第一七二五號

「スルフォナール」含有ノ殺鼠劑取扱方ニ就キテハ明治四十五年六月大阪府廳ヨリ伺出ニ對シ御回答ノ次第モ有之候得共其後「スルフォナール」ハ家事用毒物劇物品目中ヨリ削除セラレ且亦劇物毒物品目ニモ單ニ「スルフォナール」並其誘導體トアルニ依リ「スルフォナール」ニ種々ナルモノヲ混シテ製シタル製劑ノ取扱ニ關シテハ明治四十三年五月熊本縣ヨリ伺出ニ對スル御指示ノ通り心得販賣セシムルモ差支ナキ儀ト心得可然乎一應御見込承知致度候也

衛生局長回答 大正二年三月五日  
衛丘第六七號ノ内

本件ニ關シ客月二十日付衛收第一七二五號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御見込ノ通御取扱相成可然ト被存候

●スルフォナール製劑ノ取扱ニ

關スル件

大正十二年二月一日  
衛醫第五一號

廣島縣知事知會 大正十二年一月九日  
衛第一四七號

明治四十三年五月衛熊第三二號ノ内御通牒並大正二年三月衛丘第六七號ノ内ヲ以テ福岡縣ニ對スル御回答ニ依リ「スルフォナール」ヲ賣藥部外品トシテ許可致居候處大正十年六月省令第十八號ヲ以テ「スルフォナール」其ノ誘導體並製劑ト改正相成タル結果一般劇物トシテ更ニ編束ヲ受クルコトト存候得共果シテ如何哉右ハ已ニ部外品トシテ許可シタル關係上之カ取扱方ニ付聊カ疑義相生シ候條何分ノ御回答相成度

衛生局長回答 大正十二年二月一日  
衛醫第五一號

標記ノ件ニ關シ一月九日付衛第一四七號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御意見ノ通ト存候

●小間物店雜貨店ニテ毒劇物營業出願ニ付照覆ノ件

大正三年一月三十日  
衛熊第一六號

熊本縣知事照會 大正三年一月二十七日  
衛第六〇號

小間物店雜貨店等ニ於テ毒劇物ノ一種若ハ數種(例之染毛劑又ハ殺鼠劑)ニ限リ該營業ヲ出願スルモノアリタル場合ハ一般毒劇物ノ智識經驗ナキヲ以テ明治四十五年五月衛第四三三九號同年七月衛阪第一七三號御通牒ノ次第モ有之候ニ付許可スヘカラサルモノトハ被存候ヘ共聊疑義相生シ候條貴官ノ御意見承知致度此段及照會候也  
追テ二三ノ府縣ニ於テハ許可ヲ與ヘタル例モ有之候條爲御參考申添候也

衛生局長回答 大正三年一月三十日  
衛熊第一六號

本件ニ關シ本月二十一日付衛第六〇號ヲ以テ照會ノ趣了承右ハ御意見ノ通リト被存候條御承知相成度

●毒物砒素含有蠅取紙ヲ毒物劇物營業取締規則ニヨリ販賣許否

ニ關スル件

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

大正五年七月二十五日  
四京第三〇二號

本件ニ關シ京都府知事ト別紙寫ノ通り照覆致候條御承知相成度

京都府知事照會 大正四年九月二十三日  
衛第九〇二九號

藥劑師ニシテ白砒石ヲ含有セル蠅取紙ノ醫藥用外毒物トシテ其取扱ノ下ニ之カ製造發賣方届出タル者有之候處右ハ毒物劇物營業取締規則ニ據リ其裏面ニ「毒物砒素含有」ナル文字ヲ記入ノ上販賣セシムルハ差支無之様被存候モ一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正四年十月二十七日  
衛第三〇二號

本件ニ關シ客月二十三日衛第九〇二號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ家事用トシテ一般ニ販賣スヘカラサルモ毒物劇物營業取締規則第八條第一項ニ依リ業務上必要ト認ムル者ニ限り適法ノ證明ヲ徴シ販賣讀與スルハ差支ナシト存候

● 蠅取ノ目的ヲ有スル毒劇物ノ賣下ヲ受クル者ノ業務者ノ意義ニ關スル件

大正五年八月二十四日  
衛秋第一三六號

秋田縣知事照會 大正五年八月十八日  
秋發衛第二六〇七號

客月二十五日付衛京第三〇二號ヲ以テ御通牒相成候礎素含有蠅取紙云々中業務上トアルハ蠅ノ驅除ヲ必要トスル業務假令菓子商、料理屋、飲食店等ヲ指サルルヤ若シ然リトセハ蠅取ノ目的ヲ達シ得ラルル毒劇物ハ業務上必要ト認メ該營業者ニ販賣差支ナキ義ト被存候得共一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正五年八月二十四日  
衛秋第一三六號

本月十八日衛第二六〇七號照會標記ノ件ハ御意見ノ通リト存候

● 殺鼠殺蠅虱殺ノ目的ヲ以テ亞

砒酸雄黃等ノ配合製劑ヲ醫藥用外毒物毒シテ販賣ノ件

大正五年七月二十二日  
廣第一八〇號

廣島縣知事照會 大正五年七月五日  
衛第三六二〇號

殺鼠、殺蠅、虱殺ノ目的ヲ以テ亞砒酸、雄黃等ヲ配合セシ製劑ヲ醫藥用外毒物トシテ製造販賣シタキ旨伺出タル者有之候處右ハ普通毒物トシテ販賣セシメ差支無之哉何分ノ儀御回答煩度候

衛生局長回答 大正五年七月二十二日  
廣第一八〇號

本件ニ關シ本月五日衛第三六二〇號ヲ以テ照會ノ趣了承虱殺ノ目的ニ供スルハ不必然殺鼠ニ付テハ目下研究中ニ有之殺蠅ニ關シテハ別途浦羅京都府知事トノ照覆ノ通ニ有之候條御承知相成度

● 果樹ノ害蟲驅除ニ毒藥使用ノ件

明治四十三年五月十七日  
衛第三九五五號

(北海道廳長官宛)  
衛生局長通牒

苹果樹園ノ害蟲驅除ノ爲メ毒藥青酸加里使用ノ件本日電報ヲ以テ及通牒置候處危險豫防上ノ施設ニ關シテハ充分御計畫ノ事ト被存候へ共尙御參考迄ニ別紙心付ノ事項及通知候條違算無之様御取計相成度此段及通牒候也

(別紙)

- 一 燻蒸用ノ容器ハ毒藥ト大書シ他ノ器物ト區別スルコト
- 一 青酸カリ及硫酸ノ取扱ハ最モ注意シ人夫ヲシテ運搬セシムルトキハ嚴重ニ包裝スルコト
- 一 青酸瓦斯發生ハ相當經驗アルモノヲシテ技術員指導ノ下ニ施行セシメ關係者以外ノモノヲシテ接近セシメサルコト
- 一 燻蒸時間中ハ當該吏員ヲシテ絶ヘス看守セシメ不時ノ出來事ニ注意セシムルコト
- 一 燻蒸ヲ終ヘ瓦斯ヲ排除スルトキハ風下相當區域内ニハ人畜ヲ接近セシメサルコト

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

(參考)

明治四十三年五月九日 衛生局長宛  
北海道廳長照會

- 一 燻蒸ヲ終リタル後瓦斯發生器ニ殘存スル液ハ之ヲ危險ナキ所ニ深キ穴ヲ掘リ其中ニ放棄シ容器ハ之ヲ清潔ニ洗濯セシムルコト
- 一 青酸瓦斯ハ一種ノ臭氣アルモノニ付荷クモ特種ノ臭氣ヲ感スル場合ハ避クルコト

(衛生局長ヨリ)  
北海道廳長官宛通牒

野鼠驅除ノ爲メ亞砒酸使用ノ件本日訓令相成候處該藥品ノ危險多キハ申ス迄モ無之全ク其危險ヲ豫防致候事ハ實ニ不容易ノ義ト被存候就テハ右ノ施設ニ關シテハ充分御計畫被成候事ト存候得共尙御參考迄ニ左ニ心付ノ事項及御通知候條糖々御講究ノ上違算無キ様御取計相成度此段及通牒候也

追テ右實施候上ハ其成績詳細御報告相成度添テ申進候

左記

- 一 亞砒酸ノ配置又ハ拾集ハ適當ナル監督ノ下ニ當該吏員ヲシテ人夫ニ同行セシムルコト
- 二 亞砒酸配置ノ方面及其危險ニ就テハ吏員ヲ各戸ニ派遣シ之ヲ指示訓諭セシムルコト
- 三 亞砒酸ニハ誤食ヲ防ク爲メ適宜唐辛ヲ混和スルコト
- 四 亞砒酸ノ配置ハ拾集上過ヲ生セサル様一定ノ場所ヲ定メ可成雨蓋ヲ爲スコト
- 五 亞砒酸ヲ圓子狀トシテ配置スルトキハ必ス容器ヲ用キ且番號ヲ付ケテ拾集ニ便ナラシムルコト
- 六 小形圓子狀ナルモノハ屢鼠ノ咬ヒ去リ其所在ヲ失フノ虞アルヲ以テ從來ベスト豫防上之ヲ使用セル際ニハ厚板ノ中央ヲ掘リ凹メ其中ニ糊様ノモノニ混和シ之ヲ詰メ込ミ置キタリ此方法ハ散逸ヲ防ク點ニ於テ大ニ效アルカ如シ
- 七 亞砒酸配置後ハ原野ニ斃死セシ動物ヲ漫ニ食セサル様嚴重ニ注意ヲ與フルコト
- 八 亞砒酸配置ノ區域ハ之ヲ標示スコト

●蔬菜栽培者害蟲驅除ノ爲メ毒物使用ニ關スル件

大正十三年一月二十四日  
衛生第一三九九號

大分縣知事照會 大正十三年十月十五日  
衛生第五六六三號

蔬菜栽培者害蟲驅除ノ爲メ砒酸鉛含有ノ毒物ヲ使用スル場合ニ於テ明治四十五年五月内務省令第五號毒物劇物營業取締規則第八條規定ノ業務上必要ナル藥物トシテ取扱可然モノト思料セラルルモ蔬菜類ノ害蟲驅除ニ對シテハ衛生上有害ナルヲ以テ之ヲ許可セサルヲ穩當ト被認候へ共一應貴局ノ御意見ヲ承知致シ度此段及照會候也

衛生局長回答 大正十三年十一月十四日  
衛生第一三九九號

標記ノ件客月十五日附衛第五六六二號ヲ以テ御照會有之候處右ハ御意見ノ通り當業者ヲシテ使用セシメサルヲ適當ト被認候

●毒物劇物販賣ニ關スル件

〔衛〕

大正七年二月二十八日  
衛生第一三三號

〔各地方長官宛〕  
衛生局長通牒

毒劇物營業ニ關スル和歌山縣ヨリノ照會ニ對シ別記ノ通回答致置候條爲念及通牒候也

和歌山縣知事照會 大正七年一月二十二日  
衛生第五三五號

毒劇物營業者カ重格魯酸加里液ニ硫酸ヲ加ヘタルモノヲ點燈及呼鈴ニ使用スル電池用トシテ製造販賣方差支ナキヤノ伺出ヲ爲スモノ有之右ハ職業上必要ナルモノト廣義ニ解釋シテ普通民家ニ販賣セシメ差支ナキ様思科候モ一應貴局ノ御意見承知致度此段及照會候也

衛生局長回答 大正七年二月二十八日  
衛生第一三三號

本件ニ關シ客月二十二日付衛第五三五號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御見込ノ通職業上必要ナルモノト認メ販賣セシメ差支無之ト被存候

●毒劇物營業取締規則中専用器具ノ件

第五類 保健 第六章 毒物、劇物

〔衛〕

長野縣知事照會 明治四十五年七月七日  
衛生第八七號

本年五月十日内務省令第五號毒物劇物營業取締規則第六條ニ專用器具ヲ備フヘキ旨規定有之候處右ハ毒劇物ノ變化混交又ハ危險等ヲ防遏セラルルノ趣旨ニ外ナラスト思科セラル果シテ然ラハ其ノ内秤量器ノ如キハ凡テ完全ナル被包其ノ他ノ容器ヲ納メテ使用セシムルニ於テハ同一ノ器具ヲ以テ毒劇藥ヲ秤量スルモ差支無之義ニ候哉差掛リタル儀モ有之候條至急何分ノ御回報相成度此段及照會候也

衛生局長回答 明治四十五年七月七日  
衛生第八七號

毒劇物専用器具ノ義ニ付客月二十八日付警發第二三九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ御意見ノ通り差支無之ト被存候條此段及回答候也

### 第七章 精神病

#### ●精神病患者監護法

明治三十三年三月十日  
法律第三十八號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル精神病患者監護法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

#### 精神病患者監護法

**第一條** 精神病患者ハ其ノ後見人配偶者四親等内ノ親族又ハ戶主ニ於テ之ヲ監護スルノ義務ヲ負フ但シ民法第九百八條ニ依リ後見人タルコトヲ得サル者ハ此ノ限ニ在ラス

監護義務者數人アル場合ニ於テ其ノ義務ヲ履行スヘキ者ノ順位ハ左ノ如シ

但シ監護義務者相互ノ同意ヲ以テ順位ヲ變更スルコトヲ得

第一 後見人  
第二 配偶者  
第三 親權ヲ行フ父又ハ母

#### 第四 戶主

第五 前各號ニ掲ケタル者ニ非サル四親等内ノ親族中ヨリ親族會ノ選任シタル者

第二條 監護義務者ニ非サレハ精神病患者ヲ監督スルコトヲ得ス

第三條 精神病患者ヲ監置セムトスルコトキハ行政廳ノ許可ヲ受ケテ但シ急迫ノ事情アルトキハ假リニ之ヲ監置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ二十四時間内ニ行政廳ニ届出ヘシ

前項假監置ノ期間ハ七日ヲ超ユルコトヲ得ス

行政廳ノ許可ヲ受ケテ監置シタル精神病患者ノ監置ヲ廢止シタル後三箇年内ニ更ニ之ヲ監置セムトスルコトキハ民法第九百二十二條ニ依リ禁治產者ヲ監置セムトスルコトキハ行政廳ニ届出ヘシ

第四條 精神病患者ノ監置ノ方法又ハ場所ヲ變更シタルトキハ二十四時間内ニ行政廳ニ届出ヘシ

第五條 監置シタル精神病患者治癒シ死亡シ若ハ行方不明ト爲リタルトキ又ハ其ノ監置ヲ廢止シタルトキハ七日内ニ行政廳ニ届出ヘシ

第六條 精神病患者ヲ監置スルノ必要アルモ監置スルノ必要アルモ監護義務者ナキ場合又ハ監護義務者其ノ義務ヲ履行ス

〔備〕

〔備〕

ルコト能ハサル事由アルトキハ精神病患者ノ住所地、住所地ナキトキ又ハ不明ナルトキハ其ノ所在地市區町村長ハ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ監護スヘシ

**第七條** 行政廳ハ精神病患者ノ監護ニ關シ必要ト認ムルトキハ監置ノ許可ヲ取消シ監置ノ廢止ヲ命シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ノ變更ヲ命スルコトヲ得

監置ノ許可ヲ取消サレ又ハ其ノ廢止ヲ命セラレタル者監置ヲ廢止セサルトキハ行政廳ハ直接ニ監置ヲ廢止スルコトヲ得

**第八條** 精神病患者監置ノ必要アルトキ又ハ監置不適當ト認ムルトキハ行政廳ハ第一條第二項ノ順位ニ拘ラス監護義務者ヲ指定シ之ヲ監置ヲ命スルコトヲ得但シ急迫ノ事情アルトキハ行政廳ハ假リニ其ノ精神病患者ヲ監置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第三條第二項ノ規定ヲ準用ス

市區町村長ニ於テ監護スル精神病患者ノ監護義務者ヲ發見シ又ハ監護義務者其ノ義務ヲ履行シ得ルニ至リタルトキ亦前項ニ同シ

本條ニ依リ精神病患者ノ監置ヲ命セラレタル監護義務者其ノ命ヲ履行セサルトキハ第六條ノ例ニ依リ市區町村長ニ於テ之ヲ監護スヘシ

本條ニ依リ監護義務者ノ監置シタル精神病患者ニ關シテハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其ノ監置ヲ廢止シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ヲ變更スルコトヲ得ス

**第九條** 私宅監置室、公私立精神病院及公私立病院ノ精神病室ハ行政廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

私宅監置室、公私立精神病院及公私立病院ノ精神病室ノ構造設備及管理方法ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

**第十條** 監置ニ要シタル費用ハ被監置者ノ負擔トシ被監置者ヨリ辨償ヲ得サルトキハ其ノ扶養義務者ノ負擔トス

市區町村長ニ於テ監置スル場合ニ於テ之ヲ爲要スル費用ノ支辨方法及其ノ追徴方法ハ行旅病人及行旅死亡人取扱法ノ規定ヲ準用ス

**第十一條** 行政廳ハ必要ト認ムルトキハ其ノ指定シタル醫師ヲシテ精神病患者ノ檢診ヲ爲サシメ又ハ官吏若ハ醫師ヲシテ精神病患者ニ關シ必要ナル尋問ヲ爲サシメ又ハ精神病患者在ル家宅病院其ノ他ノ場所ニ臨檢セシムルコトヲ得

**第十二條** 本法又ハ本法ニ基ツキテ發スル命令ノ執行ニ關シ行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十三條 本法又ハ本法ニ基ツキテ發スル命令ノ執行ニ關スル行政廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第十四條 官吏公吏又ハ行政廳ノ命ヲ受ケテ公務ヲ行フ醫師本法ノ執行ニ關シ不正ノ所爲ヲ爲シタル者ハ三年以下ノ〔重禁錮〕ニ處シ〔百圓以下ノ罰金ヲ附加〕ス

第十五條 官吏公吏又ハ行政廳ノ命ヲ受ケテ公務ヲ行フ醫師本法ノ執行ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ刑法〔第二百八十六條〕ノ例ニ照ラシテ處斷ス

第十六條 左ニ掲クル者ハ一年以下ノ〔重禁錮〕ニ處シ〔百圓以下ノ罰金ヲ附加〕ス

一 詐偽ノ所爲ヲ以テ行政廳ノ許可ヲ受ケ若ハ虛偽ノ届出ヲ爲シ精神病者ヲ監置シ又ハ拘束ノ程度ヲ加重シタル者

二 醫師精神病者ノ診斷書ニ虛偽ノ事實ヲ記載シ又ハ自ら診斷セシテ診斷書ヲ授與シタル者

前項第一號ノ場合ニ於テハ監置又ハ拘束ノ日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

第十七條 左ニ掲クル者ハ二月以下ノ〔重禁錮〕ニ處シ〔二十圓以下ノ罰金ヲ附加〕シ又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ監置又ハ拘束ノ日數十日ヲ過クル毎ニ一等ヲ加フ

一 許可ヲ受ケス又ハ届出ヲ爲サス若ハ命ヲ受ケスシテ精神病者トシテ人ヲ監置シタル者

二 禁治産ノ宣告又ハ監置ノ許可ヲ取消サレ又ハ監置ノ廢止ヲ命セラレ若ハ假監置ノ期間ヲ經過シタル後監置ヲ廢止セサル者

三 許可ヲ受ケ又ハ届出ヲ爲シ若ハ命ヲ受ケタル程度ヲ超エテ精神病者ヲ拘束シタル者

第十八條 左ニ掲クル者ハ一月以下ノ〔重禁錮〕ニ處シ〔十圓以下ノ罰金ヲ附加〕シ又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

一 精神病者ノ監置ニ關シ虛偽ノ事實ヲ記載シタル願届其ノ他ノ書類ヲ行政廳ニ提出シタル者

二 監置義務ヲ履行スヘキ順位ニ在ラサル者ニシテ許可ヲ受ケス又ハ命ニ依ルニ非スシテ監置ヲ廢止シ又ハ監置ノ方法若ハ場所ヲ變更シタル者

三 官吏又ハ行政廳ノ指定シタル醫師ノ臨檢若ハ檢診ヲ拒ミ又ハ其ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ答辯ヲ爲シタル者

第十九條 左ニ掲クル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

一 監置ノ方法若ハ場所ノ變更ヲ命セラレ其ノ命ヲ履行セサル者

〔舊〕

●精神病者監護法施行規則

明治三十三年六月二十八日 内務省令第三十五號

精神病者監護法施行規則左ノ通定ム

二 監護義務者精神病者ノ監置ヲ命セラレ其ノ命ヲ履行セサル者

三 第八條第四項及第九條第一項ニ違背シタル者

第二十條 第四條及第五條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

第二十一條 本法ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ヨリ精神病者ヲ監置シタル者ニシテ仍之ヲ繼續セムトスルトキハ本法施行ノ日ヨリ二箇月内ニ第三條ノ許可ヲ受ケ又ハ届出ヲ爲スヘシ

第三條ノ許可ヲ受ケス届出ヲ爲サスシテ前項ノ期間ヲ經過シタル後監置ヲ廢止セサル者ハ第十七條ノ例ニ照シテ處斷ス

本法中市區町村長ニ屬スル職務ハ市制區制町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ市區町村長ニ準スヘキ者之ヲ行フ

第二十二條 外國人タル精神病者ノ監護ニ關シ別段ノ規定ヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十三條 人事訴訟手續法第五十條又ハ第六十條ニ依リ裁判所ニ於テ精神病者ノ監護ニ付必要ナル處分ヲ命シタル場合ニ關シテハ本法ノ規定ヲ適用ス

精神病者監護法施行規則

第一條 精神病者監護法第一條第二項但書ニ依リ監護義務者ノ順位ヲ變更シタルトキハ關係者ハ七日内ニ連署ヲ以テ警察官署ヲ經テ地方長官ニ届出ヘシ

第二條 精神病者監護法第一條第二項第五號ニ依リ監護義務者ヲ選任シタルトキハ親族會ハ七日内ニ警察官署ヲ經テ地方長官ニ届出スヘシ

第三條 精神病者監護法第三條ニ依リ精神病者ヲ私宅病院其ノ他ノ場所ニ監置セムトスルトキハ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ警察官署ヲ經テ地方長官ニ願出又ハ届出ヘシ

第三條第一項但書ニ依リ精神病者ヲ監置シタルトキハ監護義務者ハ警察官署ニ届出ヘシ此ノ場合ニ於テハ醫師ノ診斷書ヲ添フルコトヲ要セス

第四條 精神病者ヲ監置セムトスル場合ニ於テ地方長官ノ許可ヲ得



可ヲ受クルノ暇ナシト認ムルトキハ監護義務者ハ醫師ノ診  
斷書ヲ添ヘ警察官署ニ願出ヘシ  
前項ノ場合ニ於テハ監護義務者ハ三十日以内ニ前條ニ依リ更  
ニ地方長官ニ願出ヘシ

第五條 前二條ノ願出又ハ届出ヲ爲ス場合ニ於テハ監置ノ方  
法及場所ヲ記シ若シ私宅監置室ヲ設クルトキハ其ノ構造設  
備ヲ記シタル書類ヲ添付スヘシ

第六條 本則第四條第一項ニ依リ監置シタル精神病者ニ關シ  
三十日以内ニ地方長官ニ監置ノ願出ヲ爲ササルトキ又ハ地方  
長官ニ於テ願出ニ對シ不許可ノ處分ヲ爲シタルトキハ警察  
官署ノ與ヘタル許可ハ取消サレタルモノトス

第十條 精神病者監護法第四條又ハ第五條ノ届出ハ監護義務  
者ニ於テ醫師ノ診斷書又ハ檢案書ヲ地添ヘ警察官署ヲ經テ  
方長官ニ之ヲ爲スヘシ但シ行方不明ノ場合ニ於テハ醫師ノ  
診斷書又ハ檢案書ヲ添フルコトヲ要セス

本則第四條第一項ニ依リ監置シタル精神病者ニ關シテハ前  
項ノ届出ハ警察官署ニ之ヲ爲スヘシ  
第八條 私宅監置室ハ精神病者ノ資産又ハ扶養義務者扶養ノ程  
度ニ應シ相當ノ構造設備ヲ爲シ及之ヲ管理スルコトヲ要  
ス

第九條 府縣立ヲ除ク外公私立精神病院及公私立病院ノ精神  
病室ヲ設置セムトスルトキハ其ノ構造及管理ニ關スル事項  
ヲ具シ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ其ノ之ヲ變更セムトスル  
トキ亦同シ

第十條 精神病者監護法第七條及第八條行政廳ノ職權ハ地方  
長官之ヲ行フ但シ急迫ノ事情アルトキハ警察官署ニ於テ之  
ヲ行ヒ直ニ地方長官ノ指揮ヲ請フヘシ

第十一條 精神病者監護法第九條第一項行政廳ノ職權ハ地方  
長官之ヲ行フ但シ私宅監置室ニ關シテハ警察官署之ヲ行  
フ

第十二條 精神病者監護法第十一條行政廳ノ職權ハ內務大臣  
地方長官又ハ警察官署之ヲ行フ

第十三條 本則第九條ニ違背シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處  
ス

第十四條 本則第一條及第二條ニ違背シタル者ハ一圓九十五  
錢以下ノ科料ニ處ス

第十五條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ  
行フ

●精神病者監護ニ關スル件

明治三十三年六月三十日  
勅令第二百八十二號

朕精神病者監護法第六條及第八條第三項ニ依レル監護ニ關ス  
ル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 精神病者監護法第六條ニ依リ市區町村長ニ於テ精神  
病者ヲ監置スヘキ場合ニ於テハ地方長官ノ認可ヲ受クヘ  
シ

前項地方長官ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ市區町村長ハ警  
察官署ノ同意ヲ經テ三十日以内精神病者ヲ監置スルコトヲ得  
但シ急迫ノ事情アルトキハ警察官署ノ同意ヲ經サルモ七日  
以内假ニ之ヲ監置スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ警察官署ニ  
通知スヘシ

第二條 精神病者監護法第六條及第八條第三項ニ該當スル精  
神病者アルトキハ地方長官ハ警察官署ヲシテ之ヲ市區町村  
長ニ引渡サシムヘシ但シ急迫ノ事情アルトキハ警察官署ハ  
假ニ之ヲ市區町村長ニ引渡シ直ニ地方長官ノ指揮ヲ請フヘ  
シ

〔衛〕

〔警〕

第三條 市區町村長ニ於テ監置シタル精神病者治療シ死亡シ  
又ハ行方不明ト爲リタルトキハ第一條第一項及第二條ニ依  
リテ監置シタルモノニ付テハ地方長官ニ報告シ第一條第二  
項ニ依リテ監置シタル者及第二條但書ニ依リテ假ニ監置シタ  
ル者ニ付テハ警察官署ニ通知スヘシ

市區町村長ニ於テ監置シタル精神病者ノ監置ヲ廢止シ又ハ  
監置ノ方法若ハ場所ヲ變更セムトスルトキハ第一條第一項  
ニ依リテ監置シタル者ニ付テハ地方長官ニ報告シ第一條第  
二項ニ依リテ監置シタル者ニ付テハ警察官署ニ通知シ第二  
條ニ依リテ監置シタル者ニ付テハ地方長官ノ認可ヲ受ケ其  
ノ但書ニ依リテ假ニ監置シタル者ニ付テハ警察官署ノ同意  
ヲ經ヘシ但監置ノ方法又ハ場所ノ變更ヲ要スル急迫ノ事情  
アルトキハ假ニ之ヲ變更シ直ニ認可ヲ受ケ又ハ同意ヲ經ヘ  
シ

第四條 市區町村長ハ其ノ監護スル精神病者ノ監置ヲ適當ナ  
キ公私ノ施設又ハ私人ニ委託スルコトヲ得

第五條 東京府ニ在リテハ地方長官ノ職務ハ警視總監之ヲ行  
フ

附 則

本令ハ明治三十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●精神病院法

大正八年三月二十七日  
法第二十五號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル精神病院法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

精神病院法

第一條 主務大臣ハ北海道又ハ府縣ニ對シ精神病院ノ設置ヲ命スルコトヲ得

第二條 地方長官ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル精神病者ヲ前條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ニ入院セシムルコトヲ得

一 精神病者監護法ニ依リ市區町村長ノ監護スヘキ者

二 罪犯ヲシタル者ニシテ司法官廳特ニ危險ノ虞アリト認ムルモノ

三 療養ノ途ナキ者

四 前各號ニ非ケル者ノ外地方長官特ニ入院ヲ必要ト認ムル者

前項ノ規定ニ依リ精神病者ヲ入院セシムルニハ命令ノ定ムル所ニ依リ醫師ノ診アルコトヲ要ス

第三條 國庫ハ勅令ノ定ムル所ニ從ヒ第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ノ經費ニ對シ六分ノ一乃至二分ノ一ヲ補助ス

第四條 第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ノ長ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ入院者ニ對シ監護上必要ナル處置ヲ行フコトヲ得

第五條 地方長官ハ入院者ヨリ入院費ノ全部又ハ一部ヲ徵收スルコトヲ得地方長官入院者ヨリ徵收スルコトヲ得スト認ムルトキハ其ノ扶養義務者ヨリ之ヲ徵收スルコトヲ得前項ノ費用ノ徵收方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 道府縣ニ於テ設置スル精神病院ニシテ地方長官ノ具申ニ依リ主務大臣ニ於テ適當ト認ムルモノハ第一條ノ規定ニ依リ設置スルモノト看做ス

第七條 主務大臣必要ト認ムルトキハ期間ヲ指定シ適當ト認ムル公私立精神病院ヲ其ノ承諾ヲ得テ第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ニ代用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ第二條乃至第五條ノ規定ヲ準用ス

第八條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ執行ニ關シ行政官廳ノ處分ニ不悞アル者 訴願スルコトヲ得行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラ、タリトスル者ハ行政裁判所

ニ出訴スルコトヲ得

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ各條ニ付之ヲ定ム

●精神病院法ノ一部施行期日ノ件

大正八年八月二日  
勅令第三百六十五號

朕精神病院法ノ一部施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

精神病院法第七條ノ規定ハ大正八年八月十日ヨリ之ヲ施行シ同法第一條乃至第五條及第八條ノ規定ハ同法第七條ノ規定ノ施行ニ必要ナル範圍内ニ於テ同日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年十月二十二日  
勅令第四百九十號

朕精神病院法ノ一部施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
精神病院法第六條ノ規定ハ大正九年十月二十五日ヨリ之ヲ施行シ同法第一條乃至第五條及第八條ノ規定ハ同法第六條ノ規定ニ依リ之ヲ公布セシム

第五類 保健 第七章 精神病

定ノ施行ニ必要ナル範圍内ニ於テ同日ヨリ之ヲ施行ス、

大正十二年六月三十日  
勅令第三百二十四號

朕精神病院法ノ一部施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

精神病院法中未タ施行セラレサル部分ハ大正十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●精神病院法施行令

大正十二年六月三十日  
勅令第三百二十五號

朕大正八年勅令第三百六十六號精神病院法ニ依リ代用精神病院ノ國庫補助及入院費ノ徵收方法ニ關スル件改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

精神病院法施行令

第一條 國庫ハ精神病院法第一條ノ規定ニ依リ設置スル精神病院ノ經費ニ對シ左ノ區別ニ依リ補助ス  
一 創設費及擴張費並之ニ伴フ初度調辦費  
支出額二分ノ一

第五類 保健 第七章 精神病

二 其ノ他ノ諸費 支出額ノ六分ノ一

前項ノ支出額トハ事業ニ伴フ収入又ハ寄附金ノ額ヲ控除シタル支出精算額ヲ謂フ

第二條 國庫ハ北海道地方費又ハ府縣カ精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ對シ支出シタル入院費ノ精算額ノ六分ノ一ヲ北海道地方費又ハ府縣ニ補助ス

前項ノ精算額トハ北海道地方費又ハ府縣ノ受クル入院費又ハ之ニ充ツヘキ寄附金ノ額ヲ控除シタルモノヲ謂フ

第三條 精神病院法第五條第一項又ハ第七條ノ規定ニ依リ徵收スル入院費ニシテ指定期間内ニ納付ナキモノニ付テハ國稅滯納處分ノ例ニ依リ之ヲ徵收スルコトヲ得

第四條 入院費ノ徵收ハ必要アルトキハ納付義務者ノ居住地又ハ財産所在地ノ地方長官ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第五條 精神病者入院中死亡シタルトキハ其ノ遺留財産ヲ以テ入院費ノ全部又ハ一部ニ充ツルコトヲ得

附 則

本令ハ大正十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●精神病院法施行規則

大正十二年六月三十日 內務省令第十七號

大正八年內務省第七號精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ關スル件及大正九年內務省令第三十三號精神病院法第六條ノ規定ニ依ル精神病院ニ關スル件左ノ通改正ス

精神病院法施行規則

第一條 精神病院法第一條ノ規定ニ依リ精神病院ノ設置ヲ命セラレタル北海道又ハ府縣ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ精神病院ノ位置設計及其ノ收容人員ヲ定ムヘシ其ノ變更ニ付亦同シ

第二條 市町村長又ハ町村制ヲ施行セサル地ニアリテハ町村長ニ準スヘキ者ハ精神病者監護法ノ規定ニ依リ監護スヘキ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ申請スルコトヲ得

第三條 精神病者ノ監護義務者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ精神病者ノ入院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第四條 精神病院法第二條第二項ノ規定ニ依ル診斷ハ地方長官ノ指定シタル醫師ヲシテ之ヲ爲サシムヘシ

第五條 地方長官ハ入院者在院ノ必要ナシト認ムルトキハ速ニ退院セシムヘシ此ノ場合ニ於テハ豫メ當該精神病院ノ長ノ意見ヲ徵ルスコトヲ得

患者ノ保護治療ヲ施スト共ニ公安ノ保持ニ任セシメントスル義ニ付宜ク其ノ意ノ在ル所ヲ諒シ遺憾ナキヲ期セラレ度尙ホ今般同法ノ一部施行相成候ニ付テハ之カ實施ニ當リ特ニ左記ノ事項御留意相成度依命此段及通牒候也

〔左記〕

一、精神病者ノ入院及退院ハ自由並公安ノ保持ニ至大ノ關係アルヲ以テ周到ノ注意ヲ拂ヒ若シ其ノ入院退院ニ付醫師ノ診斷意見一致セサルカ如キ場合ニ於テハ更ニ專門醫ノ診斷ヲ待ツ等慎重且ツ迅速ニ處理スヘキコト

二、患者ヲ入院セシムルニ付テハ症狀ノ輕重疾病ノ性質扶養關係ノ完否其他各種ノ狀況ヲ參酌シテ保護治療ノ急ヲ要スルモノヨリ之ヲ撰定スル様留意スルコト

三、精神病院法第二條第三項ノ規定ニ依ル診斷ニ從事セシム可キ醫師ハ左ノ資格ヲ有スルモノノ中ヨリ指定スルコト

(イ) 警察醫其他道府縣ノ職員ニシテ精神病ニ關スル學識經驗アルモノ

(ロ) 代用精神病院ノ長及醫員

(ハ) 其他精神病ニ關スル學識經驗アルモノ

四、同法第四條ノ規定ニ基キ精神病院ノ長ノ入院者ニ對シ

第六條 入院者ノ監護義務者ハ入院者ノ退院ヲ地方長官ニ出願スルコトヲ得

第七條 精神病院法第四條ノ規定ニ依リ精神病院ノ長ノ入院者ニ對シテ行フヘキ監護上必要ナル處置ニ付テハ內務大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第八條 精神病院法第二條及本令ノ規定ニ依ル地方長官ノ職務ハ東京府ニ在リテハ東京府知事及警視總監之ヲ行フ

第九條 本令第二條乃至第八條ノ規定ハ精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ關シ之ヲ準用ス

附 附

本令ハ大正十二年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

●精神病院法施行ニ關シ注意事項ノ件

大正八年八月十三日 內務省發給第一七九號

(各地方長官宛) 內務次官通牒

精神病院法制定ノ趣旨ハ別冊精神病院法制定理由ニ記述スル如ク精神病者ノ悲惨ナル實情ニ鑑ミ公共團體ノ施設ニ依リテ

第五類 保健 第七章 精神病

テ行フヘキ監護上必要ナル處置ハ醫療ノ範圍ヲ超ヘ患  
者ノ身體ニ拘束ヲ加フル方法ナルヲ以テ之ヲ施行スル  
ニ付テハ左ノ諸點ニ留意スルコト  
(イ) 放火、逃走、煽動其他公安上危害ヲ生スル虞アル  
患者ニ限ルコト  
(ロ) 社會又ハ患者ニ對シ不快ナル印象ヲ與フヘキ用語  
例ヘハ監置又ハ監置室若クハ躁狂室等ノ用語ハ之ヲ  
避クルコト

(ハ) 監護ノ爲メ患者ヲ七日以上保護室(從來ノ躁狂室)  
ニ入室セシムルニハ地方長官ノ許可ヲ受ケシムルコ  
ト  
保護室ノ入室ハ總テ速ニ地方長官ニ報告セシメ常  
ニ其狀態ヲ明瞭ナラシムルコト

(ニ) 患者ニ對シ強制具又ハ繩紐ノ類ハ萬止ヲ得サル場  
合ノ外其使用ヲ避クルコト  
看護人ノ良否ハ精神病者ノ取扱上最も重要ノ關係ヲ  
有シ從來精神病院ニ開スル社會ノ批難ハ看護人ノ患者  
取扱ニ關連スルモノ多キノ實情ナルニ依リ代用精神病  
院ノ經營ニ付テハ常ニ看護人ノ品性及技術ノ養成向上  
ニ留意シ殊ニ保護室ノ看護ニ從事セシム可キ看護人ニ

五、  
看護人ノ良否ハ精神病者ノ取扱上最も重要ノ關係ヲ  
有シ從來精神病院ニ開スル社會ノ批難ハ看護人ノ患者  
取扱ニ關連スルモノ多キノ實情ナルニ依リ代用精神病  
院ノ經營ニ付テハ常ニ看護人ノ品性及技術ノ養成向上  
ニ留意シ殊ニ保護室ノ看護ニ從事セシム可キ看護人ニ

(別冊)

制定理由

- 六、精神病院法制定ノ理由ハ可憐ナル精神病者ニ對シ保護  
治療ヲ行フコトヲ主タル目的トスル義ニツキ道府縣ニ  
於テハ宜ク此趣旨ヲ體シ患者ノ看護ニ任スルト共ニ入  
院費徵收ノ如キニ付テモ此趣旨ニ則リ可成無科トシ之  
ヲ徵收スル場合ニ於テモ其取扱ヲ寬大ニシ苛酷ニ互ラ  
サル様留意スルコト
- 七、代用精神病院患者ノ入院決定入院費ノ徵收其他諸般  
ノ法律關係ハ代用ノ範圍ニ於テハ地方長官ニ於テ之ヲ  
行フヘキモノナルヲ以テ其經費モ府縣ノ負擔ナルコト  
但シ經理ノ方法トシテ代用セシメタル精神病院ノ經營  
者ト協議シ患者一人當リノ經費ヲ定メ之ヲ交付スルカ  
如キハ素ヨリ差支ナキコト
- 八、大正八年內務省令第七號第七條ノ規定ニ基キ東京府知  
事及警視總監ニ於テ行フヘキ職務ノ執行方法ニ付テハ  
處理規定ヲ定メテ內務大臣ノ承認ヲ受クヘキコト之ヲ  
變更セントスルトキ亦同シ

我カ國ニ於ケル精神病者ノ數ハ明治四十四年二萬五千七百

九十三人ナリシカ其ノ後年々増加シ大正五年末ニ於テハ四  
萬四千二百二十五人ニ達シ著シキ増加ノ傾向アリ昨年保健  
衛生調査會ニ於テ全國ニ對シ一定ノ標準ヲ示シ警察調査ヲ  
行ヒタル結果ニ依ルニ六萬四千九百三十四人ニ及ヘリ、歐  
米諸國ニ於テハ調査精確ナル爲精神病者ノ數ハ國民三百人  
乃至五百人ニ一人ノ割合ニシテ之ニ依リ我國ヲ律スルトキ  
ハ我國人口六千萬中十二萬人乃至廿萬人ニ達スル割合ナリ  
而シテ社會ノ複雜ヲ加フルニ從ヒ益々精神病者増加ノ傾向  
アルコト疑ヲ容レサル所ナルヲ以テ歐米諸國ニ於テハ之カ  
保護取締ニ關スル施設ノ設備ニ努メ英佛諸國ニ於テハ精神  
病者ノ三分ノ一ハ官公立精神病院ニ收容シ北米合衆國ニ於  
テハ悉ク精神病院ニ收容スルノ狀況ナルト共ニ病院ノ設備  
內容亦頗ル見ルヘキモノナルニモ拘ラス我國ニ於テハ國家  
及公共團體共ニ保護治療ニ關スル何等ノ設備ナキ狀況ナ  
リ、而シテ精神病者ニ對スル唯一ノ法制タル精神病者監護  
法ハ單ニ公安上ヨリ監置患者ノ取締ヲ主トシ不法ノ監置ヲ  
排除スルト共ニ監護義務者及市區町村長等ニ對シ精神病者  
ヲ監置スルノ權能ヲ能フト雖之ヲ監護スヘキ場所ノ設備等  
ニ就テハ何等ノ規定ナク從テ今ヤ精神病者監護法制定以來  
二十年ヲ經過セムトスルニ係ラス東京巢鴨病院ヲ除クノ外

多クハ私立病院ニシテ從テ六萬有餘ノ精神病者中精神病院  
其ノ他ノ設備ニ收容セララル患者ノ數ハ僅々四千名餘ノ少  
數ニ過キス故ニ監置ヲ要スル患者ト雖約四千五百名ハ最モ  
不完全ナル私宅監置ニ附セラレ而モ其ノ多クハ中産階級以  
下ニ屬スルカ故ニ檢狀往々見ルニ忍ヒサルモノアリ  
又監置ヲ要セサル患者ニ付テモ其ノ多クハ適當ナル保護治  
療ヲ受ケル能ハサルヲ以テ時ニ恐ルヘキ犯罪ヲ犯シ年々百  
五十名ヲ下ラサル殺人放火等ノ危險ナル精神病者ハ多ク此  
等處置ヲ受ケサル者ノ内ヨリ生ス、而モ刑法ハ不論罪トシ  
テ處罰セサルヲ以テ此等危險ナル患者ト雖凡テ不完全ナル  
監置ニ附セララルノ狀況ナリ  
斯クノ如キハ精神病者ノ保護治療ハ勿論公安上不備渺カラ  
サル所ニシテ畢竟之カ收容ノ場所ヲ私人ノ經營ニ委シテ顧  
ミサル結果ニシテ決シテ適當ノ處置ト謂フヘカラス、故ニ  
國家ト地方ト相協力シテ之カ施設ヲ爲スノ必要ナルハ今ヤ  
多言ヲ要セサル所ナリトス、故ニ保護治療上ヨリ療養ノ途  
ナキ精神病者其ノ他監護上必要ナル精神病者ヲ收容セシム  
ル爲道府縣ニ對シ精神病院設置ノ義務ヲ命シ國家ハ之ニ補  
助ヲ與ヘ其ノ負擔ヲ輕カラシムルト共ニ一面危險性甚シキ  
犯罪性精神病者其ノ他地方立精神病院ニ於テ監護困難ナル  
精神病者等ヲ收容セシムル爲國立精神病院ヲ設置シ之カ監

第五類 保健 第七章 精神病

護ヲナスノ必要アリ然リト雖國家及地方財政ノ關係ハ俄ニ  
國立及道府縣立精神病院ノ普及完備ヲ期スル能ハサルノ事  
情アルヲ以テ道府縣立精神病院ノ設置ヲ見ルニ至ラサル府  
縣ニ於テハ既存ノ公私立精神病院ヲ利用シ之ヲ保護獎勵セ  
シムルコト必要ナリトス依テ精神病院ノ設置、維持、管理  
等ニ關シ之カ諸般ノ關係ヲ統一シタル立法ノ必要ヲ認ムル  
所以ナリ

第一條 道府縣立精神病院ノ設置

本條精神病者監護ノ實況ニ鑑ミ府縣立精神病院ノ設立ヲ必  
要トスルヲ以テ主務大臣ニ於テ北海道及府縣ニ對シ之カ設  
置ヲ命シ得ルコトヲ規定シタルモノナリ而シテ府縣ニ於テ  
設置シタル精神病院ノ維持管理ニ要スル費用ハ府縣ノ負擔  
ニ屬スルコト言フ俟タス

第二條 道府縣立精神病院ニ入院セシムヘキ者ノ範圍及入院  
セシムヘキ條件

一、本件ハ精神病者監護法ニ對シ特別規定タルノ關係ヲ有  
シ地方長官ハ本條ノ規定ニ依リ其ノ職權ヲ以テ精神病  
者ヲ入院セシムルヲ得ルモノトス而シテ入院後ノ監護  
關係モ亦全然精神病者監護法ノ規定ニ依ラズシテ本法  
ノ規定ニ依ルヘキモノトス

二、本條第一項ニヨリ入院セシムヘキ者ノ範圍

1、精神病者監護法ニ依リ市區町村長ノ監護ヘキ者  
精神病者監護法第六條ニ基キ監護スルノ必要アル  
モ監護義務者ナキ場合又ハ監護義務者其ノ義務ヲ  
履行スルコト能ハサル事由アルトキニ於テ市區町  
村長ノ監護スヘキ者並同法第八條第三項ニ基キ精  
神病者ノ監護ヲ命セラレタル監護義務者其ノ命令  
ヲ履行セサルトキニ於テ市區町村長ノ監護スヘキ  
精神病者之レナリ、而シテ本條ニ所謂市區町村長  
トアルハ市制町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ市  
區町村長ニ準スヘキモノトス

2、罪ヲ犯シタル者ニシテ司法官廳特ニ危險ノ虞アリ  
ト認ムル者

第一、罪ヲ犯シタルモ精神病者ノ故ヲ以テ刑法第

三十九條ニヨリ處罰スヘカラサル者

第二、罪ヲ犯シタル後ニ於テ精神病者トナリタル  
者ノ内司法官廳ニ於テ特ニ危險ノ虞アリト認メ  
タル者之ナリ

勿論司法官廳ニ於テ危險ト認ムルモ地方長官ニ  
於テ設備ノ收容力其ノ他ノ關係上入院セシメザ

ルモ可ナルナリ但シ此ノ場合ニ於テ監置ノ必要  
アル者ハ精神病者監護法ノ規定ニ依リ監置スヘ  
キモノトス

3、療養ノ途ナキ者

監置ヲ要セサル患者ニシテ療養ノ途ナキ者ヲ謂  
フ

4、前各號ニ掲クル者ノ外地方長官特ニ必要ト認  
ムル者

精神病者監護法ノ規定ニ依リ私宅ニ於テ監置  
スル患者ニシテ監置上精神病院ニ入院セシム  
ルヲ適當トスル者若ハ關係人ヨリ特ニ入院ヲ  
希望シ地方長官ニ於テ特ニ入院ノ必要ヲ認メ  
タル者等ヲ主ナルモノトス

三、本條第二項ハ精神病者ヲ強制入院セシムルハ個人ノ身  
體自由權ニ至大ノ關係アル故ニ醫學上果シテ精神病者  
タリヤ否ヤヲ決定スルノ要アルヘク醫師ノ診斷アル  
ニヨリ初メテ入院ヲ強制シ得ヘキモノトナシタルナリ  
而シテ診斷ヲナスヘキ醫師ノ範圍ハ命令ニ依リ之ヲ定  
ム

第三條 道府縣立精神病院ニ對スル國庫ノ補助

第五類 保健 第七章 精神病

補助方法及歩合ハ勅令ノ規定スル所ニ依リ第一條ノ規定ニ  
依リ設置スル精神病院ノ經費ニ對シ六分ノ一乃至二分ノ一  
ヲ補助ス面シテ勅令ノ規定ハ大體次ノ標準ニヨルノ見込ナ  
リ即チ國庫ハ道府縣ノ支出精算額ニ對シ左ノ區別ニ從ヒ補  
助ス但シ事業ニ伴フ收入又ハ寄附金等アルトキハ之ヲ控除  
シタル額ニ對シ補助ス

1、精神病院創設費擴張費及之ニ伴フ初度調辦費二分ノ一

2、其ノ他ノ諸費 六分ノ一

3、代用精神病院ノ患者入院費ニ對シ道府縣ノ支出シタル 六分ノ一

第四條 道府縣立精神病院長ノ權限

精神病院ノ長ハ精神病院內ニ於ケル患者ノ保護治療ニ關ス  
ル責任ヲ有スルモノトス而シテ精神病者ノ醫藥上必要ナル  
行為ハ精神病院ノ長ハ當然行ヒ得ヘキモノナリト雖監置其  
ノ他監置上必要ナル處置ハ純粹ノ醫藥行為ト認ムルヲ得サ  
ル場合アルヲ以テ本條ニ依リ之カ處置ノ權限ヲ與ヘントス  
ルモノナリ、而シテ監置其ノ他監置上必要ナル處置ハ大體  
ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受ケシメ緊急ノ場合ニ於テハ機宜  
ノ處置ヲ課ラサル様事後ニ於テ許可ヲ受ケシムル方針ナリ

第五條 道府縣立精神病院入院費

本法ハ救済ヲ主トスルカ故ニ入院費ハ主トシテ道府縣ニ於テ負擔セシムルヲ目的トスト雖負擔力アル者ニ對シテハ入院費ヲ徵收シ救済ノ度ヲ超ヘサラシメンカ爲本條ノ規定アル所以ナリ、而シテ負擔力アリヤ否ヤハ地方長官ノ認定ニ委シ厘毛ノ微ニ至ル迄之ヲ追徵スルノ趣旨ニアラス從テ大體ニ於テ負擔力ナシト認ムルトキハ之ヲ免除スルヲ趣旨トス而シテ扶養義務者負擔ノ範圍ハ民法ノ規定ニ依リ扶養スヘキ義務ノ程度トス

入院費徵收ノ方法ハ大體府縣稅徵收ノ例ニ依ラントスルノ見込ナリ

第六條 任意道府縣立精神病院

本法施行前ヨリ道府縣ニ於テ設置シタル精神病院又ハ本法施行後道府縣ニ於テ本法ノ規定ニ依ラス任意ニ設置シタル精神病院ニハ地方長官ハ本法第二條ニ依リ精神病者ヲ入院セシムルコト能ハス主トシテ精神病者監護法ノ規定ニ依リ監護義務者ニ於テ入院セシムヘキモノトス而シテ道府縣ニ於テ此ノ種ノ精神病院ヲ設置スルハ何等差支ナシト雖當該地方長官ニ於テ更ニ本法ニ依ル精神病院タラシムルノ意思アリ且設備其ノ他ノ點ニ於テ主務大臣ノ適當ト認ムルモノナルニ於テハ本法ニ依リ設置シタルモノト同一ニ取扱フハ

何等差支ナク又實際ニ適スル場合アルヘシ故ニ此ノ場合ニ處スルタメ本條ノ規定アル所以ナリ

第七條 代用精神病院

道府縣立精神病院ノ設置充分普及スルニ至ル迄本法第二條ニ依リ入院ヲ要スル精神病者ノ全數ヲ充分ニ入院セシメ難キヲ以テ道府縣立以外ノ公私立精神病院ニ入院セシメテ監護救済スルノ必要アルヲ以テ本條ニ於テ代用精神病院ヲ認メタリ然レトモ代用精神病院ハ設備充分ナラサルヲ常トスルカ故ニ之ヲ無條件ニ認ムルニ於テハ監護上充分ナラサルノ憾アルト共ニ一面道府縣立精神病院ノ普及ヲ妨クルノ虞アルヲ以テ主トシテ代用精神病院ハ過度ノ場合ニ應スル施設タラシムルノ趣旨ナリ故ニ代用精神病院タラシムルモノニハ相當ノ期限ヲ附スルコトトナセル所以ナリ

第八條 訴訟及訴訟

精神病者ニ對スル處置取扱ハ其ノ人身權ヲ侵害スルコト大ナルカ故ニ行政官廳ノ處分ニ對シテハ一定ノ救済方法ヲ設クルヲ至當トスヘク是レ本條ヲ規定スル所以ニシテ又他面ニハ精神病者監護法ノ規定ト照應セシメタリ

附則 施行ニ關スル件

〔衛〕

本法ハ國家財政ノ都合ニヨリ本年度豫算ニ於テ道府縣ニ設置セシムル爲ニ要スル經費ヲ得難キ事情アリタルカ故ニ本年度ニ於テハ代用精神病院ニ關スル規定及之カ施行ニ必要ナル範圍ノ規定ヲ施行スルノ見込ナリ

●代用精神病院ノ長ノ入院患者ニ對シテ行フヘキ監護上必要ナル處置規定認可申請ノ件

大正九年六月四日 視衛第一四〇號

警視總官申請 大正九年三月十三日 衛第五一號

精神病院法第七條ノ規定ニ依ル代用精神病院ニ關スル件第六條ノ規定ニ依リ代用精神病院ノ長ノ入院患者ニ對シテ行フヘキ監護上必要ナル處置ニ關スル規定別紙ノ通相定メ之ヲ施行細則中ニ追加致度候條認可相成度此段及稟申候也

別紙 代用精神病院ノ長ノ入院患者ニ對スル處置ニ關スル規定

第五類 保健 第七章 精神病

〔衛〕

代用精神病院ノ長ハ殺傷、放火、逃走、煽動其ノ他公安ヲ害スルノ虞アル入院患者ニ對シテハ左ノ制限ニ依リ之ヲ保護室（從來ノ躁狂室）ニ入室セシムコトヲ得

一、 護監上萬止ムヲ得サル場合ニ非サレハ患者ヲ保護室ニ入室セシムルコトヲ得ス

二、 七月以上保護室ニ入室セシメントスル時ハ患者ノ氏名、病名及收容ノ事由ヲ具シ警視總官ノ許可ヲ受クヘシ

但シ急迫ヲ要スルトキハ假ニ之ヲ處置シ二十四時間内ニ本文ノ手續ヲ爲スヘシ

三、 保護室ニ入室セシメタル患者ニシテ其ノ必要ナキニ至リタルトキハ速ニ退室セシムヘシ

但シ警視總官ヨリ特ニ保護室ニ收容ヲ命シタル患者ニ付テハ豫メ警視總官ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ退室セシムルコトヲ得ス

四、 保護室ノ入室室ハ其ノ都度二十四時間内ニ其ノ年月日時患者ノ氏名、病名及症狀ヲ具シ警視總官ニ届出ツヘシ

代用精神病院ノ長ハ自殺又ハ自傷ノ虞アル患者ニ對シテ危險防止ノ爲必要ナル處置ヲ施シタルトキハ患者ノ氏名及方法ヲ具シ二十四時間内ニ警視總官ニ届出ツヘシ之ヲ廢止シタルトキ亦同シ

認可大正九年六月四日  
認可視衛第一四〇號

大正九年三月十三日附衛第五一號申請代用精神病院ノ長ノ入院患者ニ對シ行フヘキ監護上必要ナル處置ニ關スル件認可ス

警視總監

●精神病者監護法適用上疑義ニ關スル件

大正六年三月九日  
衛新第三三號

新潟縣知事照會大正六年二月十六日  
保發第三八號

精神病者監護法適用上左記ノ事項ニ關シ疑義相生シ候條何分ノ御回示相成度及何候也

- 一 精神病者監護法施行規則第九條中「公私立」トアルハ官立(例ヘハ醫學專門學校附屬精神科病室ノ如キ)ヲ包含スル義ニ候哉
- 一 精神病者ヲ官立(前項例示ノ如キ)病院ニ收容スル場

合ト雖苟クモ監置ヲ要スルモノナランニハ其ノ監護義務者ニ於テ監置ニ關スル警察許可ヲ受クルヲ要スル義ト解シ可然哉

衛生局長回答大正六年三月九日  
衛新第三三號

本件ニ關シ客月十六日付保發第三八號ヲ以テ御問合ノ趣了承第一項「公私立」ノ中ニ官立ハ包含セス第二項ハ御意見ノ通ト存候

●精神病者ノ監置及移轉ニ關スル取扱方ノ件

明治三十三年七月六日  
衛甲第九七號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

今般省令第三十五號ヲ以テ精神病者監護法施行規則發布相成候處同則第三條ニ依リ精神病者ヲ監置ヲスル場合ニ於テ地方長官ニ願出テ又ハ届出ルトアルハ監置スヘキ場所ノ地方長官ニ爲スヘキ儀ト御承知相成度將又監置ノ場所ヲ他管内ニ移轉スルトキハ從來監置ノ場所及移轉地ノ地方長官ヘモ届出テシ

(衛)

メ候條御取扱相成度又精神病者監護法第八條ニ依リ監置シタル精神病者ニ關シテハ監置ノ場所ヲ他管内ニ移轉スルトキハ同條第四項ニ依リ從來監置セシ場所ノ地方長官ノ許可ヲ受ケ且移轉先ノ地方長官ニ届出シムル儀ニ有之候條此段及御通牒候也

●精神病者ヲ其住所外地ニ送リテ監置スル場合取締ニ關スル件

明治三十九年十月二十一日  
秘丙第一四八號

(滋賀縣知事照會ニ  
對シ衛生局長回答)

貴ニ及御照會置候精神病者監護ノ件ニ付六月七日付ヲ以テ御回答之趣了承文中某ヲ精神病者トシテ精神病院ニ入院セシメタル前後三回ナリシカ其ノ都度京都市ニ監置シタルヲ以テ其手續力適法ナリシヤ否ヤハ明ナラス云々ト有之候モ本件事實ノ如ク精神病者ヲ其住所外地府縣ヘ送リテ監置スル場合ニ關シテハ別ニ法ノ明文ナキモ法第三條、第四條及第五條等ニ規

(衛)

定スル許可申請又ハ届出ノ如キハ勿論住所地方府縣(本件ナレハ貴縣)ニ對シテ之レヲ爲サシムヘク其之レカ監置ヲ許可シタル住所地方府縣ハ更ニ精神病者監置ノ場所ヲ支配スル府縣(本件ナレハ京都府)ニ照會シテ其病院ニ於ケル病者ノ取扱振等ヲ監視スルコトヲ協定シ置キ若シ其取扱振即チ監置方法等ノ不都合ナル等ノ通知ヲ受ケタルトキハ監護義務者ニ對シ監置ノ方法若クハ場所(本件ナレハ其病院)ノ變更ヲ命スル等法ノ規定ニ依リ相當取締ヲ爲スヘキ義ト御承知相成度經何ノ上此段及通牒候也

●精神病者監護管轄ニ關スル件

大正元年十二月  
衛第三八三三號

大阪府知事照會大正元年  
十二月  
精神病者監護法第六條ニ該當スル精神病者ニシテ住所アルトキハ其住所地方府縣ニ於テ監置スヘキコトニ規定セラレ居候處之カ監護中ノ前記住所ヲ他ヘ移轉シタル場合ハ之ト同時ニ貴ノ市區町村長ノ監護ヲ離レ移轉地ノ市區町村ニ於テ監

護スヘキコトニ可相成儀ニ候哉、果シテ市區町村長ノ管轄ニ  
異動ヲ來スモノトセハ他府縣ヘ住所ヲ移轉シタル場合ニ之カ  
引渡上不抄手數ヲ要スル次第ニ有之候付テハ同條中ノ住所  
云々トアルハ假令住所ノ移轉アルモ最初ノ市區町村長ニ於テ  
本件ノ事故止ム迄監護ヲ繼續スヘキ義ニ候哉、若シ前段ノ如  
ク解スルニ於テハ各府縣之カ取扱上軌一ニスルノ必要有之候  
様被存差懸リ疑義相生シ候條至急何分ノ御回示相煩度此段及  
照會候也

衛生局長回答 大正元年十二月  
衛第三八三三號

精神病者監護管轄ニ關スル件右ハ後段御意見ノ通ト被存候條  
御承知有之度經伺之上此段及回答候也

●精神病者監護義務者指定ニ關  
スル件

大正十四年六月十一日  
內務省高衛第二六號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

標記ノ件ニ關シ高知縣知事ヘ別紙ノ通回答候條爲念及通牒

候

(別紙ハ高知ヘ回答案添付)

高知縣知事照會 大正十四年五月十五日  
保發第一三八號

精神病者ヲ監護終セントスルモ精神病者監護法第一條第二項  
ニ列舉セル後見人、配偶者、親權ヲ行フ父又ハ母若クハ戶主  
共ニ在ラサルトキハ同項第五號ニヨリ四親等内ノ親族中ヨリ  
親族會ノ選任シタル者ニ於テ監護セサルヘカラス從ツテ斯ル  
場合未タ親族會ノ選任ナキ間ハ所謂監護義務者監護ノ義務ヲ  
履行スル能ハサル事由アルトキニシテ法第六條ニ基キ一先ツ  
市町村長ヲシテ之カ監護ヲ爲サシムヘキセト存候

一方法第八條ニハ行政廳カ法第一條第二項ノ順位ニ拘ラス監  
護義務者ヲ指定シ得ヘキ場合ヲ規定シアリ而シテ其ノ第一條  
第二項ノ順位トハ同項第五號ニ在リテハ親族會ノ選任ヲ得テ  
現實ニ監護ノ義務ヲ盡シ得ヘキ地位ニアルモノニシテ四親等  
内ノ親族一般ヲ指スモノニハ非サル如ク思料スルモ斯ノ如キ  
解釋ヲ採ルニ於テハ親族會ヲ召集スル事困難ナル場合等ニ於  
テ監護ニ最モ適當ナル者例之兄弟姉妹等ノ在ルニ拘ラス法第  
六條ニ依リ市町村長ニ監護セシムルハ徒ニ多クノ手數ヲ要シ  
不便亦不抄此場合若シ第八條ニ所謂第一條第二項ノ順位中第

然此段及通牒候也

●精神病者監置室ニ關スル件

大正五年八月四日  
衛北第一三七號

北海道廳長官照會 大正五年七月二十四日  
警衛第九六四六號

左記ノ性質ノ精神病者監置室ニ對スル許可ハ私宅監置室ト見  
做スキヤ或ハ精神病者監護法施行規則第九條ニ準シ地方長官  
ニ於テ爲スヘキモノナリヤ取扱上疑義有之候條何分ノ御回報  
相煩度候也

記

一 市町村長ノ監置スヘキ精神病者ノ監置ヲ私人ニ委託シ  
タル場合ニ其ノ被託者タル私人ニ於テ建設スル監置室  
ニシテ一時的使用即チ病者轉歸後ハ之ヲ廢スルモノ竝  
ニ一時的使用ニアラスシテ反覆繼續スルモノ即チ常ニ  
監置室ヲ設備シ置キ(公私病院ニアラス)テ市町村長  
ノ委託ニ應シテ監置スルモノニ對スル許可

衛生局長回答 大正五年八月四日  
衛北第一三七號

號ヲ四親等内ノ親族一般ヲ指スモノト解シ法第八條ニヨル行  
政廳ノ指定ヲ爲スニ於テハ多クノ不便ヲ免レ得テ而モ實情ニ  
適セシメ得ル様被存候ニ付テハ右ニ取扱差支無之哉至急何分  
ノ御指揮相煩度此段及照會候也

衛生局長回答 大正十四年六月十一日  
內務省高衛第二六號

五月十五日付保發第一三八號ヲ以テ御照會ニ係ル標記ノ件何  
ノ通御取扱相成差支無之ト存候

●精神病者監護法ニ關スル精神  
病院及病室ノ構造設備標準ニ  
關スル件

明治三十三年七月二十四日  
衛甲第九九號

(各地方長官宛  
衛生局長通牒)

精神病者監護法第九條第二項ニ關スル規定ノ義ニ付往住問答  
ノ向モ有之候處右ハ省令第三十五號ニ規定セラレタル外差當  
リ別段標準等設ケラレサル筈ニ有之就テハ貴廳ニ於テ其必要  
有之候ヘハ廳府縣令又ハ內規等ヲ設ケラレ便宜御措置相成可



本件ニ關シ客月二十四日警衛第九六四六號ヲ以テ照會之趣了  
承右ハ前段御意見ノ通リト被存候

●市町村立精神病患者監護施設ニ  
關スル件

大正十四年十月二十三日  
衛豫第六四二號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

標記之件北海道廳長官ニ對シ別紙ノ通回答致置候條爲念及通  
牒候也

北海道廳長官照會 大正十四年九月十九日  
警衛第二一八四號

左記精神病患者監置室ハ病院組織ニハ非ラサルモ精神病患者監護  
法第九條ノ公立精神病院ト看做スヘキモノナリヤ若シ然ラス  
トセハ之カ取扱ニ該當スヘキ條項無キカ如ク取扱上疑義有之  
候條何分ノ御回示相煩度候也

一、市町村ニ於テ永久的ニ精神病患者監置室ノミヲ敷室建設  
シ診療ハ市町村醫若クハ開業醫ニ囑託シ病者ニ對スル

給養其他一切ノ監護ハ特定ノ私人ニ請負ハシムルモノ  
ナリ

衛生局長回答 大正十四年十月十五日  
衛豫第六四二號

標記ノ件ニ關シ九月十九日付警衛第二一八四號ヲ以テ御照會  
相成候處右ハ精神病患者監護法第九條精神病院トシテ御取扱相  
成可然ト存候

●精神病患者兩足連鎖ノ件

明治三十四年七月十五日  
衛第 四八七四號

(各地方長官宛)  
衛生局長通牒

精神病患者監置方法トシテ兩足連鎖ノ義埼玉縣知事照會ニ對ス  
ル回答之件左記御參考迄此段及御通牒候也

埼玉縣知事照會 明治三十四年六月十八日  
保收第一五四四號ノ一

精神病患者ニ對シ危險豫防ノ爲メ徐步運動ヲ妨ケサル程度ニ於  
テ兩足ヲ連鎖看護致度旨出願ノ者有之右ハ精神病患者ニ對スル  
一種ノ監置方法トシテ同監護法ニヨリ許可スヘキ者ニ候哉御  
意見承知致度此段及問合候也

衛生局長回答 明治三十四年七月十五日  
衛第 四八七四號

保收第一五四四號ノ一ヲ以テ精神病患者危險豫防ノ爲メ兩足連  
鎖ノ御問合相成候處右之方法ハ現時治療上殆ント施用セサル  
ニ付萬己ムヲ得サル事由アル場合ニ限り醫師ノ鑑定書ヲ徵シ  
審査ノ上許可相成可然最連鎖ノ器具方法等ハ不都合ナキ様十  
分御注意相成度此段及御回答候也

●癩療養所へ收容中ノ癩患者ニ  
シテ精神病ニ罹リタルモノ監  
置方ノ件

明治四十二年九月十七日  
衛甲第六一號

熊本縣知事照會 明治四十二年九月四日  
衛第 九四六號

癩療養所へ收容中ノ癩患者ニシテ精神病ニ罹リ監置ノ必要ア  
リテ療養所内ニ監置ヲ爲ス時ハ別段ノ手續ヲ經スシテ癩療養  
所管理者タル地方長官ノ資格ニ於テ職權ヲ以テ監置可然儀ト  
解セラレ候モ精神病患者監護法並ニ癩豫防ニ關スル法律中右ニ

該當スル規定無之聊カ疑義ヲ生シ候然ルニ日下當區療養所容  
收中ノ患者一人精神病ニ罹リ將來或ハ監置ノ必要ヲ生スルヤ  
モ難計候ニ付豫メ御意見承知致度此段及御問合候也

衛生局長回答 明治四十二年九月十七日  
衛甲第六一號

本月四日付衛第九四六號ヲ以テ癩療養所へ收容中ノ癩患者ニ  
シテ精神病ニ罹リタル場合ノ監置方ノ件御照會ノ處右ハ精神  
病患者監護法ニ依ルヘキ筋ト存候此段及回答候也

大正六年九月二十日  
衛第 二四八三號

(東京府、青森縣、香川縣、熊本縣)  
本縣長官宛衛生局長通牒

本件ニ關シ別紙寫ノ通大阪府知事ト照覆候條御了知相成度  
大阪府知事照會 大正六年  
九月十六日

療養所ニ收容中ノ原籍不明ノ癩患者ニシテ精神病ニ罹リタル  
時療養所長ヲ看護義務者ト看做シ院内ニ監置セシメ差支ナキ  
ヤ

衛生局長回答 大正六年九月二十日  
衛第 二四八三號

本件ニ關シ本月十六日電報ヲ以テ照會ノ趣了承監置ノ必要アル者ハ精神病者監護法第六條ニ依リ所在地市區町村長ニ於テ監置スヘキモノニ有之候得共此ノ場合ニ於テハ市區町村長ヲシテ療養所ニ對シ監置ノ委託ヲ爲サシムルヲ便宜ト候存又監置ノ必要ナキ者ニ就テハ當該療養所長ニ於テ適宜處置スルコトヲ得ル儀ニ候條右ニ御了知相成度

●精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續

明治三十四年六月三日  
内務省訓令第七號

監置ノ必要アル精神病者タル在監人ニ關シテハ監獄ノ首長ハ其放免前相當ノ時期ニ於テ監護義務者ニ通知シ監護義務者ナキカ又ハ監護義務者其義務ヲ履行スルコト能ハサル事由アルトキハ精神病者住所地(住所地ナキカ若クハ不明)ノ市區町村長ニ通知シ之ヲ引取ラシムルノ手續ヲ爲スヘシ  
前項ノ手續ヲ爲スモ放免ノ際現ニ之ヲ引取ル者ナキ場合ニ於テハ監獄ノ首長ハ其所在ノ警察官署ニ通知シ之ヲ引渡シ警察

官署ハ監護義務者又ハ市區町村長等ニ之ヲ引取ラシムルノ手續ヲ爲スヘシ  
監獄ノ首長前各項ノ通知ヲ爲ストキハ醫師ノ診斷書其他必要ナル書類ヲ添付スヘシ

●精神病者タル在監人放免ノ際監獄首長ヨリ引取先ノ警察官ニ通知方ノ件

明治三十四年七月十二日  
衛甲第三九號

(各地方長官宛衛生  
監獄兩局長通牒)

精神病者タル在監人放免ノ際監獄首長ヨリ警察官署へ通知方ノ件別紙甲號寫ノ通千葉縣知事ヨリ照會有之候ニ付乙號ノ通回答條監置ヲ要スヘキ精神病者タル在監人ヲ監護義務者市區町村長等ニ引渡シタル場合ニハ監獄首長ヨリ取引先所轄警察官署へ通知セシメラレ候様御取計相成度此段及通牒候也

明治三十四年七月十二日  
衛甲第三九號

(集治監典獄宛衛生  
監獄兩局長通牒)

精神病者タル在監人放免ノ際監獄首長ヨリ警察官署へ放免通知方ノ件別紙甲號寫ノ通千葉縣知事ヨリ照會有之候ニ付乙號ノ通リ及回答條貴監ニ於テモ同様御取計相成此段及通牒候也

(甲號)

千葉縣知事照會 明治三十四年六月十五日  
保發第七一號

明治三十四年六月三日内務省令第七號ヲ以テ精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續發布相成候處監獄ノ首長ニ於テ精神病者タル在監人放免前監護義務者若ハ市區町村長ニ對シ通知ノ上引渡シタルトキ監護義務者市區町村長ハ法律ノ規定ニ遵ヒ相當ノ手續ヲ盡スハ當然ノ義ニ可有之候得共往々其手續ノ遅緩ニ流ルルノ懸念有之警察取締上支障尠カラス就テハ監獄ノ首長ヨリ監護義務者又ハ市區町村長ニ引取ラシムル場合ニ於テハ其ノ所轄地ノ警察官署へ其旨通知ヲ發スヘキ様御取計相成度此段及照會候也

(乙號)

衛生監獄兩局長回答 明治三十四年七月十二日  
衛甲第三九號

第五類 保健 第七章 精神病

保發第七一號ヲ以テ精神病者タル在監人放免ノ際監獄首長ヨリ警察官署へ通知ノ件御照會有之候處右ハ別紙寫ノ通廳府縣長官へ及通牒尙集治監典獄へモ同様ノ旨趣及通牒候間貴縣ニ於テモ同様御取計相成度此段及回答候也

(別紙前掲)

●精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續疑義ノ件

明治三十六年四月二十五日  
衛甲第五〇號

(各地方長官、各典  
獄宛衛生局長通牒)

明治三十四年六月内務省訓令第七號精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續中疑義ノ點ニ付左記神奈川縣知事ト照覆ノ次第御參考迄此段及通牒候也

神奈川縣知事照會 明治三十六年三月十七日  
警衛受第九八一號

明治三十四年内務省訓令第七號精神病者タル在監人放免ニ關スル取扱手續第二項中「監獄ノ首長ハ其所在ノ警察官署ニ通知シ之ヲ引渡シ」トアルハ監獄署ヨリ當該警察官署ニ送致シ

來リ引渡スヘキ旨ヲ示サレタルモノニシテ其通知ヲ受ケタル警察官署ハ引取人ヲ差出シ引渡ヲ受クヘキモノニ非スト考量セラレ候得共御意見反對ノ向モ有之將來心得ノ爲メ御意見承知致度此段及御照會候也

衛生監獄兩局長回答 明治三十六年四月二十五日 衛甲第五〇號

三月十七日付警衛受第九八一號精神病者タル監人放免ニ關スル取扱手續中疑義ノ點ニ付御照會ノ趣了承右監獄首長ヨリ通知ノ上ハ警察官署ニ於テ引取ノ手續ヲナスヘキ義ト御承知相成度依命此段及回答候也

●行旅中精神病ニ罹リタル者ノ 監護方ニ關スル件

明治三十四年九月五日 衛甲第五三號

埼玉縣知事照會 明治三十四年八月八日 保發第二〇號

行旅中精神病ニ罹リタル者監護ノ必要アルモ本人又ハ監護義務者ノ住所遠隔ナルトキハ精神病者監護法第六條ニ依ラス行旅病人及死亡人取扱法ニ依リ所在地市町村長ヲシテ監護セシ

ムルコトヲ得ヘキ哉差掛リタル事件有之候ニ付至急御回答相成度此段及照會也

衛生局長回答 明治三十四年九月五日 衛甲第五三號

本月八日付保發第二〇號ヲ以テ行旅中精神病ニ罹リタル者ノ監護方ニ付御照會ノ趣了承右ハ精神病者監護法第六條ノ規定ニ準シ尙キ所在地市町村長ヲシテ監護セシメ住所ノ監護義務者ニ若又監護義務者ナキカ又ハ監護義務者其義務ヲ履行スル能ハサル場合ニハ住所ノ市町村長ニ引渡候様便宜御取計相成候外有之間敷ト存候候何ノ上此段及回答候也

第八章 墓地、埋火葬

●墓地及埋葬取締規則

明治十七年十月四日 太政官布達第二十五號

墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム

墓地及埋葬取締規則

第一條 墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス

第二條 墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條 死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條 區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘ

第五類 保健 第八章 墓地、埋火葬

第五條 墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戶長ノ認許證ヲ得タル者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ヲナサシムヘカラス

第六條 葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

第七條 凡ソ碑表ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除ケシムヘシ

但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

第八條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事(縣令)ニ於テ便宜取設ケ(内務卿)ニ届出ヘシ

右布達候事

●墓地及埋葬取締規則違背者處分ノ件

明治十七年十月四日 太政官布達第八十二號

今般二十五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ〔違背罪〕ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

●墓地及埋葬取締規則施行方法 標準

明治十七年十一月 內務省達乙第四十號

沿革 明治一五年二月內務省達甲第五號、大正元年一月 內務省訓令第二二號 改正

本年第二十五號布達第八條ニ記載セル方法細目ハ左ノ條件ヲ標準トスヘシ此旨相達候事

第一條 墓地ハ從前許可セラレタル者ニ限ル但己ムコトヲ得サル事情アリテ之レヲ取廢メ又ハ新設スル場合ニ於テハ地方廳ニ願出ヘシ

第二條 墓地ヲ新設スルハ國道縣道鐵道大川ニ沿ハス人家ヲ隔ルコト凡ソ六十間以上ニシテ土地高燥飲用水ニ障害ナキ地ヲ撰ムヘシ

第三條 墓地ハ種族宗旨ヲ別タス其町村ニ本籍ヲ有シ若クハ其町村ニ於テ死シタルモノハ何人ニテモ之ニ葬ルコトヲ得其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス但死刑ニ處セラレタル者ハ墓地ノ一隅ヲ區劃シテ其内ニ埋葬スルモノトス

第四條 墓地ノ周圍 墓地ト墓地ニ非サル地トノ境界ヲ云フニハ樹木ヲ栽ユヘシ墓地ノ内ニハ一丈以上ノ樹木塀塔ヲ存スヘカラサルモノトス但從前ヨリ現存スル者ハ此限ニアラス

第五條 墓地ハ清潔ヲ旨トシ掃除及修繕ヲ怠ルヘカラス

第六條 火葬場ハ人家及人民輻輳ノ地ヲ隔ル凡ソ百二十間以上ニシテ風上ニ位セサル地ヲ撰ヒ火爐煙筒ヲ備ヘ臭煙ヲ防クノ裝置ヲナシ且周圍ニ塀塔ヲ設クヘシ但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナルトキハ格別ナリトス

第七條 火葬ハ成ルヘク日沒後之ヲ行フヘシ

第八條 墳穴ノ深サハ六尺以上タルヘシ若シ土地ニヨリ六尺ニ至リ難キモノ及ヒ火葬ノ遺骨ヲ埋藏スルモノハ格別ナリトス

第九條 墓地火葬場ニハ必ス管理者ヲ置キ其姓名ハ區役所又ハ戶長役場ニ届ケ置クヘシ

〔衛〕

第十條 死者ノ姓名族籍官位勳爵法號及生死ノ年月日建立者ノ姓名ヲ記スルニ止リ誌銘傳贊等ノ碑文ヲ刻セサル墓標ハ所轄警察署ノ許可ヲ受ルノ限ニ非ス

第十一條 死屍ヲ埋葬又ハ火葬セント欲スル者ハ主治醫ノ死亡届書ヲ添ヘテ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

醫師ノ治療ヲ受ケタルノ猶豫ナクシテ死亡シタルモノヲ埋葬又ハ火葬セント欲スルトキハ醫師ノ檢案書ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ

妊娠四箇月以上ノ死胎ニ係ルトキハ醫師若クハ產婆ノ死産證ヲ差出シ區長又ハ戶長ノ認許證ヲ乞フヘシ變死ニ係ルトキハ立會醫師ノ檢案書ニ檢視官ノ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ

囚徒ノ死屍ヲ引取埋葬又ハ火葬セント欲スルモノハ獄醫ノ死亡證書寫ニ司獄官ノ檢印ヲ乞ヒテ差出スヘシ

第十二條 區戶長ハ前條ノ届書證書ヲ領收スルニアラサレハ埋火葬ノ認許證ヲ與フヘカラス

第十三條 管理者ハ葬主ヨリ領收シタル區戶長ノ認許證ヲ一年間保存シ警察官吏ノ求アルトキハ之ヲ提示スヘシ

第十四條 管理者ハ墓地ノ繪圖及墓籍ヲ調製シ置クヘシ

〔衛〕

●墓地及埋葬取締規則施行細則 標準第三條中刪除ノ義ニ關スル件

明治三十二年六月 秘丙第三〇七號

宮城縣知事上申 明治三十二年五月三十日 保發第七〇七號

明治十七年十一月十八日付御省乙第四十號達墓地取締規則標準第三條末文ニ「其從前別段ノ習慣アルモノハ此限ニアラス」トアルヲ削除シ併セテ地方制定細則中此規程アルモノヲ削除致度然ラサレハ他日外國人雜居又ハ旅行中死亡ニ際シ宗教ノ異別ヲ以テ其埋葬ヲ拒絕シ或ハ射利ノ目的ヲ宗教ノ種類ヲ名トシテ之レカ埋葬ヲ拒絕スル等ノ紛議ヲ免レス今ニシテ本文削除相成候ハ尤モ適當ノ儀ト被存候條此段及上申候也

警保局長通牒 明治三十二年六月 秘丙第三〇七號 明治十七年十一月內務省達乙第四十號墓地及埋葬取締規則施行細則標準第三條中刪除ノ義ニ付本年五月三十日付保發第七

○七號ヲ以テ御上申相成候處右乙第四十號ハ取締規則施行細則ノ標準ヲ示シタルニ過キスシテ地方ノ狀況ニ依リ準據シ難キ廉ハ便宜地方規則御改正相成可然存候殊ニ又外國人ノ埋火葬方ニ就テハ先般大臣ヨリ御指示相成候次第モ有之候通右趣旨ヲ貫徹シ遺憾ナキ様御措置相成度尤モ寺院ニ屬スル墓地ノ如キハ強テ從來ノ習慣ヲ破ラシムルハ不穩當ト被認候ニ付其邊可然御了承相成度候本件ハ別段御詮議不相成候條依命此段及通牒候也

●埋火葬認許證下附方ニ關スル件

明治三十二年二月 警發第七號

鳥根縣知事照會 明治三十二年 本縣墓地及埋火葬取締規則ヲ以テ死屍ヲ埋葬又ハ火葬セントスル場合ハ明治十七年内務省令第四十號標準ニ基キ (一)主治醫師ノ死亡届書 (二)醫師ノ治療ヲ受クル猶豫ナクシテ死亡シタル者ハ醫師ノ檢案書 (三)妊娠四ヶ月以上ノ死胎ニ係ルト

キハ醫師若クハ產婆ノ證 (四)變死ニ係ルトキハ立會醫師ノ檢案書ニ檢視官ノ檢印ヲ受ケタルモノ (五)囚徒ノ死屍ニ係ルトキハ獄醫ノ死亡證書寫ニ司獄官ノ檢印ヲ受ケタルモノヲ添ヘ死亡地市町村長ノ埋火葬認許證ヲ乞フコトニ規定致居候處戶籍法實施ニ付テハ該法(第百二十五條)ニ依リ届出義務者ハ醫師ノ診斷書若クハ檢案書又ハ警察官ノ檢視調書ノ際本ヲ添ヘ届出ツルコトニ相成候ニ付市町村長ニ對スル埋火葬認許證ノ申請及戶籍吏ニ對スル死亡届共ニ各醫師ノ檢案書、診斷書ヲ添付セサルヘカラサルヲ以テ其名ニ於テ主管ヲ異ニスルモ其實際ニ於テハ重複トナル據アルノミナラス届出ノ煩雜不尠コトト存候ニ付テハ市町村長ハ「戶籍吏」ニ於テ受付タル届書ニ基キ埋火葬認許證下付スルノ方法ニ改正シ御意見無之哉至急何分ノ御回答相煩シ度此段及照會候也 警保局長回答 明治三十二年二月 警發第七號

〔衛〕

〔衛〕

明治六年七月第三百五十二號火葬禁止ノ布告ハ自今廢シ候條 此旨布告候事

●火葬燒場心得

明治八年六月 内務省達乙第八十號

沿革 明治九年一〇月内務省達乙第一二三號、一三年一月第五〇號 改正

府 縣

●死産ニ關シ埋火葬認許證下附方

明治三十三年六月二十七日 内務省訓令第二十一號

爲シ得ルノ結果往々認許證ノ申請ハ死亡届出ニ先チ隨テ死亡届出マテハ埋火葬ヲ認許シ得サルノ不都合ヲ生スヘク且又市町村長ト(戶籍吏)トハ本來別個ノ資格ヲ有スルモノニ付之ヲ同視スルハ不穩當ノ據有之候尤モ認許證申請ノ場合ニ於テ醫師ノ診斷書等ヲ市町村長ニ示シ或ハ醫師ノ證明セル診斷書等ノ際本ヲ添付スルコトニ規定スルハ別段支障無之據被認候本件ハ衛生局長ニ御照會有之候得共本局主管ニ付經伺ノ上此段及回答候也

府 縣

●火葬ノ解禁

明治八年五月 布告第八十九號

第五類 保健 第八章 墓地、埋火葬

一八七

火葬ノ義第八十九號ノ通御布告有之候ニ付テハ燒場ノ義左ノ心得ヲ以取扱可申此旨相達候事 一 燒場ハ東京府下ハ朱引外其他ノ地方ハ市街村落ノ外揮テ人家遠隔ノ地ニ於テ薄稅地又ハ借地料等無之等ヲ選ミ最寄市邑申合共用致サスヘク最モ官有地又ハ民有地ノ内新規相設ケ候積リ取調可何出事 一 舊燒場(官民有地) 從前ノ儘使用スル土地及ヒ新規拂下タル土地ハ民有第二種ニ可組入事 一 「燒場ハ火爐煙筒及塙壁等ヲ設クヘシ最モ人家遠隔ノ山野等ニ於テハ適宜簡易ノ裝置ヲナスモ不苦候事」

一 燒場遺棄修繕等一切ノ費用ハ人民ノ自辨勿論ニ候得共  
不都合無之様區戸長ニ於テ注意取締可爲致事  
一 遺骨ヲ此場中ニ埋葬候義ハ不相成候事

●火葬場取締ニ關スル件

明治三十八年九月  
丘乙第二四一號ノ内

(衛生警保局長  
通)

過般福岡縣門司市在火葬場ニ於テ屍體燒却ノ委託ヲ受ケ火葬  
ヲ執行スル際同場附屬ノ人夫カ竊ニ火葬竈ヲ開キ衣類等ヲ竊  
取シ及屍體ヲ損傷タル事實發見セラレ一時非常ノ紛擾ヲ來シ  
タル旨同縣知事ヨリ報告有之如此ハ單リ風紀ヲ害スルノ甚シ  
キノミナラス復タ其屍體ニシテ各種傳染性疾患ニ關係スルモ  
ノナルニ於テハ其衛生上ニ及ホス危害モ亦測ルヘカラサル義  
ニ有之候處如斯ノ陋習ハ往々社會ノ裏面ニ伏在スルモノナル  
ヤノ疑モ有之就テハ爾後一層火葬場ノ取締ヲ嚴重ニシ此等陋  
習ヲ根絶セシメ候様御配慮相成度依命此段及通牒候也

●人骨販賣者取締ニ關スル件

明治三十五年二月二十日  
内務省訓第八六號

近來墳墓ヲ發掘シテ人骨ヲ採拾シ若ハ遺棄セラレタル人骨ヲ  
蒐集シテ製藥者又ハ賣藥商等ニ販賣スル者有之趣右ハ容易ナ  
ラサル事體ニ付將來墓地及火葬場管理者ノ監督ヲ嚴重ナラシ  
ムルハ勿論常ニ墓地及火葬場ノ取締ヲ周密ナラシメ若違法ノ  
者アルトキハ假借ナク處分セラレルヘシ  
右訓令ス

●山林原野内ニ墓地火葬場等ヲ  
設ケルトキ主務省へ進達ニ關  
スル件

明治十七年十二月  
地告知外第四六九號

(地理、山林  
兩局長通牒)

官有地第三種ハ地目ニ據リ所管ノ別モ候處往々混淆御開申之  
向モ有之調理上差支候間爾後左ノ通  
(摘錄)  
一 山林原野ノ内ニ於テ堤塘道路用悪水路溜池ヲ新設シ及墓  
地火葬場等ヲ設ケル爲メ拂下又ハ貸渡ニ關スル事

(衛)

(衛)

以上内務農商務兩卿宛内務省へ進達スヘキモノトス  
右ニ掲ケル諸項ノ外ハ内務省ノ主管ト御承知御取扱有之度此  
段及御通知候也

●鐵道用地中墓地其他ノ類ニ係  
ルモノ取扱方ニ關スル件

明治三十一年十月  
内務省訓第九一四號

沿革 明治三十六年内務省訓第三六號 改正  
〔通信省〕ニ於テ敷設セラルヘキ鐵道ノ用地中社寺、佛堂境内  
地名、勝地、舊蹟地、古墳、墓地ノ類ニ係ルモノアルトキハ  
線路確定前鐵道主務官ヨリ協議可有之ニ付此場合ニ於テハ篤  
ト協議ヲ盡シ取調ノ上前記ノ土地ニシテ疑義アルモノハ稟伺  
シ然ラサルモノハ其處ニ於テ不都合ナキ様取計フヘシ  
右訓令ス

●刑死者ノ墓標祭祀等ニ關スル  
件

明治二十四年七月二十七日  
内務省令第十一號

第一條 刑死者ノ墓標ニハ氏名、法號、族籍、年齢、生死ノ  
年月日ヲ記入スルニ止メ他ノ事項ヲ記スルコトヲ得ス  
其墓標ハ遺骸埋葬地又ハ祖先又ハ祖先登城ノ外之ヲ建設ス  
ルコトヲ得ス  
異様ノ墓標ヲ建設シ及文字ニ彩色ヲ施スコトヲ得ス  
第二條 所轄警察署ノ許可ヲ得スシテ刑死者ノ爲メ公然祭祀  
ヲ行フコトヲ得ス但親族ノ香花ヲ供スルノ類ハ此限ニ在ラ  
ス  
第三條 刑死者ノ寫眞其他肖像ヲ公然陳列シ又ハ販賣スルコ  
トヲ得ス  
其他總テ刑死者ヲ賞揚哀悼スルコトヲ得ス  
第四條 前各條項ニ違背シタル者ハ二圓以上二十四圓以下ノ  
罰金若クハ十一日以上二十五日以下ノ〔輕禁錮〕ニ處ス

### 第九章 公園

#### ●公園ノ設置

明治六年一月  
太政官布告第十六號

三府ヲ始人民輻輳ノ地ニシテ古來ノ勝區名人ノ舊跡等は迄群集遊觀ノ場所（東京ニ於テハ金龍山淺草寺、東叡山寛米寺境内ノ類京都ニ於テハ八坂神社、清水ノ境内、嵐山ノ類總テ社寺境内除地或ハ公有地ノ類）從前高外除地ニ屬セル分ハ永ク萬人僭榮ノ地トシ公園ト可被相定ニ付府縣ニ於テ右地所ヲ擇ヒ其景況巨細取調圖面相添（大藏省）ヘ可伺出事

府 廳

府縣郡府町村等ニ於テ公園ヲ設置シ變更シ又ハ廢止スル場合ニ自今當省ト許可ヲ受クルニ及ハサル義ト心得ヘシ

#### ●公園設置等取扱方ノ件

明治三十九年十月五日  
衛甲第五五號

（衛生局長 通 牒）

公園ノ義ニ關シ別紙ノ通訓令相成候處公園設置又ハ擴張ノ爲社寺境内其他官有地ヲ使用シ若ハ讓受ケントスル場合若ハ土地收用法ニ依リ民有地ヲ收用セントスル場合等ニ於テハ公園設置又ハ擴張ノ處分ヲ爲スニ先チ土地ノ使用讓受收用等ニ關スル相當ノ手續ヲ履行セラレ候様致度依命爲念此段申進候也

#### ●公園設置等自今稟議ニ及ハサル件

明治三十九年十月五日  
内務省訓第七一二號

#### ●公園地内ニ碑表建設スル者取締方ニ關スル件

明治三十九年十二月  
庶甲第二六〇號

（衛）

舊來ノ慣行ニ依リ特ニ使用スル者ノ外ハ渾テ市町村管轄物規則並ニ使用料細則ノ規定ニ依リ取扱ハシム可シ

#### ●公共團體ノ管理スル公共用土地物件ノ使用ニ關スル件

大正三年四月四日  
法律第三十七號

今般訓第八六七號訓令ヲ以テ明治十九年六月當省訓令第三九七號第五條中改正相成候處官有社寺境内ニ關シテハ從前ノ通り取扱可相成ハ勿論ニ有之又官有道路堤塘公園ニ於テ碑表ヲ建設セントスル場合ニ關シテハ貴廳限リ必要ニ應シ相當取締ノ規程ヲ設ケテ許可セラルルハ敢テ妨ケナキ筋ニ有之候得共其他當省主管ニ屬スル普通官有地ニ在ツテハ法律勅令ノ規定ニ從ヒ賣拂フコトヲ得ルモノニ限リ先以テ土地ヲ賣拂ヒ而シテ後チ碑表ヲ建設候様取計ハレ可然且ツ建碑ノ事タル元來永遠ヲ期スルモノニ付建碑ノ爲メニ官有地ヲ貸付スルトキハ後日該地ノ處分上ニ差支ヲ來スヲ以テ碑表ヲ建設スルカ爲メニ普通官有地ヲ貸付スルコトハ自今一切不相成儀ト御心得有之度依命此段及通牒候也

#### ●市町村ニ於テ維持保存スル公園地内使用及其使用料徴收ニ關スル件

明治二十四年五月  
内務省訓第四六四號

市町村ニ於テ維持保存スル公園地内使用及其使用料徴收等ハ

第五類 保健 第九章 公園

#### ●名所古蹟保存ノ件

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第五類 保健 第十章 學校

明治五年四月  
大藏省達第五十三號

先般荒蕪除地等拂下ノ義公布相成候ニ就テハ於各地方古來ヨ  
リ聲譽ノ名所古蹟ハ素ヨリ國人ノ賞觀受讓スヘキモノニ付右  
等ノ場所ヲ猥リニ破壊伐木セサル様篤ト注意可致事

第十章 學校

公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件

明治三十一年一月十二日  
勅令第二號

朕公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
第一條 北海道廳府縣郡市町村ノ設置ニ係ル學校ニ學校醫ヲ  
置ク

地方長官ハ特別ノ事情アルトキハ村立學校及人口五千未滿  
ノ町立學校ニハ當分ノ内學校醫ヲ置カサルコトヲ得

第二條 學校醫ハ地方長官之ヲ囑託ス

第三條 學校衛生事務ニ關シ學校醫ハ地方長官郡市町村長ノ  
諮詢ニ應シテ意見ヲ述フヘク又之ニ建議スルコトヲ得

第四條 學校醫ニハ其ノ學校經費ヨリ相當ノ手當ヲ給スヘシ

第五條 學校醫ノ囑託執務及其ノ他ニ關シ必要ナル規程ハ文  
部大臣之ヲ定ム

第六條 本令ニ於テハ北海道沖繩縣ノ區ノ設置ニ係ル學校ハ  
附 則

町立學校ト同視シ沖繩縣ノ間切及島ノ設置ニ係ル學校ハ村  
立學校ト同視ス

第七條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ本令中市町村  
長ニ關スル規定ハ島司〔郡長〕〔北海道ニ在  
テハ支廳長〕區長戶長又ハ  
之ニ準スヘキモノニ適用ス

第八條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

學校醫ノ資格及職務ニ關スル  
規程

大正九年二月二十一日  
文部省令第七號

明治三十一年勅令第二號第五條ニ基キ學校醫ノ資格及職務ニ  
關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

學校醫ノ資格及職務ニ關スル規程

第一條 學校醫ハ醫師法ニ依ル醫師タルヘシ

第二條 學校醫ハ少クトモ毎月二回教授時間内ニ於テ其ノ擔  
當學校ニ到リ左ノ事項ヲ調査スヘシ但シ必要ニ應シ調査事  
項ノ取捨ヲ行フコトヲ得

第五類 保健 第十章 學校

一、校地、建物並設備ノ衛生ニ關スル事項

二、校具ノ衛生ニ關スル事項

三、教授衛生ニ關スル事項

四、運動ニ關スル事項

五、職員生徒兒童ノ健康狀態

六、病者、虛弱者、精神薄弱者等ノ監督養護ニ關スル事項

七、清潔ニ關スル事項

八、飲料水並飲食物ニ關スル事項

九、其ノ他衛生上必要ナル事項

臨時必要アル場合ニ於テ學校醫ハ管理者又ハ學校長ノ請求  
ニ依リ特ニ前項各號ノ全部又ハ一部ニ就キ調査スヘシ

第三條 學校醫ハ生徒兒童中病者、虛弱者、精神薄弱者ヲ發  
見シ若ハ學校長其ノ他ノ職員ヨリ之ニ關スル通知アリタル  
トキハ其ノ狀況ニ依リ一科目若ハ數科目ノ授業免除、就學  
猶豫、就學免除、休學、退學又ハ治療、保護矯正等ヲ要ス  
ヘキコトヲ學校長ニ申告スヘシ

前項ノ異狀アル生徒兒童中就學猶豫、就學免除、休學、退  
學等ヲ要セサル者ニ對シ學校醫ハ繼續的ニ之ヲ監察スヘシ

第四條 學校醫ハ學校職員中學校衛生上注意ヲ要スル者ヲ發  
見シタルトキハ之ニ關シ必要ナル事項ヲ學校長ニ申告スヘ



シ

- 第五條 學校醫ハ學生生徒及幼兒身體検査規程ニ依リ生徒兒童ノ身體検査ヲ爲スヘシ
- 第六條 學校醫ハ學校傳染病豫防規程ニ依リ學校傳染病豫防ニ關スル事務ニ從事シ同規程第六條乃至第八條ノ場合ニ於テハ必要ナル事項ヲ學校長ニ申告スヘシ
- 第七條 學校醫ハ第三條第四條及第六條ニ掲ケタル場合ノ外學校衛生上必要ト認メタル事項ニ就キ管理者又ハ學校長ニ申告スヘシ
- 第八條 學校醫ハ學校衛生ニ關シ學校長ノ諮問ニ應シテ意見ヲ述フヘシ
- 第九條 學校醫ハ學校長ノ請求ニ應シ生徒兒童又ハ其ノ保護者等ニ對シテ衛生ニ關スル講話ヲナスヘシ
- 第十條 學校醫ハ其ノ調査シタル事項、執務ノ狀況、申告若ハ建議セル事項ニ就キ其ノ大要ヲ學校醫執務日誌ニ記入シ其ノ都度學校長ニ提出スヘシ
- 第十一條 學校醫ハ本令ニ掲ケタルモノノ外地方長官ノ命ヲ承ケ學校衛生ニ關スル職務ニ従事スヘシ
- 第十二條 本令ニ關シ必要ナル規則ハ地方長官之ヲ定ムルコトヲ得

附 則

本令ハ大正九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
明治三十一年文部省令第六號及第七號ハ之ヲ廢止ス

● 學生生徒兒童身體検査規程

大正九年七月二十七日  
文部省令第十六號

沿 昭和二三年三月文部省令第三號 改正

學生生徒兒童身體検査規程左ノ通定ム

- 第一條 學生生徒兒童身體検査ハ毎年四月ニ於テ之ヲ施行スヘシ 但シ止ムヲ得サル場合ハ五月ニ於テ之ヲ施行スルコトヲ得
- 監督官廳又ハ學校長ニ於テ必要ト認ムルトキ又ハ學校醫ニ於テ必要ト認メ學校長ノ同意ヲ得タルトキハ身體検査ノ全部若ハ一部ヲ臨時施行スルコトヲ得
- 第二條 身體検査ハ學校醫ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ 學校醫ナキ場合若ハ學校醫カ身體検査ヲ行ヒ難キ事情アルトキハ他ノ醫師ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

〔審〕

學校職員又ハ他ノ適當ナルモノヲシテ身體検査ノ一部ヲ助ケシムルコトヲ得

第三條 身體検査ハ左ノ項目ニ就キ施行スヘシ

- 一 發育(身長、體重、胸圍、概評) 二 榮養 三 脊柱 四 視力及屈折狀態 五 色神 六 眼疾 七 聽力 八 耳疾 九 齒牙
  - 十 其ノ他ノ疾病及異常 十一 監察ノ要否
- 前項目ノ外必要ト認メタル事項ハ特ニ検査ヲ行フコトヲ得 色神検査ハ在學中一回行ヒタルトキハ其ノ後之ヲ省略スルコトヲ得

尋常小學校第四學年以下ノ兒童ニ在リテハ視力及屈折狀態

色神並聽力検査ヲ省略スルコトヲ得

第四條 身體検査ハ左ノ各號ニ準據シテ施行スヘシ

- 一 検査ノ表記ニハ度ハセンチメートル、衡ハキログラムヲ以テ單位トシ四捨五入法ヲ用ヒテ夫々單位ノ下一位ニ止ムヘシ
- 二 身長ヲ測定スルニハ足袋、靴等ヲ脱セシメ兩踵ヲ密接シテ直立シ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ頭部ヲ正位ニ保タシムヘシ 又女子ニシテ鬚アル者ハ小桿ヲ鬚下ニ水平ニ挿入レテ測定スヘシ
- 三 體量ハ著衣ノ儘測定シタルトキハ其ノ著衣ノ重量ヲ全重

量ヨリ除去スヘシ

四 胸圍ハ起立シ姿勢ニ於テ兩上肢ヲ自然ニ垂レシメ乳頭ノ水平線ニ沿ヒ普通呼吸ノ終レル時ヲ測定スヘシ

乳房ノ下垂セル女子ニ在リテハ乳線上第四肋間ノ水平線ニ於テ測定スルモノトス

五 發育ノ概評ハ別ニ定ムル標準ニ據リ甲、乙、丙ノ三ニ分ツモノトス

六 榮養ハ甲、乙、丙ニ分チ其ノ佳良ナルヲ甲トシ不良ナルヲ丙トシ其ノ中間ナルヲ乙トス

七 脊柱ハ正、左彎、右彎、前彎、後彎ヲ區別シ彎ニ就テハ凡テ其ノ凸側ニ依リテ前後左右ノ方向ヲ表示スルモノトス

八 視力ハ萬國式試視力表ニ就キ兩眼ヲ各別ニ検査シ裸眼視力ヲ記入スヘシ 裸眼視力一、〇以上ナルヲ正視眼トス

九 屈折機ノ異常アルモノハ其ノ種別ヲ記入スヘシ 弱視、失明等モ兩眼ニツキ各別ニ記入スヘシ

十 色神ハ其ノ異常アルモノニ就キ色盲及色弱ヲ區別スヘシ 十聽力ハ其ノ障礙ノ有無ヲ検査スヘシ

十一 齒牙ハ齲齒ニ就キ検査スヘシ

十二其ノ他ノ疾病及異常ハ検査ノ際發見シタルモノヲ記入  
スヘシ殊ニ結核性疾患、腺病、肋膜炎、心臟疾患及機能  
障碍、貧血、脚氣、傳染性皮膚病、腺樣增殖症及扁桃腺  
肥大、「ヘルニヤ」、神經衰弱、精神障碍ニ注意スヘシ  
十三監察ノ要否ハ検査ノ結果身心ノ健康状態不良ニシテ學  
校衛生上特ニ繼續的ニ監察ヲ要スト認ムル者ヲ「要」トシ  
記入スルモノトス

第五條 第一條第一項ノ身體検査ヲ施行シタルトキハ其ノ結  
果ヲ身體検査票ニ記入シ本人同一種類ノ學校ニ在學中連年  
之ヲ繼續スヘシ 但シ程度ヲ異ニスル學科部類ヲ有スル學  
校ニ在リテハ其ノ部類毎ニ別票ヲ用フルモノトス  
第一條第二項ノ臨時身體検査ノ際必要ト認ムル事項ヲ發見  
シタルトキハ之ヲ身體検査票ノ裏面ニ記入スルモノトス  
繼續的監察ノ場合亦同シ

他校ヨリ轉入シタル者アルトキハ學校長ハ前ノ學校ヨリ其  
ノ身體検査票ノ交付ヲ受ケ使用スヘシ 身體検査票ハ學校  
長ニ於テ保管スヘシ

第六條 身體検査ヲ施行シタルトキハ學校長ハ其ノ結果ヲ本  
人若ハ其ノ保護者ニ示スヘシ授業免除、就學猶豫、就學免  
除、休學、退學又ハ治療保護矯正等ヲ要スヘキモノアルト

キハ本人若ハ其ノ保護者ニ對シテ特ニ注意ヲ與ヘ其ノ他必  
要ナル處置ヲ取ルヘシ

第七條 第一條第一項ノ身體検査ヲ施行シタルトキハ學校長  
ハ身體検査統計表ヲ調製シ其ノ年六月限り直轄學校、公立  
私立ノ大學高等學校及專門學校ニ在リテハ文部大臣ニ其ノ  
他ノ學校ニ在リテハ地方長官ニ報告スヘシ

地方長官ハ前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ之ヲ取纏メ其ノ年  
七月限り文部大臣ニ報告スヘシ

第八條 幼稚園ニ於テハ本令中尋小學校第四學年以下ノ兒  
童ノ身體検査ニ關スル規定ヲ準用ス 但シ胸圍及脊柱ノ檢  
査ヲ省略スルコトヲ得

第九條 特別ノ事情アル場合ハ監督官廳ノ認可ヲ受ケ本令ノ  
身體検査ヲ行ハサルコトヲ得

附 則

本令ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
明治三十三年文部省令第四號ハ之ヲ廢止ス

身體検査票

學 校 名	氏 名	年 齡	年	年	年	年	年	年	年	發 育			脊 柱		視力及屈折 狀態	
										身 長	體 重	胸 圍	概 評	養 料		左
			學年	學年	學年	學年	學年	學年	學年	學年						
			男	女												
			年	年	年	年	年	年	年	年						
			月	日												
			日生	職業												

- 一 用紙ノ大サハ幅二十四センチ  
メートル、長サ三十六センチ  
メートルトス
- 二 横ノ區劃ハ全學年數ヨリ二欄  
多クシ尙足ラサルトキハ符號  
ヲ以テ之ヲ補フヘシ
- 三 學校名稱ニハ本規程第五ノ學  
科部類名ヲモ併セ記入スヘシ  
移轉先學校名ハ適宜學校欄ノ  
餘白ニ記入スヘシ
- 四 疾病其ノ他ノ爲検査ヲ受ケサ  
ル場合ハ當該區劃ニ其ノ旨記  
入スヘシ

(注意事項)



- 一 用紙ノ大サハ幅二十六センチメートル長サ三十八センチメートルトス
- 二 本表ハ男女別學科部類別ニ調製スヘシ
- 三 年齢ハ四月一日ノ計算ニ依リ滿六年一日以上滿七年迄ノ者ヲ七年トシ其ノ他之ニ準ス
- 四 身長、胸圍ニ係ル總長、體重ニ係ル總重ノ各欄ニハ孰レモ同一年齡ニ於ケル各検査人員ノ身長、胸圍又ハ體重ノ各合計ヲ掲ケ平均ノ各欄ニハ其検査人員ヲ以テ總長又ハ體重ヲ除シタル商ヲ掲ケヘシ
- 五 視力及屈折狀態ニ就テハ兩眼ノ欄ニハ兩眼トモ正視、遠視、近視、若ハ亂視及ヒ其ノ他ノ者ノ人員ヲ掲ケ一眼ノ欄ニハ一眼ノミ正視、遠視、近視若ハ亂視及ヒ其ノ他ノ者ノ人員ヲ掲ケヘシ
- 六 色辨ニ就テハ異常者ノ數及ヒ検査人員ヲ記スヘシ
- 七 尋常小學校第四學年以下ノ兒童及幼稚園幼兒ニ在リテハ視力及屈折、狀態、色辨並聽力ハ之ヲ本表ニ計入スルヲ要セス
- 八 其ノ他ノ疾病異常欄ニ不足ヲ生シタルトキハ附箋ヲ以テ之ヲ補フヘシ
- 九 前項ノ外本表ニ記入スヘキ項目ノ一部ノ検査ヲ缺キタル者

ハ之ヲ表中ニ記入スヘカラス  
 一 外國人ニ係ルモノハ之ヲ計入スヘカラス  
 二 備考ノ欄ニハ表中記入ノ事實ニ關シ説明ヲ要スル事項其ノ他特ニ必要ト認メタル事項ヲ記載スヘシ  
 三 本表ノ成績ニ關シ學校醫ニ於テ學校衛生上意見アルトキハ之ヲ表末ニ附記スヘシ

●發育概評決定標準

昭和二年三月十二日  
 文部省訓令第二號

直轄學校 公立私立ノ大學高等學校  
 及專門學校 北海道廳府縣

大正九年文部省令第十六號學生生徒兒童身體検査規程第四條  
 第五號ニ依ル發育概評決定標準左ノ通改正ス

發育概評決定標準  
 學生生徒兒童及幼兒ノ發育概評ハ左ノ標準ニ依リ之ヲ定ムルモノトス

- 一、七年ヨリ十八年マテノ男子、七年ヨリ十六マテノ女子ニ在リテハ被檢者ノ身長、體重、身長ヲ以テ體重ヲ除

シタル商ノ三者カ何レモ左記發育概評決定標準表ニ照シテ當該年齢ヨリ一年年長ノモノノ標準以上ナルヲ甲トシ之ニ該當セスシテ一年年少ノモノノ標準以上ナルヲ乙トシ甲乙何レニモ該當セサルモノヲ丙トス  
 表中ニ掲ケサル年少者ニ關シテハ右ニ準シテ推定スルモノトス  
 二、十九年以上ノ男子ニ在リテハ身長一六〇・六センチメートル、體重五三・六キログラム、身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商カ〇・三三四以上ナルヲ甲トシ之ニ該當セスシテ身長一五七・〇センチメートル、體重四八・八キログラム、身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商カ〇・三一

以上ナルヲ乙トシ、甲乙何レニモ該當セサルヲ丙トス  
 十七年以上ノ女子ニ在リテハ身長一四八・五センチメートル、體重四六・八キログラム、身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商カ〇・三一五以上ナルヲ甲トシ之ニ該當セスシテ身長一四三・九センチメートル、體重三九・四キログラム、身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商カ〇・二七四以上ナルヲ乙トシ、甲乙何レニモ該當セサルヲ丙トス  
 三、前各號ニ於ケル被檢者ノ身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商ノ計算ハ小數第三位ニ止メ第四位以下ハ切捨ツルモノトス

年 齡	男			女		
	身長	體重	身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商	身長	體重	身長ヲ以テ體重ヲ除シタル商
六 年	一〇二・七	一六・〇	〇・一五六	一〇一・五	一五・四	〇・一五二
七 年	一〇六・七	一七・五	〇・一六四	一〇五・五	一六・九	〇・一六〇
八 年	一一一・二	一九・二	〇・一七三	一〇九・七	一八・四	〇・一六八
九 年	一一五・八	二一・〇	〇・一八一	一一四・二	二〇・二	〇・一七七

一〇年	一二〇・三	二二・九	〇・一九〇	一一八・八	二二・一	〇・一八六
一一年	一二四・九	二四・九	〇・一九九	一二三・六	二四・三	〇・一九七
一二年	一二八・八	二七・一	〇・二一〇	一二八・五	二七・〇	〇・二一〇
一三年	一三三・六	二九・九	〇・二二四	一三五・二	三〇・八	〇・二二八
一四年	一三九・四	三三・六	〇・二四一	一三九・四	三四・七	〇・二四九
一五年	一四六・四	三八・二	〇・二六一	一四三・九	三九・〇	〇・二七一
一六年	一五二・七	四四・五	〇・二九一	一四六・七	四二・七	〇・二九一
一七年	一五七・〇	四八・二	〇・三〇七	一四七・九	四五・一	〇・三〇五
一八年	一五九・一	五〇・七	〇・三一九			
一九年	一六〇・三	五二・六	〇・三二八			

附 則

本令ハ昭和二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●學校傳染病豫防規程

大正十三年九月九日  
文部省令第十八號

學校傳染病豫防規程左ノ通改正ス

學校傳染病豫防規程

第一條 學校ニ於テ特ニ豫防スヘキ傳染病ノ種類左ノ如シ

第一類 「コレラ」、赤痢(疫痢ヲ含ム)、腸チフス、「バラチフス」、痘瘡、發疹「チフス」、猩紅熱、「ヂフテリア」、流行性腦脊髄膜炎、「ペスト」

(附)

第二類 百日咳、麻疹、流行性感冒、流行性耳下腺炎、風疹、水痘

第三類 肺喉頭其ノ他ノ機關ノ開放結核、癩

第四類 「トラホーム」其ノ他ノ傳染性眼炎、疥癬其ノ他ノ傳染性皮膚病

「コレラ」及「ペスト」ノ疑似症ハ本令ノ適用ニ關シテハ之ヲ「コレラ」及「ペスト」ト看做ス

地方長官ニ於テ傳染病豫防法第二條第二項ノ規定ニ依リ同法ヲ適用スルトキ其ノ他學校傳染病豫防上必要アリト認めタルトキハ「コレラ」及「ペスト」以外ノ傳染病ノ疑似症ニ對シ本令中其ノ傳染病ニ關スル規定ノ全部又ハ一部ヲ適用スヘシ官立學校長ニ於テ學校傳染病豫防上必要アリト認めタルトキ又同シ

第一類ノ傳染病ノ病原體保有者ハ本令ノ適用ニ關シテハ之ヲ其ノ傳染病ノ患者ト看做ス

第二條 學校長ハ兒童又ハ未成年ノ生徒カ入學シタル場合ニ於テハ其ノ法定ノ種痘ヲ完了セシヤ否ヲ調査シ未了者ニハ之ヲ受ケシメ又保護者ヲシテ其ノ義務ヲ履行セシムヘシ第二期種痘定期ニ在ル在學中ノ生徒兒童ニ關シ亦同シ  
尋常小學校又ハ小學校ニ類スル各種學校ノ卒業證書、盲學

校及雙啞學校ノ初等部、中學校豫科及高等學校豫科ノ修了證書ニハ當該生徒兒童カ法定ノ種痘ヲ完了セシヤ否ヲ記入スヘシ

第三條 第一類ノ傳染病ニ罹リタル職員學生生徒兒童等ハ治愈シタル後ニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス

第一類ノ傳染病病原體保有者ハ其ノ病原體消失シタル後ニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス但シ左記各號ノ一ニ該當シ學校醫ニ於テ適當ト認ムル豫防處置ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

一 罹患後ノ病原體保有者ニシテ其ノ主要症狀消退ノ時ヨリ起算シ左ノ期間ヲ經過シタルモノ  
イ 赤痢 十四日  
ロ 腸チフス、バラチフス 二十一日  
ハ 「ヂフテリア」、流行性腦脊髄膜炎 七日

二 健康病原體保有者

「コレラ」病原體保有者及地方長官又ハ官立學校ニ於テ特別ノ必要アリト認めタル者ニ付テハ前項ノ規定ヲ適用セズ

第四條 「コレラ」、「ヂフテリア」及流行性腦脊髄膜炎ニ在リテハ二十四時間以上、赤痢、腸チフス」及「バラチフス」ニ在リテハ四十八時間以上ノ間隔ヲ置キ採取シタル検査材料ニ付細菌學的検査ヲ行ヒ引續キ二回以上ノ病原體ノ存在ヲ

第五類 保健 第十章 學校

證明セサル場合ニ於テ病原體消失シタルモノト看做ス  
前項ノ検査材料ハ「コレラ」及「赤痢」ニ付テハ尿、腸「チフス」  
及「バラチフス」ニ付テハ尿、便「チフス」及「流行性腸脊  
髓膜炎」ニ付テハ鼻咽部ノ粘液トス

第五條 第二類ノ傳染病ニ罹リタル職員學生生徒兒童等ハ左  
記ニ該當スルニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス但シ病況ニ  
依リ學校醫ニ於テ其ノ傳染病ノ豫防上支障ナシト認メタル  
トキハ此ノ限ニ在ラス

一 百日咳ニ在リテハ特有ノ咳嗽消失シタルモノ  
二 麻疹ニ在リテハ主要症狀消退後七日ヲ經過シタルモノ  
三 流行性感冒ニ在リテハ主要症狀消退後三日ヲ經過シタ  
ルモノ

四 流行性耳下腺炎ニ在リテハ耳下腺ノ腫脹消失シタルモノ  
五 風疹ニ在リテハ主要症狀消退後五日ヲ經過シタルモノ  
六 水痘ニ在リテハ痂皮全部脱落シタルモノ

第六條 第三類又ハ第四類ノ傳染病ニ罹リタル職員學生生徒  
兒童等ハ治療シタル後ニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス但  
シ肺喉頭ノ開放結核以外ノ傳染病ニ在リテハ學校醫ニ於テ  
適當ト認ムル豫防處置ヲ爲シタルトキ又ハ病況ニ依リ傳染

ノ虞ナシト認メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七條 職員學生生徒兒童等ニシテ第一類又ハ第二類ノ傳染  
病患者アル家ニ居住スルモノ又ハ該病ニ感染ノ疑アルモノ  
ノ豫防處置施行ノ狀況其ノ他ノ事情ニ依リ學校醫ニ於テ  
傳染ノ虞ナシト認メタル後ニアラサレハ昇校スルコトヲ得  
ス

第八條 職員等ハ學校内ニ於テ第一條ニ掲クル傳染病ノ患者  
又ハ其ノ疑アル者若ハ其ノ死者ヲ發見シタルトキハ直ニ之  
ヲ當該學校長ニ申告スヘシ

學校長ハ必要ト認ムルトキハ當該學校醫ヲシテ診斷セシメ  
左ニ掲クル處置ヲ爲スヘシ  
一 第一類ノ傳染病ニ在リテハ速ニ其ノ地ノ警察官吏又ハ  
市區町村長ニ通報シ消毒、隔離其ノ他適當ノ處置ヲ爲ス  
ヘシ

二 第二類ノ傳染病ニ在リテハ第五條各號ノ一ニ該當スル  
者及學校醫ニ於テ豫防上支障ナシト認メタル者ノ外昇校  
ヲ停止シ消毒其ノ他適當ノ處置ヲ爲スヘシ

三 第三類ノ傳染病ニ在リテハ肺喉頭ノ開放結核以外ノ傳  
染病ノ患者ニシテ學校醫ニ於テ適當ト認ムル豫防處置ヲ  
爲シタル者又ハ病況ニ依リ傳染ノ虞ナシト認メタル者ノ

〔衛〕

外昇校ヲ停止シ消毒其ノ他適當ノ處置ヲ爲スヘシ

第四類ノ傳染病ニ在リテハ學校醫ニ於テ適當ト認ムル  
豫防處置ヲ爲シタル者又ハ病況ニ依リ傳染ノ虞ナシト認  
メタル者ノ外昇校ヲ停止スヘシ

學校内ニ第一條ニ掲クル傳染病ニ汚染シ若ハ汚染ノ疑ア  
ル物件アルトキハ消毒其ノ他適當ノ處置ヲ爲スヘシ

第九條 第三條第二項但書又ハ第六條但書ニ依リ昇校スル職  
員學生生徒兒童等アル場合ニ於テ學校長ハ學校醫ノ意見ヲ  
徴シ必要ト認ムルトキハ左ニ準據シ豫防處置ヲ爲スヘシ

一 病原體保有者又ハ患者ノ座席ヲ健康者ノ座席ト隔ツル  
コト

二 病原體保有者又ハ患者ノ使用スル器具、書籍等ヲ専用  
トスルコト

三 病原體保有者又ハ患者ノ座席、器具、書籍等ヲ時々消  
毒スルコト

四 病原體保有者又ハ患者ノ使用シタル衣類、器具、寢具  
書籍其ノ他ノ物ヲ他人ニ交付シ又ハ使用セシムル場合ハ  
之ヲ消毒スルコト

五 「デフテリア」、腸脊髓膜炎ノ病原體保有者ニ在リテハ  
前各號ニ掲クル豫防處置ヲ爲スノ外左ノ事項ヲ遵守セシ

第五類 保健 第十章 學校

ムルコト

イ 咳嗽、噴嚏ノ際ハ布片、紙片等ヲ以テ口鼻ヲ覆フコト  
ロ 鼻汁、唾痰ノ附着シタル布片、紙片其ノ他鼻汁、唾  
痰ニ汚サレタル物ヲ消毒シ又ハ便池ニ投棄スルコト

六 赤痢、腸「チフス」、「バラチフス」ノ病原體保有者ニ在  
リテハ本條第一號乃至第四號ニ掲クル豫防處置ヲ爲スノ  
外左ノ事項ヲ遵守セシムルコト

イ 便所ハ専用トシ上國ノ都度便池ニ消毒藥ヲ投入スル  
コト

ロ 便所ノ手洗水ニハ消毒藥ヲ用キ上國ノ都度消毒スル  
コト

ハ 尿尿ニ汚サレタル物ハ之ヲ消毒スルコト

七 「トラホーム」其ノ他ノ傳染性眼炎ノ患者ニ在リテハ本  
條第一號乃至第四號ニ掲クル豫防處置ヲ爲スノ外眼脂ヲ  
拭フニ清潔ナル専用ノ布片類ヲ使用セシムルコト

第十條 學校内、學校所在地及其ノ附近ニ於テ第一類又ハ第  
二類ノ傳染病發生シ其ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ別  
段ノ規定アル場合ヲ除クノ外學校長ニ於テ學校醫ノ意見ヲ  
徴シ學校ノ全部若ハ其ノ一部ノ閉鎖又ハ休業ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ學校長ハ直ニ監督官廳ニ届出ツヘシ

第十一條 學校所在地若ハ其ノ附近ニ於テ第一類又ハ第二類ノ傳染病發生シタルトキハ其ノ狀況ニ依リ適當ナル清潔方法ヲ施行スヘシ

第十二條 傳染病ノ爲閉鎖シタル學校若ハ其ノ舍室ハ再ヒ之ヲ使用スルニ先チ十分ナル清潔方法ヲ施行スヘシ

第十三條 學生生徒兒童ノ通學區域内若ハ職員等ノ居住地ニ於テ第一類又ハ第二類ノ傳染病發生シ其ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ學校長ハ學校醫ノ意見ヲ徵シ其ノ地域ヨリ通學スル學生生徒兒童及職員等ノ昇校ヲ停止スルコトヲ得前項ノ規定ハ第一類又ハ第二類ノ傳染病流行地ニ滞在シタル學生生徒兒童及職員等ニ對シ之ヲ準用ス  
前二項ノ場合ニ於テハ學校長ハ直ニ之ヲ監督官廳ニ届出ツヘシ

第十四條 學校ノ寄宿舎ニ於テ第一類ノ傳染病發生シタルトキハ官立學校長又ハ地方長官ハ左ノ各號ニ依リ文部大臣ニ報告スヘシ

一 初發ノ場合ニハ病名、發病ノ日、(發病ノ日不明ノト)、患者數、疾病ノ經過、感染徑路、發病以來ノ處置、將來執ラントスル處置其ノ他參考トナルヘキ事項ニ付遲滞ナク報告スヘシ

二 續發セル場合ニハ病名、發病ノ日(發病ノ日不明ノト)、患者數、初發報告以外特ニ執リタル處置其ノ他參考トナルヘキ事項ニ付報告スヘシ但シ多數ノ患者連續發生スルトキハ即時報告スヘシ

三 前二號ノ患者ノ轉歸ハ治療、死亡其ノ他(休學退學等)ニ分チ報告スヘシ

第十五條 學校長ハ學校ノ設備ニ關シ第三類及第四類ノ傳染病豫防ノ爲左ノ事項ヲ遵守スヘシ

- 一 手洗水ハ流出裝置ト爲スコト
- 二 共同手拭ヲ備ヘサルコト
- 三 學生生徒兒童ノ數ニ應シ液體ヲ入レタル適當箇數ノ唾壺ヲ配置シ唾壺内ノ唾痰ハ消毒シタル後之ヲ便池ニ投棄スルコト
- 四 宿直其ノ他ノ爲ニ使用スル共同ノ寢具ハ之ヲ各自專用ノ白布又ハ使用者ヲ改ムル毎ニ洗濯シタル白布ヲ以テ被包スルコト

第十六條 本規程中學校醫ノ職務ハ學校醫ナキトキ若ハ止ムヲ得サル場合ニ於テハ適宜他ノ醫師ヲシテ行ハシムヘシ

第十七條 本規程ニ依リ行フ清潔方法ノ要項左ノ如シ  
一 「コレラ」、赤痢、腸「チフス」及「バラチフス」ニ付テハ

(衛)

(衛)

井戸側、井戸流、臺所流、下水溝、汚水溜、便所、芥溜等ニ付不潔ナル場所ヲ掃除シ必要アル場合ニ於テハ其ノ修理及井戸浚ヲ爲シ且蠅ノ驅除及蠅ノ發生シ易キ場所ノ掃除ヲ行フコト

二 痘瘡、猩紅熱、「チフテリア」及流行性腦脊髄膜炎ニ付テハ衣類、寢具、器具、玩具、疊、敷物等ヲ清潔ニスルコト

三 發疹「チフス」ニ付テハ虱ノ驅除ヲ行ヒ且衣類、寢具等虱ノ棲息シ易キ物件ヲ清潔ニスルコト

四 「ベスト」ニ付テハ鼠族、蚤及南京蟲ノ驅除ヲ行ヒ且衣類、寢具、疊、敷物、床下等蚤及南京蟲ノ棲息シ易キ物件及場所ヲ清潔ニシ及掃除スルコト

五 第二類、第三類及第四類ノ傳染病ニ付テハ衣類、寢具、書籍、器具、玩具、疊、敷物等ヲ清潔ニスルコト

六 前各號ノ外必要ニ應シ左ノ清潔方法ヲ行フコト  
イ 土地及建物ノ内外ヲ掃除スルコト  
ロ 室内ノ採光及換氣ヲ十分ニスルコト  
ハ 疊、敷物等ヲ日光ニ曝スコト  
ニ 床下ハ換氣ヲ十分ニシ濕潤著シキ場所ハ之ヲ埋メ又ハ排水ヲ十分ニスルコト

第一類及第二類ノ傳染病ニ對スル清潔方法ハ鼠族、昆蟲等ノ驅除ヲ除クノ外消毒方法ノ施行ヲ了リタル後之ヲ施行スヘシ  
清潔方法ヲ施行スル場合ニ於テハ適宜消毒藥ヲ撒布スヘカラス  
傳染病ノ流行ニ際シ溝渠ヲ掃除スル場合ニ於テ必要アルトキハ燬製石灰末、普通石灰又ハ「クローラ」石灰水ヲ以テ消毒シタル後浚溝スヘシ  
清潔方法ノ施行ニ依リ生シタル汚泥、塵芥ノ類ハ適當ノ運搬器具ニ入レ一定ノ場所ニ投棄シ又ハ焼却スヘシ

第十八條 消毒方法ノ要項左ノ如シ

- 一 消毒方法ハ左ノ五種トス
  - イ 焼却
  - ロ 蒸氣消毒
  - ハ 煮沸消毒
  - ニ 藥物消毒
  - ホ 日光消毒
- 二 蒸氣消毒ニハ流通蒸氣ヲ用キ成ルヘク消毒器内ノ空氣ヲ排除シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムヘシ蒸氣消毒ヲ施行セントスルトキハ左ノ事項ニ注意スヘシ  
イ 消毒ニ依リ褪色ノ虞アル物ハ蒸氣消毒ヲ避ケ他物ニ

染色ノ虞アル物ハ他物ト混シ蒸汽消毒ヲ行ハサルコト  
衣類ハ豫メ袖又ハ衣蓋ヲ檢索シ爆發又ハ發火シ易キ  
物件アルトキハ之ヲ取出スコト

三 煮沸消毒ハ消毒スヘキ物件ヲ全部水ニ浸漬シ沸騰後三十分間以上煮沸スヘシ

煮沸消毒ノ施行ニ關シテハ前號イヲ準用ス

四 藥物消毒ニ用ウヘキ藥品其ノ製法及用法左ノ如シ

イ 石炭酸水 防疫用石炭酸三分  
水九十七分

石炭酸水ヲ製スルニハ定量ノ防疫用石炭酸ニ少量ノ湯又ハ水ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪シツツ徐々ニ水ヲ注キ定量ニ至ラシムヘシ

石炭酸水ハ使用ノ都度之ヲ振盪スヘシ

ロ 「クレゾール」水分  
「クレゾール」石鹼液三

水九十七分

「クレゾール」水ヲ製スルニハ定量ノ「クレゾール」石鹼液ニ定量ノ水ヲ加フヘシ

「クレゾール」水ハ使用ノ都度之ヲ振盪スヘシ

ハ 昇汞水 昇汞一分、普通食鹽一分  
水千分

昇汞水ヲ製スルニハ定量ノ昇汞及普通食鹽ヲ定量ノ水ニ溶解シ又ハ昇汞錠（一錠中昇汞〇・五）ヲ一錠ニ付水約五百「グラム」ノ割合ニ溶解スヘシ

昇汞水ハ金屬製ニアラサル容器ニ之ヲ貯藏シ其ノ昇汞錠ヲ用キサルモノハ「スカレット」、「フクシンの」其ノ他適當ノ色素ヲ加ヘ著色シ識別シ易カラシムルコトヲ要ス

ニ 煨製石灰 少量ノ水ヲ注ケハ熱ヲ發シ崩壊スルモノ

煨製石灰末 煨製石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲シタルモノ

煨製石灰末ヲ製スルニハ用ニ臨ミ煨製石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲スヘシ

石灰乳 煨製石灰二分  
水八分

石灰乳ヲ製スルニハ定量ノ煨製石灰ニ徐々ニ定量ノ水ヲ如ヘ十分攪拌スヘシ

石灰乳ハ用ニ臨ミ之ヲ製シ且使用ノ都度之ヲ攪拌スヘシ

煨製石灰ヲ得ルコト能ハサル場合ニ限り倍量ノ普通石灰ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

ホ 「クローラ」石灰水 九十五分  
水五分

「クローラ」石灰水ノ製法及用法ハ石灰乳ノ例ニ依ル

ヘ 「フォルマリン」水 「フォルマリン」一分  
水三十四分

「フォルマリン」水ヲ製スルニハ用ニ臨ミ定量ノ「フォルマリン」ニ定量ノ水ヲ加フヘシ

ト 「フォルムアルデヒド」

「フォルムアルデヒド」ハ「フォルマリン」ヲ噴霧發生セシメ又ハ適當ノ裝置ニ依リ之ヲ發生セシムヘシ

「フォルムアルデヒド」ノ使用ニ關シテハ左ノ事項ニ注意スヘシ

（一） 消毒室内又ハ室内ノ容積百立方尺ニ付「フォルマリン」四十「グラム」以上ヲ噴霧セシメ又ハ「フォルムアルデヒド」瓦斯十五「グラム」以上ヲ發生セシメ同時ニ約百「グラム」以上ノ水ヲ蒸發セシムルノ比例ヲ以テ處置シタル後七時間以上密閉シ置クヘシ

（二） 物件ノ内部ニ至ルマテ消毒スル必要アルモノニハ眞空裝置ニ依ルニアラサレハ之ヲ使用スヘカス  
眞空裝置ニ依ル消毒時間ハ其ノ裝置ニ依リ之ヲ定ムヘシ

（三） 氣密ニ閉鎖シ得ヘキ消毒室内又ハ土藏造、洋風廊物等ニシテ戸扉、窓孔等ヲ密閉シ得ヘキ室内ニアラサレハ之ヲ使用スヘカラス

五 日光消毒ハ日光ニ曝露スルト共ニ十分ニ空氣ノ流通ヲ計ルヘシ

日光ノ強度、消毒物件ノ性質ニ依リ數時間乃至數日間繼續スヘシ

六 「コレラ」、赤痢、腸「チフス」及「バラチフス」ニ付消毒方法ノ施行ヲ必要トスルモノ概ネ左ノ如シ

イ 尿尿、吐瀉物及其ノ處置ニ用キタル器具、布片、紙片等

ロ 死體

ハ 患者及死體ノ用ニ供シタル衣類、寢具、運搬器具等ニ看護人其ノ他病毒ニ接觸シタル者及其ノ使用シタル衣類、寢具等

ホ 患者ノ用ニ供シタル飲食器具、患者ノ食物殘渣等

ヘ 病室ノ疊、敷物等

ト 便所、便池、手洗鉢等

チ 臺所、臺所器具、井戸、水槽等  
リ 芥溜、下水溝等



七 痘瘡、猩紅熱、麻疹、風疹及水痘ニ付消毒方法ノ施行  
ヲ必要トスルモノ概ネ左ノ如シ

イ 鼻汁、唾痰、膿汁、痂皮、落屑及其ノ處置ニ用キタル器具、布片、紙片等

ロ 死體

ハ 患者及死體ノ用ニ供シタル衣類、寢具、運搬器具等  
ニ看護人其ノ他病者ニ接觸シタル者及其ノ使用シタル衣類、寢具等

ホ 患者ノ用ニ供シタル飲食器具其ノ他ノ器具、書籍等  
ハ 病室ノ疊、敷物、建具、側壁等

八 發疹「チフス」ニ付消毒方法ノ施行ヲ必要トスルモノ概  
ネ左ノ如シ

イ 鼻汁、唾痰及其ノ處置ニ用キタル器具、布片、紙片  
等

ロ 死體

ハ 患者及死體ノ用ニ供シタル衣類、寢具、運搬器具等  
ニ看護人其ノ他病者ニ接觸シタル者及其ノ使用ニ供シタル衣類、寢具等

ホ 病室ノ疊、敷物等

九 「デフテリア」、流行性腦脊髄膜炎、百日咳、流行性感  
冒及流行性耳下腺炎ニ付消毒方法ノ施行ヲ必要トスル  
モノ概ネ左ノ如シ

イ 鼻汁、唾痰及其ノ處置ニ用キタル器具、布片、紙片等

ロ 患者ノ用ニ供シタル衣類、寢具等

ハ 看護人及其ノ使用シタル衣類、寢具等

ニ 患者ノ用ニ供シタル飲食器具其ノ他ノ器具、書籍、  
玩具等

ホ 病室ノ疊、敷物、建具、側壁等

十 「ベスト」ニ付消毒方法ノ施行ヲ必要トスルモノ概ネ左  
ノ如シ

イ 血液、鼻汁、唾痰、膿汁及其ノ處置ニ用キタル器具  
、布片、紙片等

ロ 死體

ハ 患者及死體ノ用ニ供シタル衣類、寢具、運搬器具等  
ニ看護人其ノ他病者ニ接觸シタル者及其ノ使用シタル  
衣類、寢具等

ホ 患者ノ用ニ供シタル飲食器具其ノ他ノ器具、書籍等  
ハ 病室ノ疊、敷物、建具、側壁等

ト 鼠ノ棲息、交通スル場所

十一 消毒方法ノ應用概ネ左ノ如シ

〔前〕

イ 患者

患者ハ治癒シタル時入浴セシメ衣類ヲ更メシムヘシ但  
シ温濕布ヲ以テ拭淨シ入浴ニ代フルコトヲ妨ケス

入浴ニ使用シタル水ノ消毒ハ本號中汚水ノ消毒ニ依ル  
死體

死體ヲ棺ニ納ムルニハ其ノ衣類ニ石炭酸水、「クレゾ  
ール」水若ハ昇永水ヲ十分撒布シ又ハ石炭酸水「クレ  
ゾール」水若ハ昇永水ニ浸漬シタル布片ヲ以テ死體ヲ  
包ミ又ハ棺内ニ普通石灰ヲ填ツヘシ

ハ 尿尿、吐瀉物其ノ他ノ排泄物

尿尿、吐瀉物其ノ他ノ排泄物ニハ同容量ノ石炭酸水若  
ハ「クレゾール」水、其ノ容量ノ三十分ノ一以上ノ燻製  
石灰末又ハ其ノ容量ノ五分ノ一以上ノ石灰乳若ハ「ク  
レゾール」石灰水ヲ加ヘ十分攪拌シタル後二時間以上放  
置シ又ハ之ヲ煮沸シ若ハ燒却スヘシ

昇永水及「フォルマリン」水ハ尿尿、吐瀉物其ノ他ノ排  
泄物ノ消毒ニ適セス

ニ 病者ニ接觸シタル者

看護人、消毒方法ノ施行及ハ患者、死體、排泄物等ノ  
運搬ニ從事シタル者其ノ他病者ニ接觸シタル者ハ時々

又ハ其ノ都度手足ヲ消毒シ入浴スヘシ

手足ノ消毒ニハ石炭酸水、「クレゾール」水、又ハ昇永  
水ヲ使用スヘシ

ホ 衣類、寢具、敷物、布片等

蒸氣消毒若ハ煮沸消毒ヲ行ヒ又ハ石炭酸水、「クレゾ  
ール」水若ハ「フォルマリン」水ニ二時間以テ浸漬シ又  
ハ「フォルムアルデヒド」ヲ使用スヘシ

絹布、毛織物、綿、綿入蒲團、羽蒲團等ハ成ルヘク蒸  
汽消毒ヲ行ヒ又ハ「フォルムアルデヒド」ヲ使用スヘ  
シ

ハ 患者、死體、病者汚染物件ノ運搬器具

患者、死體又ハ病者ニ汚染シ苦ハ汚染ノ疑アル物件ヲ  
運搬シタル駕籠、釣臺、車等ハ使用ノ都度石炭酸水、  
「クレゾール」水、昇永水若ハ「フォルマリン」水ヲ以  
テ拭淨シ又ハ之ヲ撒布スヘシ

ト 圖書、書類等

「フォルムアルデヒド」ヲ使用スヘシ

昇水水若ハ「フオルマリン」水ヲ以テ拭淨シ又ハ之ヲ撒布シ汽熱ニ堪フルモノニ付テハ蒸汽消毒若ハ煮沸消毒ヲ行フヘシ

飲食器具、玩具、金屬製品等ノ消毒ニハ昇水水ヲ使用スヘカラス

革類、革製品、漆器其ノ他ノ塗物類、護謨製品、「セロイド」製品、護謨製品、糊附品、膠附品、紙製品、毛皮、象牙、龍甲、角等

石炭酸水、「クレゾール」水若ハ「フオルマリン」水ヲ以テ拭淨シ若ハ之ヲ撒布シ又ハ「フオルムアルデヒド」ヲ使用スヘシ

蒸汽消毒及煮沸消毒ハ以上ノ物件ノ消毒ニ適セス

校舎、寄宿舎其ノ他ノ室内各部  
石炭酸水、「クレゾール」水、昇水水若ハ「フオルマリン」水ヲ以テ拭淨シ又ハ之ヲ撒布スヘシ但シ密閉シ得ヘキ場合ニ於テハ「フオルムアルデヒド」ヲ使用スルコトヲ得

消毒後ハ日光ノ射入、空氣ノ流通ヲ良クシ乾燥セシムルヲ要ス  
便所、芥溜、溝渠等

便所ハ石炭酸水、「クレゾール」水若ハ「フオルマリン」水ヲ以テ拭淨シ又ハ之ヲ撒布シ便池、肥料溜等ニハ煨製石灰末、石灰乳又ハ「クロール」石灰水ヲ注キ十分攪拌スヘシ但シ尿尿ハ消毒後一週間ヲ經過スルニアラサレハ肥料ニ供スルコトヲ得ス

芥溜及土地ニハ石灰乳又ハ「クロール」石灰水ヲ、溝渠ニハ煨製石灰末、石灰乳又ハ「クロール」石灰水ヲ注キ塵芥ハ之ヲ燒却スヘシ

煨製石灰末ハ乾燥セル場所ノ消毒ニ適セス

井戸、水槽、汚水等ニハ水量ノ五十分ノ一ノ煨製石灰ヲ乳狀ト爲シタルモノ若ハ水量ノ五十分ノ一ノ「クロール」石灰水ヲ投入シ十分攪拌シタル後十二時間以上放置シ又ハ適當ノ裝置ニ依リ熱蒸汽ヲ通シ三十分間以上沸騰セシムヘシ

昇水水ハ飲料水ニ滲透スルノ虞アル場所ノ消毒ニ之ヲ使用スヘカラス

船舶

船室ノ消毒ハ本號又ニ準スヘシ  
船底水ニハ其ノ容量ノ二百分ノ一ノ煨製石灰末又ハ其

ノ容量ノ二百分ノ一ノ「クロール」石灰水ヲ加ヘ二十四時間ヲ經過シタル後之ヲ汲出スヘシ

動物ノ死體、消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキ物件又ハ消毒費用ニ比シ廉價ナル物件ハ之ヲ燒却スヘシ

ヨ 衣類、寢具、器具、敷物、圖書、書類、其ノ他ノ物件ニシテ燒却、蒸汽消毒、煮沸消毒、藥物消毒ヲ施行シ難キモノニ付テハ日光消毒ヲ行フヘシ

第十九條 本令ハ之ヲ幼稚園ニ適用ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●學校清潔方法

大正十五年十二月七日  
文部省訓令第二十六號

北海道廳 府縣

學校ハ多數ノ兒童生徒長時間ニ亘リテ勉學運動スル場所ナルヲ以テ常ニ清潔ヲ保持シテ衛生上遺憾ナカラシムルヲ要ス而シテ學校ノ清潔ヲ保ツニハ先ツ校地ノ選定校舎ノ構造等ニ意ヲ用ヒ又日常塵埃汚物ノ發生ヲ防キ又其ノ除去ニ努メサルヘカラス現今校地ノ選定校舎ノ建築等ニ關シテハ漸次改善ヲ見ツツアリト雖モ校地校舎ノ清潔方法ニ至リテハ動モスレハ從

來ノ慣行タル洒掃ニノミ重キヲ置キ塵埃ノ發生校舎ノ汚染ヲ防止スル施設等未タ十分ナラサルモノアリ又掃除ノ方法宜シキヲ得スシテ甚シク塵埃ヲ飛散セシメ爲ニ生徒兒童ノ健康ヲ害フカ如キコトナシトセス凡ソ斯ノ如キ弊ハ速ニ改善ヲ圖ラサルヘカラス  
地方長官ハ地方ノ實情ニ鑑ミ學校當局者ヲシテ左記方法ニ準據シテ夫々實施セシメ以テ學校清潔ノ實績ヲ擧クルニ力メラルヘシ

學校清潔方法

學校ニ於ケル清潔方法ヲ分チテ日常清潔方法、定期清潔方法及臨時清潔方法ノ三種トス

甲 日常清潔方法

一 學校ノ建築ニ際シテ其ノ構造ニ注意シ就中教室、廊下、昇降口等ノ廣サヲ適當ニシ且光線ノ射入、空氣ノ流通ニ便ナラシムヘシ

二 校舎、寄宿舎等ハ毎日人ナキ時ニ於テ窓戶ヲ開放シ適宜左ノ方法ニ依リ掃除ヲ行フヘシ

塵埃ノ飛散ヲ防ク爲先ツ如露ヲ用ヒテ少シク床ヲ潤シ靜ニ掃出シタル後濕布ヲ以テ清拭シ又ハ濕リタル綿屑、茶殻、糞殼等ヲ床上ニ撒布シテ之ヲ掃出シ或ハ狀況ニ依リテハ單

- ニ濕ヲ以テ清拭スヘシ
- 除塵油ヲ塗布シタル床ニ在リテハ單ニ掃ニテ掃出スカ又ハ除塵油ニテ濕シタル布片ヲ以テ拭フヘシ
- アスファルト、タール、コンクリート、石、煉瓦等ノ廊下、昇降口、運動場等ハ時々水ヲ以テ洗滌スヘシ
- 疊敷又ハ塵埃ノ飛散スル虞ナキ場所ニ於テハ乾燥ノ儘掃出スモ支障ナシ
- 建具、校具等ハ濕布ヲ以テ清拭スヘシ
- 三 木床、リノリウム敷等ハナルヘク除塵油ヲ塗布スヘシ木床ニ塗油スルニハ先ツ曹達水ヲ以テ床面ヲ洗拭シ其ノ乾燥シタル後之ヲ爲スヘシ
- 塗油ハ春季、夏季、冬季ノ休業等ノ時期ニ於テ行フ可トス其ノ回数ハ兒童、生徒ノ員數及校舎ノ構造等ニ依リ適宜斟酌スヘシ
- 四 教室、廊下、寄宿舎等ニ於テハ適當ナル箇數ノ屑箱及液體ヲ容レタル唾壺ヲ配置シ紙片其ノ他ノ廢棄物ノ散亂ヲ防キ且唾痰ヲ唾壺以外ニ略出スルヲ禁スヘシ唾壺内ノ唾痰ハ消毒シタル後之ヲ便池ニ投棄スヘシ
- 五 黒板、黒板拭ハ常ニ清潔ヲ保タシメ黒板ヲ拭ヒ又ハ其ノ掃除ヲ爲ス際ニハチローク粉ヲ飛散セサルヤウ注意シ又黒

- 板拭ハナルヘク室外ニ於テ清掃スヘシ
- 六 靴ノ儘昇降スル校舎寄宿舎等ノ昇降口ニハ塵掃、靴拭、靴洗器等ヲ備ヘ室人ニ砂塵ノ侵内スルヲ防クヘシ尙狀況ニ依リテハ上靴、カパー等ヲ使用セシムヘシ
- 七 便所ノ尿溝、注壁、便池及其ノ周圍ハ不滲透性ノ物質ヲ以テ固メ尿溝、注壁等ハ時々水ヲ以テ洗滌シ便池内ノ汚物ハ期ニ後レス汲取リ常ニ清潔ヲ保テ惡臭ノ鬱滞ヲ防クヘシ便所ノ手洗水ハ流出裝置ト爲スヘシ又共同手拭ヲ使用セシムヘカラス
- 七 宿直室、寢室等ハ特ニ採光、換氣ニ留意シ寢具ハ適宜日光ニ曝シ被布、寢衣等ハ時々洗濯シ清潔ヲ保タシムヘシ
- 九 食堂、炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ハ採光、換氣ニ注意シ且常ニ清潔ヲ保タシメ殊ニ食堂、炊事場等ニ於テハ惡臭ノ鬱滞ナキヤウ注意スヘシ
- 十 塵芥ノ類ハ芥箱又ハ一定ノ場所ニ集メ置キ期ヲ課ラス燒却又ハ搬送セシムヘシ
- 十一 常ニ校地ノ排水ニ注意シ下水溝ハ適當ノ勾配ヲ保タシメ其ノ溝壁ニハ不滲透性物質ヲ用ヒ又時々浚渫ヲ行ヒ汚泥ハ適當ノ方法ヲ以テ他ニ搬送シ或ハ狀況ニ依リ一定ノ場所ニ集積シ散亂ヲ防クヘシ

〔備〕

〔備〕

- 下水溝ハ成ルヘク暗渠ト爲スヘシ
- 十二 運動場ハ其ノ廣サヲ適當ナラシメ其ノ手入並清潔保持ニ注意シ塵埃ノ飛散ヲ防ク爲時時撒水ヲ爲シ狀況ニ依リ樹木ヲ植エ又ハ芝生ヲ造ルヘシ
- 十三 廊下、運動場其ノ他適當ナル場所ニ手洗場ヲ設ケ狀況ニ依リ運動場、昇降口等ニ足洗場ヲ設クヘシ
- 十四 器械室、標木室、戸棟、押入、下駄箱、物置、庭園等ニ關シテハ前記各項ニ準據シ適宜其ノ清潔保持ニカムヘシ
- 乙 定期清潔方法
- 一 定期清潔方法ハ毎年少クトモ一回之ヲ行フヘシ
- 二 教室、寄宿舎内等ニ在ル机、腰掛、寢臺、戸棚等ハ之ヲ室外ニ出シ戸、障子、窓掛等ハ之ヲ外シテ掃除シ尙天井、壁面、床等ヲ掃ヒ其ノ他日常清潔方法ニ準據シテ十分清潔ナラシムヘシ
- 三 室外ニ持出シタル器具、寢具等ハ之ヲ清潔ニシ十分空氣ヲ通シ日光ニ曝シ室内ノ乾燥シタル後持込ムヘシ
- 四 校地、建物、校具、井戸、下水其ノ他ノ設備ヲ査閲シ其ノ改善修理ヲ要スルモノハ適當ニ處理スヘシ
- 丙 臨時清潔方法
- 一 浸水ノ害ヲ被リタル學校ニ在リテハ速ニ左ノ清潔方法ヲ

- 行フヘシ
- (イ) 水ニ浸サレタル校舎、寄宿舎ハ成ルヘク其ノ建具、床板等ヲ取り外シ日光ノ射入、空氣ノ流通ヲ圖リ床下ノ汚物、泥土ヲ除去シ十分乾燥セシムヘシ
- (ロ) 建具、床板、校具、腰羽日等ノ浸水シタルモノハ清水又ハ熱湯ヲ以テ清拭シタル後成ルヘク之ヲ日光ニ曝シ十分乾燥セシムヘシ
- (ハ) 浸水ノ害ヲ被リタル井戸ハ浚渫シテ之ヲ汚物ヲ除キ井戸側ハ清水ヲ以テ洗ヒ學校傳染病豫防規程第十八條ニ準シ消毒方法ヲ行フヘシ
- 炊事場、食堂、洗面所、其ノ他必要ト認メラルモノニツキテモ適宜消毒方法ヲ行フヘシ
- (ニ) 右ノ外日常又ハ定期清潔方法ニ掲ケタル各項ヲ適宜準用スヘシ
- 二 前項以外ノ災害其ノ他公衆ノ集合等ニ依リ不潔トナリタル校舎等ニツキテハ夫々適當ナル清潔方法ヲ行フヘシ

附則

明治三十年文部省訓令第一號ハ之ヲ廢止ス

●學校生徒飲酒取締ノ件

明治四十二年九月九日  
文部省訓令第十二號

北海道廳 府縣

學校生徒ノ飲酒ハ教育上取締ヲ要スヘキハ言フ俟タス從來各學校ニ於テモ常ニ適當ノ方法ヲ講シテ訓戒監督ヲ怠ラサルハ本大臣ノ認ムル所ナリ然レトモ訓育ノ目的ヲ貫徹セント欲セハ學校ト家庭ト常ニ聯絡ヲ保タンコトヲ要ス因テ各學校ニ於テハ自今飲酒ノ取締ニ就キ一層家庭ト聯絡ヲ保ツコトニ注意シ以テ教育ノ效果ヲ完ウセンコトヲ努ムヘシ

●未成年者飲酒禁止法

大正十一年三月三十日  
法律第二十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル未成年者飲酒禁止法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

未成年者飲酒禁止法

第一條 未成年者ハ酒類ヲ飲用スルコトヲ得ス

未成年者ニ對シテ親權ヲ行フ者若ハ親權者ニ代リテ之ヲ監督スル者未成年者ノ飲酒ヲ知リタルトキハ之ヲ制止スヘシ營業者ニシテ其ノ業態上酒類ヲ販賣又ハ供與スル者ハ未成年者ノ飲用ニ供スルコトヲ知リテ酒類ヲ販賣又ハ供與スル

●學校生徒ノ喫煙ニ關スル件

明治三十三年三月二十六日  
文部省訓令第五號

北海道廳 府縣 文部省直轄學校

學校生徒ノ喫煙ニ關シテハ小學校ニ在リテハ明治二十七年文部省訓令第六號ヲ以テ生徒ノ喫煙スルコト及煙器ヲ夾帶スルコトヲ禁スヘキ旨訓令シ中學校等ニ在リテモ實際喫煙ヲ禁止セルモノ多シ蓋シ學校生徒ノ喫煙ハ衛生上有害ナルノミナラス風紀ニ關スルコト少ナラス殊ニ此際未成年者喫煙禁止法ノ發布アリタルニ就キテハ小學校中學校師範學校及等位ノ之ニ準スヘキ學校ニ在リテハ取締上其ノ生徒ノ成年以下ナルト以上ナルト學校ノ内外ト問ハス喫煙シ及煙草煙器ヲ夾帶スルコトヲ禁止スヘシ其他ノ學校ニ在リテモ特ニ注意ヲ加ヘ法律違反ノ者ナカラシメムコトヲ期スヘシ

●未成年者喫煙禁止法

明治三十三年三月七日  
法律第三十三號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル未成年者喫煙禁止法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

年者ノ飲用ニ供スルコトヲ知リテ酒類ヲ販賣又ハ供與スルコトヲ得ス

第二條 未成年者カ其ノ飲用ニ供スル目的ヲ以テ所有又ハ所持スル酒類及其ノ器具ハ行政ノ處分ヲ以テ之ヲ沒收シ又ハ廢棄其ノ他ノ必要ナル處置ヲ爲サシムルコトヲ得

第三條 第一條第二項、第三項ノ規定ニ違反シタル者ハ科料ニ處ス

第四條 營業者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ其ノ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

營業者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

明治三十三年法律第五十二號ハ本法ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附則

本法ハ大正十一年四月一日ヨリ施行ス

未成年者喫煙禁止法

第一條 未成年者ハ煙草ヲ喫スルコトヲ得ス

第二條 前條ニ違反シタル者アルトキハ行政ノ處分ヲ以テ喫煙ノ爲ニ所持スル煙草及器具ヲ沒收ス

第三條 未成年者ニ對シテ親權ヲ行フ者情ヲ知リテ其ノ喫煙ヲ制止セザルトキハ一圓以下ノ科料ニ處ス

親權ヲ行フ者ニ代リテ未成年者ヲ監督スル者亦前項ニ依リテ處罰ス

第四條 未成年者ニ其ノ自用ニ供スルモノナルコトヲ知リテ煙草又ハ器具ヲ販賣シタル者ハ十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●兒童生徒及學生ノ近視眼豫防ニ關スル件

大正八年九月十九日  
文部省訓令第九號

兒童生徒及學生ノ近視者カ年ト共ニ増加シテ來タノハ誠ニ憂フベキ現象デアツテ、是ハ音ニ學習ノ障害トナルベカリテナク、他日社會ニ出テ活動スルニ當ツテ其ノ能率ニ影響スル所ガ渺クナイ。又之ヲ壯丁検査ノ結果ニ徴シテ見ルニ、近視ノ

爲不合格ニナル者ガ毎年多クナツテ來ル傾向ガアルノハ、國家ノ爲輕視スルコトノ出來ナイ問題デアル。近視ハ其原因種々アルガ、學校教育ニ因ツテ誘發シ若ハ増悪スルコトガ頗ル多イ。併シ平生周到ナ注意ヲ拂ツテ適當ナ措置ヲスレバ、之ヲ未然ニ防グコトガ必シモ難事デナイカラ、學校時代ニ豫防ノ方法ヲ講ズルコトハ極メテ緊要ナ事柄デアアル。

地方長官ハ、教育ノ任ニ當ル者ヲシテ善ク家庭トノ聯絡ヲ保チ、左ニ指示スル要項ニ則リ、豫防上其ノ宜シキヲ得サセテ、此ノ訓令ノ趣意ヲ貫徹サセル様ニ努メラレタイ。

一、採光ニ關スル件  
採光ハ主トシテ座席ノ左側カラスル。但シ紙面ニ陰影ヲ生シナイ限上方カラシテ善イ。

光度ハ十分デ平等ナコトガ必要デアアル。併シ授業時間中教室内ニ日光ガ直射スルノハ、光度ガ強過ギ、且頭部ヲ熱シテ充血ヲ來スカラ、適當ニ窓掛等ヲ利用シテ其ノ害ヲ避ケル様ニシナケレバナラヌ。

人工採光ヲ用ヒルトキハ、殊ニ光力ニ注意スルト共ニ、陰影ヲ生シナイ様ニ力メナケレバナラヌ。

二、机腰掛ニ關スル件  
机腰掛ハ之ヲ調整スル際ニ善ク衛生上ノ要求ニ適フ様ニ

シ、常ニ身體ニ適シタルモノヲ用ユベキデアアル。且机ト腰掛ノ分離スルモノデハ、著席後常ニ其ノ離尺ニ注意シテ、輕度ノ陰性離尺ヲ保タセル様ニスベキデアアル。

三、讀書・書字・圖畫・手工・裁縫等ニ關スル件  
學校ニ居ル時デモ家庭ニ居ル時デモ、學習若ハ作業ノ際ニハ、姿勢ヲ正シクシナケレバナラヌ。姿勢ハ不正ニ流レ易イカラ、教師ヤ父兄ハ絶エズ監督シテ其矯正ニ努メルコトガ必要デアアル。讀書・書字等ノ場合ニハ、紙面ト眼ノ距離ヲ大凡一尺以上保タセ、且讀書ノ際ハ書物ヲ机ノ水平面上約四十五度ノ角度ニアル様ニ注意シナケレバナラヌ。

總テ讀物ハ文字ノ大イサガ適當デ色・形等モ明瞭ナモノヲ擇ブベキデアアル。

步行中又ハ電車・汽車・人力車等ノ動搖スル處デ讀書スルコトハ避ケナケレバナラヌ。

筆記帳等ニ書ク文字ガアマリ小サ過ギルカ、又ハ明瞭デナイノハ甚シク有害ナモノデアルカラ、努メテ之ヲ避ケナケレバナラヌ。殊ニ鉛筆ヲ細ク削ツテ、非常ニ細カナ文字ヲ書ク様ナコトハ最モ注意スベキデアアル。圖畫・手工・裁縫等ハ年少者ニ對シテ過度ニ緻密ナモノヲ課シテハナラヌ。

四、黑板・圖表等ニ關スル件

黑板及圖表等ノ文字ハ、其ノ色が鮮明デ且大キイガ宜シイ。黑板又ハ圖表ハ光線反射ノ關係上光ツテ見難イコトガアルカラ、適當ナ方デ不良ナ反射ヲ避ケル様ニシナケレバナラヌ。殊ニ夜間ハ一層此ノ關係ニ注意シ、且眼ト黑板又ハ圖表ノ間ニアル光源ノ輝閃ニ依ツテ視覺ヲ妨ゲナイ様ニスベキデアアル。

黑板ノ色ハ常ニ黒クナケレバナラヌ。故ニ時々塗替ヘルコトカ必要デアアル。

五、服裝ニ關スル件  
服裝特ニ頸部ニ於ケルモノニ、窮屈ナモノヲ用ヒルトキハ、頸部ヲ壓迫シテ頸部ニ鬱血ヲ來シ、延イテ近視ノ原因トナルコトカアルカラ、常ニ寛カナモノヲ用ヒル様注意ヲ要スル。

六、眼ノ疲勞ニ關スル件  
眼ノ疲勞ハ近視ノ原因トナルモノデ、長時間ニ亙ツテ微小ナ文字ヲ讀ミ、或ハ精細ナ作業ヲスレバ、眼ノ疲勞ヲ來スモノデアアル。故ニ學校ニアルト家庭ニアルト問ハズ、新様ノ場合ニハ時々作業ヲ變更シ、又ハ眼ヲ遠距離ニ轉シテ休養ヲ圖ルベキデアアル。

七、身體検査ニ關スル件

身體検査ノ際近視者ヲ發見シタ場合ニハ、常人ハ勿論、教師又ハ家庭ニモ適當ナ注意ヲ與ヘ、其ノ後モ絶エズ其増悪ヲ防クコトニ力メナケレバナラヌ。

八、眼鏡ニ關スル件  
眼鏡ヲ要スル場合ニハ必ズ醫師ノ指圖ニ從ツテ適當ナモノヲ使用スベキデアアル。濫リニ自分デ選擇シテ使用スルコトハ斷ジテ善クナイ。

九、座席ニ關スル件  
近視者デ特ニ必要ノアル者ニハ座席ヲ黑板ノ近クニ設ケテ、視力ノ不十分ナトコロヲ成ルベク補足シテヤル様ニ注意スベキデアアル。

十、近視ニ關スル知識ヲ授ケル件  
兒童生徒及其ノ父兄ニ對シテ、種々機會ニ近視ノ弊害原因並其豫防ノ方法等ニ關スル知識ヲ授ケテ、各自自衛的ニ之ヲ豫防スル様ニ努メサセナケレバナラヌ。

十一、遺傳的素質ニ關スル件  
近視者ノ子孫ハ近視ニ罹リ易イ遺傳的素質ヲ享ケテ居ルコトカアルカラ、血族中ニ近視者ノアル者ハ特ニ前記ノ諸項ニ注意スルコトカ必要デアアル。

●學校生徒ニ於テ紫色鉛筆ノ有害ナルモノノ使用禁止

明治三十七年八月九日  
文部省訓令第八號

北海道廳 府縣 直轄學校

學生生校等ノ使用スル「コピールピオレット」リラビオレット「ヨハン、コピール」「ハ、ツエ、クルツ、コピール」等ノ記號アル紫色鉛筆ハ其ノ製造ノ原料ニ有害ノ色素ヲ包含スルカ故ニ其ノ破片又ハ溶液ノ眼中ニ入ルトキハ激烈ナル毒作用ヲ呈シ竟ニ不治ノ眼疾ニ陥ルコトアリ仍テ幼稚園及小學校等ノ兒童ニハ之カ使用ヲ禁止シ其ノ他ノ學校ノ學生生徒ニ在リテハ必要缺クヘカラサル場合ニ限り之ヲ使用セシムルコトヲ得ルト雖其ノ使用上ニ周密ノ注意ヲ爲サシムヘシ

●女子師範學校高等女學校生徒ノ衛生ニ關スル件

明治三十三年三月二十六日  
文部省訓令第六號

北海道廳 府縣

女子ノ師範學校及高等女學校ニ在學スル年紀ハ心身ノ發育上

甚タ遺憾ナルコトト言ハサルヘカラス

地方長官並直轄學校長ハ以上ノ趣旨ニ則リ左記事項ニ準據シ體育關係者ヲシテ我カ國情ニ應シ地方ノ實情ニ適セル體育運動ノ普及發達ニ力メシムルヤウ適宜ノ措置ヲ講セラルヘシ

一 體育運動ノ指導ニ關スル事項

體育運動指導ノ任ニ當ル者ハ左記各項ニ留意シ適切ナル指導ヲ爲スコト

- (一) 常ニ體育運動ノ目的、技術、衛生的注意等ニ付正シキ知識ヲ授ケ且廣ク體育運動思想ノ普及ヲ圖ルコト
- (二) 體育運動ヲ行フニ當リテハ運動精神ノ發揚ヲ圖リテ徳性ノ涵養ニ力メ且身體ノ修練ヲ重ンスルコト
- (三) 體育運動ハ一部少數者ニ限ルコトナク普ク國民ヲシテ與カラシメ且一時的ニ過度ニ陥ルコトナク斷ニス正シク之ヲ行フ習慣ノ養成ニ力ムルコト
- (四) 體育運動ノ種目(體操、遊戲、競技、劍道、柔道、弓道、水泳、乗馬、相撲、スキー、スケート、登山、遠足等)並其ノ實施程度ハ運動ヲ行フ者ノ年齢、環境、土地ノ事情、季節等ヲ顧慮シ適當ニ之ヲ定ムルコト
- (五) 女子體育運動ニ關シテハ特ニ其ノ精神的並身體的ニ適合セル運動ノ種目及實施方法ヲ選定シ且運動時ノ應

最モ注意ヲ要スル時期ナリ故ニ右等ノ學校ニ在リアハ女生徒學業ノ成績ハ平素ニ於テ便宜之ヲ調査セシムルコトトシ時期ヲ定メテ一時ニ全學科目ノ試験ヲ行フコト勿カラシムヘシ又月經ノ間ハ其ノ生徒ニ限リ體操科ヲ課セシメサルヲ要ス

●體育運動ノ振興ニ關スル件

大正十五年三月八日  
文部省訓令第三號

北海道廳 府縣 直轄學校

體育運動ノ振興ニ關スル件

近時學校ノ内外ヲ問ハス體育運動著シク勃興シ國民ノ間ニ漸ク其ノ普及ヲ見ルニ至レルハ學校教育並社會教育上洵ニ慶フヘキコトトス然ルニ之ヲ各國ノ事例ニ徴シ我カ國ノ實況ニ照ストキハ將來尙一層其ノ改善ト進歩トヲ促シ普ク國民ヲシテ斷ニス體育運動ヲ合理的ニ實施セシメ以テ國民ノ精神的並身體的訓練ヲ完ウシ其ノ品性並體位ヲ向上セシムルハ極メテ緊要ノコトタリ世上動モスレハ體育運動ヲ一部愛好者ノ專有ニ任セ或ハ運動競技ニ於テ徒ニ勝敗ニ捉ハレ尙フヘキ運動精神ヲ閑却スルカ如キ弊ナキニアラサルモ斯ノ如キハ體育運動ノ目的ニ副ハサルモノニシテ健全ナル國民體育ノ普及發達上

〔衛〕

度、服裝等ニ注意スルコト

- (六) 身體虛弱者ノ體育運動ニ關シテハ體質、體力、氣力其ノ他ノ心身狀態ヲ顧慮シテ適當ナル運動ノ種目及實施方法ヲ選定シ且運動量ノ限定、休養其ノ他ノ衛生的養護ニ注意スルコト
- (七) 運動ヲ行フ場所、運動用具、救急設備等ニ注意シ運動ニ因ル傷害ノ豫防ヲ怠ラサルコト

二 運動選手及運動競技會ニ關スル事項

- 運動選手ノ選定、對抗競技會、選手權競技會及之ニ類スル競技會ノ開催、管理等ニ關シテハ學校長、團體又ハ競技會ノ管理者等ハ左記各項ニ留意シ適當ナル措置ヲ爲スコト
- (一) 運動選手ハ身體強壯ニシテ操行正シク學業又ハ業務ニ忠實ナルヘキコト
- (二) 運動選手ハ強要スルカ如キ方法ヲ以テ之ヲ選定セサルコト
- (三) 學校又ハ團體ノ選手ノ選定及競技會參加ニ關シハテ其ノ學校長又ハ管理者ノ承認ヲ經ヘキコト
- (四) 運動選手ハ運動精神ヲ重シ其ノ行動ハ公明正大ニシテ競技ノ勝敗ノミニ捉ハレサルコト
- (五) 學校ノ競技會開催ニ付テハ當該學校長ノ承認ヲ經ヘキ

コト

- (六) 體育運動團體其ノ他各種團體ノ競技會開催ニ付テハ出來得ル限り教育關係者ト聯絡ヲ採リ競技會ノ計畫、實施等總テ教育的ナラシムルコト
  - (七) 學校、團體等ノ競技會開催ニ付テハ互ニ聯絡ヲ採リ同一選手ノ参加スヘキ競技會ヲ數次重複セシメサルコト
  - (八) 競技會ノ開催ニ關シテハ開催ノ時期、日數、参加地域等ヲ願慮シ選手應援者等ヲシテ學業又ハ業務ニ支障ヲ來サシメス且多額ノ参加費用ヲ要セサラシムルコト
  - (九) 競技會ノ實施ニ當リテハ其ノ管理者、役員、選手、應援者、參觀者等ハ各々職分ヲ守リ其ノ責任ニ任シテ競技ノ遂行上遺憾ナキヲ期スルコト
- 三 體育運動團體ニ關スル事項
- 學校及團體ノ關係者ハ體育運動團體ノ組織並管理ニ關シ左記各項ニ留意シ其ノ健全ナル發達ヲ圖ルコト
- (一) 學校ニ於ケル體育運動ニ關スル團體ヲ組織スル場合ハ學校長タル者之カ管理ニ當ルコト
  - (二) 學校ニ於ケル體育運動團體ハ成ルヘク學校間ニ於テ聯絡ヲ保ツコト
  - (三) 學校以外ノ體育運動團體ハ其ノ管理ニ關シ成ルヘク教育關係者ト聯絡ヲ採リ事業ノ達成ニカムルコト

育關係者ト聯絡ヲ採リ事業ノ達成ニカムルコト

●學童體育及衛生ニ關スル注意

事項ノ件

明治二十七年九月一日  
文部省訓令第六號

小學校ハ小學校令第一條ノ示ス所ニ依リ兒童ノ體育ニ留意シ教育ノ完成ヲ期セサルヘカラス我國舊來弓馬劍鎗ノ武藝盛行ハレ體育ノ道ニ於テ缺クル所ナカリシモ維新後兵制變革ノ爲或種ノ武藝ハ其必要ヲ失ヒタルト同時ニ體育ノ衰頹ヲ致セル事又教員及生徒カ學問智識ノ進歩ニ急ニシテ動モスレハ智育ノ一方ニ偏重セル事及社會一般ノ衛生ノ必要ヲ感スルコト未タ深切ナラサル事是等多數ノ原因ノ爲ニ各般ノ學校ニ於ケル體育及衛生ノ方法ハ仍不完全ナルヲ免レス殊ニ小學校教育ノ時ハ方ニ身體發育ノ期ニ當リ一タヒ傷害ヲ受クルトキハ其患ハ終身ニ及ヒ哀ムヘキ情況ヲ呈セントス今小學校ニ於ケル體育及衛生ニ關シ訓令スルコト左ノ如シ

一 體育ハ及フタケ活潑ナル運動ヲ課スルヲ要スヘク普通體操ニ於テモ亦兵式體操ト同ク手足及全身ノ筋力ノ運動ヲ活潑ニシ氣血ノ代謝ヲ促スト同時ニ生徒自個ニ於テ意氣快活ヲ覺ユル效果アラシムヘシ體操ノ弊ハ或ハ

〔節〕

- 死法ニ流レ態勢ヲ整ヘ並列ヲ正スカ爲ニ許多ノ時間ヲ費シ却テ生徒ヲシテ厭倦ノ氣ヲ生セシムルニ至ル此ノ如キハ却テ體操ノ精神ヲ失フモノナリ
- 二 高等ノ學校男生徒ニハ兵式體操ヲ課スルノ際軍歌ヲ用ヒ體操ノ氣勢ヲ壯ニスルコトアルヘシ又隨意科トシテ節單ナル器械體操ヲ授クヘシ
- 三 小學校生徒ハ活潑ナル運動ニ便スル爲ニ不得已場合ノ外學校内ニ於テハ洋服又ハ和服ヲ問ハス都テ筒袖ヲ用ヒシムヘシ
- 四 族課時間ニ於テ停立閑語シテ經過スルニ終ラシムヘカラス男女トナク成ルヘク活潑ニ大氣中ニ運動スルノ遊戯ヲ誘フヘシ或ハ大聲急走嬉戲ノ態ヲ以テ生徒ノ不良事ト爲シ沈靜ヲ以テ品行點ニ加フルカ如キハ當ヲ得タルモノニアラス
- 五 生徒ヲシテ筆記及誦讀ヲ務メシムルハ過度ニ腦力ヲ勞セシムルモノナレハ特ニ必要ノ場合ノ外之ヲ用キサラシコトヲ要ス
- 六 小學校ノ課業ノ中生徒ノ尤困難ヲ感スル者ハ作文トス初級ノ生徒ニハ作文ヲ授クヘカラス若シ簡單ナル作文ヲ授クルモ此ヲ以テ試験問題トスヘカラス

第十一章 工場

●工場法

明治四十四年三月二十九日  
法律第四十六號

沿革 大正一二年三月法律第三三號 改正  
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル工場法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ

工場法

第一條 本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス  
 一 常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ  
 二 事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ  
 本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

第二條 (削除)

第三條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十一時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ本法施行後十五年間ヲ限リ前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前五時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ午後十一時迄就業セシムルコトヲ得

第五條 (削除)

第六條 (削除)

第七條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ設ケ、一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ケヘシ

前項ノ休憩時間ハ一齊ニ之ヲ與フヘシ但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス  
 夏季ニ於テ一時間ヲ超ユル休憩時間ヲ設クル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ其ノ超ユル時間以内就業時間ヲ延長スルコトヲ得但シ其ノ延長時間ハ一時間ヲ超ユルコトヲ得ス

第八條 天災事變ノ爲又ハ事變ノ虞アル爲必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ事業ノ種類及地域ヲ限リ第三條、第四條及前條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得  
 避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條ノ規定ニ拘ラス十六歳以上ノ女子ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得但シ急速ニ腐敗シ又ハ變質スル虞アル原料又ハ材料ノ損失ヲ防ク爲必要ナル場合ニ於テハ繼續四日間以上ニ互ラス且一月ニ七日ヲ超エサル限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルコトヲ要セス

〔衛〕

〔衛〕

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ届出テ一月ニ付七日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第九條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、検査若ハ修繕ヲ爲サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ關帶調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ爲サシメ其ノ他危險ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十條 工業主ハ十六歳未満ノ者ヲシテ毒藥、劇藥其ノ他有害物品又ハ爆發性發火性若ハ引火性ノ物品ヲ取扱フ業務及著シク塵埃、粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務其ノ他危險又ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十一條 前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十六歳以上ノ女子

ニ付之ヲ適用スルコトヲ得

第十二條 主務大臣ハ病者又ハ産前産後若ハ生兒哺育中ノ女子ノ就業ニ付制限又ハ禁止ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條 行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建設物並設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ行政官廳ハ工業主ニ命シタル事項ニ付必要ナル事項ヲ職工又ハ徒弟ニ對シ命スルコトヲ得

第十四條 當該官吏ハ工場若ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢シ又ハ就業ノ禁止制限ヲ爲スヘキ疾病若ハ傳染ノ虞アル疾病ニ罹レル疑アル職工若ハ徒弟ノ檢診ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證據ヲ携帶スヘシ

第十五條 工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ職工カ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル場合ニ於テ本人又ハ其ノ遺族若ハ本人ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ヲ扶助スヘシ

第十六條 職工徒弟、職工徒弟タラシムトスル者若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工徒弟又ハ職工徒



第百九十九條 工業主ハ前條ニ依リ工業主ニ代ル者本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 工業主又ハ前條ニ依リ工業主ニ代ル者本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ、妨ケ若ハ忌避シ又ハ其ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ職工若ハ徒弟ノ檢診ヲ妨ケタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 前條ノ工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ルモノトス但シ第十五條ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治產者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事、業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條 工業主又ハ前條ニ依リ工業主ニ代ル者本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス  
第二十一條 正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ、妨ケ若ハ忌避シ又ハ其ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ職工若ハ徒弟ノ檢診ヲ妨ケタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス  
第二十二條 工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス  
工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ職工ノ年齡ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルコトヲ得ス但シ工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス  
第二十三條 本法ニ依リ行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴訟ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

〔舊〕

〔舊〕

第二十四條 主務大臣ハ第一條ニ該當セサル工場ニシテ原動力ヲ用フルモノニ付テハ第九條、第十一條、第十三條、第十四條、第十六條及第十八條乃至第二十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第二十五條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正五年一月勅令第八號及同年五月第五十六號ヲ以テ同年九月一日ヨリ施行)

附則 (大正十二年法律第三十三號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十五年六月勅令第百五十二號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

本法中十六歳トアルハ本法施行後三年間ハ之ヲ十五歳トス職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行後三年間ハ第四條ノ規定ヲ適用セス

前項ノ規定ニ依リ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ就業セシムル場合ニ於テハ毎月少クトモ四回ノ休日ヲ設ケ十日ヲ越セサル

期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換スヘシ

●工場法施行令

大正五年八月三日 勅令第九十三號

沿革 大正一一年一月勅令第四七一號、一五年六月第一五三號 改正

朕極密顧問ノ諮詢ヲ經テ工場法施行令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

工場法施行令 第一章 通則 第一條 左ニ掲クル事業ノミヲ營ム工場ニ付テハ工場法ノ適用ヲ除外ス但シ内務大臣ノ定ムル原動機ヲ用フルモノハ此ノ限ニ在ラス

- 一 寒天、凍蒟蒻、凍豆腐、湯葉、麵類又ハ穀ノ製造
- 二 行李、簾、籠、和傘骨其ノ他ノ柶柳、籬、竹、竹ノ皮、經木、蓆、蓆又ハ業ノ手工品ノ製造
- 三 經木眞田又ハ麥稈眞田ノ編製
- 四 「アダン」、「バナマ」又ハ之ニ類スルモノヲ以テスル帽子其ノ他ノモノノ編製
- 五 扇子、團扇、和傘又ハ提燈ノ製造

- 六 紙、絲、棉、竹又ハ布帛ヲ主タル材料トスル玩具又ハ造花ノ製造
  - 七 形紙、紙函、元結又ハ水引ノ製造
  - 八 手工ニ依ル被服、足袋其ノ他ノ布帛類ノ裁縫
  - 九 手工ニ依ル組紐ノ編製
  - 一〇 刺繍、「レース」、「バテンレース」又ハ「ドロインウオーク」ノ業
- 第二條 鑛業法ノ適用ヲ受クル工場ニ付テハ工場法ノ適用ヲ除外ス
- 第三條 左ニ掲クル事業ヲ營ム工場ハ工場法第一條第二號ニ該當スルモノトス
- 一 毒劇物又ハ毒劇藥ノ製造
  - 二 動物ノ剥製
  - 三 水銀ヲ用フル計器ノ製造
  - 四 水銀唧筒ヲ用フル魔法燭ノ製造
  - 五 鉛ヲ用フル鑄ノ製造
  - 六 珫瑯磁器又ハ珫瑯藥ノ製造
  - 七 塗料、顏料、印刷用インキ又ハ繪具ノ製造
  - 八 亞硫酸瓦斯、「クロール」瓦斯又ハ水素瓦斯ヲ用フル事業

- 九 硫黃ノ精製
- 一〇 「チアン」加里又ハ硝酸鹽ヲ用フル金屬ノ熱處理
- 一一 「フアクチス」ノ製造
- 一二 脂肪油ノ精製
- 一三 「ポイル」油ノ製造
- 一四 乾燥油又ハ溶劑ヲ用フル擬革紙布又ハ防水紙布ノ製造
- 一五 溶劑ヲ用フル護膜製品ノ製造
- 一六 溶劑又ハ「ラバーセメント」ヲ用フル護膜製品ノ貼合
- 一七 溶劑ヲ用フル油脂ノ採取
- 一八 溶劑ヲ用フル芳香油ノ製造
- 一九 溶劑ヲ用フル野草建ノ捺染
- 二〇 溶劑ヲ用フル模造眞珠ノ製造
- 二一 溶劑ヲ用フル「ドライクリーニング」(單ニ拂拭スルモノヲ除ク)
- 二二 溶劑ヲ用フル絆創膏ノ製造
- 二三 「タンニン」酸ノ製造
- 二四 合成染料又ハ其ノ中間物ノ製造
- 二五 「セルロイド」ノ製造、加熱加工又ハ鋸機ヲ用フル加工
- 二六 硝化綿ノ製造

- 二七 「コロザウム」ヲ用フル紙燃製品ノ製造
- 二八 「エーテル」ノ製造
- 二九 酒精ノ製造又ハ變性
- 三〇 「ヴィスコーズ」ヲ製造
- 三一 「テレピン」油ノ蒸溜又ハ精製
- 三二 鑛油ノ蒸溜、精製又ハ凝結
- 三三 「アスファルト」ノ精製
- 三四 瀝質物ヲ用フル建築用「フェルト」又ハ紙ノ製造
- 三五 燐寸ノ製造
- 三六 火藥、爆藥又ハ火工品ノ製造又ハ取扱
- 三七 金屬ノ熔融又ハ精煉
- 三八 電氣又ハ瓦斯ヲ用フル金屬ノ熔接又ハ切斷
- 三九 壓縮瓦斯又ハ液化瓦斯ノ製造
- 四〇 壓縮瓦斯又ハ液化瓦斯ヲ用フル製氷
- 四一 動力ニ依ル製材
- 四二 電氣業(發電所、變電所、蓄電所及開閉所)
- 四三 電球ノ製造
- 四四 硝子ノ製造、腐蝕、砂吹又ハ粉碎
- 四五 金屬、骨、角又ハ貝殼ノ乾燥研磨
- 四六 動力ニ依ル金屬、箔又ハ金屬粉ノ製造

- 四七 動力ニ依ル鑛石、土砂、貝又ハ骨ノ粉碎
  - 四八 電氣用「カーボン」ノ製造
  - 四九 石炭瓦斯又ハ骸炭ノ製造
  - 五〇 「カーバイト」ノ製造
  - 五一 石灰ノ製造
  - 五二 「フェルト」又ハ吹付羅紗(粉狀纖維ヲ用フル模造羅紗)ノ製造
  - 五三 起毛又ハ反毛ノ作業
  - 五四 製綿
  - 五五 麻ノ梳解
  - 五六 古綿、落綿、古麻、屑紙、屑綿絲、屑毛又ハ纖維類ノ選別
  - 五七 骨炭又ハ血炭ノ製造
  - 五八 毛皮ノ精製、製革又ハ製膠
  - 五九 毛髮又ハ羽毛ノ精製
  - 六〇 其ノ他内務大臣ノ命令ヲ以テ指定スル事業
- 第二章 職工又ハ遺族ノ扶助
- 第四條 職工業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ本章ノ規定ニ依リ扶助ヲ爲スヘシ但シ扶助ヲ受クヘキ者民法ニ依リ同一ノ原因ニ付損害賠償ヲ受ケタルト

第五編 保健 第十一章 工場

キハ工業主ハ扶助金額ヨリ其ノ金額ヲ控除スルコトヲ得  
前項扶助ノ義務ハ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外職工ノ解雇  
ニ因リテ變更セラルルコトナシ

第五條 職工負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ工業主ハ其ノ  
費用ヲ以テ療養ヲ施シ又ハ療養ニ必要ナル費用ヲ負擔スヘ  
シ

第六條 職工療養ノ爲勞務ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金  
ヲ受ケサルトキハ工業主ハ職工ノ療養中一日ニ付賃金百分  
ノ六十以上ノ休業扶助料ヲ支給スヘシ但シ同一ノ疾病又ハ  
負傷及之ニ因リ發シタル疾病ニ付其ノ支給百八十日ヲ超エ  
タルトキハ其ノ後ノ支給額ヲ一日ニ付賃金百分ノ四十迄ニ  
減スルコトヲ得

第七條 職工ノ負傷又ハ疾病治療シタル時ニ於テ左ノ各號ノ  
一ニ該當スル程度ノ身體障害ヲ存スルトキハ工場主ハ左ニ  
掲クル區別ニ依リ障害扶助料ヲ支給スヘシ  
一 終身自用ヲ辨スルコト能ハサルモノ  
賃金五百四十日分以上

- 二 終身勞務ニ服スルコト能ハサルモノ  
賃金三百六十日分以上
- 三 從來ノ勞務ニ服スルコト能ハサルモノ

二五〇

ノ、健康舊ニ復スルコト能ハサルモ  
ノ又ハ女子ノ外親ニ醜疾ヲ殘シタル  
モノ  
賃金百八十日分以上

四 身體ヲ傷害シ舊ニ復スルコト能ハス  
ト雖引續キ從來ノ勞務ニ服スルコト  
ヲ得ルモノ  
賃金四十日分以上

第七條ノ二 職工重大ナル過失ニ因リ負傷シ又ハ疾病ニ罹リ  
且工業主其ノ事實ニ付地方長官ノ認定ヲ受ケタル場合ニ於  
テハ休業扶助料又ハ障害扶助料ヲ支給セサルコトヲ得

第八條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ遺族又ハ職工ノ死亡  
當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニ賃金三百六十日  
分以上ノ遺族扶助料ヲ支給スヘシ

第九條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ葬祭ヲ行フ遺族又ハ  
職工ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニシテ  
葬祭ヲ行フ者ニ賃金二十日分(其ノ金額二十圓ニ滿チサル  
トキハ二十圓)以上ノ葬祭料ヲ支給スヘシ

第十條 遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ職工ノ配偶者トス  
配偶者ナキ場合ニ於テ遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ職工死亡  
當時同一ノ家ニ在リタル職工ノ直系卑屬又ハ直系尊屬ト  
シ其ノ順位ハ親等ノ近キ者ヲ先ニシ卑屬ト尊屬ト親等相同

シキトキハ卑屬ヲ先ニス

第十一條 前條第二項ニ定メタル同順位者ノ間ニ在リテハ其  
ノ順位ハ左ノ規定ニ依ル

- 一 職工ノ家督相続人又ハ戸主ハ之ヲ他ノ者ヨリ先ニス
- 二 男ハ之ヲ女ヨリ先ニス
- 三 直系卑屬ニ付テハ男又ハ女ノ間ニ在リテハ嫡出子ヲ先  
ニシ嫡出、子庶子及私生子ノ間ニ在リテハ嫡出子及庶  
子ハ女ト雖之ヲ私生子ヨリ先ニス
- 四 前二號ニ掲クル事項ニ付相同シキ者ノ間ニ在リテハ年  
長者ヲ先ニス

第十二條 第十條ノ規定ニ該當スル者ナキ場合ニ於テハ左ニ  
掲クル者ノ中一人ニ遺族扶助料ヲ支給スヘシ但シ職工ノ遺  
言又ハ工業主ニ對シテ爲シタル豫告ニ依リ左ニ掲クル者ノ  
中一人ヲ特ニ指定シタルトキハ之ニ從フヘシ

- 一 職工ノ家督相続人又ハ戸主
- 二 職工ノ兄弟姉妹ニシテ職工死亡當時之ト同一ノ家ニ在  
リタル者
- 三 職工死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者

第十三條 第五條ノ規定ニ依リ本人ニ支給スル費用及休業扶  
助料ハ毎月一回以上之ヲ支給スヘシ

第五編 保健 第十一章 工場

障害扶助料ハ職工ノ負傷又ハ疾病ノ治療後遺滞ナク、遺族  
扶助料及葬祭料ハ職工ノ死亡後遺滞ナク之ヲ支給スヘシ但  
シ障害扶助料及遺族扶助料ハ地方長官ノ許可ヲ受ケ數回ニ  
分割シテ之ヲ支給スルコトヲ得

第十三條ノ二 職工健康保險法(第四十八條第一項第二號ノ  
規定ヲ除ク)ニ依リ療養ノ給付又ハ療養費ノ支給ヲ受クヘ  
キトキハ其ノ期間第五條ノ扶助ハ之ヲ爲スコトヲ要セス健  
康保險法ニ依リ傷病手當金ノ支給ヲ受クヘキトキ休業扶助  
料ノ支給ニ付亦同シ

職工ノ死亡ニ關シ健康保險法ニ依リ埋葬料又ハ埋葬ニ要シ  
タル費用ノ支給アルヘキトキハ葬祭料ノ支給ハ之ヲ爲スコ  
トヲ要セス

健康保險法第六十二條第一項第二項、第六十四條又ハ第六  
十五條第二項ノ規定ニ依リ保險給付ヲ受ケサル場合ニ於テ  
ハ前二項ノ例ニ依リ第五條ノ扶助又ハ休業扶助料若ハ葬祭  
料ノ支給ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第十四條 第五條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受ケ又ハ健康保險法ニ  
依リ療養ノ給付若ハ療養費ノ支給ヲ受ケタル職工療養開始後  
三年ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治療セサルトキハ工業主ハ  
賃金五百四十日分以上ノ打切扶助料ヲ支給シ以後本條ノ規  
定ニ依リ扶助ヲ爲ササルコトヲ得

第五類 保健 第十一章 工場

第十五條 工業主ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得

一 職工ノ解雇後一年ヲ經過シテ扶助ヲ請求スルトキ但シ既ニ受ケタル扶助又ハ健康保險法ニ依ル保險給付ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スルトキハ此ノ限ニ在ラス解雇前ニ又ハ解雇後一年内ニ請求シタル扶助又ハ健康保險法ニ依ル保險給付ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スルトキ亦同シ

二 扶助又ハ健康保險法ニ依ル保險給付ヲ受ケテ治療シタル負傷又ハ疾病カ職工ノ解雇後ニ於テ再發スルトキ

第十六條 扶助料及葬祭料算出ノ標準トスヘキ賃金ハ左ノ各號ノ金額トス

一 職工健康保險法ニ依ル被保險者タル場合ニ於テハ同法ニ基キ其ノ者ニ付定メタル標準報酬ノ日額

二 職工健康保險法ニ依ル被保險者タラサル場合ニ於テハ疾病ニ在リテハ診斷ニ據ル發病ノ日ヲ除キ、發病ノ日明ナラサルトキハ診斷前七日ヲ除キ、負傷又ハ即死ニ在リテハ事故發生ノ日ヲ除キ其ノ前(賃金締切日アル場合ニ於テハ直前ノ賃金締切日以前)三月間(雇入後三月ニ滿チサルトキハ其ノ期間)ニ於ケル賃金總額ヲ

其ノ期間ノ日數ヲ以テ除シタル金額但シ其ノ金額ハ上記賃金總額ヲ該期間中ニ於テ賃金ヲ受ケタル日數ヲ以テ除シタル金額ノ百分ノ六十ヲ下ルコトヲ得ス

前項第二號ニ規定スル期間ニ左ノ各號ノ一ニ該當スル期間アルトキハ其ノ日數及其ノ期間ニ於ケル賃金ハ前項ノ期間及賃金總額ヨリ之ヲ控除ス

一 業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リ療養ノ爲休業シタル期間

二 産前又ハ産後ノ女子内務大臣ノ定ムル所ニ依リ休業シタル期間

三 試ノ雇傭期間

四 工業主ノ都合ニ依リ職工臨時ニ休業シタル期間

第一項第二號ノ賃金總額ニハ賞與又ハ臨時ニ支給セラルル手當ニシテ内務大臣ノ定ムルモノヲ包含セス

前三項ノ規定ニ依リ扶助料及葬祭料算出ノ標準トスヘキ賃金ヲ算出スルコトヲ得サル場合ニ於テハ扶助規則ノ定ムル所ニ依ル但シ扶助規則ニ定ナキトキハ地方長官之ヲ定ム

第十七條 前條第一項第二號ノ規定ニ依リ賃金ヲ算出スル場合ニ於テ工業主カ食事其ノ他ノ給與ヲ當時支給スルトキハ其ノ價額ハ賃金中ニ之ヲ加算ス但シ休業扶助料ヲ支給スル場合ニ於テ工業主カ食事其ノ他ノ給與ヲ引續キ支給スルト

キハ其ノ價額ハ休業扶助料算出ノ標準トスヘキ賃金中ニ之ヲ加算セス

第十八條 地方長官ハ職權ヲ以テ又ハ申請ニ因リ職工ノ負傷、疾病若ハ死亡ノ原因、第七條各號ニ掲クル身體障害ノ程度其ノ他扶助ニ關スル事項ニ付之ヲ審査シ及事件ノ調停ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷又ハ検査セシムルコトヲ得

第十九條 工業主ハ遲滞ナク扶助規則ヲ作成シ扶助ノ金額、手續其ノ他扶助ニ關シ必要ナル事項ヲ定メ之ヲ地方長官ニ届出ツヘシ扶助規則ヲ變更シタルトキ亦同シ

地方長官必要ト認ムルトキハ扶助規則ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第二十條 官立工場ニ於ケル職工ノ扶助ニ付テハ別ニ定ムル規程ニ依ル

第二十一條 工業主ハ遲滞ナク職工名簿ヲ調製シ工場毎ニ之ヲ備付クヘシ

職工名簿ニ記載スヘキ事項ニ關シテ内務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五類 保健 第十一章 工場

第二十二條 職工ニ給與スル賃金ハ通貨ヲ以テ毎月一回以上之ヲ支拂フヘシ

第二十三條 工業主ハ職工ノ死亡若ハ解雇ノ場合又ハ内務大臣ノ定ムル場合ニ於テ權利者ノ請求アリタルトキハ遲滞ナク賃金ヲ支拂フヘシ

前項ノ場合ニ於テ積立金、信託金其ノ他何等ノ名義ヲ用キルニ拘ラス職工ノ貯蓄金ハ遲滞ナク之ヲ返還スヘシ

第二十四條 工業主ハ職工ノ雇入ニ關シ前二條ノ規定ニ違反スル契約又ハ工業主ノ受クヘキ違約金ヲ定メ若ハ損害賠償額ヲ豫定スル契約ヲ爲スコトヲ得ス但シ左ノ事項ニ付豫メ方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

一 職工ニ貯蓄ヲ爲サシメ又ハ職工ノ利益ノ爲賃金ノ一部ニ代ヘ他ノ給付ヲ爲スコト

二 職工カ雇入契約ニ違反シ其ノ他職工ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因リ解雇セララルル場合ニ於テ職工ノ貯蓄金中工業主ノ給與ニ係ル部分ヲ交付セサルコト

第二十五條 職工ノ貯蓄金ヲ管理スル場合ニ於テハ工業主ハ豫メ確實ナル方法ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十六條 (削除)